Shizuoka University of Art and Culture

10

VOL.10 2009

静岡文化芸術大学
研究紀要

SHIZUOKA UNIVERSITY OF ART AND CULTURE
BULLETIN 2009

ISSN 1346-4744

10

静岡文化芸術大学研究紀要

Shizuoka University of Art and Culture Bulletin

VOL.10 2009

静岡文化芸術大学研究紀要　２００９
第１０巻

２０１０年3月３１日
編集：静岡文化芸術大学研究紀要委員会
馬成三／根本敏行／佐野真由子／三好泉／和田和美／古瀬敏（委員長）
表紙デザイン： 佐井国夫
発行：静岡文化芸術大学
〒４３０-８５３３　静岡県浜松市中区中央 2-1-1
Tel　０５３-４５７-６１１１
Fax　０５３-４５７-６１２３
印刷：株式会社シバプリント

Shizuoka University of Art and Culture
Bulletin VOL.10　2009

March 31, 2010
2-1-1 Chuo, Naka-ku
Hamamatsu City
430-8533 Japan
Tel +81-53-457-6111 Fax +81-53-457-6123
http://www.suac.ac.jp/

目次

原著論文

文化的行為としての食生活 ―食研究の視座―	林　在圭	1
日本人英語学習者と教員に対するニーズ分析 ―演習、講義との関連を意識したアカデミックリーディング授業のあり方―	杉浦香織	11
静岡文化芸術大学図書館・情報センターの学習支援の可能性を考える	林　左和子	23
明治末期から昭和期に至る劇場の現代性について	永井聡子	27

研究報告

国際関係学における教育方法と内容の展開（下） ー米学会誌(International Studies Perspectives) 掲載論文サーベイー	馬場　孝	35
ブラジルの中の日本、日本の中のブラジル ー写真で見る100年、過去から未来へー	池上重弘、イシカワ エウニセ アケミ 立入正之、古田祐司	45
フィリピン大学との学術交流報告	鈴木元子、梅若猶彦 米屋武文、古田祐司	57
ウェールズの昔話研究と国立歴史博物館	美濃部京子	67
身体文化とメディアの融合と創造 ―グローバル化するスポーツ文化―	溝口紀子、トーマス パルス 和田和美、マーク D.シーハン	75
教師間の連携によるテクノロジーを活用した英語授業の創造と実践	トーマス パルス マーク D.シーハン、杉浦香織	89
英語で教える英文学概論 ―EFLコンテンツ・コース―	マーク D.シーハン	99
イタリアにおけるパゾリーニ現象 ー自身の研究をふりかえりつつー	土肥秀行	107
リバプール、海商都市の歴史観光	種田　明	117
浜松市東区における地域福祉デザインのための現状調査（1）	黒田宏治	125
三遠南信景観色調査研究 ー第2次報告書ー	宮内博実	135
発信するSUAC印 ―ユニバーシティ・グッズの開発と大学ネットショップの展望 第2章―	和田和美、坂本鐵司、鳥居厚夫 山本一樹、佐藤聖徳、羽田隆志 的場ひろし	151
ユニバーサルデザインの地域での実践に向けて（その3）	古瀬　敏、根本敏行	161
地域におけるサスティナブルデザインの展開の可能性 ー持続可能な地域公共交通ネットワークをめざしてー	宮川潤次、坂本鐵司、鳥居厚夫 伊坂正人、佐井国夫、羽田隆志 古瀬　敏	165
SUACの学習環境についての考察	花澤信太郎、林左和子、伊坂正人 的場ひろし、和田和美	173
マンメド・アミン・ラスルザーデ著 改訳『あるトルコ民族主義者のスターリンと革命の回想』（その1）	徳増克己	179
並列処理プロセッサ"Propeller"によるスケッチング・プラットフォーム	長嶋洋一	189

Contents

Original Articles

Food Lifestyle as Cultural Behavior : Perspective of Food Research	Jaegyu LIM	1
Needs Analysis of EFL Students and Teachers: Towards Making Connection among Academic Reading Class, Seminar Class and Lecture	Kaori SUGIURA	11
Feasibility for learning support of the Library of SUAC	Sawako HAYASHI	23
A Study on the theater from the Meiji last years to the Showa beginnings	Satoko NAGAI	27

Research Report

Pedagogy in International Studies: Survey of the Pedagogical Articles in International Studies Perspectives 2000-2006 Part II	Takashi BABA	35
Japanese in Brazil, Brazilians in Japan: 100 years in Photos - From the Past to the Future	Shigehiro IKEGAMI Eunice Akemi ISHIKAWA Masayuki TACHIIRI Yuji FURUTA	45
A Report on Academic Exchange with University of the Philippines	Motoko SUZUKI Naohiko UMEWAKA Takefumi YONEYA Yuji FURUTA	57
Folklore Studies in Wales and the National History Museum	Kyoko MINOBE	67
The Fusion and Creation of Physical Culture and Media -Globalization of sports culture-	Noriko MIZOGUCHI Thomas PALS Kazumi WADA Mark D. SHEEHAN	75
Creation and Collaboration: A team approach to English language course design	Thomas PALS Mark D. SHEEHAN Kaori SUGIURA	89
A Survey of British Literature in English: Teaching EFL content courses	Mark D. SHEEHAN	99
The Pasolini Phenomenon in Italy	Hideyuki DOI	107
Liverpool-Maritime Mercantile City, a historic city tour	Akira OITA	117
A Report on Fundamental Research for Community-based Welfare Design in Higashi-ku, Hamamatsu City(1)	Kohji KURODA	125
A Report of Landscape Color and Image in SAN-EN-NANSHIN(Part2)	Hiromi MIYAUCHI	135
The brand SUAC which sends as an unique existence -The development of university goods and the view of university online-shop (stage 2)-	Kazumi WADA Tetsuji SAKAMOTO Atsuo TORII Kazuki YAMAMOTO Kiyonori SATO Takashi HADA Hiroshi MATOBA	151
Practicing Universal Design in the Community (Part 3)	Satoshi KOSE Toshiyuki NEMOTO	161
Possibility of designs for sustainable communities in the western area of Shizuoka Prefecture	Junji MIYAKAWA Tetsuji SAKAMOTO Atsuo TORII Masato ISAKA Kunio SAI Takashi HADA Satoshi KOSE	165
Considerations on the Possibility of Improvement of Study Environment in SUAC	Shintaro HANAZAWA Sawako HAYASHI Masato ISAKA Hiroshi MATOBA Kazumi WADA	173
A New Translation of Məmməd Əmin Rəsulzadə's *A Turk Nationalist's Memoirs on Stalin and the Revolution*, Part 1	Katsumi TOKUMASU	179
Sketching platform with the "Propeller" parallel processor	Yoichi NAGASHIMA	189

文化的行為としての食生活－食研究の視座－

Food Lifestyle as Cultural Behavior : Perspective of Food Research

林　　在圭
文化政策学部国際文化学科

Jaegyu LIM
Department of International Culture, Faculty of Cultural Policy and Management

何を食べるのか、どのように食べるのか、また何を使って食べるのかは、文化圏によって異なり、個別文化それぞれの特有の食文化を作り上げている。食を介して人間関係や社会のつながりが生まれ、こうして文化のうちのかなりの部分が食にかかわっており、文化の基礎を担っている。こうした食をめぐる行動に注意を払うことによって、その社会や文化の最も基本的な構造がみえてくるはずである。人は何を食べるのか（食べないのか）、そして人はなぜそれを食べるのかという問題に限定して、とくに韓国の食を中心に紹介しながら、日本の食文化を考えるきっかけを与えることにしたい。

Food Lifestyle as Cultural Behavior - Perspective of Food Research -
What is eaten, how it is eaten, and what is used to eat it varies by cultural zone, creating each individual culture's unique food culture. Human relations and social ties are created through food, and thus a large portion of culture is related to food, which is a foundation of culture. By paying attention to such behavior concerning food, the most basic structure of that society and culture should come into view. Limiting our discussion to what people eat (what don't they eat?) and why people eat those things, especially focusing on Korea's foods, we provide a catalyst for considering Japan's food culture.

はじめに

私たちは生きていくためには食べなければならない。人間にとって、食べることは生命と健康を維持するための最も基本的な行為であり、その意味で生物学的に普遍的な営みである。そのため日々の生活の中で、ふだん何をどのように食べているかは、あまり意識されることはない。しかし、この一見あたりまえの行為の背後には、人と自然、人と人とのかかわりあいが深く結びついている。

何を食べるのか、どのように食べるのか、また何を使って食べるのかは、文化圏によって異なり、個別文化それぞれの特有の食文化を作り上げている。食を介して人間関係や社会のつながりが生まれ、こうして文化のうちのかなりの部分が食にかかわっており、文化の基礎を担っている。したがって日々のありふれた事柄としての食をめぐる行動に注意を払うことによって、その社会や文化の最も基本的な構造がみえてくるはずである。

本稿では、ありふれた日常生活のひとこまにすぎない「食べる」という行為を切り口に、人と自然、人と人とのかかわり方について考察する。しかしながら、食べるという「食」の問題は非常に間口が広く、網羅してとらえることは不可能であろう。そのため、ここでは人は何を食べるのか（食べないのか）、そして人はなぜそれを食べるのかという問題に限定して、とくに韓国の食を中心に紹介しながら、日本の食文化を考えるきっかけを与えることにしたい。したがって、本稿の目的は食文化研究の一手法を提示するものであり、人は何を食べるのか、そして人はなぜそれを食べるのかについて議論しながら、今一度「食べる」という行為について考える契機を与えたい。

1　食べることの意味とは

（1）食物タブーと食物選択

今日の日本でさえ、近親相姦の禁止、敷居を踏むな、着物を左前に着るなといったことと同様に食習慣についても、かつて長い間仏教の影響で肉食を禁止する風習があった。また箸に関するタブー（立て箸、二人箸など）や食い合わせ（ウナギと梅干、タニシと蕎麦、天ぷらとスイカなど）など、多くのタブーが残っている。世界中の様々な生物が食物タブーとして禁食となっている。タブーは人間の社会文化を構成する根本的な特徴の一つであるといえる。それ故、多くの人類学者がタブーの謎に取り組み、普遍的原理を模索してきた。何でも食べることのできる人間が、なぜある種の食べ物をわざわざ禁止したのだろうか。あるいは、それぞれの文化はどのようにして自分たちの食べるものを選択してきたのだろうか。この疑問の根底には、人間はもともと何でも食べていたが文明の発達とともに、食物を限定してきたという考え方と、人間は自分たちの食べるべきものを一つひとつ選択しながら食域を拡げてきたという二通りの考え方がある。前者の考え方には、何を食べるのかという人類の食物選択が、すべて技術の問題に帰するとしたモルガンの技術進化論をはじめ、古典進化論時代のマックレナンやフレーザーなどの古典的トーテミズム論、マリノフスキー、デュルケーム、ラドクリフ＝ブラウン、フォーテス、エヴァンス＝プリチャードなどに代表される機能主義的トーテミズム論、そしてハリスの経済合理主義論があげられる。他方、後者の考え方にはレヴィ＝ストロースのトーテム理論、ダグラスの文化象徴論、リーチの文化記号論などが有名である。

以下ではレヴィ＝ストロースが『今日のトーテミズム』（1962）の中で、前者の実利主義的食物選択論を「食べるに適している理論」と称し、そして後者の文化の意味体系的食物選択論を「考えるに適している理論」と名付けた

ので、この名称を借りるとしよう。

1）食べるに適している学派

①モルガンの技術進化論

文化人類学の歴史の中で、最初に人類の食生活について体系的に記述を行ったのは、親族構造論の先駆者で、進化論時代のモルガン（Lewis Henry Morgan）である。彼は人類の食物選択の歴史が技術の進歩に裏打ちされていたという立場をとり、何を食べるのかという人類の食物選択は、すべて技術の問題に帰するものだととらえた（『古代社会』1877）。

②古典的トーテミズム論

食物選択に関する重要なキーワードの一つが「トーテミズム」である。このトーテミズムは多くの人類学者によって、古くから外婚制の関連で、また食物選択の謎を解く重要な手がかりとしても注目されてきた。トーテミズムとは何かという問題には、精神分析の創始者であるフロイト（Sigmund Freud）をはじめ多くの研究者たちが取り組んだが、人類学におけるトーテミズム研究の先駆者は古典進化論時代のマックレナンであり、彼はトーテミズムを動物崇拝に由来する宗教であるとみなした。また同時代のイギリス宗教人類学者のフレーザー（James George Frazer）はトーテミズムを呪術であると述べた（『金枝篇』1898）。このように古典進化論時代の人類学者たちは、トーテミズムの解明に苦心しながら、これを原始的な信仰、原始心性の現れだと考えたのである。

③機能主義的トーテミズム論

機能主義の始祖として登場したマリノフスキー（Bronislaw Kasper Malinowski）は、トーテミズムに人間と神とを媒介する食物という概念を導入することによって説明を試みた。しかし彼は食物選択を「空腹を感じた時に、直接そこ（自然）から補充するように食物を集め、調理し、食べる」という機能的な側面からのみ考察を行った。これに対しデュルケーム（Emile Durkheim）は、トーテムを西欧国家の国旗と同様の役割をもつものとしてとらえた（『宗教生活の原初形態』1912）。

一方、ラドクリフ＝ブラウン（Alfred Reginald Radcliffe-Brown）は、トーテミズムを個別的事例によって説明するのではなく、人類社会に普遍的に存在する法則の一つとして解明しようとした。トーテミズムとは人間と自然種との間の儀礼関係から発生した、もしくはその特殊な一発達であると述べる（『未開社会における構造と機能』1955）。彼によれば、トーテムは集団の統一と連帯性を保証しているのと同時に、集団間の差異を強調する役割を果たすものである。一方、フォーテス（Meyer Fortes）はトーテム種の選択をトーテム種とトーテム集団の類似性にその答えを求めようとした。彼が参与観察を行ったアフリカのタレンシー族では「牙をもった」肉食動物がトーテムとされており、人々とトーテム種の関係が先祖の関係と極めて類似していたからであるという。彼によって、トーテム種の選択に対する考え方を、主観的実利性の観点から客観的類似性の観点に移行させた。さらにエヴァンス＝プリチャード（Sir Edward Evans-Pirichard）によって、トーテムの解釈は外的類似性から内的相同性へと移行を成し遂げた（『ヌアー族の宗教』1940）。こうした一連のトーテミズム論の研究は食物選択におけるトーテム種であるがゆえに、食物タブーが存在するものととらえた。

④ハリスの経済合理主義

こうした実利主義をさらに精緻化させたのが、文化唯物論を提唱したアメリカ人類学者のハリス（Marvin Harris）である。彼は新古典派のミクロ経済学が開発した費用と便益分析を応用して、すべての食物タブーを物質的利害関係によって説明しようとした。彼は「好んで選ばれる（食べるに適している）食物は、忌避される（食べるに適さない）食物より、コストに対する実際の利益の差引勘定のわりがよい食物なのだ」という理論を展開し、食物選好問題を解こうとした（『食と文化の謎』1985）。彼の説明によると、私たちが犬や猫を食べないのは、それが愛しいペットだからではなく、肉食動物である犬は肉の供給源として効率が悪いからである。しかし、すべての人間が最小限コストによる最大限収益という経済合理的な行動をとると想定するのは極端すぎて無理がある。また物理的利害だけでは食物以外のタブー（例えば、性や結婚タブー）は説明できないところに欠陥がある。

2）考えるに適している学派

①レヴィ＝ストロースのトーテム理論

ラドクリフ=ブラウンのトーテム理論を批判的に継承しつつ、まったく新たな理論を展開したのが、構造主義人類学を確立したレヴィ＝ストロース（Claude Levi-Strauss）であり、彼は言語の文法から食習慣を理解しようした。「なぜその集団がそのトーテムを選択したのか、あるいは、しなければならなかったのか」という根源的な問題を設定した。彼によると、食物選択において、とうとう人々は、自然種は「食べるに適している」からではなく、「考えるに適している」から選ばれていると述べた（『今日のトーテミズム』1962）。つまり私たちが何を食べ、何を食べないかを決定するのは、それが技術に裏打ちされているからでも、食べるに適しているからでもなく、考えるに適しているからであるということになる。

②リーチの文化記号論

リーチ（Edmund Ronald Leach）によると、人間が無秩序な混沌状態（自然）に名前を付けて分類し秩序体系を作り上げようとする際に、どうしても分類の網目からこぼれ落ちてしまうものがある。その自然の余剰部分がタブー視されるのだとして、『文化とコミュニケーション』（1976）の中で、ユーラー図形を用いて説明する。タブーとはカテゴリーの明確な対立に関して異例なカテゴリーに適用されるとして、AとBの2つの言葉のカテゴリーがあるとして、Bは＜Aではないもの＞と定義され、その逆もまた真であるとき、この区別を仲介する第3のカテゴリーCがあって、AB両方の属性を共有すれば、その時Cはタブーであるという。すなわちAとBに人間と動物を当てはめる。重複部分Cには人間であり、かつ動物でもある存在としてのペットが入る。そのため、ペットである犬や猫を禁食としていると説く。

③メアリー・ダグラスの文化象徴論

メアリー・ダグラス（Mary Douglas）は、リーチの理論を具体的に食物タブーに適用した。彼女は『汚穢と禁忌』（1966）の中で「レビ記」の禁忌について、イスラ

エル人にとって清浄で許食の動物は反芻類・偶蹄類というカテゴリーＡであり、蹄のない動物はカテゴリーＢとして可食域から排除される。可食域に入る動物のうち反芻類・偶蹄類は当然許食されるが、そのどちらか一方のもの、つまり蹄が分かれていても反芻しない動物（例えば豚）、あるいは反芻しても蹄が分かれていない奇蹄類（例えばラクダ）は汚れたものとしてタブーとされる。このように曖昧で両義的な境界上の動物がタブーとなる。

このようにレヴィ＝ストロースが指摘し、リーチやダグラスが証明しているように、私たちの食物選択は私たちの世界観の表現であり、自分たちがどのようにありたいと思っているのかという願望の表現でもある。こうした考え方によれば、生き物としての「食える・食えない」とは異なる次元で解釈され、それぞれの文化の意味体系によって、自己と他者の境界にあるものをタブーにしたり、あるいは、「旨い・まずい」という基準で、まずいものは栄養があっても食べないのである。

（2）食は他者認識のバローメーター

ある民族の料理法や特定の食べ物は、しばしば社会集団としての自己と他者とを区別するシルシとなり、他の集団と区別する根拠ともなっている。かつて日本では、日本料理で使うことのないニンニクを使う韓国人（朝鮮人）を「彼ら」と、日本人の「われわれ」とを区別する根拠とした。ちなみに私が日本の空港に降り立った時、韓国に行ってきたことを自覚化するのは、自分の口から発するニンニクの匂いからである。韓国料理に欠かせない大切な食材が、料理全般に使用され真っ赤に彩る唐辛子であり、それと並んで大量に摂取されているのがニンニクである。普通に韓国人はまとまった鱗茎を日に３～４個も食べる。韓国人の１人当たりのニンニクの年間消費量は、３００ｇの日本人の３６倍もの１０kgを超えている。食の違いの経験、とくに珍味やゲテモノに関しては理屈抜きの本能的なレベルで強烈なインパクトを受ける。こうした韓国料理としては夏バテ防止や退院後の保養等のために食される犬肉の「保身湯（ポシンタン）」と、屋台などでたくさん売られているおやつ感覚の「ポンデギ」（繭のサナギ）がある。

一方、韓国にとって日本は長い歴史の中で、常に意識され、他者として区別されるべき存在であった。今でも韓国にとって日本は、「追いかけ追い越せ」のよきライバルであり、パートナーである。そのため、韓国ではキムチを食べる韓国人の「われわれ」に対し、タクワンを食べる日本人を「チョックパリ」（倭者）と呼び区別する（ちなみに両者の根本的な差異はタクワンが単なる塩漬けであるのに対し、キムチは唐辛子やニンニク、様々な野菜を混ぜ込んで発酵させたものである）。韓国の象徴的食物としてのキムチが、韓国では一年中食されているが、とくに越冬のためのキムチ漬け（「キムジャン」と呼ぶ）の季節になると、一種の民間行事と称せられるほどで、町々の市場には白菜をはじめとする野菜が山積みされる。このキムチ漬けのために、会社ではキムジャン・ボーナスが支給され、各メディアではさくら前線ならぬ「キムジャン前線」が流れる。キムチの内容物も、地方や家によって異なり、塩辛などの海産物を入れるか否か、唐辛子やニンニクの量や塩加減が家々の味を決する。韓国の各家庭には今では通常の冷蔵庫とは別にキムチを保存しておくためのキムチ専用の冷蔵庫がある。このように韓国人にとって、キムチは米と並ぶ栄養補給源として準主食の地位にあるといえる。

このように人間は食べるものと食べないものとのカテゴリーを変えることによって、自分たちとそれ以外の人たちという境界を作ってきた。人間の食行動は高度に社会的なものであり、幼少時から長い年月をかけて社会化していく。例えば、食卓でのマナーや食習慣を身につける。そのため、食事の内容や作法も家族や地域や民族の歴史を色濃く反映し、それぞれに個別の象徴的な意味をもっている。例えば日本と韓国の食事マナーにおける最も異なる点は、韓国では箸はおかずを食べる時にだけ使い、ご飯やスープやチゲ（鍋料理）には匙を使う。韓国料理にスープやチゲの種類が豊富なのは、それらが匙で食べるのに向いた料理だからであり、食卓をかこむ者は同じ鍋の中に直接それぞれの匙を入れてすくって食べる。また日本では正座をして器を手にもって食べるが、韓国ではあぐら（女性は片膝を立てることも多い）をかいて器を食卓に置いたまま食べる。韓国では器を手にもったり、直接口につけたりすることは行儀が悪いとされる。もう一つは日本と違って、韓国では料理を残す習慣がある。日本では食べ物を残さず、すべてを食べるように教えられるが、韓国ではこれとは逆に出されたものをすべて食べ尽くすのは、マナー違反になる。儒教の国である韓国では、祖先祭祀を祀り、客をもてなす「奉祭祀接賓客」が第一の行動様式として実践されている。日常の食事を「飯床（パンサン）」と呼ぶが、飯床では日本の懐石料理や西洋のフルコースのように一品ずつ時間を追って供されるのではなく、すべての料理を一度にお膳の上に並べるのが基本である。一度にすべての料理が並べられることから、客をもてなす接客の食事は料理の種類とその量という、見栄が大切になっている。韓国には「お膳の脚が曲がるほどの御馳走」という表現があるが、品数が多いほど豪華な食事で、人をもてなす際にはたくさんの料理が並ぶ。そして残すことによって「食べきれないほどの御馳走でした」という謝意を表し、「充分な量が振る舞われた」ということを示すことになる。

このように、どの民族であれ自分たちの料理や調理法には強いこだわりを示す一方で、逆に他者の食事作法に対してはテーブルマナーを含め、強い嫌悪感を抱くことがよくみられる。食べ物を介した自己対他者の認識・再認識に有効に働くのは、幼い頃から理屈を超えた価値観として刷り込まれているからであり、異文化に対してはなかなか寛容にはなれないという側面をもっている。同じ食べ物を共に分かち合って食べることによって、人々の間には他者に対する「われわれ」という自己認識が培われるからである。こうした自己認識はそれぞれの民族集団を区別するだけでなく、同じ民族集団内の社会階層を差別化する時にもよくみられる。同じものを食べる場合でも調理法の違いによって、自己と他者を区別することも少なくない。食物選択や調理法を含む食習慣の差異は、集団を切り分けていく重要な要因の一つとなっており、集団のアイデンティティーや性差やステータスを表すものとなる。例えば、かつての韓国でも白米飯は支配階層の両班（ヤンバン）たちの食物であったのに対し、庶民の百姓たちは雑穀飯を食べていた。あるいは、精白米を食する上流階層に対し、玄米飯を食べる下流階層と

いう図式である（現在では自然食品や健康食のブームもあって逆転現象が起こっている）。調理法では、炭火焼きや「ジョンゴル鍋」（即席で焼いて食べる鍋）の上流階層に対し、スープ・野菜たっぷりのチゲ鍋を食する下流階層に分かれる。また今日では、食物の選択には経済性と安全性が密接に関係しており、折しも今年は「中国産の農薬餃子」の事件が大きな社会問題となっている。例えば同じ牛肉を食べるといっても、松阪牛を食べるか輸入牛肉を食べるか、あるいは有機栽培の野菜を意識して食べるか、そんなことよりも安いものを選択するのかといった選び方に、その人の嗜好や経済力などが表される。

また韓国では、手羽先は女性の食べ物、胆嚢や卵は男性の食べ物、受験生にはくっついて落ちないように飴や餅を食べさせ、滑って不合格にならないように若布スープは避けられる（若布スープは産婦には欠かすことのできないものである）。祭祀供物として唐辛子はもちろん、魂を寄せ付けない性質をもつとされるニンニクやネギ類がタブーとなっている。現在の韓国人は、唐辛子やニンニクが入っていない料理を美味しいとは感じない。韓国の食卓は全体が真っ赤であり、食卓に並べられた数種のおかずのすべてが唐辛子で赤く彩られ、辛いものを朝からたっぷりと食する。そのため、祭祀供物を祭祀後に美味しく食するための工夫が「ビビムバプ」であり、スープご飯の「グッバプ」である。ビビムバプはご飯の上に載せた具と共に唐辛子味噌のコチュジャンでこねて食べる。他方、グッバプはスープの中にご飯を入れ、薬念醤（ヤンニョムジャン）（薬味調味料）やコチュジャンなどで調味し、かき混ぜて食べる。家庭の食卓や食堂などでは常にコチュジャンがうずたかく盛ってあり、韓国人の食生活には欠かせないものである。たいていの韓国料理はこれを混ぜて食べる。刺身も日本のようにわさび醤油だけでなく、コチュジャンに酢と砂糖をまぜた酢コチュジャンをつけて食べるのである。

調理法から食事作法に至るまで、食べることにかかわるあらゆる「きまり」（習慣）が、その文化の人々にとっては、文化的自己そのものにかかわる重大事であり、食べ物の差異によって文化的自己の差異を際立たせ、自らの固有性を保持するのである。特有の食物が文化的自己認識において、象徴的に重要な意味をもつのは、それがその文化の共食のための食べ物として欠くことのできない存在だからである。

（3）共食

食べ物を分かち合って共に食べる（共食）という行為は、かなり人間的な現象であろう。ある特別の食べ物を皆で分かち合って食べる共食は人と人とを結びつける、最も強力な行為となる。これは象徴的には性的交わりとも同等に比べ得るほどである。人間文化の本質をなす交換として、物質、メッセージ、女性の交換（すなわち婚姻）によるコミュニケーションに関するレヴィ=ストロースの理論はよく知られているが、分かち合って食べることと性的交わりをもつことは、人と人との関係の網目の中に分かちがたく織り込まれ、文化全体の様相を形づくっている。とりわけ共食は、いかなる社会にも必ず見いだされる慣習・儀礼であり、食物を分かち合って食べることで身内（仲間）意識が育成される。日本でも「同じ釜の飯を食べた仲」という言葉があるように、同じものを分かち合って食べることで「仲間同士」「われわれ同士」という強い身内意識が培われる。このように食事という行為は人と人とを結びつけ、あるいは対立するものを和解させ共存させる手段でもある。食や食の場のつくり方は人々の関係をつくる根本をなすものであり、人間は共に食べることを通じて互いをわかり合え、親密さを築き上げる。したがって共食は人間にとって基本的な行為であり、食は人の共同生活やコミュニケーションを支え、媒介する、極めて重要な社会的役割を担っているといえる。

ところで、韓国では肉や餅・果物が共食には欠かすことのできない食べ物である。その重要性は、それらのもつ象徴的意味や文化的価値によるものである。肉や餅は古来から、神々に豊穣を祈念するための生贄の名残であり、果物は多産と子孫繁栄を象徴するものである。現在でも、中部西海岸漁村の豊漁祭では牛をその場でつぶし、生肉を供物として捧げ、スープにして村中の人が共に食している。これらの食物は祭祀や「ジャンチ」などの様々な儀礼において、欠くべからざる供物である。韓国では宴のことを漢字語では宴会（ヨーネ）、固有語ではジャンチという。宴会は宮中宴会のようにやや堅苦しいニュアンスがあり、慶事の宴を意味するジャンチの方がより一般的に使われている。とくにジャンチは生後100日目に行う「ベギルジャンチ」、初誕生祝いの「ドルジャンチ」、還暦祝いの「ヘガプジャンチ」のように、人生の通過儀礼に伴って行われる宴に多く使われるが、一般にジャンチは婚礼の宴をさす。通過儀礼（冠婚葬祭）には祝うものとは別に弔うものと祀るものも含まれており、葬礼と祭礼に分類できる。とくにその際に重要なのは共食行為である（韓国では祭祀共食をとくに「飲福（ウムボク）」と呼ぶ）。

一方、一年を通して生活の節目ごとに行われ、農業との関係が深い歳時風俗（年中行事）は正月や盆行事のように毎年同じ時期や季節に繰り返し行われる周期伝承である。行事内容は地域や家によって異なるが、その日にはふだんとは違うもの（御馳走）をつくって神仏や祖先に供え、家族も同じものをいただく神祭りの日である。この日は、ふだんとは違う御馳走をつくり神仏や祖先に供え、人も同じものを食べて作物の豊作を祈り感謝し、また家族の健康を祈願し健康を感謝する。この日は労働から離れて休む（遊ぶ）日となる。日本でもこれを「ハレ」と呼び、日常の「ケ」と区別する。ハレの日は特別な食事を食べ、特別な衣装を着て、特別な行事が行われ、非日常の世界に入る。それが終われば、また日常のケの世界へともどっていく。このハレとケの繰り返しが、私たちに生活リズムをつくっていた。都会に住んでいると、なかなかこうしたリズムを感じることはできないが、祭りとなると仕事も放り出して熱中する人もいる。日頃のつらい作業もハレの日があるからこそ頑張ることができるのである。

こうした年中行事や通過儀礼などのハレの日につくられる供物や御馳走は、その地域の栽培作物と密接な関係をもつ食物であり、人々が集まって分かち合って共に食べる。人々は愛情や友情を表したり、つながりを強化したりするために分かち合って共に食べるのである。しかし今日では食生活が豊かになり、餅や白米飯などが御馳走ではなくなった。また生活活動や精神生活の変化もあって、ハレと

ケの区別も曖昧になり、ハレに対する考え方も、今ではかなり希薄になっている。

以下のエスノグラフィーでは、韓国の最も代表的な非日常（食）であり、典型的な共食行為が伴う祖先祭祀を取りあげ、韓国の村落社会における日常食と儀礼食の関係を明らかにする。調査手法と手順は、まず世帯のタイプわけのための世帯調査を行い、祖先祭祀等の参与観察と世帯タイプ別の食事記録をとり、食物の摂取頻度による計量的分析を行う。

2　韓国農村における日常食と儀礼食

はじめに

農耕社会を背景とする韓国の伝統的な食生活は、「ご飯より優る薬はない」という医食同源（韓国では「薬食同源」と呼ぶ）の考え方に基づき、日常食は主食のご飯と副食のスープ・キムチ・ナムル・焼肉などのおかず（「飯饌（パンチャン）」）から構成されている。そのため多種多様な副食を通して均衡のとれた栄養素を取り込むことが可能であった。一方、韓国の食生活は日常食だけでは完結せず、非日常の儀礼食を組み合わせることで全体的な栄養バランスをとってきたといえる。

ところが韓国では日常食や儀礼食に関する具体的なフィールドワークに基づく実証的研究はほとんど行われてこなかった。全京秀の儀礼食の交換関係を焦点に祖先崇拝と社会構造との関係を明らかにした研究（全京秀 1992）や末成の忌祭と墓祭を中心に一漁村の祖先祭祀に関する挙行様相を調査報告したもの（末成1985）が若干注目されるにすぎない。

韓国では伝統的に村落社会における日常の食事がいたって質素であるのに対して、祭祀・結婚式・還暦・葬式などの儀礼時に用意される食事は、その量や質においてたいへんなご馳走であった。いずれも日常の食事では滅多に口にすることのない肉や魚料理をはじめ、餅やチヂミや果物を食する機会ともなっている。なかでも膨大な回数に及ぶ祖先祭祀では、祭祀後に行われる家族や参祀者だけによる神人共食の「飲福（ウムボク）」（直会）ばかりでなく、翌朝には親しい者や近隣の人々を招いて共食が行われる。また飲福に来られなかった人々に対しても、同じものをその家まで届けるのが習わし（「頒器（パンギ）」と呼ぶ）であった。こうした儀礼や接客以外では肉料理を食べることは伝統的にはほとんどなかった。

そのため、韓国の食生活を把握・理解するためには、日常食と非日常の儀礼食とを同じ論理体系の中で有機的にとらえる必要性があると思われる。そこで本研究では、韓国農村の一村落の地域社会を対象として、日常の食事記録と祖先祭祀の儀礼食の食物贈答・交換関係を調査し、食生活における日常食と儀礼食の相互補完的関係を明らかにすることを第一の目的とする。また、日常の食事記録から村落社会における日常食の基本パターンを析出し、従来の研究で定説化されている日常食の規範である「飯床規範」を検証する。

一方、祖先祭祀の儀礼研究では、金斗憲（1969）をはじめ、崔在錫（1975）・金宅圭（1979）・李光奎（1990）など多くの研究者によって、祖先祭祀の核心的機能として家族や親族組織の結束や紐帯、同族意識の維持・強化の機能（社会的地位の象徴的行為としての誇示）だけが強調されてきた。そこで第２の目的として、村落社会における祖先祭祀の儀礼食（とくに飲福過程）の食物贈答・交換関係の分析を通して、祖先祭祀（儀礼食）における村落統合の機能をも明らかにしたい。

（1）調査対象地

調査対象地は、ソウルから車で約2時間距離にある中部西海岸の一農村である、忠清南道唐津郡Ｄ里である。当該村落は17世紀末頃の宜寧南氏忠壮公派門中の一族によって開拓され、海に面した僻地農村であった。景観上の特徴は谷筋に数戸の家々が点在する散村形態をなしており、生業形態は狭小な水田耕作と、畑作の複合経営を組み合わせて展開してきた（林在圭 2000 参照）。特産品としてはコァリ唐辛子（シシトウ）・ダルレ（ノビル）・タバコなどが有名である。この地域一帯が大きな変貌を遂げたのは、1980年代に始まる大規模干拓事業が契機となっており、それによって干拓農地が造成され、1990 年代半ば頃に周辺農民に１戸当たり平均 3000 坪が分配され、水田耕作面積が倍増した。

統計上の戸数は７０戸前後であるが、実質的に居住する戸数は６０戸前後の中山間集落である。そのうち、半数以上が宜寧南氏で占める「宗族マウル」を形成している（林在圭 1998 参照）。2005 年の調査対象戸数と人口は６１戸１８６人であり、65 歳以上の高齢者の人口が２３%以上を占めている。職業構成は耕地専業農家６2.3%（３８戸）、畜産との兼営農家 26.2%（16 戸）、その他 11.5%（商業２戸、牧師、公務員が各１戸、無職３戸）となっている。戸数の変化は少ないが、人口については１戸当たり平均人数が、1980 年 6.3 人であったのに対して、2005 年には 3.0 人と半減し、過疎・高齢化がかなり進行している。

（2）日常食の食事記録

Ｄ里における日常食の基本パターンを析出するために、当初は上中下の階層別に各１世帯を選定し、季節別にそれぞれ10日間の食事記録をとることにした。しかしＤ里では 1990 年代を境に、階層別の差異がほとんどみられなくなり、階層別分類の有効性が低下し、むしろ世帯構成員の違いによる差異が高まったことを知った。そこで、家族周期を考慮した分類に修正を加え、「年配世帯」（Ⅰ）・「中高生を有する世帯」（Ⅱ）・「幼児を有する世帯」（Ⅲ）に分類した。この分類に従って各１世帯ずつを選定し、それぞれ季節別に10日間の食事記録をとることにした。タイプ別世帯構成をみると、タイプⅠの世帯構成は世帯主（65 歳・農業）、妻（56 歳・農業）、長男（37 歳・農業）の３人構成である。タイプⅡは世帯主（42 歳・公務員）、妻（41 歳・学校給食の「学母給食トウミ」）、長男（17 歳・高校学生）、長女（13 歳・中学生）の４人構成である。タイプⅢは世帯主（42 歳・農業）、妻（41 歳・家事）、長男（9 歳・小学生）、長女（7 歳・小学生）の４人構成である。

調査・分析方法は、毎日摂取する料理の種類とその頻度

を分析する。日常食と儀礼食の大きな違いは良質の動物性蛋白質の摂取にあると思われる。そこで、動物性蛋白質を考慮して、食事記録から料理を分類すると表 1 のとおりである。食事記録から料理名によって食物群を分類すると主食類（A）からデザート（M）まで 13 群になる。主食類は飯（Aa）と粥や粉食（Ab）、麺類（Ac）に細分される。ご飯には白米飯の他に、玄米飯・黒豆飯・黒米飯・麦飯・雑穀飯なども好んで食べている。お粥にも様々な種類があるが、カボチャ粥と小豆粥などが定番であり、鮑粥も有名である。粉食は「ミシッカル」と呼ばれ、雑穀を炒り、粉にして牛乳や蜂蜜を入れた水に溶かした穀物ジュースである。一方町部にはパン屋が多くみられ日常的に食されているのに対して、当村ではパン食がほとんどみられないのが意外でもあった。麺類には「カルクッス」と呼ばれる手打ちうどんやインスタントラーメンを利用した料理の他に、「トックック」（雑煮）や「スジエビ」（水団）などが多用される。

一方、おかずの副食類に関しては、スープ・ナムル・チゲは肉や魚貝類を入れるか否かによって細分類するが、これらの動物性蛋白質は薬味（「薬念（ヤンニョム）」と呼ぶ）程度のものである。デザート類には牛乳といった飲物や果物や餅類などに細分類される。

表 1　日常食の食物分類

料理名	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L	M
	主食	スープ	キムチ	ナムル	生菜	チゲ	煮付	蒸物	揚物	焼物	刺身	塩辛	デザート
動植別の細分	a	a	a	a	a	a	a	a	a	a			a
	飯	肉	野菜	肉	野菜	肉	煮付	肉	肉	肉			牛乳
	b	b	b	b	b	b	b	b	b	b			b
	粥粉	魚貝	漬物	魚貝	海草	魚貝	炒物	魚貝	魚貝	魚貝			果物
	c	c	c	c		c			c				c
	麺類	野菜	魚貝	野菜		野菜			野菜				餅類

表 2　日常食の摂取食物別序列化

	年配世帯				高校生世帯				幼児世帯				計	序列
	夏	秋	冬	春	夏	秋	冬	春	夏	秋	冬	春		
Aa	28	24	25	20	18	19	14	8	23	24	25	21	249	-
Ab	0	0	0	0	0	1	5	10	0	0	0	0	16	-
Ac	2	5	5	5	3	3	6	2	3	6	4	9	53	-
B	7	7	14	7	8	8	6	4	11	6	7	11	96	6
C	29	57	51	17	26	30	18	17	47	73	71	50	486	1
D	38	10	24	26	14	24	17	7	16	20	15	14	225	2
E	28	14	1	16	3	3	1	5	14	10	7	3	105	5
F	12	15	5	15	8	7	7	3	8	17	14	6	117	4
G	11	28	17	1	2	10	4	4	16	7	16	12	128	3
H	6	7	2	4	5	2	3	1	4	3	4	6	47	7
I	0	1	0	1	0	0	0	0	0	0	1	0	3	12
J	2	3	0	4	1	3	0	0	7	4	5	2	31	8
K	0	0	0	0	0	0	0	0	0	4	0	0	4	11
L	0	0	11	0	0	0	0	0	0	3	0	2	16	9
M	0	0	0	0	0	0	0	7	0	0	0	0	7	10
計	163	171	155	116	88	110	81	68	149	177	169	136	1583	4.97

（3）日常食の基本パターン

各世帯別の食事記録に基づいて、副食（おかず）の食物群別に整理し、摂取頻度による順位付けをしたものが表2である。表2によると、日常食における副食の摂取頻度による序列は、①キムチ（C）→②ナムル（D）→③煮付（G）→④チゲ（F）→⑤生菜（E）→⑥スープ（B）→⑦蒸物（H）→⑧焼物（J）→⑨塩辛（L）→⑩デザート（M）→⑪刺身（K）→⑫揚物（I）の順である。したがって当村において最も頻繁に食されている副食はキムチであり、その次が茹で野菜の和え物であるナムルであることがわかる。その次に頻繁に食されている副食は、煮付、鍋物のチゲ、生野菜の和え物である生菜である。特に煮付はそのほとんどが煮干の佃煮の類である。また、チゲはキムチや豆腐といった野菜ベースの鍋物であり、肉や魚は薬味程度を入れるものが多い。次に、「クック」と呼ばれるスープは一般にご飯に付きものとして食事には欠かせないものとして認識されているが、実際の調査では非常に低い順位であることがわかる。一方、動物性蛋白質の料理としては蒸物・焼物・塩辛があげられる。特に蒸物はそのほとんどが卵料理であって、肉や魚の蒸物はほとんど食されていない。また焼物は豚の 3 枚肉を中心とした焼物かブルゴギである。

最後に、デザート・刺身・揚物類はほとんど食されていないことがわかる。特に7件のデザートはミシッカルの穀物ジュースであり、伝統的に食後のデザートを食べるという習慣はなかった。刺身はいわゆる生魚の刺身ではなく、干潟が近いということもあって、タコや貝類（主としてアサリ）の湯通ししたものが主である。日本のような揚物の天ぷらは日常食では食されておらず、フライパンで焼くチヂミや卵焼きがせいぜいのところである。

ところで、当村では1食当たりの平均摂取食物の品数はどれくらいだろうか。これを割り出すために、延べ摂取食物の件数を食事回数で割る（外食等82回を除外する）。延べ摂取食物の件数は 1583 件であり、実際の食事回数は 318 回であるので、1583 ÷ 318 ＝ 4.97、となる。したがって当該村落における日常食の基本パターンは、主食1に副食4品のキムチ・ナムル・煮付炒物・チゲとなるが、生菜はナムルの代わりに、スープはチゲに代わるものとして用いられている。特にスープは毎食ではなく、1 日に 1 回弱程度にすぎない。一方、動物性蛋白質の食物は薬味程度のものを除けば、G・H・I・J・K・L の 229 件であるが、その中身をみると、卵焼きや小魚料理がその大半を占め、良質の動物性蛋白質の料理とはいいがたいものである。煮付（G）は 1 日に 1 回、蒸物（H）は 2 日に 1 回、焼物（J）は 4 日弱に 1 回、塩辛（L）は 7 日に 1 回の割合で食されている。

（4）祖先祭祀の儀礼食

韓国における儀礼は、冠婚葬祭の通過儀礼と1年の節日（「名節（ミョンジョル）」と呼ぶ）に行われる年中行事（「歳時風俗」と呼ぶ）とに大別される。地域社会における食物贈答交換という観点からは、とりわけ初誕生祝い・婚礼・還暦祝いなどと、葬儀・祖先祭祀が重要であり、現在でも盛大に行われている。一方、年中行事は 1970 年代以降そのほとんどが姿を消し、旧暦 1 月 1 日のソル行事と旧暦 8 月 15 日の秋夕行事だけが残り、韓国の 2 大民俗行事として、帰省

のための民族大移動が繰り広げられている。この両行事は特に「茶礼」と呼ばれる、祖先祭祀が祀られる。儀礼にはお祝い事の「ジャンチ」共食と、祖先祭祀などの「飲福」の共食過程が含まれており、家族や親族のみならず、地域社会の住民たちも呼ばれて共同飲食が行われる。そのため韓国の食生活を理解するためには日常食だけでなく、儀礼食の考察は欠かせない。ここでは諸儀礼の中で祖先祭祀を取り上げる（写真 1）。

写真 1

現在、D 村における祖先祭祀の種類は、基本的に 4 代奉祀の命日に行われる「忌祭」、上述の 2 大名節に行われる「茶礼」、忌祭の対象から後退した 5 代祖以上を対象とした旧暦 10 月中に墓前で行われる「時祭」の 3 種である（祖先祭祀の祭礼過程や供物等の詳細は、林・秋野 2006 を参照されたい）。図 1 は当村に根拠地をおく宜寧南氏忠壮公派門中の大宗家（総本家）における忌祭時の供物を示したものである。祖先祭祀の供物は、縦 4 列・横 8 列の計 32 品が供えられるが、全品揃わない時もある。祭需の陳設は祭膳に向かって、最前列の左から棗・栗・梨・柿・真瓜・水瓜（西瓜）・油果・糖果の順に供えられる。2 列目は、左から 脯（ポ）（干物）・熟菜（ナムル）・煎（ジョン）（チヂミ）・佐飯（ジャーバン）（佃煮）・清醤（醤油）・海衣（海苔）・醢（ヘー）（甘酒）・沈菜（キムチ）の順に、3 列目は左から肉（茹でた片肉（ピョンユック））・肉奠（ユッジョン）・鶏卵・炙（ジョク）（串焼き）・魚奠（オジョン）・豆腐・餅・清（蜂蜜か水飴）の順である。最後列に左から飯（メー）・羹（ケン）（スープ）・盞（ザン）（盃）・盞・匙楪（匙箸入れ）・酢・飯・羹の順に供えられる（写真 2）。こうした陳設にみられる規則は、まず第 1 に最前列の果物は左から天果・地果・造果、すなわち棗・栗・梨など、木になる果物（天果）、次に西瓜や瓜のような土でとれる果物（地果）、そして饌子（サンジャ）・茶食（チャシク）など人が作った菓子（造果）の順に供える。第 2 に「棗栗梨柿（ソユルイシ）」のルールすなわち棗・栗・梨・柿の順に供える。また地域によっては「紅東白西（ホンドンペッソ）」、すなわち赤い果物は東、白いものは西に供える。第 3 に「左脯右醢（ソァポウヘ）」すなわち脯は左に醢は右に供え、「生東熟西（センドンスッソ）」すなわち生物は東に、火を通した物は西に供える。第 4 に「魚東肉西（オドンユッソ）」すなわち魚は東に、肉は西に供えるルールである。左（西）側に高い価値のある物を供える。肉類は魚類より高い価値があるとされており、炙は肉（牛・豚）・鶏・魚類の順に、その格式の順位が付けられている。第 5 に「右飯左羹（ウバンソァゲン）」すなわち位牌に対して、ご飯は右側に、スープの羹は左側に供えるルールである。しかし、こうした陳設における規則や祭需の数は、原則的なものであって、実際には必ず規則通りに守られているわけではなく、状況に応じて柔軟性がある。この祖先祭祀の祭祀床は、「チャングムの誓い」でみられるように朝鮮王朝の国王の食事である「スラッサン」が庶民の儀礼食に流れ、範型化されたものといえよう。

写真 2

（5）祖先祭祀の飲福範囲

祖先祭祀後の供物を家族や親族のみならず、近所や村中の人々を呼んで共に食べるが、この共食過程を「飲福」と呼ぶ。表 3 は当該村落 61 戸の 1 年間の忌祭の対象別回数を示したものである。当村では飲福の範囲によって、①村付合飲福（父母の忌祭と時祭）、②近所付合飲福（祖父母～高祖父母の忌祭）、③家族のみ飲福（茶礼）の 3 種に分類される。

まず、①村付合飲福は父と母の忌祭と時祭時の飲福であ

			位　牌				
飯	羹	盞	盞	匙楪	酢	飯	羹
肉	肉奠	鶏卵	炙	魚奠	豆腐	餅	清
脯	熟菜	焼	佐飯	清醤	海衣	醢	沈菜
棗	栗	梨	柿	真瓜	水瓜	油果	糖果
		香炉			酒		

図 1　大宗家の忌祭の祭需陳設

表 3　D 里の対象別祖先祭祀

対象先祖	回数	対象先祖	回数
父	37	曾祖父	12
母	27	曾祖母	12
祖父	23	高祖父	7
祖母	23	高祖母	7
計	149	その他	1

り、村中の全戸が対象になるが、通常各戸から最高齢者１名が飲福に呼ばれる。当該村落における父母の忌祭は全149回のうち64回である。これによる食物分配の対象人数＝件数×（分配対象戸数＋平均世帯員数）、すなわち64×(61＋3.0)=4096人である。また時祭は宜寧南氏忠壮公派門中の下位の8小グループで祀られており、時祭による食物分配の対象人数は＝件数×（分配対象戸数＋平均世帯員数）、すなわち８×(61＋3.0)=512人である。したがって村付合飲福による食物分配の対象人数は延べ4608人となる。

次に、②近所付合飲福は父母以外の忌祭の飲福であり、平均して隣近所の３戸の全世帯員が呼ばれる。全149回の忌祭のうち、父母の忌祭64件を除いた85件がこれに当たる。したがって近所付合飲福による食物分配の対象人数＝件数×分配対象戸数×平均世帯員数、すなわち85×4×3.0=1020人となる。

さらに、③家族のみ飲福は茶礼の飲福であり、茶礼は61戸のうち39戸で祀られている。これによる食物分配の対象人数＝茶礼挙行戸数×平均世帯員数×（ソルの3日＋秋夕２日）＋年始回り戸数、すなわち39×3.0×5＋61=646人である。

したがって当村における1年間の祖先祭祀による儀礼食の摂取対象人数は、①②③を合計した延べ6274人となり、毎日約18人が祖先祭祀の儀礼食の飲福に預かるのである。D里の人口が186人であるから、当村における１個人は祖先祭祀の儀礼食によって約10日に１回、良質の動物性蛋白質が供給されることになる。

（6）考察

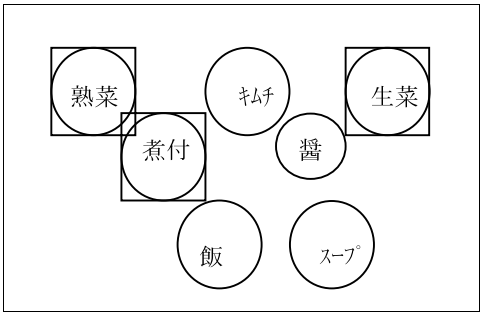
ここでは、日常食の「飯床規範」は誰のものであるかという問題と、祖先祭祀の地縁紐帯強化機能という２点について考察を加える。

まず日常食の「飯床規範」についてみよう。日常食は「飯床」と呼ばれ、一定のルールをもっているといわれる。すなわち飯床は主食のご飯と副食のスープおよびおかずから構成されている。ご飯・スープ・キムチ・チゲ・蒸物・醤類を基本とし、食材と調理法の重複を避けて、ナムル・生菜・焼物・煮付・刺身・塩辛・乾物などの中から3-12種類を選んで配合するが、このおかずの数によって３・５・７・９・12楪飯床となる（林在圭2004参照）。これが従来の研究で定説化されている飯床規範である。したがって、おかず３品の最も質素な３楪飯床でも基本のもの（飯・スープ・チゲ・蒸物・醤類）を入れると少なくとも７品以上となる（図２と３参照）。なお飯床の配列は、ご飯を左にスープを右に、チゲや醤類を中央に、汁物や焼物を右側に、ナムルや小魚の煮付などは一番奥に配列される。すなわち匙で食べるご飯やスープを食べる人の近くに、チゲや汁物を中央か右側に、そして箸で食べるナムルなどは食べる人から遠いところに配列される。

当村の食事記録による日常食の基本パターンからわかるように、１食当たりの平均摂取食物の品数は4.97であった。したがって当村における日常食の基本パターンは、主食１に副食４の５品である。飯床規範によると最も質素な３楪飯床でも７品であり、当該村落の５品とは２品という大きな差がある（写真3）。さらに当該村落では1980年代を境に大きく変貌し、豊かになったといわれる。その豊かさは日常の食卓にも大きな変化をもたらした。1980年代の大変貌の主たる要因のひとつは畑作における商品作物の導入であり、もうひとつは政府主導の大規模干拓事業による水田面積の倍増である。こうしたことを考慮すると、飯床規範は誰のものであるか、誰のための規範であったのかが容易に推測される。少なくとも定説の飯床規範は庶民のものではなかったのである（写真４）。

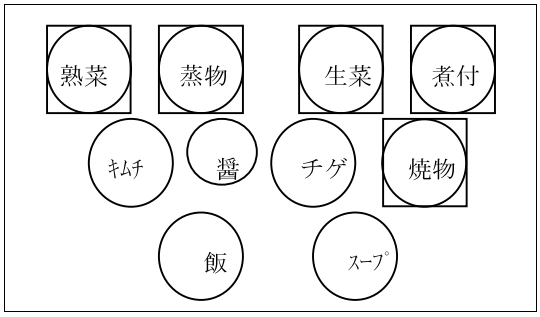
次に祖先祭祀の地縁紐帯強化機能について考えてみよう。従来の研究では、祖先祭祀は血縁関係の紐帯強化機能だけが強調されてきた。しかし祖先祭祀を食（儀礼食）という側面からみると、当村の祖先祭祀の飲福過程にみられるように、儀礼食の贈答交換（共食行為）は村落社会にお

写真３



注）○：基本のもの、▢：楪

図２



注）○：基本のもの、▢：楪

図３

写真 4

ける人間関係の維持強化の機能を果たしていることがわかる。それ故祖先祭祀の儀礼食は血縁関係の紐帯強化機能に加え、地縁関係の維持補強機能をも併せ持っている。村落社会における儀礼食の贈答交換は村落全体の互恵的生活互助交換の一輪として機能している。したがって儀礼食の贈答交換は、村落社会の生活原理・秩序形成における統合の誘発メカニズムとして働いている。

むすび

韓国の人々はとりわけ食べ物を重視する。「飯を食べたか」という言葉が挨拶にもなっているほどである。これは貧しさ故に飯を食べたか否かをたずねるものではなく、食べる行為を重視する文化を持っているからである。

韓国の食生活の伝統は日常食だけでは完結せず、儀礼食を組み合わせることで、成り立っている。日常食と儀礼食の大きな違いは、日常食が野菜中心であるのに対して、儀礼食では魚や肉料理が重要な供物となっている。こうした食生活の伝統は、医（あるいは薬）と食は源が同じであるという医食同源の考え方に基づき、よい食事をとれば健康になると信じられている。村落社会における医食同源の考え方は、依然として強く受け継がれているものの、幼児を有する世帯では外食行動も増え、肉食化の傾向もみられる（写真 5）。

また韓国人は１人で食べることを嫌い、「食事は皆で集まってするものだ」という意識が強く、一緒につくりわいわい皆で食べるのを好む。韓国の大学に留学した女子大生曰く、困ったことのひとつは、周りの人たちから変な目で見られたり、声をかけられたりするので、１人で飲食店に食事に出かけられないことだったと述懐していたのもうなずける。とくにお祝いや祖先祭祀の際には家族親族のみならず、近所や村人が共に食べる。

写真 5

しかし 1970 年代の都市産業化、1973 年の家庭儀礼準則、1985 年頃の高度経済成長、1990 年代以降の外食産業の隆盛などの外的要因によって、村落社会における食生活も大きく変わりつつある。1980年代半ば以降、一部の儀礼（婚礼・還暦など）を除き、儀礼食による食物の贈答交換機能は喪失し、日常食の肉食化が進行しつつある。今後、祖先祭祀以外の諸儀礼食、外食行動に関する調査研究をさらに進めていきたい。

3　まとめ

人間にとって食べることは生命と健康を維持するための最も基本的な行為であり、普遍的な営みである。そのため日々の生活の中で、ふだん何をどのように食べているかは、あまり意識されることはない。しかしこれまでみてきたように、この一見あたりまえの行為の背後には、人と自然、人と人とのかかわりあいが深く結びついていることがわかる。

しかし今日では、世界中からあらゆる食物が輸入され、食のつくり手と受け手の関係、食の環境が大きく変わっている。食材をつくるということと、料理をつくるということと、食べるということが完全に切り離されている。食べる人は食べ物がつくられるプロセスを知らず、つくり手が見えなくなり、つくることと食べることのミスマッチによって、食への安全・安心感も揺らいでいるというのが昨今の現状ではないだろうか。食文化は私たちを取り巻く自然環境とのかかわり合いの中で生まれ、またこれらの地域の食材を日々の料理に活かすための工夫や知恵が親から子へと引き継がれ、さらに次の世代に伝えていくことが重要である。同時に自らの国の文化や伝統を理解することは、日本人としての自覚をもち、国際理解を進めることにもつながるはずである。

参考文献

山内昶 1994『「食」の歴史人類学』人文書院
山川三太 1998『文化人類学通になる本』オーエス出版社
モルガン著、青山道男訳 1958-61『古代社会』上・下、岩波文庫）
フレーザー著、永橋卓介訳 1951-52『金枝篇』（簡訳版）1-5 巻、岩波文庫
マリノフスキー著、寺田和夫・増田義郎訳 1967「西太平洋の遠洋航海者」『マリノフスキー・レヴィ＝ストロース』世界の名著 59、中央公論社
ラドクリフ＝ブラウン著、青柳まちこ訳・蒲生正男解説 1975『未開社会における構造と機能』新泉社
ハリス著、板橋作美訳 1988『食と文化の謎』岩波書店
レヴィ＝ストロース著、仲沢紀雄訳 1970『今日のトーテミズム』みすず書房
ダグラス著、塚本利明訳 1972『汚穢と禁忌』思潮社
リーチ著、青木保・宮坂敬造訳 1981『文化とコミュニケーション』紀伊國屋書店
全京秀 1992「下沙美の祭祀と飲福」『韓国漁村の低開発と適応』集文堂
林在圭・秋野晃司 2006「韓国の祖先祭祀における食文化」『女子栄養大学栄養科学研究所年報』14、女栄養大学栄養科学研究所

日本人英語学習者と教員に対するニーズ分析
－演習、講義との関連を意識したアカデミックリーディング授業のあり方－

Needs Analysis of EFL Students and Teachers: Towards Making Connection among Academic Reading Class, Seminar Class and Lecture

杉浦　香織
文化政策学部国際文化学科

Kaori SUGIURA
Department of International Culture, Faculty of Cultural Policy and Management

本稿の目的は、国際文化学科に所属する日本人英語学習者（教員６人、２年生５６人、３年生４３人）を対象に行なった、アカデミックリーディングの授業に関するニーズ分析調査結果を報告することにある。
主な結果としては、学習者は主に口頭でのコミュニケーションスキルを伸張させたいと考えている一方、演習や講義で英語文献を使用する教員は、受容的スキル（リーディング）と能動的スキル（スピーキング、プレゼンテーション）の両方のスキル向上を期待していることがわかった。また、学習者間でも、その英語力によって、アカデミックリーディングの学習に対する意欲の度合いに差があることが明らかとなった。読解を困難にさせていると考えられる要素に関しては、学習者は主に語彙（専門用語を含む）を要因と捉える一方、教員は、学生の複雑な文法の解釈力や主題把握力を問題視していることが明らかとなった。
これらの結果を踏まえ、アカデミックリーディングの授業の目的や内容を議論するとともに、実際の指導内容に関する提案を行なう。

The purpose of the study is to reveal the academic reading needs of the students with intermediate English proficiency and instructors who use English written materials in seminar classes or lectures. The survey was conducted on faculty members (n=6) and English as a foreign language (EFL) university sophomores (n=56) taking English reading classes in the Department of International Culture. The sample also includes juniors and seniors (n=43) enrolled in a seminar class in which English written materials are used for their study.
One of the main findings showed that overall the students were likely to be interested in improving their oral communication skills, whereas subject instructors tended to expect students to acquire both passive, especially reading skills, as well as productive skills, such as speaking and presentation abilities. In addition, there is a clear spread between the groups with different English levels in terms of motivation for academic English learning. Regarding perceived difficulties in academic reading, the learners reported that they had difficulty in dealing with vocabulary, whereas teachers consider that students have problems with understanding complex grammar and grasping main ideas.
Based on the survey results, the objectives and content of the academic reading classes and the ideas for practical teaching in EFL settings will be discussed.

1. Introduction

The ability to read academic materials in English is inarguably an essential skill for university students. This is especially true for those whose majors are related to English, since resources written in English can provide a wide range of useful authentic information that is not available in Japanese. Most subject teachers want their students to read English written materials. However, for most university students studying English as a foreign language (EFL), apart from those who seldom need to use English on campus or in their future careers, it is difficult to establish clear purposes for studying English for academic purposes (EAP). At the same time, many students are unwilling to read in English or are likely to do poorly when studying academic subjects in a second language. Consequently, university teachers have tended to abandon the use of materials written in English, opting to use the mother language to present and discuss English-written instructional materials in their lectures and seminars. A gap clearly exists between university teachers' expectations and students' needs and preferences, and these issues are now attracting much attention in the field of EAP (e.g., Braine, 2001; Chan, 2001; Spratt, 1999).

The original motivation for the present study came from my first experience in teaching reading for EAP, where not much literature is available regarding the instruction of EFL students with intermediate English proficiency who major in Humanities, Languages, or Social Sciences. This article is based on the results of a needs analysis survey presented to students and subject teachers. The survey was designed to shed light on the perceptions of students and teachers regarding academic English, in order to determine how much EAP is necessary and what features and skills should be taught for the type of student mentioned above. After evaluating the results, some practical suggestions for course objectives and the instruction of academic English classes for EFL students are made.

2. Background

2.1 Needs Analysis and ESP & EAP

Needs analysis, in which systematic data collection is conducted to determine students' or/and teachers' preferences and requirements, is one of the basic components used in education for creating curriculum design. The results of needs analysis are used to create courses where these needs can be met (Brown, 1995; Jordan, 1997; Dudley-Evance and St.John, 1998). In this study, needs analysis is conducted to implement English for Specific Purposes (ESP) classes in ways that are more effective. ESP, as defined in the present study, consists of research and

teaching designed to allow learners to acquire English knowledge and skills for specific purposes, such as vocations or professions (Orr, 1999). According to Dudley-Evance and John (1998), ESP may not always refer to the language of one specific occupation or training, such as English for Law or English for Physics. English education at university level that instructs students in common features of academic context in the sciences or humanities, often called English for Academic Purposes (EAP), can also be considered as a form of ESP.

According to Jordan (1997), EAP can be further classified into two categories: EGAP (English for General Academic Purposes) and ESAP (English for Specific Academic Purposes). In truth, it could be said that many Japanese universities, while providing 'mass' tertiary education, have instructed English for General Purpose (EGP) or English with No Purpose (ENP) rather than teaching EAP. Tajino (2004), however, claims that as long as universities are places where students conduct academic study and/ or research, the purpose of English language education in Japan should be EAP. To be specific, he states that the goals of English education in a university should be established as an 'arbitrary' point in a continuance between EGAP and ESAP, according to each university's situation. As shown in Figure 1, the relationship between skills and content instruction indicates that the instructional materials used for freshmen are not necessarily related to their specialties. As the school year progresses, the content used in teaching materials increases. This model is very useful for setting course objectives or for planning new curricula, and this study was conducted to explore where the arbitrary point should be set for a target university.

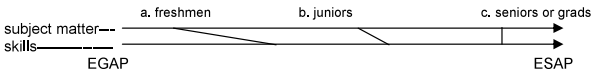


Figure 1. Relation between skills and content instruction (adapted and from Tajino, 2004)

2.2 Context of the study

Students in the Department of International Culture

In the present study, the participants major in International Culture, where they cultivate their knowledge and perspectives about a variety of cultures and circumstances both within and outside of Japan, including areas such as China, Korea, Indonesia, Vietnam, Australia, France, Italy, Turkey, Britain, and the U.S.A., among others. Along with traditional subjects, they also have chances to learn second languages including English, Korean, Chinese, German, French, Italian, Portuguese, Indonesian and Arabic.

Lectures conducted in English

In the current curriculum, two lectures, Introduction to English Literature and History of America, are conducted in English. This year, about 40 students, most of whom were highly motivated to study English, took the English Literature course in the spring semester. In this lecture course, contrary to a traditional teacher-centered one, the students were encouraged to engage actively in learning that provides language scaffolding. For example, pair work was integrated to check the understanding of the lecture material and to promote interest in the lecture content. Visual materials such as movie clips were often used in lessons to help students to understand the content, work sheets with fill-in blanks were prepared for note-taking, and lectures were conducted in clear and slow speech. As an assignment, the students were required to read several examples of classic literature, to answer a number of questions, and to survey the historical background of the authors or the literature using on-line resources. Reading textbooks or journals written in English were not included in the assignment.

Seminar class

The juniors and seniors who participated in this survey were enrolled in seminar classes related to English, such as American Literature, English Literature, and Applied Linguistics. In these seminar classes, the students had opportunities to read academic texts, such as introductory textbooks, novels, academic journals, and magazines, in English.

English language classes (each class conducted once a week: about 90minutes)

In the current curriculum, about 65%-70% Junior and senior students in the department take advanced English reading classes. Students have opportunities to take classes in Current English and English for Academic Purposes. These students are streamed into two groups according to their TOEIC scores, and the class sizes are about 25-20 students. In the reading class for academic purposes, students learn top-down reading strategies (identifying main points, inferring meanings, understanding textual cues, recognizing discourse patterns) and bottom-up skills (understanding of the units of language: sight-word recognition, lexical recognition, parts of speech and structure, and the meaning of syntactic units) and vocabulary. The weight balance of teaching these skills varies with the instructor.

3. The Present Study

Taking the current educational situations of the target university into consideration, the six questions that guided this research project were as follows:

1) What skills do the students want to improve while attending university?
2) Do the students feel an academic reading class is necessary?
3) What skills do the students find most difficult in general

and academic reading?

4) What different perceptions toward academic reading exist among sophomores, juniors, seniors, and teachers?

5) What are the student perceptions about taking lectures in English?

6) What can be done in the reading class to prepare for the seminar class and to support lectures conducted in English?

Through this survey, the current study attempted to explore an 'arbitrary' point in a continuance between EGAP and ESAP for the target university and to explore meaningful relations among language classes, seminar classes, and subject-matter classes.

4. Method

4.1 Participants

The survey respondents were sophomores in the International Culture Department in a Japanese university and were enrolled in an English linguistic class and juniors and seniors taking English-related seminar classes. All of the students took a selective English class, advanced English I (speaking and listening) or II (reading and writing) after having finished an English Communication Class for freshmen. Table 1 shows profiles of the 99 students who responded to the survey. All except three of the respondents were female and all had been learning English for an average of almost 6 years before entering university. Their TOEIC scores ranged from below 400 to near 800. Of these, 10 respondents who did not complete all of the survey questions or who had not taken advanced English classes, were removed from the study.

In total, 34 of the respondents were enrolled in an English literature course conducted in English. For a wider exploration of the necessity and role of an academic reading class, a survey regarding the lecture was also administrated to these students. In addition, 6 seminar class instructors who had their students read academic journals also participated in this survey. Their areas of specialization varied and included International Relations, American Literature, English Literature, Islam, Western History, Asian History, and Applied Linguistics.

4.2 Survey Instrument

For the students and teachers, the survey items (see the Appendix A) were prepared to address the questions mentioned above. In addition, there was an item asking about their students' current TOEIC scores or STEP scores.

The questionnaire was designed to have the students be able to complete it relatively quickly and accurately in class. For this reason, all of the survey items were written in Japanese.

4.3 Data Collection

Data collection for the students took place during July 2009, and that for instructors during September, 2009. For the students, the instructors who taught an English linguistics class and three Seminar Classes teachers administered the surveys to the students during the classes. For the subject teachers, the researchers asked them to answer the survey questions.

4.4 Data Analysis

All data from the surveys were coded for statistical analyses and entered into a computer database. The descriptive statistics were conducted for the various items on the survey, including totals, percentages, means, and standard deviations. Kruskal-Wallis one-way analyses of variance (ANOVAs) and Mann-Whitney *U* tests were administrated to examine the effects of status demographic factors in the section on "Student interests in learning Academic English". The statistical software package SPSS for Windows (Version 7.0) was used for data analysis.

5. Results and Discussion

5.1 Skills that Students Want to Improve and Teacher Expectations

Students' general tendency

As shown in Figure 1, the areas of concern claimed by students were generally related to practical English, including speaking, listening, presentation, and cross-cultural understanding. Approximately 90% of the students in each group seemed to be interested in improving their speaking ability, and 50% to 60% felt that they should improve their TOEIC scores during their university studies. In addition, about 50% to 60% of the students replied that improving cross-cultural understanding was necessary. On the other hand, only 10% to 35 % of the students in each group replied that studying academic and general reading and composition were important for them. Taken together, students indicated a higher motivation toward acquiring practical English skills rather than academic ones. This is perhaps not surprising. The students most likely wanted to improve their oral communication skills as many of them had worked on acquiring knowledge such as grammar and vocabulary to prepare for University entrance exams, rather than learning English for communication purposes.

Table 1. Demographic profile of students

Class		TOTAL	TOEIC below 400	above 500	above 600	above 700	above 800
English ling.	Sophomores	56	28	21	4	3	0
Seminar	Juniors & Seniors	43	11	17	12	3	0

STEP2[1] =above 500 (*n* =99)

Differences among student status

More people in the 3rd & 4th group and in the 2nd year above the 500 group showed more concern about improving their reading skills (3rd & 4th : academic reading, 35%; general reading, 35%; composition, 28% , 2nd year: academic reading, 29%; general reading, 25%; composition, 25%). In contrast, the students in 2nd year below the 500 group were less concerned with this aspect (academic reading, 11 %; general reading, 14%; composition, 7 %) (see Figure 2). This suggests that students who are in a higher year and who are more proficient are more motivated to work on cognitive demanding tasks, including reading or writing.

Differences between the skills students want to improve and teacher expectations

There were differences between the student and instructor responses (see Figure 2) on the items of general reading skills (instructors 67%; students 25%,on average), presentation skills (instructors 83% ; students 41% on average). Regarding reading skills, the observed difference might be due to the fact that in seminar class or lectures, subject teachers are likely to consider student reading skills as unsatisfactory in seminar classes. Teachers are likely to want students to improve their reading ability, whereas students, especially 2nd year students who do not attend seminar classes, have not yet realized the necessity of improving reading skills for their studies.

In terms of presentation skills, interestingly, 83 % of the teachers expected students to acquire these skills. This result can be interpreted as indicating that teachers want to have students improve not only passive skills such as reading but also productive skills in the second language.

5.2 What Students Find Difficult in Reading Skills

General tendency

Figure 3 summarizes the subjects' responses towards their own difficulties with general reading. The students in each group reported having many problems in reading. In particular, they felt that vocabulary (on average 71%) and grammar (on average 72%) were the most problematic areas. On this point, the results are consistent with previous studies (Dudley-Evans and Green, 2007), which showed that students in Hong Kong perceived their skills in receptive and productive English vocabulary as inadequate. Thus, vocabulary and grammar can generally be perceived as difficult for people with different language backgrounds. Another concern was the fact that more than half of the students reported finding fast reading to be problematic, implying that their skills in reading fluency were inadequate; that is, their ability to comprehend without much consciousness or awareness was lacking (Logan, 1997).

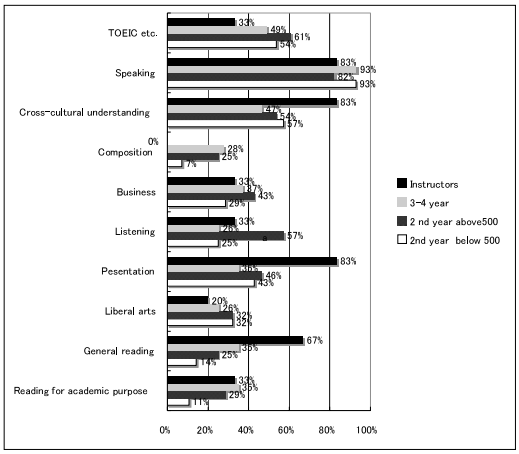


Figure 2. Skills students want to improve and lecturer expectations

Differences among status

Although the overall results are similar across the groups, one difference was observed in the vocabulary area. When compared to students in the higher proficiency groups, more students in the lower proficiency group (86 % versus 58 % and 71% in the higher groups) felt uncomfortable in dealing with lexical features, which impeded comprehension in reading. This result suggested that students with lower proficiency needed a more basic skill for understanding written text.

5.3 What Students Find Difficult in Reading Skills and Teacher Perceptions in Academic Reading

Students

Regarding academic reading, about 80 of the respondents participating in the present study reported difficulty in understanding subject-specialist vocabulary (83%). This was remarkably higher than the other items and was followed by general vocabulary (62%). However, vocabulary was by no means the only language resource deemed unsatisfactory; grammar (52%), background knowledge of content (48%), and understanding text organization (48%) were also perceived as inadequate to meet the challenges placed on students in terms of academic reading. The subjects' perceived difficulties with both general and specialist

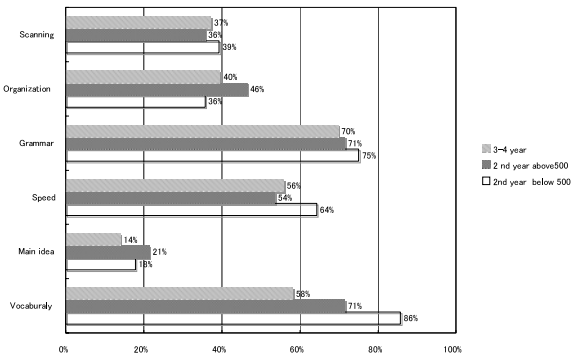


Figure 3. Difficulty in general reading

vocabulary of academic reading were consistent with the perceptions of students and with results of previous studies (Dudley-Evans and Green, 2007).

Difference between students and teachers

When comparing between the lectures and the student proportions of the six reading skills that they found difficult (Figure 4), gaps existed between their perceptions regarding some items. First of all, instructors consider student grammar knowledge and the ability to grasp main ideas as more problematic than other aspects; whereas students think their vocabulary knowledge, including terminology, prevents them from smooth comprehension of text.

It is interesting that they perceived the difficult aspects in reading differently. One of the possible reasons for the difference might come from the participants' degree of attention to each reading skill. It could be assumed that, for example, the students might pay less attention to grasping main ideas while reading because they have to check the meaning of many unfamiliar words in the text.

Regarding "terminology", the teachers did not indicate the necessity of increases in special vocabulary. They probably understood it was not feasible for English instructors to cover terminology in language teaching classes.

5.4 Student Perception towards Academic Reading for Specific Purposes

The students were also asked to answer four questions that were related to their academic reading class. They indicated their degree of interest by choosing their feelings from following five items: Very interested, interested, not sure, not so interested, not interested at all. For statistical analyses, these were changed into 5 scales: Very interested =5, interested= 4, not sure=3, not so interested=2, not interested at all=1. Subject responses to four items were compared statistically among three groups. The scores in response to these items, as shown in Table 2, provide several discussion points.

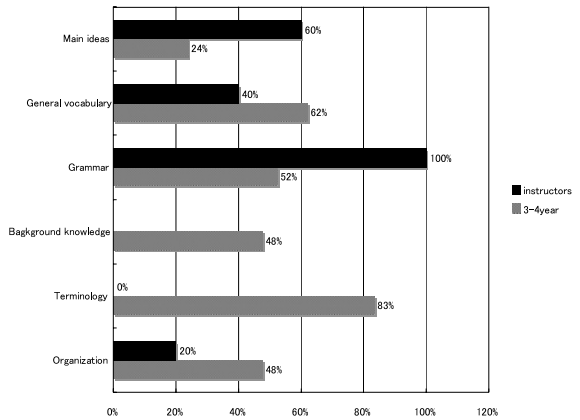


Figure 4. Difficulty in academic reading

General tendency

As shown for the scores for Questions 1 and 4, if we assume that a mean of 3.0 or more out of 5.0 indicates some degree of motivation/necessity, students in all three groups generally indicated a necessity for reading for their ESP/ EAP course (scores ranged from 3.7 to 4.0 among the three groups). However, the interests of students across the three groups for writing theses in English, as indicated in Q3, was lower compared to those of reading English materials. These results implied that the subjects identified that they are interested in working on academic reading but not in academic writing, which is probably because writing is more demanding.

Difference among status

Although the group means for the four questions fell in the middle of the range (scores of 2.5-3.9), there was a clear difference among the student status in terms of Q1 (interests for academic reading before a seminar), Kruskal-Wallis one-way ANOVAs indicated $F(2, 93)=.015$; $p<.05$. A further analysis of Mann-Whitney U tests indicated that there were statistically significant differences between 2nd year below 500 students and 3rd and 4th year students ($p=.008$), indicating that more fluent students were likely to be motivated to improve their reading skills for their academic study.

Regarding Q3 (interest in writing a thesis in English), the mean score was relatively low in comparison with those of other items, with scores ranging from 2.3 to 2.7. In addition, there were no significant differences among the three groups (Kruskal-Wallis one-way ANOVA, $F(2, 93)=.067$). Based on the results, students across the three groups appeared to lack confidence, or were not interested, in writing a graduation thesis in English. One of the possible reasons is that they consider writing as a most demanding task.

In terms of Q4 (necessity of studying ESP for students in the department), although there was no statistically significant difference among the groups (Kruskal-Wallis one-way ANOVA, $F(2, 93)=.119$), students of lower proficiency attached more importance to English classes than did their more linguistically able counterparts, with a mean score of 4.0 out of 5.0. However, it is important to note that their motivation towards taking an academic reading course is the lowest among the groups, as shown in responses to Q2. In this respect, a gap appears to exist between their ideal and actual feelings; that is, although they know it might be necessary for students in a Department of International Culture to take reading for ESP/EAP classes, they themselves are not particularly motivated to take these classes.

5.5 About Lectures Conducted in English

Skills necessity to take lectures in English

As shown in Figure 5, the respondents perceived that they should improve primarily five skills, including gram-

mar, listening, speaking, reading and writing (32 % for Grammar; 44% for Listening; 45% for Speaking; 50% for Reading; 41 % for Writing). In contrast, only 12% of the students felt it unnecessary to improve their note-taking skills. These results might be attributable to the fact that the course was carefully designed to be applicable to intermediate English learners. For instance, work sheets with fill-in blanks for note-taking were prepared, visual materials such as movie clips were added into every lesson to help student understanding of the content, pair work was used for checking their understanding of the lecture, and slow and clear speech were used in conducting the lectures.

Student interest in taking subject-classes in English

Table 3 indicates the subject responses to questions regarding taking lectures in English. Again, if we assume that a mean of 3.0 out of 5.0 or over indicates some degree of motivation/necessity, the participants were in favor of studying subjects in English, showing much concern towards taking other subjects or lectures without the scaffolding that helps foreign language learners to understand content (Q2 & Q3). At the same time, the students seem to be interested in taking language classes that support subject lectures if they have a chance. The existence of highly motivated learners should not be overlooked when establishing a new curriculum.

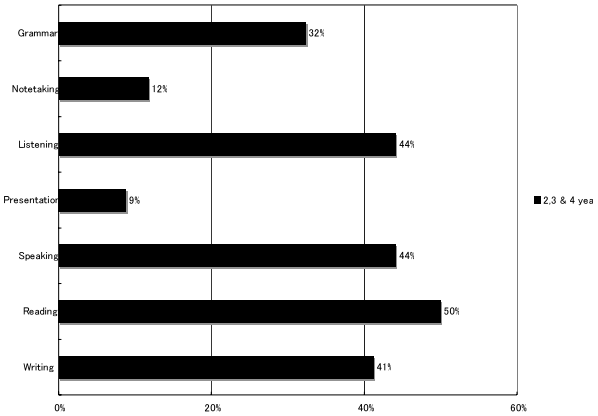


Figure 5. Skills students find necessary to take lectures in English

5.6 Teacher Perceptions towards Academic Reading

Questions

To explore the subject teacher expectations and needs towards academic reading classes, an additional five questions were administered:

Q1 Do you think student English reading skills are adequate for the study required in your seminar?

Q2 Do you use English written materials in your seminar? If so, what type of materials do you use?

Q3 Do you use English written materials in your lectures? If so, what type of materials do you use?

Q4 Do you require students to read resources written in English for their graduation thesis?

Q5 What kinds of materials do you think are appropriate or useful for teaching English, to bridge students from general academic English courses to specific English study?

Regarding Q1, the teachers were likely to report that stu-

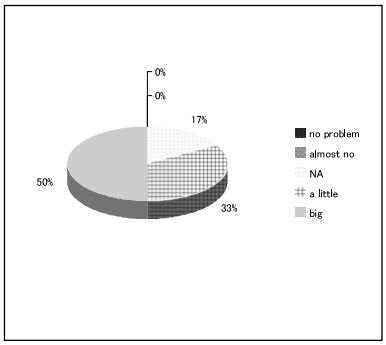


Figure 6. Q1:Do you think students ' English skills are adequate?

Table 2. Students ' interests for learning Academic English

Items	Mean			SD		
	2nd Blw.	2nd Abv.	3rd & 4th.	2nd Blw.	2nd Abv.	3rd & 4th.
Q 1 Reading academic articles in seminar	3.2	3.4	3.9	1.2	1.0	1.0
Q2 Studying ESP /EAP before taking seminar	3.2	3.5	N/A	1.1	1.0	N/A
Q3 Writing graduation thesis in English	2.4	2.7	3.0	1.1	1.0	1.1
Q4Necessity of studying ESP	4.0	3.7	3.7	1.3	1.0	0.8

2nd Blw.(*n*=28) 2nd Abv.(*n*=28) 3rd & 4th. (*n*=43)

Table 3. Students ' interests for taking lectures in English

Items	Mean	SD
Q1 Interest for taking other lectures conducted in English	4.1	0.9
Q2 Motivation for taking lecture without support	3.7	1.0
Q3 Needs of English class for supporting lecture* (need comments)	3.9	1.0

(*n*= 34)

dents' English reading skills were inadequate for conducting seminar classes, as shown in Figure 6. In total, 33 % of the teachers felt that students' English was problematic and 50% of the teachers considered it as quite problematic.

The teachers were also asked whether they use English written materials in their seminar class. If so, what type of materials do they use? Figure 7 shows that 83 % of the teachers deal with English written materials in their seminar classes. The sources mainly came from books, including introductory textbooks, encyclopedias, and academic journals (See Table 4).

Regarding Q3, as shown in Figure 8, most teachers (83%) reported that they used English written materials in their lectures. Students could be assumed to have chances for exposure to some special terminologies, to some extent, through these materials in the lectures. However, it is difficult to know to what degree they were able to meaningfully utilize these English materials since, most of time, lecturers do not have enough time to explain the details or complex grammar during the class. As well, although the teachers may provide many resources, it is up to the students to determine whether they use them outside of the class. Nonetheless, it is surely helpful for students to be provided with this type of special information in English in lectures to reinforce the point of connecting what they have learned in their seminar class.

Another question is whether teachers require the students to use English written resources to write their graduation thesis. Interestingly, although most teachers reported that they use English reading materials in their seminar studies, only 33 % of the teachers require their students to read resources in English for their culminating study, as indicated Figure 9. This is perhaps because the teachers understand that the students' English abilities and motivation towards using English vary; thus, they do not force the students to integrate English materials into their references.

Finally, Table 5 lists the responses towards the question about what kinds of English teaching materials the subject teachers think are appropriate or useful for bridging between general academic English and specific English stud-

Table 4. Q2: What type of English materials do you use in seminar class?

materials	Response numbers
Books	6
Encyclopedia	4
Journals	3
Journal abstract	2
Newspapers	1
Magazines	1
Tales	1
Data	1

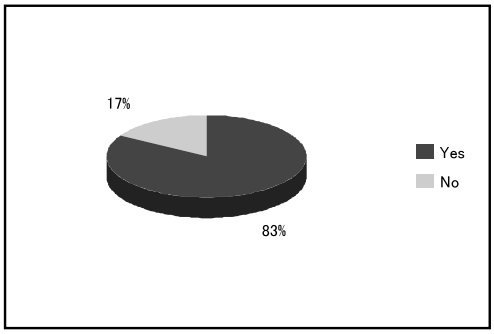


Figure 7. Q2: Do you use English written materials in your seminar?

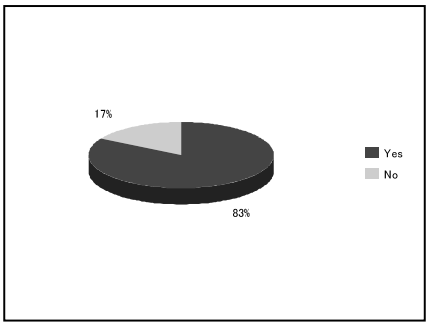


Figure 8. Q3: Do you use English written materials in your seminar?

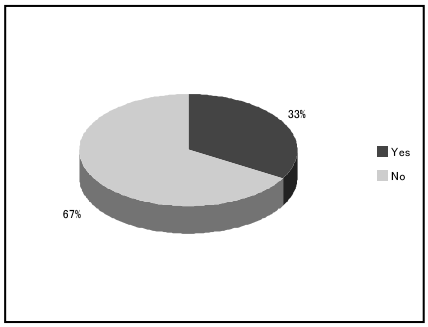


Figure 9. Q4: Do you require students to use resources written in English for their graduation thesis?

Table 5. Q5: What kinds of materials do you think are appropriate or useful for teaching English to bridge between general academic English courses and specific English study?

Materials	Response numbers
Books	6
Encyclopedia	3
Newspaper	3
Journal abstract	2
magazines	1
Journals	1

ies. The teachers suggested that books, particularly introductory textbooks that are written in comparatively easy English, are appropriate for 2nd year students prior to taking seminars in the 3rd year. To obtain the latest information about a specific field, academic journals might be plausible. However, the styles of English in the journals are likely to be formal, and the papers seldom provide sufficient explanation of basic concepts or terminology. In general, students are not expected to be able to understand the gist of journal articles.

Comments from subject teachers

In addition, the teachers were given the opportunity to write comments about academic English teaching at this university. These teachers have been teaching seminars for at least 4 years in the present university and have been using English materials in their seminars, where student number is usually below 10. Consequently, it might be the case that these teachers have captured student problems or the types of skills that they should be learning in academic reading, and that this type of information may be essential for English language teachers when planning teaching syllabus.

The following section describes the areas that concerned subject teachers concerns and the ideas or opinions that were obtained from their comments.

Dictionary skills

The teachers suggested that students should improve their dictionary skills so that they would be able to interpret polysemous words more correctly according to their context and to also be able to learn grammar through the examples in the dictionary. Students are often observed only to look at the first meaning of a target word without considering the context in which the word is embodied and thus, they often misunderstand the content. Fostering their dictionary skills should be one of the ways that comprehension of academic reading materials could be made more accurate.

Reading skills

The respondents also pointed out that the students often cannot grasp main ideas in a text because they tend to struggle with the complexities of grammar and vocabulary, including terminologies, and pay too much attention to details of the context without taking the whole picture of the text into consideration in their reading. Language teachers should therefore encourage students to discuss content after they have shown that they understand the author's ideas in the articles.

The subject teachers also feel a necessity to review basic English grammar in order to allow correct understanding of the academic text . Some students with lower proficiency might need remedial studies in English grammar, while other students who have high English competence might need more emphasis in some aspects of grammar that tend to be problematic for Japanese students. Traditionally, Japanese English Education was focused too much on forms, and recently meaning rather than grammar has been paid more attention in Japanese teaching of English. However, bottom-up skills as well as top-down skills should be integrated into English teaching in order to increase students' reading accuracy and fluency.

Translation skills

There were a number of respondents who pointed out the students' inability to translate materials into natural Japanese. According to the subject teachers, one of their problems seemed to lie in the fact that students are likely to translate the text word by word into Japanese; as a result, they tend to produce unnatural translations. It might be useful for the teachers to train the students to think about the content in their own words, either in Japanese or in English.

Teaching materials

Regarding the use of academic journals, experienced subject teachers pointed out three points in the choice of journals for an English class. First, the English should be easy and second, the article should be well organized, including the introduction, body and conclusion. Third, this type of article should also be useful as a model for organizing a thesis. In terms of textbooks, the teachers suggested that introductory textbooks for university/ college students are good for our students as teaching materials and they should be considered before using academic journals. Regarding types of content, the teachers recommend Sociology, which is comparatively understandable for students who do not have enough background knowledge about other special fields. The teachers also added the comment that since the areas of study of the subject teachers varies, the content should not be related to a specific subject but should instead be of interest to the students in the departments. Taking this into consideration, Cross-cultural Communication, Education, or Environmental Studies might be suitable content.

To have students read academic journals and textbooks, it is necessary for language teachers to fully examine the content as well as the linguistic features, taking into consideration the students' background knowledge about the content and their abilities in grammar.

6. Conclusions

6.1 Summary of Results

Research Question 1 in this study examined the skills that the students want to improve upon in a university setting. Subjects reported that they were more interested in learning practical skills such as speaking, listening, and cross-cultural understanding than they were in general and academic reading or writing (Figure 2). Research Ques-

tion 2 targeted student perceptions towards the necessity of an academic reading class. Overall, students seemed to consider knowledge and skills more important than studying specialized fields, although students who were more proficient tended to show their willingness to improve their reading skills (Figure 2). Research Question 3 inquired which skills students find most difficult in either general or academic reading. Students were most likely to report problems with vocabulary and grammar in general reading and vocabulary and special terminology in reading for specific academic purposes (Figure 3 and 4). Research Question 4 tried to reveal similarities and differences between the responses of the students and teachers. The students were likely to be interested in improving their oral communication skills, whereas subject instructors tended to expect students to acquire both passive, especially reading skills, as well as productive skills, such as speaking and presentation abilities (Figure 2). Regarding perceived difficulties in academic reading, the learners reported that they had difficulty in dealing with vocabulary, whereas teachers consider that students have problems with understanding complex grammar and grasping main ideas (Figure 4). Research Question 5 examined student perceptions regarding taking lectures in English to explore the role and the necessity of academic reading classes. In general, the subjects were highly motivated to take academic subjects in English since the students who answered this question were relatively high proficient (Table 3). Finally, Research Question 6, targeting the exploration of the role of academic reading, will be discussed in the following section, since the answer can be deduced by considering all of the results indicated above.

6.2 Implications for EAP Reading Instruction

Despite the differences between instructors and students, generalizations emerging from the survey can be useful in designing instruction, in selecting materials, and in planning curricula for the future.

Students need skills in academic vocabulary

Clear pedagogical concerns obtained from the findings are presented here: one is that English instruction should more strongly stress common academic and subject specific words. As effective ways of teaching vocabulary, following the suggestions of Carell (1988) would seem to be practically useful. First, key words in the target passages should be taught. Second, the words should be taught in semantically and topically related units, in order to improve word meanings and background knowledge at the same time. Third, both definition and contextual information of the words should be instructed. In this way, students should be able to engage in deeper processing of word meanings and effectively store the new vocabulary in their long-term memories.

Students need background knowledge in special academic context

Another concern for teaching ESAP is to help build students' background knowledge in a topic, in addition to their linguistic competence. If both discourse disciplines and the subject content are unfamiliar to learners, the task of cognitively comprehending the texts would be far too demanding, and it might discourage them from studying English. One of the solutions, especially for intermediate proficiency students, might be to present the materials in their first language (Huang, et al., 2006) or in comparatively easy written English in pre-reading tasks. This pre-reading activity would definitely help to cultivate expertise as well as to facilitate reading activities.

Another possible way, as mentioned earlier in subject teachers' comment sections, would be to have language teachers choose a subject whose content is comparatively understandable with learners' current background knowledge, such as Sociology including Cross-cultural Communication, Education, or the Environment.

Materials: teacher collaborations

The technical concerns in implementing instruction in ESAP in the current instructional setting is the difficulty of covering the articles or text of all of the subject areas that the students study in a seminar class. The specialized fields in the department is also varied, covering areas such as European, Japanese and Asian History, Japanese, American and English Literature, Anthology, International Relations and Applied Linguistics, among others. One of the ways to solve this constraint in the reading class is to set a task where students can choose one reading text from several choices of content related to teacher specializations and then to work on comprehending the material and making a presenting about the content (e.g., making quizzes about the contents) in small groups. In conducting this task, again, it is essential for the students to be given some background knowledge about the topic in easy English or in their first language. By doing so, the students can learn both the content and linguistic features that might be useful in the future seminar class.

This is one of the ways to ask cooperation of content-area teachers. If they systematically provide students with chances to be exposed to specialized academic words or introductory texts and journals in the lectures, the students would be able to gradually familiarize themselves with certain academic words or written discourse. Given these opportunities, the students would more smoothly move to the study of specific content areas in seminar class.

Course objectives

In a higher educational institution, it is reasonable for students to acquire a certain level of English to study academic areas. However, there is a clear spread among the students' English levels and motivation towards English

learning in the current university. Some 2nd year students are taking English reading classes just for taking credits, while others have motivation for studying subjects through English or have ambitions to study abroad. Considering the current situation, it would be desirable to establish specific courses: one would be for students who wish to study content areas in English and the other would be for those who wish to learn basic academic English skills or English for more practical purposes. In the former class, students might target ESAP in their studies, whereas those in the latter class might focus more on EGAP.

It is also essential to make freshmen aware of the importance and necessity of reading materials in English for their future study in seminar classes or lectures. The specific goals in learning English in this school have not been clearly introduced to students, except in terms of TOEIC scores, so the students are unlikely to be motivated to improve their reading skills, as the survey results show (Figure 2).

6.3 Conclusion

What emerges from this study is that there are different views towards learning English, especially reading, among instructors and students with high and low proficiencies. The survey results will be helpful for language teachers to conduct lessons that meet the subjects and students' needs as much as possible. There were some limitations regarding the analysis and data in this study. Due to the different sample sizes between teachers and students, comparisons among these groups were not considered to be reliable. However, the present study is able to reveal the problems of intermediate English learners in academic reading and it provides some practical and technical solutions that can be applicable to other similar populations.

References

Braine, G. (2001). When professors don t cooperate: A critical perspective on EAP research. *English for Specific Purposes, 20,(3)*, 293-303.

Brown, J. D. (1995). *The elements of language curriculum*. Boston: Heinle and Heinle Publishers.

Carrell, P.L. (1988). Interactive text processing: implications for ESL/second language reading classrooms. In P.L. Carrell, J. Devine and D.E. Eskey (eds.) *Interactive approaches to second language reading*. New York: Cambridge University Press, 239-259.

Chan, V. (2001). Determining students ' language needs in a tertiary setting. *English Teaching Forum, 39,(3)*, 16-27.

Dudley-Evans, T., & St John, M. (1998). *Developments in ESP: A multi-disciplinary approach*. Cambridge:Cambridge University Press.

Dudley-Evans, T., & Green,C. (2007). Why EAP is necessary: A survey of Hong Kong tertiary students. *Journal of English for Academic Purposes, 6, (1),* 3-17.

Dudley-Evans, T. & St.John,M. (1998). *Developments inEnglish for Specific Purpose.* Cambridge: Cambridge University Press.

EIKEN. Oct. 1, 2009, from http://www.eiken.or.jp/.

Huang,S., Cheng, Y & Chern, C. (2006). Pre-reading materials from subject matter texts ' Learner choices and the underlying learner characteristics. *Journal of English for Academic Purposes, 5, (1),* 193-206.

Hyland, K. (1997). Is EAP necessary? A survey of Hong Kong undergraduates. *Asian Journal of English Language*, 77-99.

Jordan, R.R.(1997). *English for academic purposes*. Cambridge: Cambridge University Press.

Logan,G.D.(1997). Automaticity and reading:Perspecftives from the instance theory of automatization. *Reading and Writing Quarterly, 13,* 123-146.

Orr, T. (1998). ESP for Japanese universities: A guide for intelligent reform. *The Language Teacher, 22, (11),* 19-21.

Spratt, M. (1999). How good are we at knowing what learners like? *System, 27,(2),* 141-155.

SPSS for Windows (Version 7.0) [Computer software]. Chicago: SPSS.

田地野 彰 (2004). 日本における大学英語教育の目的と目標について―ESP 研究からの示唆― *MM News,* 7, 11-21.

Appendix A (Due to space limitation, the items of the survey are partially presented here.)

アンケート調査：学生用（２年生対象）抜粋

1．あなた自身は大学の英語教育で何を学びたいですか／どの能力を伸ばしたいですか？（複数回答可）

□専門英語（ゼミの内容に関係する内容）力の養成　□ビジネス英語力の養成
□論文読解力の養成　□論文作成力の養成
□幅広い教養の養成　□異文化理解を深める
□発表能力（プレゼンテーショ ン）の養成　□会話力（聞く、話す）の養成
□講演、発表などの聞き取り能力の養成　□検定試験（TOEIC、TOEFL、英検）対策

2 . 英文読解において、あなた自身はどのような知識や技術が不足していると考えていますか。
（複数回答可）

□ 基本的な語彙力　□複雑な文構造を理解する力
□ メインアイディアの把握　□文章における論理展開をつかむ力
□ 読解スピード　□ 必要な情報を素早く探し、見つける力

【ゼミ関連】

1．将来、ゼミにおいて、英語の文献を読むことに興味がありますか？
□大いに興味ある　□興味ある　□あまり興味がない □どちらともいえない □全くない

2．ゼミに入る前の準備として、ゼミで扱われる専門内容に関する英語文献を読むことに興味がありますか？
□大いに興味ある　□興味ある　□あまり興味を持っていない □どちらともいえない

3．将来、ゼミにおいて、英語で論文を書く事に興味がありますか？
□大いに興味ある　□興味ある　□あまり興味がない □どちらともいえない □全くない

4．国際文化学科において、専門内容（ゼミに関係した学術的な内容）を扱う語学教育（「英語上級」にて）を実施する必要性はあると思いますか？
□必要　□まあ必要　□あまり必要なし　□必要なし　□どちらともいえない

5．専門英語の教育は、時間的に可能であれば何年生で実施すべきだと思いますか？
□１年生　□２年生 □３年生　□４年生 □必要ない　（複数回答可）

【英語で学ぶ専門授業】

1．　授業を受講していて、より勉強が必要だと感じた英語のスキルは何ですか？（複数回答可）
□ライティングスキル　□リスニングスキル
□リーディングスキル
□スピーキングスキル　□ノートテイキング
□オーラルプレゼンテーションスキル　□文法（複雑な構文で書かれている内容を読み解く文法力）

2.「専門内容」を英語で学ぶ際、ある程度の背景知識を持っている内容の方が良いと感じましたか？
□大いに感じる　□感じる　□あまり感じない □どちらともいえない □全くない

3. 専門科目を英語で受講する際に、それをサポートする英語授業（例：文学特有の英語表現、語彙、文章構成などを学習する）が必要だと考えますか？
□大いに必要　□まあ必要　□あまり必要でない　□全く必要ない　□わからない

＊本研究は、平成２１年度学部長特別研究費（「専門分野での学びを前提とした英語教育に対する学生と教員のニーズ分析」）の助成を得て実施されたものです。
＊本調査にご協力くださいました、国際文化学科教員及び学生の皆様に、心より感謝申し上げます。

静岡文化芸術大学図書館・情報センターの学習支援の可能性を考える

Feasibility for learning support of the Library of SUAC

林　左和子
文化政策学部文化政策学科

Sawako HAYASHI
Department of Regional Cultural Policy and Management, Faculty of Cultural Policy and Management

図書館の学習支援の可能性を考えるためには、まず学生は図書館をどのように利用しており、どのような問題を感じているのかを明らかにさせる必要があると考えた。このため、授業で図書館を利用して調べる課題を与え、それについてのアンケート調査を行った。この調査の結果に基づいて、学生の図書館利用の現状と問題点をまとめ、考察した学習支援の可能性について述べる。

It is necessary that studentsÉÜ pattern and problem of library use become clear. Then a questionnaires survey of student was conducted. This paper describes the result of the questionnaires surveyÅ@andÅ@possibilities of learning support of the Library of SUAC.

1．はじめに

大学図書館を活用させる授業の効果として、以下の6点が指摘されている[i]。第一に、情報を探し出し、評価し、効果的に利用する方法を学習することは、卒業後の実社会で必要となる情報探索に役立つ。第二に、問題を組み立て、問題に関連する情報を探し出し、収集した情報を整理し、その情報に基づいて行動に移る、という能動的な学習体験をする事が可能となる。第三に、個別に課題に取り組ませることで、それぞれの学生の能力に応じた学習が可能となる。第四に、個別的な学習に向いている学生とグループ学習に向いている学生それぞれに対応する授業スタイルが可能となる。第五に、継続・発展的な学習が可能となる。第六に、学生自身に課題や達成点を設定させることで、主体的に取り組ませることができる。

この6点は、現在全国の大学で進められているFD(ファカルティ・デベロップメント)・授業改善に共通する要素が多い。大学図書館を活用させる授業をおこなうことが、FDにつながるといえる。FDとの関わりで大学図書館の学生支援(学習支援)の事例も報告されている。[ii]静岡文化芸術大学(以下本学とする)図書館・情報センターでも、FDと関連した取り組みを行うことができないだろうか。この点を考えるため、まず学生の図書館利用の現状や授業で図書館を活用させるにあたって、どのような問題点があるかを把握することとした。方法としては、2008年度後期の「地域情報サービス論」の中で学生に図書館を活用して調べる課題を与え、アンケートで学生の状況を把握することにした。そのデータに基づき、SUAC図書館・情報センターの学生支援の可能性について論じた。

2．「地域情報サービス論」の概要とアンケート調査方法

「地域情報サービス論」は、文化政策学部共通科目(区分「情報リテラシー」)でありかつ司書課程科目(「図書館サービス論」)でもあるため、公共図書館サービスの歴史と可能性に関する内容となっている。2年次対象科目であるが、3年次になってから履修するものも多い。2008年度の場合、登録者数は150人であった。

図書館を使って調べる課題は3点与えた。課題1は、アンドリュー・カーネギーと図書館の関わりについて、資料を指定して調べさせた。なお学生数150人に対して資料が6点と少なかったため、期間を長めに設定するとともに、図書館に依頼して指定した資料は貸出停止措置をとってもらった。ただし指定図書として一箇所に集めることはせず、請求記号を手掛かりに書架上で探させるようにした。課題2は、授業で紹介した小説『ブラックボーイ』の著者リチャード・ライトの略歴を調べることである。この時は、特に資料は指定せず、参考図書を探して調べるように指示した。課題3(まとめ課題)は、地域の課題を解決する図書館というテーマで、各自が自分の住む自治体の課題と図書館で課題解決のためにどのようなサービスが可能かを考えるものであった。対象とする自治体や図書館について、インターネットを利用して情報を収集するとともに、自分が考えた図書館サービスをすでに行っている図書館の事例を図書や雑誌論文で探すことを義務づけた。

アンケートは、課題を提出した最終日に行った。課題提出者が135人で、アンケートのうち有効回答は89件であった。

3．アンケート調査結果

3-1　学生の図書館活用の現状

まず、この学期中(2008年10月～2009年2月)の図書館利用状況、利用目的、実際の利用内容をたずねたところ、表1～2の結果となった。利用回数は週1～2回がもっとも多く次いで週3回以上であり、ほとんどの学生が「レポートなどのため」を利用目的としている。しかし表3で利用内容を見ると、「メディアステーションで課題を作成」が74%ともっと多く次いで「図書館の本を借りる」が60%である。一方で、「百科事典などで調べる」は30%、「新聞、雑誌記事を探す」は5.6%と、調べること

を目的とした利用が少ない。利用目的で「ゼミ・卒論のため」を選んだ3年生30人に限定しても、同様の傾向がみられる。

このデータから、本学の学生は、「レポートなどのため」に図書館をよく利用しているが、その内容は図書を借りることやメディアステーションでの課題作成が中心であり、調べることを目的とした利用は少ないといえる。

3-2　課題について

指定された図書で調べる課題1と自分で事典類を探して調べる課題2についての調査結果を示したのが表4である。「資料をすぐ見つけることができた」が最も多いのは共通しているが、課題1が61%であるのに対して課題2では49%になっている。一方で、「資料をさがすのが大変だった」との回答は課題1が17%で、課題2では27%になった。テーマに即した資料(この場合は参考図書)を探すことが難しいと感じている学生が少なくないようである。なお「配架場所はすぐわかったがその場所にないことが多かった」は学生数が多いため、特定の資料を同時に調べようとして資料が見つからないケースを想定した問いである。表5は、図書や雑誌論文を探す課題3(最終課題)で、難しかったことを3点まで選ばせた結果である。

「図書、雑誌論文の探索」と「図書、雑誌論文の入手」がいずれも60%である。表4、表5の結果から、学生が調べる内容に適した専門事典や図書、雑誌論文の探索を苦手としていることがうかがえる。

3-3　情報探索の経験

表6は、これまでの情報探索の経験(図書検索、雑誌論文検索)についてたずねた結果である。どの学科、学年においても「経験がある」の回答件数が「経験がない」を大幅に上まわっており、この時点までで情報探索方法について学んできていることがわかる。本学では、文化政策学部共通科目の「図書館概論」「情報検索」「学術情報論」で情報探索を学習する機会がある。また、学科別では国際文化学科の「国際文化基礎演習」「購読演習」や文化政策学科の「文化政策基礎論」でも学習している。「経験がある」と回答した学生に、どのように機会に情報探索を行ったかを書いてもらった中にこういった科目名があがっている。

経験はしているものの、3-2で見たように図書や雑誌論文の探索と入手を難しいと感じている学生が多い理由としては、テーマによって情報の探し方に工夫をしなければならないという個別性や、経験してはいるが身についていない、などが考えられる。アンケート最後の自由記述の中に、「ツールを使いこなせていない自分を強く感じた」という回答があった。他の技術同様、繰り返し使うことで身についていくものであろう。

ここまでの結果から以下の2点のことが明らかになった。第一には、本学の学生は図書館を比較的よく利用しているが、その利用はメディアステーションでの課題の作成、図書の貸し出しが中心であり、「調べる」ことを目的とした利用は少ないことである。第二に、指定された図書を書架上で探すことは問題ないものの、目的に合わせて適切な参考図書、図書、雑誌の探索や入手は難しいと感じている学生が多いことである。一方で、授業などで、図書や雑誌論文を探した経験をもっている学生は多い。つまり、探索方法を一通り学んでいるものの、それが実際に使いこ

表1

質問	ほぼ毎日	週三回以上	週一～二回	月数回以上	月一～二回	利用しない
回答数	9	28	35	12	4	0

表2

質問	レポートなど	ゼミ・卒論	自主学習	知識・教養	趣味・娯楽	その他
回答数	87	20	8	11	17	3

表3

利用方法	全体	ゼミ・卒論のため
回答数	89	20
1. 図書を読む	23(25%)	10(50%)
2. 図書を借りる	54(51%)	17(85%)
3. 図書のコピー	9(10%)	2(10%)
4. 新聞・雑誌を読む	5(5%)	2(10%)
5. 新聞・雑誌記事の検索	5(5%)	2(10%)
6. 百科事典などで調べる	27(30%)	3(15%)
7. インターネットにアクセス	37(41%)	9(45%)
8. メディアステーションで課題作成	66(74%)	15(75%)
9. 自習場所	23(25%)	3(15%)

表4

設問	課題1	課題2
1. 資料をすぐ見つけて調べることができた。	54(61%)	42(49%)
2. 資料の配架場所はすぐわかったが、所定の場所にないことが多かった。	18(20%)	13(15%)
3. 資料を探すのが大変だった。	15(17%)	27(31%)
4. その他	1(1%)	3(3%)

表5

設問	回答数
1. 自治体についての調査	17(20%)
2. 図書、雑誌記事の探索	54(60%)
3. 図書、雑誌記事の入手	53(60%)
4. 関連する機関、団体の調査	32(35%)
5. 調べている図書館サイトから必要な情報を見つける	32(35%)
6. その他	1(1%)

なせるまでになっていないと考えられる。こういった状況を改善するために、以下の 2 つの方法を提案したい。

4．学生に図書館を活用させる方法

4-1 授業での取り組み

情報探索の基本は学んでいるととはいえ、図書館で調べる学習方法が十分に身についているとはいえない。調べさせるための何らかの仕組みをつくることが必要であろう。

そのためには、授業内で、図書館を活用させる課題を出すことが効果的と考えられる。図書館のオリエンテーションや情報リテラシー科目では、どうしても情報探索技術を身につけること自体が目的となってしまい、その必要性を学生が実感しにくいのではないか。授業に即した課題で、情報を探し、読み(分析し)、まとめる体験を通して、情報探索の必要性を認識することができる。

また多くの技術同様、情報探索も繰り返し行うことで能力を向上させることができる。複数の授業で取り組むことで、卒業時には社会で役に立つ応用力を身につけることができるのではないか。

授業で課題を出すにあたっては、図書館との協力体制を事前につくっておくとよい。

まず、調べる課題を出す 1 ヶ月ほど前に、担当教員と図書館員で話しあう機会をつくる。この段階で、調べさせるテーマとそのために図書館が提供できる資料や情報の存在と数が明らかになる。もし不充分な場合は、役立ちそうな資料の購入手続きをとることも考えられる。こういった場合の特別購入枠を設けておくと迅速に対応できる。打ち合わせなどの時間の問題があるか、非常勤講師にも可能性を開いておくことが望ましい。もし用意できる資料数に限りがある場合は、一定期間の貸出停止措置をとることで多くの学生に利用させることは可能である。

図書館員がどこまで手伝ったらよいのか(どこまでは学生に努力させたいと考えているか)の打ち合せも必要であろう。場合によっては、調べる際の手引き書になる「パスファインダー」を用意し、できる限り学生自身で調べることができるようにしておくことも考えられる。

必要があれば、課題を与える日の授業の中で、図書館員に調べ方を指導をしてもらうこともできる。ただしあくまでも課題を与える時であることが重要である。学期当初など、学生が課題を意識していない段階での説明は、記憶に残りにくい。

表 6

		WebcatPlusで特定分野の図書を探した経験		CiNiiもしくは国立国会図書館雑誌記事索引で雑誌記事を探した経験	
	学年	ある	ない	ある	ない
国際文化学科	2	19(60%)	13(40%)	23(72%)	9(28%)
	3	11(79%)	3(21%)	11(79%)	3(21%)
文化政策学科	2	24(82%)	5(18%)	22(76%)	7(24%)
	3	3(100%)	0	2(66%)	1(33%)
芸術文化学科	2	8(73%)	3(27%)	8(73%)	3(23%)

4-2 図書館の整備

授業で課題を与えることで、調べなければならない状況に学生を置くことができる。ただ、すでに見てきたように、学生は調べるための情報源(インターネット情報源を含め)を探す段階で困難さを感じている。これに対応できるのが、図書館員のサポート、いわゆるレファレンスサービスである。

教員の指導だけでなく、図書館員のサポートが必要と考える理由は 2 点ある。第一に、あくまでも学生に主体的に取り組ませることが重要であり、サポートは探索に行き詰まった場合に、それぞれの状況に合わせて提供されなければならない。教員は常時図書館にいるわけではないので、困った時にすぐ相談できるとは限らない。また「正解」となる資料をすぐ提供するのではなく、いろいろな資料をその使い方を説明しながら調べさせていく、ことが好ましいが、これは研究室やメールでのやりとりでは限界がある。図書館員であれば、すぐ相談でき、図書館内を一緒に歩き回り、あるいは資料を手にとって見ながら説明することができる。

第二に卒業後に必要となる情報探索の場合を考えた時、常に教員に助けを求められるわけではない。しかし、図書館員に助けを求められることを知っていれば、地元の公共図書館などに相談ができる。

しかし、レファレンスサービスの存在が学生に知られているとはいえない。アンケートの自由記述の中に、「レファレンスサービスは今まで受けたことがなかったが、今後卒論作成などにより専門的文献を探すとき、お世話になると思う。しかしカウンターが時々無人であったり、レファレンスサービスについての案内表示がないため、何となくたずねにくい雰囲気で気軽に利用できるか少し心配」という回答があった。学生が相談しやすい環境をつくることが望まれる。

また現在の情報探索では、印刷資料とインターネットの両方を利用することが必要であろう。そのためには、PC を使いながら、図書も調べられる環境があることが望ましい。

さらに、授業によっては、個人で取り組む場合だけでなく、グループで調べる課題に取り組むことも考えられる。

この3点に対応できるものとして最近注目されているのが、「ラーニング・コモンズ」である。「ラーニング・コモンズ」(インフォメーション・コモンズともよばれている)は、1990 年代に合衆国の大学図書館で、「場としての図書館」の意義を考える中で生まれてきた試みである。大学によってその形は多少異なっているが、「学生が自主的に問題解決を行い、自分の知見を加えて発信する学習活動全般を支援するための施設とサービスの提供」[iii] である点は共通している。また「最も重要なのは人的支援がある点であろう。同じフロアには、資料調査で行き詰まった学生の相談を受けるレファレンスカウンターが設置され、機器類の使い方を指導してくれる技術支援スタッフも常駐」[iv] とあるように、専門のスタッフ(図書館員)のサポートを受けられる場所でもある。日本では、お茶の水女子大学図書館が図書館改革の一つとして導入しその成果が報告されている[v]。大阪大学附属図書館など新たに設置した大学図書館や取り組みの検討をはじめた大学がある。

5. まとめ

大学図書館を使って調べる学習習慣を学生に身につけさせるためには、授業を計画する教員と図書館員の協力体制が必要である。同時に、図書館の整備や図書館員の配置により、学生が来館したくなる場所、そこにいけばサポートを受けられる場所という認識を学生にもってもらえるようにすることも必要であろう。

[本研究は、平成20年度学長特別研究「新しい学習環境の研究」の一環として進められたものであることを付記しておく。]

注・引用文献

i　ブレイビク，パトリシア・セン，ギー，E. ゴードン　三浦逸雄ほか訳『情報を使う力　大学と図書館の改革』勁草書房　1995 p.41-43

ii　例えば、金丸明彦他「長崎大学におけるファカルティ・デベロップメント　プログラム」『大学図書館研究』69(2003.12) p.1-14、長澤多代「アラーム・カレッジの図書館が実施する学習教育支援に関するケース・スタディ」Library and Information Science 57(2007) p.33-50 、原真由美他「横浜女子短期大学図書館における学習支援の試み」『横浜女子短期大学紀要』23(2008) p.99-124 などがある。

iii　米澤誠「インフォメーション・コモンズからラーニング・コモンズへ：大学図書館におけるネット世代の学習支援」 カレントアウェアネス 287(2006) p.9-12

iv　井上真琴「「学びのマネジメント」を支援する」『IDE 現代の高等教育』No.510(2009年5月号)　p.12

v　茂出木理子「学習と図書館改革　お茶の水女子大学」『IDE 現代の高等教育』No.510(2009年5月号)p.27

明治末期から昭和期に至る劇場の現代性について

A Study on the theater from the Meiji last years to the Showa beginnings

永井　聡子
文化政策学部芸術文化学科

Satoko NAGAI
Department of Art Management, Faculty of Cultural Policy and Management

本論文は、明治末期より昭和期に至る日本の劇場の変遷を、帝国劇場、築地小劇場、東京宝塚劇場などの劇場改革を踏まえて現代性を描きだすことを目的としている。「劇場」とは、「専門家の配置、舞台作品の製作、空間の設計、観客の資質」という４つの要素が関わることが重要であり、時代は経ても変わることのない部分である。本論では、その前提となる建設の背景および劇場空間における前舞台領域との関係性において考察した。特に、劇場建設に対する言説から考察し、民間劇場が残した財産を現代の公共劇場がどう担うのか、これからの劇場のあり方を提示する。

A goal of this paper is to draw a change from the Meiji last years to a Showa beginnings in a Japanese theater, Teikokugekijyo, Tukijisyogekijyo and Tokyo Takarazuka gekijyo. 4 elements are included in a word as a theater, Specialist's arrangement, Creation in a stage, Spatial design, the quality of the audience. These are also an important part via the time. A relation in a front stage of a background of construction and theater space was hung by the main subject. In particular, it's considered more than a statement of theater constrution. The assets for which a private theater left it, how to carry a present-day public theater is shown.

１．はじめに

１－１．研究の背景と目的

「劇場」は社会の縮図であり、「舞台」は人生の縮図である。社会が要求した、人材、空間、作品、観客　という４つの要素が劇場空間の中でどのように関わるか、時代に必要な関わり方があるように思う。

本論では、民間劇場が劇場史の近代化を担ってきたその過程を明治末期から昭和期に焦点をあてる。民間劇場の遺産の中から人材と空間を重点的に、現代の劇場のあり方を抽出することが目的である。空間については、特に、舞台と客席をつなぐ「前舞台領域」に着目している。劇場史の大きな転換期となった民間劇場、すなわち帝国劇場（明治44年開場）、築地小劇場（大正13年開場）、東京宝塚劇場（昭和９年開場）などを対象として、その現代性を考察する。

１－２．用語の定義

本論では、「劇場」という言葉を使用している。「劇場」とは、「空間の設計、専門家の配置、舞台作品の製作、観客の資質」を内包するものとして扱う。「劇場空間」は「舞台と客席を含む空間」とし、「演出空間」は「物理的な意味で演技の及ぶスペース」とした。「前舞台領域」とは、舞台と客席をつなぐ空間と設定し、特に舞台前の処理にその特徴を見るものとした。「演劇」とは、各ジャンルを内包するものとはせずに、「歌舞伎」「新劇」「ミュージカル」「レビュー」などと記載することにした。「近代化」とは、「劇場の機能・デザインなどに欧米の影響及び我が国独自の改良が見られること」とした。

１－３．研究方法と既往の研究

本論は、各劇場に関する資料の分析を基本とし、関係者へのヒアリングで補足している。劇場史において空間を軸に歴史的な分析をした研究は、後藤慶二『日本劇場史』（1925年）、須藤敦夫『日本劇場史の研究』（1966年）がある。小泉嘉四郎『劇場舞台設計計画』（1965年）は、劇場における舞台計画の実際を扱ったものとして、また、清水裕之『21世紀の地域劇場』（2000年）は、劇場空間の歴史的変遷に運営の視点も含めたものとして参考となった。本論は、筆者が1998年に発表した論文「明治末期より昭和期に至る劇場空間の近代化に関する研究―前舞台領域の空間的変遷」、2001年に発表した論文「日本の劇場の近代化に関する研究―帝国劇場・築地小劇場・東京宝塚劇場を中心として―」を基に、劇場の在り方についてその現代性を考察している。

２．21世紀の日本の劇場構想－劇場建設の背景

我が国において劇場の近代化は「多目的ホール」の歴史である。初期の公会堂の目的は、「行事または講演等」の利用であったため、「講堂的性格」をもって設計されている。客席の平土間の床にも傾斜がなく、窓からの自然採光、自然換気によっている。当時は「進歩的な新しい型のホール」[i]として、各種の文化的催しものを予見した機能を有していた。大正７年、大阪市中央公会堂をもって本格的な公会堂の嚆矢とされている。以後、昭和２年に早稲田大隈講堂、昭和４年日比谷公会堂、昭和５年名古屋市公会堂が開場した。いずれも構造としてクッペルホリゾントを有した施設であり舞台公演上演の場としても利用された。戦後、復興開場した歌舞伎座の「経営大要」には、「歌舞伎を主として上演すると共に、新劇、新派劇、歌劇、レビュー等各種演劇の上演につとめ、さらに映畫、音楽、舞踊、演藝等についても興行の機會を與える豫定」と書かれていた。[ii]

時代の要求に従って新しく「文化会館」などと呼ばれる施設の要望が高まるのは戦後であった。日本の伝統芸能の

上演を主とする国立劇場が開場したのは1966年、その30年後の1997年にはオペラ・バレエなどの現代舞台芸術を上演する新国立劇場が開場した。佐藤武夫が「公会堂建築」で述べているように「一つの国立劇場を国家が中央都市の東京に建てることで古典芸能の存続を守りつづけられるものではない。むしろ、地方にも分散拡張して、しだいにこのまま枯渇に瀕して行くだろう古典芸能の新しい観客層を獲得拡大してこそ、その保存と発展が約束される。」のであり、重要なのは、全国各地を視野に入れた伝統芸能の保存と発展、新しい舞台芸術の分散である。文化政策に関わる課題は1970年代には整理され、全国各地において劇場建設ラッシュとなる。特に1980年代からの20年間は、欠落していた劇場（公共ホール）における運営の人材が急務とされた。「芸術監督」や「プロデューサー」の存在に注目が集り、都心を中心に一部の地域で劇場計画時から運営の方針と現場を動かす専門家の配置が行われてきた。また、国も実演家のみならず「劇場の運営」に対する助成金（芸術拠点形成事業など）の環境整備、研修（公立文化施設協議会、地域創造など）やシンポジウムなども開催され、「公共劇場」におけるソフト充実への歩みが加速するかに見えた。しかし、1970年代から現在に至るまで、一部の劇場を除き、ハードとしての劇場機能（舞台機構）を持つ施設を運営するための専門家組織が内在化されないまま、劇場建設がなされてきた。先にも示した佐藤武夫の言説は、古典芸能のみならず各ジャンルにおいても、その存続を守り続けるという視点は現在の劇場事情にもあてはまる。東京一極集中の是正は、全国各地において「劇場内部における人材の配置と育成、および作品の内部創造」を行うことで解決できるだろうが、これは国立だけの問題ではなく日本の全国の劇場未来に関わる大きな問題である。

現在、全国の文化施設では劇場でのソフト構築・改善に苦心する一方で、都心では「舞台評価の高い有名人」が「芸術監督」に就任していく。都心に住む者、高額チケットを入手できる者のみが劇場を「選択」し「良質」の舞台作品を享受している。一方で、地域では「選択肢」すらないというアンバランスな状況が生まれている。

芸術監督が全国の地域の劇場に置かれることは理想であると言わねばならない。実際、地域において専門組織を内在化させて多くの市民に舞台作品を提供し続けることのできる基盤はいまだ未成熟である。

近年、商業劇場がミュージカル作品を続々と公演し、新作をも発表している。公立劇場のドタバタを尻目に、商業劇場が多くの国民の目を楽しませているように思えてならない。日本の劇場の歴史は何をしてきたのか。そして劇場はどのような存在であるべきだろうか。

3．明治末期より昭和期に至る劇場建設

3－1．劇場構想における欠陥

明治初期より政府は芸能政策を行い、法令、新聞、雑誌、書籍などの形を借りて、かつて見られないほど多彩な芸能論が展開された。その際、芸能論の基調をなしたのが、高尚・修身道徳・歴史教科書という命題であった。明治4年から6年に至る岩倉具視を特命全権大使とする欧米派遣使節団の劇場経験からはただちに劇場建設を大きく変える方策を取るには至らなかったが、劇場視察の興奮は、後に明治19年末松兼澄の『演劇改良全』に反映される。

劇場の近代化は、明治11年開場の新冨座に遡る。新冨座は、政界、学者を交え、守田勘弥が劇場空間、運営などに新しい劇場の形を示すとともに、猿若町から町の中心である新冨町へ移り、劇場の位置づけを変えた。明治22年開場の歌舞伎座もこれを契機に町の中央に建設されたが、これまでの劇場内容を一変させ、帝国劇場建設へと導いたのは、明治19年の「演劇改良会」、明治22年のジョサイア・コンドルにる「欧風劇場計画案」である。明治27年、37年の日清、日露の戦中に立ち消えになっていたが、戦勝国となった日本において、再び「演劇改良論」が持ち上がったという背景の中、明治39年10月帝国劇場株式会社発起人総会に実業家が集合、賛助に西園寺公望、伊藤博文、林薫などが名を連ね、明治44年帝国劇場は開場した。

演劇改良会は、第一次伊藤博文内閣の親欧米政策の一つの表れとして、財界の著名人によって組織された。その中にあって末松兼澄は、伊藤の側近中の側近で、元は日報社の社員であり社長福地桜痴の紹介で伊藤の知遇を得た。以後、伊藤派の中心人物として腕を振るい、また評論、翻訳など多岐にわたる関心の中には演劇改良も含まれた。基本的に「演劇改良」の動きは、「上流階級」による「風俗改良」であった。観客の対象を「中流以上」として、茶屋制度を中心とする歌舞伎劇場の運営を壊し、「新しい運営」によって「風俗改良」を達成することを目指していた。それは「悪所場」からの脱却を促す結果となったが、劇場が持つ「全階級を対象とする娯楽」という意味においては、逆の行き方をしたと言えよう。ただ、帝国劇場において上演された音楽劇などが後の浅草オペラや宝塚歌劇などに繋がるばかりでなく、建築、舞台機構においては西洋の進んだ技術を取り入れており、築地小劇場に関係する演劇人たちの議論を経て、舞台技術者の職分の確立など舞台技術の発展に寄与する功績はあった。しかしそこには、劇場建築と舞台技術の発展というハードと劇場運営における人材の配置の欠如というソフトとのアンバランスがあったのである。

明治39年『新小説』に収められた上田敏の「國立劇場の話」は非常に興味深い。11月の帝国劇場株式会社発起人総会の半年以上前のことであった。

「数日前の新紙上に国立劇場の創設の噂が傳わって居ました。（中略）今度は、どうやら物になりさうな話になつて參ったとの事、実に社会一般の為に、慶賀す可き次第であります。然し唯、一時何等かの法に依つて醵金し唯宏大な建築物を設置し、其内で従来と毫も替わり無き演劇其他の興行物を觀覧に供し、時としては公共の大宴會、さては政談演説、会社の総会などを開くばかりなら、文運の進歩に対して偉大なる影響を興へる事は出来まい。早い話が、単に劇場を建築するだけなら、建築費と建築士とのみで出来るが、民心に良好の感化を與へ、文藝の眞價を知らしむるには、此劇場内で演技する戯曲其物の性質、これが改善、又俳優の技藝教育、これが地位を高尚ならしむる事其他百般精神上の経営は建築物等物質上の設備と相並んで或いはそれにも優つて必要（下線は筆者による）でありませう。」[iii]

と自身のスタンスを示した上で、「中流階級以上」を対象

として開場した帝国劇場対する意見として、上田は「（演劇は）普通の民衆に訴へるもの」であり、なぜ帝国劇場は「劇と公衆との関係、進んで劇場内部の組織迄、研究されなかつたか。」[iv]と述べており、「日本政府は繪畫、建築、音楽を除き、未だ藝術全般の事を研究する為に人才を海外に派遣した事が無い。」ことに加え、その理由として「凡べて芸術には多少常識が必要である。殊に一般公衆を相手にする演劇の事には、比常識といふ底積が大事、・・・」と述べ、明治より始まる政府の洋行体験にもかかわらず劇場運営上の政策が欠如していることを指摘した。中でも、舞台作品を上演として舞台と観客をつなぐ人材についても以下のように述べている。最も必要なのは「一般に趣味が公平で穏健で、劇界の經驗に富み、事務の才も有つて、萬事そつの無い圓滿な人」であつて[v]、「曲りなりに西洋の文學は書いてあるが、舊文明の名残も無くなつた博士のやうな頭腦には、決して、深みや厚みのある色彩陰影完備した趣味は出来ない。それゆえ今後学者連が国立劇場の相談にでも興かる事がひよつとしてあつたら、成るたけ親切な篤々と實のある議論を出すやうに、何卒突飛な藝術神論や、一知半解の樂劇論なぞは、遠慮を願ひたい。」[vi]「円満主義」「勇往主義」は自ら両立すると説き、「心中此覚悟あれば実際の効果は必ず挙がる。」と述べた。劇場運営に必要な専門の人材とこれからの劇場の位置づけを、「然し國立劇場の他、多数の小劇場或いは寄席の類に対しても実は、社会の為に、随分深い考をあたえる価値がある。」「実に、此種類の通俗演劇は社会全体の為に必要である。問題外故、一寸撮んで言はうか、民心や風俗に影響を與へる點は、却つて國立劇場よりも此方が大きい。」「通俗劇場の目的は無害なる娯楽の供給」と「通常智識の普及」[vii]であることを忘れない。この指摘は公共劇場の本質ではないか。一方、開場した帝国劇場に対し永井荷風は、次のように述べている。「劇場としての興味で無く、公会場としての興味である。即ち帝国劇場が出来たる為に、我が日本人がきれいな人の大勢集まった処に行く。従って其処で日本人の貧弱な交際生活が次第に教育される。」[vii]明治36年から41年まで欧米に学んだ永井の言説からは、日本の財産を捨て去り西洋の近代化へ急いだ関係者への批判が窺われる。上田、永井の両者の言説は、渋澤栄一の息子・渋澤秀雄が述べているように「おやじたちは国立劇場を創る意気込み」で開場された帝国劇場の裏側にある欠点を早くも見出していた。取締役会長に就任した当時の渋澤栄一は『青淵回顧録』に収められている「帝國劇場の創立」[x]と題した文の中で次のように述べている。はじめに自身が西洋音楽よりは、「音楽」、特に「太夫」に「幼少の頃より其の感化を受けた」ことを記したうえで、帝国劇場の創立に関与する前提として、「帝国劇場の創立」の「趣意」は、「帝國ホテル（明治23年11月開業、同じく伊藤博文が発起人；筆者註）を設立するのに尽力したのと同一」であること、「演劇改良論は風俗改良会から起こったもの」と認識し、「演劇改良の道」は、「福地櫻痴などが切りに之を唱道」したこと、そして「福地は自分で歌舞伎座に関係し、俳優や興行師とも密接の間柄となり、全く芝居道の人になつてしまつた。」と記述している。これを「それでは演劇改良事業に福地を親しく関係さしては却つて面白く無いから」ということで、いったん白紙になった後、明治39年頃に、「福澤捨次郎氏其他慶應義塾出身の人々が意見を纏めて、伊藤公の許へ押しかけた」という。渋澤はこうした一連の経緯に対して「外部の形式だけは進歩しても内容の進歩之に伴はず、豫期の如く之によつて演劇改良の實を挙げ得ぬ憾みが無いでもない。」と劇場構想の欠陥を認識し、「併し設備その他に於いて多少なりとも帝劇が日本の演劇改良に貢献した所はあると思ふ。」と結んでいる。「芝居小屋」＝「悪所場」を脱却させる劇場構想では、異業種から集めた人材を企業が進めていく「施設構想」であり、「舞台制作の統括」に関与する専門の人材配置はなく、真の「劇場構想」にはならなかった。帝国劇場が開場するころには、大衆を楽しませる「劇場」として、東京宝塚劇場の開場が控えるのである。大正から昭和に至るころには、以前とは異なる構造、すなわち「婦人」「こども」「家庭」というテーマの変化が社会層の変化に繋がる。その動きを積極的に推し進めたのは、国家、自治体ではなく、百貨店、電鉄、新聞社であった。家庭の趣味、娯楽、衛生、教育が対象で、理想の家庭を獲得するため、イベントやメディアが「消費生活」「中流以下の生活改善」として、都市中間層の家庭とその主婦たちに、新しい生活のモデルを示した。1909年三越呉服店で第一回児童博覧会、1911年蓑面動物園で蓑面有馬電鉄（現・阪急電鉄）による博覧会が開催される中、観客の生活の変質、自ら産業的視野を開拓していき、三越少年音楽隊、白木屋少女音楽隊、そして1911年百貨店音楽隊が蓑面有馬電鉄による宝塚少女歌劇の開設を促し、小林一三は大劇場による新しい観客の獲得を実現することになる。宝塚少女歌劇団は、東京進出に際し、帝国劇場、新橋演舞場でも公演を行っていたが、昭和7年株式会社東京宝塚劇場が創立されると、宝塚少女歌劇団の東京での本拠地として東京宝塚劇場が有楽町に誕生した。

昭和9年8月25日第四会株式総会における社長小林一三の言葉には、「市民の利益の為に」「国民大衆に対する高尚なる娯楽と慰安の為に必要なる機関として」「大東京市民の為に一家団欒家庭本位」「風紀上公明正大なる娯楽地帯」[xi]が並び、これらの言葉に基づく国民劇を目指していた。『私の行き方』[xii]の中で「私は、芝居なるものは或る特殊階級の独占的に見るものではなく、一般大衆に見せる必要品としての娯楽機関であらねばならぬものと信じている。従って芝居を如何に取り扱ふべきかといふ問題に就いて、其芸術が高級品として一部特権階級の人達や、或いは又、特殊教養の範囲に局限せらるゝ人々や、即ち、上流階級、知識階級、又は花柳社会等、それ等の方面にのみ専門的に片寄った興行方法によるべきものではないと信じている、即ち現在の松竹の興行法では私達の理想を実現することはむづかしいものと信じている。（下線は筆者による）」とし、特に下線の言説は、小林の理想とする大劇場での国民劇の育成を目的として、新しい形の演劇が新しい劇場空間を必要ようとした劇場建設を示すものである。「（松竹、帝国劇場の経営者など大劇場の反対者）彼等の誤謬は、国民劇たりし芝居を、民衆より奪取して、上流社会―明治大正の上流社会とは、芸　中心の社交、料理屋待合本位の社交、その社交を認容せる家庭をもって組織せる社会の占有物たらしめるたるに心づかず、あくまでもそれを維持しようとして固執してきた点にあるのである。」[xiii]

その後、帝国劇場は昭和4年12月23日臨時株主総会

で松竹への経営移譲を決議、松竹の手に渡って映画封切館となったが、昭和12年9月24日東宝が帝劇を吸収合併し、劇場は松竹に貸与する形を取った。昭和15年2月20日には松竹が、帝劇を東宝に明け渡した。10月1日帝劇が情報局庁舎として徴用される。以後、今日に至るまで株式会社東宝の経営となっている。

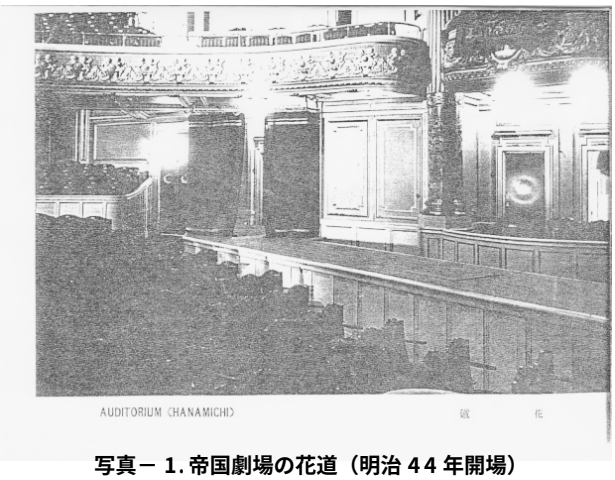
3－2．人材と前舞台領域に関する考察

「演出」という職分および機能の確立は、大正13年関東大震災後に仮設で建設された築地小劇場の活動によるところが大きい。1953年に出版の『舞台監督の仕事』の中で水品春樹が述べているように、「つぎつぎに連続的に公演を行っていく職業的専門集団にあつて「舞台監督」という職能はなくてはならぬ存在であり、ことに演劇の内容形式のますます複雑化するにしたがって、「舞台監督」という役目は専門に必要になっていった」のであって、「旧劇や新派の黒こや狂言方あるいはレヴューの進行係といつたものと同一視されるかたむきがあるようですが、それは質的にまつたくちがつたもの」[xiv]であった。明治末期から昭和に至る過程では、「演出」という言葉は使用されていたが、職分としては「演出家」ではなく「舞台監督」を使用していた。当現在では、「舞台監督」は舞台上の進行を統括する。「演出」は、作品全体を統括している。小山内薫は、帝国劇場の欠陥は「舞台監督の不在」としている。この「舞台監督」とは、小山内薫たちが築地小劇場で確立していった「演出家」を指している。特に重要なのは小山内の次の言説である。「舞台監督なき劇場は首無き役者の如き者である。（中略）舞台監督とは舞台に関する一切の責任を負ひ、且つ一切の権威を有する者である。帝国劇場に於いてはこの舞台監督無きを以て、専務が舞台の世話を焼く（中略）舞台監督は背景、電気の装置、役者の使い方、脚本の選定等を監督し、脚本の稽古に有益なる忠告を與へる。」[xv]当時は、劇場に関わる職分確立の過渡期であるとするとき、上記の内容は「芸術監督」や「プロデューサー」と「演出家」の要素を兼備えたものと言えよう。「演出家」の存在を確立した日本の演劇史からすれば、小山内薫のいう「演出家」である「舞台監督」の不在こそが、開場以来の帝国劇場の悪評をもたらしているというものであった。小林一三は違う視点から「舞台監督」論を述べている。「日本歌劇論」の中にある「大劇場概論」[xvi]では、公演全体を統括する人材を想定している。「私のここにいふ舞台監督とは、今日の脚本の作家が自己の脚本を活かすために指図をするのをいふのではない。また、小山内先生のやうな新劇の指導者が或る新劇の精神またはその形式を表象せしめんがために立つ教師の態度を尊重していふのではない。妥協芸術に欠くべからざる行司として舞台のマネージャーが当然必要となって来るとき、公平に、その芸術と人格とを了解し得る支配人によって、仮に、さういう理想な人はむづかしいとしても、かくあるべきはずの人々によって、即ち私のいはゆる舞台監督によるにあらざれば円満に興行することが出来ない時代が、早晩来るものと信ずるのである。（下線は筆者による）」特に下線の言説は、舞台公演を製作する際に必要な手続き、作品を創造する際に必要な感性を纏める役目等総てを統括すると解釈すれば、現代における劇場の専門的人材（専務、プロデューサー等）としての役割を示唆しているものと考える。場合によっては、「支配人」または「芸術監督」と呼ばれるものではあるかもしれない。

「プロデューサー」とは、企画者のことである。その内容とは、作品の目的から始まり、演目、出演者、スタッフの選択、費用の計算、宣伝、稽古の管理、作品管理、宣伝など、製作の一切についての責任を持つ職分のことである。日本におけるこうした役割は、劇場人の中で次第に名称とともに整理されていく。1940年代には、「プロデューサー」という立場で、すでに映画では使用されていたが、演劇の分野では、新派が最初ではないか、という記述がある。[xvii]本論では出自の早さを問題にしてはいないが、明治末期より昭和期にかけて、「プロデューサー」に相当する人材の考察が行われていたことが窺われる。こうした人材は主に商業演劇において配置が行われていた関係から、劇場建設における公共的な意味での配置が遅れたのではないかと考える。しかし、「プロデューサー」に相当する人材をもって、舞台作品と観客を近づけることが可能となり、そこでようやく「劇場」が生まれることを忘れてはいけない。ここで劇場を建設する場合における一つの行き方として「二重劇場論」を整理してみたい。大正9年に新関良三が翻訳し出版した、カアル・ハアゲマンの『舞台芸術』[xviii]がある。新関自身が序章で記述している中に「二重劇場」という言葉がある。この著書が出版された時期は大正9年、帝国劇場が開場して10周年を迎えるようとしているころであったが、執筆されたころはちょうど帝国劇場が開場する前後であったと推測する。この時期の東京の劇場は、歌舞伎座、帝国劇場、新劇上演を主目的として帝国劇場に先駆けて欧風劇場として開場した有楽座があり、関東大震災後に建設された新劇の拠点である築地小劇場の誕生の前であることと、新関自身が劇場を「都市の直接管理下におく」ことが劇場を営利性から取り除いて運営する方法と挙げ、「都市といふ如き公共体が劇場の建物及び全資本の独立の所有者となり、そうして劇場の全内包に対して物質的精神的更に道徳的保護を与えるように」というのは、現在に要求される文化事業と公共事業を両立させる人材が必要であることを暗示しているのではないだろうか。劇場本来の任務に戻るには、「自ら劇場そのものの中に潜む生命の培養」という舞台作品創造の内製化から生まれるエネルギーの蓄積よりほかにはなく、「近代文化の一因子としての劇場に生起する義務」であり、重要なのは「覆す可からざる法規として形式化せされ膠着せるものの類でもない。却って劇場の中に盛らるゝ劇藝術そのものの存在の條件と目的とからして必然に生じ來るもの」なのである。そのような劇場は、「上流階級」のものではなく、「社会の総ゆる階級を包括して彼等の全人間的要求たる享楽に対して共通的総括的満足を与えるといふ点に於いて、劇場ほどに社会乃至民衆の直接機関たる芸術価値を発揮し得るものはないと言って宜しい。劇藝術は到底民衆的である。」また、新関は、「二重劇場」を推奨し、「幅と深さのてんにお於いて自由に制限を加えられるところの舞台面を有つた劇場」であること、一方、「①複雑広汎なる設備を要する科白劇並びに楽劇の為に用ゐる一つの大なる半円劇場が又他方には②内輪的の演劇及び歌唱劇場為に用ゐる一つの小さい半円劇場、相共に一劇場建築内に前述の舞台面を共通

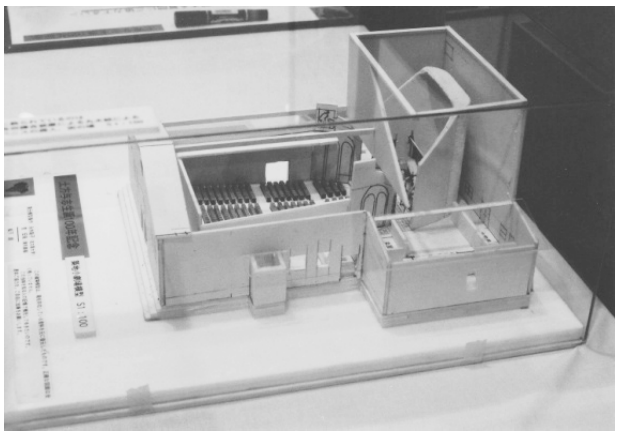
にして建てられる」のである。特に、「角かの階級的桟敷劇場は原理に於いて最早捨て去る可きもの」であって、「その代わりに土間の観客席が背後へ向つて漸次に高まり行く丈けで桟敷といふものを有たぬ③半円劇場が用ゐられなければならない。」としている（①②③下線はいずれも筆者による）。新関の分析において、①および②は、上演ジャンルと空間の結びつきを示している。①②③に見られる「半円劇場」という言葉からは、「半円劇場」という前舞台領域への指向性が窺われる。日本では歌舞伎劇場で培った舞台と客席との方向性なき関係があり、まさに西洋ではプロセニアムアーチより脱し、舞台と客席の融合の再構築が行われていた時代である。

帝国劇場は開場時には結果として、「歌劇場」ではなく、劇場の役割を認識しないまま「歌劇場」と「歌舞伎劇場」および「新しい形の日本の演劇」に必要な空間が混在した。その後、新派や新劇、レビューなど新しい演劇手法による公演がプログラムされるという、現代でいう「多目的ホール」の原型であった。当時は「花道」不要論が飛び出すなど、明治後半期より昭和初期に至る演劇形式の混沌とした状況を反映させた空間構成であった。帝国劇場の設計にあたった横河民輔は、劇場空間において「元来演劇は額縁内が世界である」とし、「花道」の不要論を説いた。「然し如何なる程度に於いてもこれなくては承知ができぬ様子であったから、甚だ不得要領なものを付けることにした」[xix] という苦心の様子が窺われる（写真-1）。有名な「二足で七三になる」花道の誕生であった。



写真－1. 帝国劇場の花道（明治44年開場）
（『帝国劇場写真帖』、高尚堂出版部、明治44年）

新関の言う「現代劇場」は、帝国劇場に対してのものと想像するが、新関によれば「所謂文芸復興劇場」であって、「伊太利原始歌劇上演の目的に副ふ為に出来合った」ものという認識下、「歌劇には小さ過ぎ、演劇には大き過ぎる。何方にも不便である不都合である。」[xx]とした。小山内薫の言う「一文字の恐るべき大きさ」[xxi]を裏付けるものと言える。現代から遡ることたかだか300年の歴史しかない「プロセニアムアーチ」という現代では当たり前のように設計されている必須の舞台機構を西洋の歌劇場の衣をまとって設計された。同時代には、19世紀末にリヒャルト・ワーグナーのバイロイト祝祭劇場が「プロセニアムアーチ」の近代的解決をもって設計され、1911年にはアドルフ・アッピアによるプロセニアムアーチを取り除く作品が舞台照明の発達を伴って実現された劇場空間の歴史は、帝国劇場にはもはや関係がなかった。ただし、現代の劇場を支えるホリゾント、フロントサイドの処理、客席に配置された調光室など演出表現に関わる仕組みは、築地小劇場の活動、東京宝塚劇場に反映され、現代の空間構成に大きな影響を与えた。なお、築地小劇場は、昭和15年に国民新劇場と改名後、昭和20年空襲で全焼した。



写真－2．築地小劇場復元模型（クッペルホリゾント設置）
（土方与志生誕100年記念展示；松下朗、荒宏哉、筆者製作）

写真－3．東京宝塚劇場
調光室から見るフロントステージ
（昭和9年開場－筆者撮影平成9年12月14日）

明治39年2月2日『中央新聞』に掲載された保岡工学士は「大劇場設立の問題」において次のように述べている。「殊に日本の歌舞伎に通じ、其の技術と舞台の関係如何を充分に会得した頭脳を有って居無ければならぬ、さもないと、只欧米劇場の賛美にばかり心配して、一も欧米式二も欧米式となり、其の結果床の浄瑠璃や下座の囃子をオーケストラに移したり、花道を廃したりするような珍案も出来して、数百年来一種独特の美を備へて発達し来ツた、日本の歌舞伎の所作事は、模範劇場の為に打ち壊されるような始末になる。（略）」と帝国劇場誕生の時期おける発言がある一方で、明治45年4月7日『読売新聞』に掲載された「日本の劇場の舞台透視法」[xxii]クウルト・グラアザが日本の劇場の本質をつく。「日本には、桟敷に当たる小さい枡があるのであるが、一定の方向があるのではな

く、見物は演劇の経過上必要な方向を取るのである。と云ふのは、この花道の上では単に人物の出入りがある許りでなく、往々戯曲の重要なる一筋が演ぜられるので是非さうなるのである。（中略）かかる場を見ると、この全堂が演劇の為に存する事、並びにそこに一定の方向のなき事、従ってまた舞台上の遠近法の欠如して居る事などが能く分かるのである。（下線は筆者による）」

帝国劇場改革者が忘れていた根本的な視点である。上演内容と運営と空間が関連しあうことによってはじめて「劇場」の存在意義があるが、新しい劇場の在り方に伴って、舞台と客席との関係を構造的かつ心理的に近づけていた前舞台領域は変化を迫られた。すなわち、上演内容の多様化による歌舞伎劇場の前舞台領域の意味の消失とレビュー、新劇など新しい演出法に伴う新しい方向性の誕生であり、現代における劇場空間の多目的性の浸透を急速に促すものとなった。「営利的劇場とは全く絶縁する」と言って（1924）幕を開けた築地小劇場は小劇場としての行き方であり、小林一三も「大劇場論者」だけではなく、「小劇場」の使い方も考えていた一人だが、小劇場にしろ大劇場にしろ、劇場人たちは前舞台領域と演劇形式とを関連づけて実行したのも、人材、演出形式、空間、観客の融合を前提とした劇場創造を考えていたからである。

写真－４．東京宝塚劇場内大楽屋
（昭和９年開場－筆者撮影平成９年12月14日）

写真－５．同劇場内床山部屋
（昭和９年開場－筆者撮影平成９年12月14日）

４．結論

芸術の特色は、「非合理性」、「個人の感性」に基づいて行われるものであるため、政策が必ずその通りに成果があるとは限らない。特に、創造的価値は時代を越えるものであり、その評価はようやく次の時代なされるということも多い。帝国劇場、築地小劇場、東京宝塚劇場などは、そうした劇場史に位置づけられる。近代化の過程において上記３つの劇場は舞台照明の発達や建築技術の前に、「人」の力によって日本独自の表現方法の実現を可能としてきた。明治期から昭和初期における劇場改革は基本的に、「芝居＝歌舞伎」というものが日本では「悪所」として捉えられていたための、帝国劇場の「風紀改良」、「インテリゲンチャ」を対象とした築地小劇場、「一家団欒」ための東京宝塚劇場による劇場イメージの改善と、劇場の発展に寄与した商業劇場の経営という我が国の劇場事情があった。

帝国劇場開場からおよそ70年後の日本において、「多目的ホールは無目的」であるという批判が広まったが、これは本質的には批判すべきものではないと考える。むしろ、劇場における人材の内在化が行われなかったことを前提として、当時としては技術的な解決の発展過程であったことや「オペラハウス」等の「専用劇場」をよしとする国内の劇場関係者、設計者、劇場人の思想的実現によるところが大きい。「多目的ホール」の反省をもとに、次は演劇や音楽など各ジャンルに特化した「専用劇場」が必要とされ始めたが、依然としてどのジャンルも実現できる「多機能型」の劇場を模索されているのが現状である。そもそも「劇場」は、同じ土地に多くを建設できない以上、あらゆる人々が様々な舞台を様々な形で鑑賞し、創造に参加できる機会を提供するものでなくてはならないだろう。20世紀後半においては、「多目的ホール」を曲解し、日本の劇場における人材、作品、空間、観客の４つの関係を理解しないまま建設が進められ、現代の公立の劇場におけるいわゆる「多目的ホール」「貸館運営」への批判の素地を作ってきたのである。むしろ、日本の劇場の劇的変化に対応していったのは民間劇場であった。日本独自の舞台芸術創造システムが公立の劇場で続いていかなかったのは、ものを創るための専門の人材を配置する視点が欠如していたからである。帝国劇場は何を上演するか、どのような劇場であるべきかというその中心に、ものを創造する専門の人材（プロデューサー等）を置かなかった。この点においては、特にあらゆる演劇手法を取り入れる現代にあっても、劇場建設において専門的人材の配置が最優先されていない。1980年代からの現在に至る30年間、劇場がもつ拠点性の理解や組織体制の整備、市民の参加の機会の環境づくり、多目的ホールの使いこなしなど、様々な角度から模索がなされたことは意義ある期間であったと思うが、長い期間にわたって多くの公立劇場が「創造する現場」であるという環境整備をしないまま今日に至っているのは日本の劇場環境の大きな損失である。

劇場そのものの発展のためには、「専門の領域」と「国民（市民）の領域」があることを基本に据える必要がある。舞台芸術は、我が国の近代市民社会形成の過程において、清水裕之が「21世紀の地域劇場」の中で述べているように「市民の自律圏形成」が「私的領域活動にとどまり、市

民社会が公共圏を獲得する段階で積極的なリーダーシップをとることに成功してこなかった。」[xxiii] とするならば、地域の劇場こそ「専門的な領域」の確立が必要であり、専門的人材が全国に配置されるべきであろう。現在、市民が「専門領域」に関わるしくみはまだ発展の途上にある。歌舞伎劇場を持ち続けた我が国の劇場史に、地域における芝居小屋の活動のほかに「劇場」において「国民（市民）の領域」を拡充させるためには、専門領域の確保と支援という徹底した改革を促進していく必要がある。2006年指定管理者制度導入後の現在にあっては、文化事業と公共事業の両立という視点の上に立った「新しい組織構築に必要な新しい人材の確保」という視点が重要となろう。「専門の領域」の位置づけを実践してこなかった歴史が、裏返せば「国民（市民）の領域」を圧迫しているのである。そして、この二つの領域を統括することも視野に入れた人材（プロデューサー等）の不在こそが、実は日本の劇場を支えていた「劇場の純粋な楽しさ」を消滅させてしまったのではないだろうか。

謝辞
元東京宝塚劇場管理部　内野操氏、シアタークリエ副支配人伊藤博氏、竹中工務店東京設計部　堀口譲司氏には調査にあたってご協力いただきました。深く感謝申し上げます。

【註】

i　佐藤武夫『公会堂建築』、相模書房、昭和47年、pp.24－25
ii　歌舞伎座復興記念限定版『歌舞伎座』、株式会社歌舞伎座出版部、昭和26年、p．322
iii　上田敏「國立劇場の話」『新小説』、明治39年、p．380
iv　同上、p.384
v　同上、p．390
vi　同上、p．400
vii　同上、p．401
viii　永井荷風『太陽』17巻5号、明治44年4月、pp．146-147
ix　帝劇史編纂委員会編『帝国劇場五十年』東宝、昭和41年
x　青淵回顧刊行会編『青淵回顧録』上、同刊行会、昭和2年、pp．46－48
xi　「東京宝塚劇場前史」自筆原稿（東宝資料）
xii　小林一三『私の行き方』、阪急電鉄株式会社、昭和55年、p．157
xiii　小林一三「大劇場論（二）劇場経営者の理想」、『小林一三全集』、四ダイヤモンド社、昭和37年、p．75
xix　水品春樹『舞台監督という仕事』、未来社、1953年、 p．102
xv　小山内薫「帝国劇場に對する緊急なる勸告」『太陽』、1911年、p．149－151
xvi　小林一三「大劇場論（二）劇場経営者の理想」『小林一三全集』、四ダイヤモンド社、昭和37年、p．66
vxii「劇場」、演劇文化社、昭和22年、p.13

xvii　新関良三訳、カアル・ハアゲマン『舞台芸術』、内田老鶴圃、大正9年、pp．17－18
xix　横河民輔「帝国劇場創立の思い出と復興に就いて」高橋量之助『稿本帝劇の回想』に収録
xx　カアル・ハアゲマン、新関良三訳『舞台芸術』、内田老鶴圃、大正9年、pp．17－18
xxi　小山内薫『芝居入門』、プラトン社、大正14年、p．137
xxii　太田正雄『木下杢太郎全集』第十九巻、岩波書店、昭和57年、pp．329－334　「読売新聞」明治45年4月7日掲載
xxiii 清水裕之「21世紀の地域劇場」、鹿島出版会、1999年、p．141

【参考論文・文献】

永井聡子「劇場空間と演出空間の総合関係に関する考察－築地小劇場の劇場空間その1」日本建築学会東海支部研究報告集、第35号、1997年
永井聡子・清水裕之「明治末期より昭和期に至る劇場空間の近代化に関する研究―前舞台領域の空間的変遷」日本建築学会計画系論文集、第513号、1998年
永井聡子、博士論文「日本における劇場の近代化に関する研究」名古屋大学、2001年
浅野時一郎『私の築地小劇場』、芸能発行所、昭和56年
上野芳太郎編『帝国劇場案内』、大正7年3月
小山内薫『芝居入門』、プラトン社、大正14年
青淵回顧録刊行会編『青淵回顧録』下、同刊行会、昭和2年
稲垣栄三『日本の近代建築[その成立過程](上)』、鹿島出版会、1993年
伊原敏郎『日本演劇史』、藤森書店、明治37年
上田敏「国立劇場の話」『新小説』明治39年2月初出／上田敏全集刊行会『上田敏全集』第四巻、教育出版センター、昭和54年
太田雅雄『木下杢太郎全集』第十九巻（「地下一尺集」を定本。明治45年（1912年）4月7日『読売新聞』掲載）、岩波書店、1982年
大笹吉雄『日本現代演劇史明治・大正初期篇』、白水社、昭和60年
カアル・ハアゲマン、新関良三訳『舞台芸術』、大正9年、内田老鶴圃（初版）
歌舞伎座復興記念限定版『歌舞伎座』、株式会社歌舞伎座出版部、昭和26年
河竹繁俊『歌舞伎演出の研究』、早川書房、昭和26年
河竹登志夫『歌舞伎』、東京大学出版会、2001年
久米邦武編、田中彰校注『特命全権大使　米欧回覧実記（一）（二）（三）』、岩波文庫、2007年
『劇場』、演劇文化社、昭和22年
小池章太郎『考証江戸歌舞伎』、相模書房、平成3年
小泉嘉四郎『劇場舞台設計計画』、近代建築社、昭和40年
小谷喬之助『現代の劇空間（新建築技術叢書4）』、彰国社、1975年
小林一三『私の行き方』、阪急電鉄株式会社、昭和55年
小林一三「日本歌劇概論」、宝場町（兵庫県）、大正14年、『小林一三全集』
小林一三『私の見たアメリカ・ヨーロッパ』、要書房、1953年
坂本俊一編『帝国劇場案内』、明治44年
佐藤武夫『公会堂建築』、相模書房、昭和41年
渋沢栄一「帝国劇場の創立」『青淵回顧録』、青淵回顧録刊行会、昭和2年
島村抱月『抱月全集』日本図書センター、大正8年6月28日初版発行／昭和54年9月30日複製発行
清水裕之『21世紀の地域劇場』、鹿島出版会、1999年
清水裕之『劇場の構図』、鹿島出版会、昭和60年
菅井幸雄『築地小劇場』、未来社、昭和49年
杉浦善三『帝劇十年史』、玄文社、大正9年
「帝国劇場創立の計画」『建築雑誌』第20号、237　明治39年9月
「帝国劇場」『建築世界』第五巻第四号、明治44年
『帝国劇場写真帖』、高尚堂出版部、明治44年
遠山静雄『舞台照明五十年』、相模書房、昭和41年
『東京宝塚劇場工事概要』、竹中工務店東京支店、昭和9年
田中彰『明治維新と西洋文明―岩倉使節団は何を見たか』、岩波新書、2008年
帝劇史編纂委員会編『帝劇の五十年』東宝、昭和41年
遠山静雄『舞台照明学下巻』、リブロポート、1988年
服部幸雄『大いなる小屋』、平凡社、1994
服部幸雄『江戸歌舞伎文化論』、平凡社、2003年
土方与志『なすの夜ばなし』、河童書房、1947年
嶺隆『帝国劇場開幕』、中公新書、1996年
三宅周太郎『演劇五十年史』、鱒書房、昭和17年
森律子『女優生活廿年』、実業之日本社、昭和5年
『横河民輔追想録』、横河民輔追想録刊行会、昭和22年
横河民輔追想録刊行会『横河民輔追想録』、技報堂、昭和30年
吉見俊哉『博覧会の政治学　まなざしの近代』、岩波書店、平成3年

国際関係学における教育方法と内容の展開（下）
－米学会誌(International Studies Perspectives) 掲載論文サーベイ－

Pedagogy in International Studies: Survey of the Pedagogical Articles in *International Studies Perspectives 2000-2006* Part II

馬場　　孝
文化政策学部国際文化学科

Takashi BABA
Department of International Culture, Faculty of Cultural Policy and Management

本稿は、米国の学会誌(International Studies Perspectives)の創刊号から2006年までに掲載された国際関係学教授法関連の文献サーベイであり、紙幅の関係で分割掲載となった前号に続く後半部分である。前号で設定した類型化に基づき、本号においては、教育内容を所与として方法に工夫を加える授業紹介、教育内容を調査し、国際関係学の内容そのものに批判的な検討を加える教授法について概観する。

This is the second part of a paper that surveys pedagogical articles in *The International Studies Perspectives* journal. Based on the typology formulated in the previous part, this section starts with an inquiry into the teaching methods applied to explain abstract theories and concepts of International Relations (IR). It then goes on to survey the articles that investigate the contents of IR programs and textbooks. It concludes with a survey of articles that critically examine the subject matter of the discipline of IR.

はじめに

1　概観と分類
（1）概観
（2）類型化
2　教育方法の適用
（1）A-1 「方法導入型」
　i）シミュレーション＋ロールプレイング
　ii）事例（ケース）に基づく教育
　iii）PBL（ Problem Based Learning: 問題解決型学習）
　iv）ディベート
　v）情報通信技術
　vi）映画ほか　　（以上前号）

（2）A-2 「内容伝授」型

「はじめに内容ありき」。すなわち、あるテーマをどのように教えるかという工夫の開陳であり、その点が方法の導入に焦点を合わせたA-1型との相違である。方法の導入以前に内容をいかに伝授するかが強く意識されている点がA-2型の特徴である。前者が「方法が内容をみつける」一面を持つとすれば、後者は明らかに「内容が方法をみつける」性格を持ち、しばしば複数の方法が組み合わされることも特徴の一つである。

このA-2型には、「倫理」を取り上げた（59）や、グローバルな格差の教育方法について話し合われた（16）のような例もある。しかし圧倒的に多いのは、「IR理論」、すなわち古典的リアリズム、構造的リアリズム、古典的リベラリズム、制度的リベラリズム、コンストラクティビズムなど、国際関係論における「理論的視座」を伝授すべき内容とする論文である。そのうちのいくつかを取り上げ、あらましを見てみよう。

（29）は、理論的重要性が広く指摘され、調査研究でも頻用される一方、理解困難、教えるのはさらに困難とされる「コンストラクティビズム（社会構成主義）」を、国際関係論入門クラスでどのように教えるべきか、「講義案」を提示しての実践報告である。理論・研究の場と教育の現場とのギャップを架橋する試みとされる。用いられるのは、①「ヨーロッパ連合の成立」　②「アパルトヘイトの終焉」　③「化学兵器禁止」という、この100年間に起きた国際政治上の大変革をケースとして取り上げる授業方法である。リアリズムによる政治力学からもリベラリズムによる経済的便益の観点からも説明できない現象が、コンストラクティビズムによってどのように説明可能となるかが示される[（29）:17-19]。同時に、国際政治において、いかなる場合、いかなる条件が整えば「理念」が力を持つのかという問題がわかりやすく解説される。

（18）も興味深い。「行動主体たる国家を、“物理法則”に支配されるビリヤードのボールのごとく扱う」という、「構造的リアリズム」へのお決まりの批判を逆手にとり、「芝生の上のビリヤード」の別名を持つ「クロッケー（Croquet）」というゲームを授業で用いる報告である。構造的リアリズムのみならず、古典的リアリズム、リベラリズム、ポストモダニズムも「伝授」される。ゲームそのものが国際関係のアナロジーとしてとらえられ、構造的リアリズムへの批判にのっとり、「国家」に擬せられ

るのは「ビリヤード・ボール」ならぬ「クロッケー・ボール」である。そして、ボールの数、プレイヤーの数、ルールを変更することで「ゲーム」(＝国際関係) がどのように変容するかを体感する。ゲームの後、教員の指導の下に「内省」とブリーフィングを行なうという内容である[(18):389-397]。

(49) も同様で、「古典的リアリズム」を理解するための「じゃんけんゲーム」、「制度的リベラリズム」を理解するための「囚人のジレンマゲーム」、「構造的リアリズム」を理解するためのボードゲーム「ディプロマシー」の活用が紹介される。

「じゃんけんゲーム」はごく単純で、トランプのカードを1枚ずつ持ち、「生き残る」ことを目的に、じゃんけんに勝ったら相手のカードを取り上げるゲームである。ひとしきり終わった後、教師の質問から「内省」が始まる。「なぜ戦ったのか」「目的が＜生き残り＞なら戦う必要はなかったのではないか」「カードをいくらたくさん集めても＜生き残る＞ためにはプラスにならないはずだ」等々の質問が教師から発せられる。学生は、知らず知らずに「戦っていた」自分に気づかされる。そこでホッブス『リヴァイアサン』13章「人間の自然状態、その至福と悲惨について」が配布され、次の有名な一節を読みながら、自分の行動や心理状態を振り返る。「すなわち、人間の本性には、争いについての主要な原因が3つある。第1は競争、第2は不信、第3は自負である。第1の競争は人々が獲物を得るために、第2の不信は安全を、第3の自負は名声を求めて、いずれも侵略を行なわせる」[18]。ホッブスへの誘いであり、古典的リアリズムへの導入でもある[(49):366-367]。

次に行なわれるのが、変則的な「囚人のジレンマゲーム」である。全員が輪になり、「裏切り」は全員に対する裏切りとみなす利得行列にしたがいゲームは進行する。途中でルールを変更し、毎回ゲームを行うごとに、投票により1人追放可能という条件を付加する。追放された者は、追放された者同士で輪の外でゲームを継続し得点を競う。結果的に、「協力解」を出し続けるメンバーが輪に残ることになり、輪の外では裏切りを混ぜながらのゲームが進行する。ゲームに先立ち「講義」が行われている場合には、この状況で「制度的リベラリズム」との類推が示唆される。すなわち、協力を続ける「輪」こそが「制度」そのものではないか、という類推である[(49): 368]。中央集権政府が存在しない状況下でアクター間に協力が可能となるのは、アクターの本性が「善」であることによるのでも、協力を可能とする「制度」の創出によってでもなく、アクター間の相互作用が将来にわたって継続する状況下では、「協力」することが自己利益に適うためである、というのが「制度的リベラリズム」の理論的骨子である[19]。理論の想定に擬した状況を創出することで、理論の理解を助けようという工夫である。

(55) は、カードゲームピット (Pit) を用いて、国際政治経済/国際関係論の理論的視座「重商主義/リアリズム」「リベラリズム/ネオリベラリズム」「世界システム論/従属論」を教える試みである。ピットは購入してやってみたが、ルールは簡単でおもしろい。上述のクロッケー同様、ルールを変更することでゲーム内容がどのように変化するかを体験し、アナロジーから理論の理解へと導入する、準備が簡単でかつ良く工夫された授業である。アレグザンダー・ハミルトン (Alexander Hamilton)、デービッド・リカード (David Ricardo)、マルクス (Karl Marx)、レーニン (V.I. Lenin) などの古典的著作からの抜粋、あるいは定評あるテキストを課題として事前に課すことも有効とのことである[(55):71]。

その他、(38) は、ツキュディディスが伝えるペロポネソス戦争でのアテーナイ人とメーロス島民との有名な問答に基づき著者が作成した「ロールプレイング」を駆使し、教科書では「両極端」とされるリアリズムとアイディアリズム (理想主義) 両方をひとつのシミュレーションを通じて体得する手法を紹介している。(53) もディスカッション、ウェブフォーラム、模擬会議などの体験型学習を通じてIR理論を紹介する試みである。

以上のように、あれこれの方法を動員して「伝授」すべき内容として一連のIR理論は捉えられている。ISPは創刊号の巻頭エッセイにおいて、アクティブ・ラーニングの制約に触れ、古典的著作への誘いという点で伝統的講義スタイルの利点に言及している[20]。しかし仮にこ

のような方法で学生が、さもなくば手に取ることがなかったツキュディディスの『戦史』、ホッブスの『リヴァイアサン』、マキャベリ『君主論』などを、その一節であれ興味を持って読む機会になるのであれば、そのれだけでも試みに値する手法であると言えよう。

3　教育内容の検討

（1）　B-1 「内容調査」型

A-1「方法導入型」A-2「内容伝授型」はともに、教育内容そのものを調査、検討、批判の対象にするものではなく、所与のものとして、教育方法との関連や方法の有効性が検討されている点に共通性があった。

これに対して、B-1「内容調査型」B-2「内容批判型」と名づけた論文は、教育内容そのものを調査、検討、批判の対象とする点に特色と共通点がある。前者からみていこう。

教育内容の調査・分析には、教科書分析、カリキュラム分析、そしてすでに一瞥した学会誌分析の 3 つがある。

（40）は、半世紀前に出版されたオーガンスキー（A. F. K. Organski）の教科書[21]を軸に、現代の 5 冊のテキスト[22]を、理論と事実、変化しない要素と変化する要素のバランスという観点から比較調査するものである。オーガンスキーの教科書の強みは、変化そのものに根ざす理論を提示している点にあるとされる。その変化の根本要因をオーガンスキーは「産業化」に求める。産業化は国家レベルの現象であるが、国際システムレベルの平和と紛争に多大な影響を及ぼす。まず、産業化は国家レベルで政治体制や社会全般に影響を及ぼす。同時に、産業化の進展は不均等であり、国家間の不均等な発展が国際システムレベルでのパワーの変動をもたらす。特に、パワー移行期において、台頭する国家が国力に見合った満足度を得られない場合に、戦争のリスクが高まる。オーガンスキーは国際関係の変化を以上のような論理で説明する。ほぼ同時期ではるかに著名なモーゲンソー（Hans J. Morgenthau）による、今日も版を重ねるテキスト（Politics among Nations）ではなく、オーガンスキーの教科書を引証基準とするのは、彼の説の妥当性ではなく、理論と事実、不変と変化のバランスが強く意識して書かれた教科書であることが理由としてあげられている[(40): 25-28]。

この論文は筆者の以下の問題関心と重なる。すなわち、時の試練に耐えうるテキストはありうるのだろうか、あるとすれば、どのような内容を備えたものであるか、という問題である。時々刻々変化する国際関係の出来事を追いかけるだけでは、新聞の時事解説と同じになってしまう。しかし、現実に生起する事象を事後的であれ「説明」する力を持たない理論書は、「教典」にほかならない。理論と実証を架橋する枠組みをどのように提示できるのか。比較の結果を一言で言えば、現代の 5 冊の教科書は、これらの課題に多様な方法で答えようとしていることが示されるのみで、オーガンスキーの教科書との有意な比較はなされず、「理論」と「事実」、「不変」と「変化」のバランスという課題の重要性が再確認されるだけの結論となっている[23]。確かに、理論と実証、不変とされる要素と変動する要素とのバランスという問題提起そのものは的を射ていると考えられる。しかし、T・クーンの定義に適うような「通常科学」の「標準的テキスト」にはほど遠いのが現状であろう。

（32）は、国際関係論の教科書において国際法がどのような扱いをされているかについて、12 冊のテキストを取り上げ検討している。12 冊のうち 4 冊は、出版関係者からの極秘ソースによれば、売り上げシェア上位 4 冊とのことである。分析の結果は、国際関係論とその教育内容に、「国際法」についての教科書における位置づけと認識の変更を迫る内容検討・批判に近いものとなっている。例えば、「地球資源の管理は国際的なルールの発展を必要としている」「貿易問題に管轄権と強制力を持つ WTO が、GATT に代わり生み出された」「国際協定の積み重ねによりヨーロッパ連合が創設された」などといったテーマは、重要な国際法分野の問題であるにもかかわらず、国際法という章においては取り上げられることはない。これらは、国際法とは別の章において扱われ、しかも説明において国際法が言及されることすらほとんどない。「レジーム」「ルール」「規範」といった概念での議論

はなされても、国際法分野のトピックであると明示されることは皆無に近い[(32):152-53]。このように、国際関係論入門クラスにおける「国際法」の扱いへの異議申し立てと教科書記述への提案も盛り込まれている。

(43)(61)はカリキュラムの調査・分析である。(43)は、中西部の67大学の学部における国際関係学(International Studies)専攻プログラムを、カリキュラムの「構造化」という基準から調査する。「構造化されたカリキュラム」の要件は以下の3点である。

① 入学初年度において、当該分野を包括する入門科目(例えば「国際学入門」(introduction to international studies course)が必修であること。
② 当該分野に関わる「方法論」を習得するコースが必修であること。
③ 最終学年において、当該分野を総括する「卒業研究」コースが必修であること。

①で求められているのは、分野の基礎となる共通概念・理論を習得し、分野全体を眺望し、今後の勉強の指針を与えるための必修授業である。同時に、学習内容のみならず在学する教育機関への導入的な役割を果たすこともその授業に望まれている。②が必須要件とするのは、国際関係学分野における定性的あるいは定量的な分析手法を習得するための授業である。特定のテーマを選び研究を進めていく上で必要とされるスキルを身につけ、いかなる研究にも不可欠な批判的思考を養成することも期待される。③の必修授業は、広範な分野にわたる勉強内容を統合し、習得したスキルを駆使して研究内容をまとめる、論文、セミナーその他の授業である[(43):137-138]。調査の結果は、専攻する学生全員に共通の基盤を用意する「構造化されたカリキュラム」モデルを取る大学は3分の1以下とのことであり、それ以外は、多岐にわたる分野の授業を用意し、学生に選択の機会を多く与える「多様な選択」方式が主流を占めているとのことである。大学院を有する大学に「構造化」方式が多く、宗教的な背景を持つ大学は「多様な選択」方式が多いとのことである[(32):145]。

(61)も同じ基準を踏襲し、全米140大学でのカリキュラム調査・分析を行っている。入門レベルでの必修科目は97.1%の大学で課している。しかし、国際関係学(International Studies)に特有な、学際的な内容を持つ科目(科目名は、Introduction to International Studiesのみならず、Our World Today, The World as a Total System, Introduction to the World Systemなども含める)を必修とするのは58大学(42.6%)とかなり低くなる[(61):270]。方法論の習得についてはさらに低くなり、何らかの方法論を必修とする大学は22.1%で、さらに国際関係学特有の方法論は3.6%となっている。「卒業研究」については定義を緩やかに設け、最終学年のセミナーを含む何らかのコースの必修、海外留学、卒両論文などを含めて調査している。それによれば、72.1%の大学が何らかの「卒業研究」を課し、内訳としては、卒論が30%、セミナー等が42%、また海外留学は37.6%であった。さらに87%が何らかの語学の履修を学生に課しているとのことである[(61):270-281]。この2つの調査からは、「国際関係学」専攻の学部構成やカリキュラム内容の多様性が浮き彫りにされている。

前述の(51)は、教育の基盤となる研究面に着目し、学術誌をサーベイしたものであった。結論としては、掲載論文でみる国際関係分野の「偏狭性」を(51)は主張する[(51):460]。

最後に、(37)は、ラテンアメリカ7カ国の大学における国際関係論の授業内容ならびに学術誌5誌の掲載論文の調査・分析報告である。ここでは教育における米国産の国際関係理論の直輸入と、学術面におけるラテンアメリカの独自な理論展開という対照的な解明される。従属論のように、過去、ラテンアメリカにおける学術的な理論展開が、北米の議論に貢献した例もあり、今後もその可能性を持つことを示唆している[(37):346-348]。

B-2 「内容検討・批判」型

調査から一歩進み、教育内容や既存の学問体系に検討を加えるタイプである。(31)など教育内容の提言を含むもの、(62)のようにこの分野における「理論」そのものの意味を根源的に問い直すものなど多様であるが、

ここでは、いくつかを例示的に検討するにとどめる。

（7）は、女性性器切除（FGM：female genital mutilation）を題材に、国際関係論（IR）そのものの体系や内容に批判的検討を加えている。世界保健機関（WHO）は、世界で毎年1億3000万人の女性にFGMが行われ、そのうち少なく見積もって200万人が生命の危険にさらされていると報告する。この慣習の擁護には、伝統、文化的価値に依拠した議論が展開される。他方、非難する側は、女性の健康への悪影響を指摘し、FGMは女性への人権侵害であり女性に対する暴力の一形態にほかならないと論難する。他方、この慣習を擁する地域の女性からは、「西側先進国」の女性による反対運動は、新たな「文化的帝国主義」であるとの反批判もなされる。世界の女性運動を二分する争点にもなっている[(7): 234-235]。

では、FGMはどのように国際関係論の内容に関わってくるのであろうか。FGM問題は、南北問題、国際法、NGOの国際問題への関与、文化的相対主義と人権の普遍性といった国際関係の様々な側面と深い関わりを持つ。国際関係論にジェンダー的視点を導入するのに格好のトピックであろう。しかし、著者は別のアプローチを採用する。ジェンダーをいかに体系に組み込んでいるかという観点から、国際関係論の様々なアプローチを批判的に検討する事例として、FGMを活用するのである。国際関係論はこの観点から4つに分類される。

① ジェンダー・ブラインドの「見ざる聞かざる言わざる」アプローチ
② 従来の体系は不変のまま取り入れ、隔離して扱う「取り入れ、かき混ぜる」アプローチ
③ 異なった視座を複数同時に提示する「複数パラダイム」アプローチ
④ ジェンダーの観点から国際関係論を完全に書き直す「ジェンダー国際関係論」アプローチ

この4つの観点から、教科書分析も行われる[(7): 235-241]。①ではFGMは問題の重要性が認識されることはあっても、学問の対象外とされる。②では女性への人権侵害のひとつとして取り上げられるが、既存の知識への「付録」「追加」としての扱いを受けるのみである。さらに「女性」がひと括りされた単一の存在として提示され、階級、経済、地域、人種、民族に基づく相違は顧みられない。政策決定に関与する女性エリートの階級的な背景も、FGMをめぐる「南」の女性間の葛藤も、あるいは「南」と「北」との女性の間の緊張関係も②の議論の射程に入らない。③では、複数の視点から異なったFGMへのアプローチが示される。リベラリズムの観点からは、FGMは、人権の国際化における基準（スタンダード）の問題、さらには人権の普遍性と相対性との緊張関係の問題において捉えられる。ポストコロニアルの観点からは、FGMはイスラムの教義で許されるものではなく、ムスリムでない女性に行われている慣習であるにもかかわらず、イスラムと結びつけたに言説がなぜ多いのかについての問題が提起される。加えて、FGMの問題の議論や活動の過程において、「北」の女性によって「南」の女性が「他者」として対象化され、「物事がよくわかっている私たち（＝北の女性）」による「救済対象（＝南の女性）」という図式がいかに形成されるかが解き明かされる。④はさらに徹底する。外資系企業でブルージーンズの裁縫に携わる女性、大農園でバナナの収穫労働に従事する女性、家庭で子どもの世話をする女性、これら「普通の」女性の生活への理解が、国際関係論において死活的に重要であると主張され、FGMもこの文脈で議論の対象とされる[(7): 237-240]。既存のIR理論への批判と問い直し、そしてジェンダー論をどのように国際関係理論に組み入れるかという問題提起がなされている。

（34）は「歴史的アバアヴァンギャルド」なる教育手法で、ネオリアリズム的なグローバル化概念の批判を試みる授業紹介である。ネオリアリズム的なグローバル化像とは、われわれの日常生活から切り離され関係のない次元で進行する過程としてグローバル化を提示し、世界経済の構造を、自己疎外を随伴した形で定式化するものとされる。これを打破するには、ISPで先行的に紹介される様々な「工夫（トリック）」を既存の授業方法に加えるだけでは不可能であり、著者が提唱する「歴史

的アバンギャルド」による批判的教授法によって可能となることが示されている[(34)231-233]。

この試みは、ロバート・コックス（Robert Cox）による「問題解決型理論」と「批判理論」の２つとも対峙される。すなわち、既存の政治・経済制度や社会的政治的な権力関係の体制を所与のものとして、その枠内での行動と技術的な「問題解決」を模索する「理論」と、眼前の政治・経済制度や権力関係がいかに形成されたのかを批判的に検討する「理論」の区別である[(34):235]。前者では、「地球的問題群」の解決の必要がしばしば示される。その「問題群」には、様々な「問題解決アクター」が群がる。国家、国際機関、専門家、NGO、擬似NGO、政府お抱えNGOからなる「群れ」である。「グローバル・ガバナンス」の標題の下、予定調和的に問題の解決が図られ、「地球市民社会」の誕生が高らかに告げられる。この「問題解決型」国際関係理論においては、グローバルな政治と日常の生活との分離が前提とされており、問題解決のために目的を一つとする諸集団、諸アクターが「協力」し「団結」する図式が描かれる。リアリズムが国家による国益の合目的的追求以外に「政治」を見いださなかったとすれば、「問題解決型」国際関係理論は、政策志向、協調的、予定調和的、同調的な非政治化された市民社会だけを見いだす結果に終わったとされる。

一方の批判理論においては、グローバル化推進エリート、超国家企業等の「グローバルな権力」が抽象的、絶対的に措定され、それに対抗するものとしては、「反ヘゲモニー人」「反システム人」という「幽霊」が出現させられる。「問題解決型」理論にせよ、「批判」理論にせよ、「認識共同体（epistemic communities）」「脱国家的争点をめぐるネットワーク（transnational issue networks）」「反ヘゲモニー」などの「幽霊」を「国際関係学」に出現させているにすぎないと批判される[(34):234-236]。

では、提唱する「歴史的アバンギャルド」手法とはどのような授業であり、教室内でのどのような体験型授業によっていかにグローバル化が日常生活と切り離されないものとして「体感」されるのか。遠近法を発見したダ・ヴィンチの手記、コロンブス、ジャック・カルティエ、ティチングなどの日誌、あるいは「望まなかった旅行」を強いられた奴隷貿易に関する研究書などからの「せりふ」を読み、「劇」を仕立てる授業などが展開される[(34):238-245]。これらがどのような効果を持つのか、正直なところ、筆者の理解を超え、また具体的な授業のイメージをつかむことができなかった。しかし仮に著者の主張通りの効果があるのであれば、授業実践を通じた教育内容の批判的組み替えとなっており、興味深い事例である。

（15）は映画を駆使して、国際関係の諸理論を批判的な検討の対象とした授業報告である。『蠅の王』などにより、IRの理論を真偽の判定ではなく、その理論がいかに「まことしやかに見えるか」「もっともらしく見えるか」について、その仕掛けを探る試みで、内容はきわめて興味深い。「真実」はいかに真実として語られるようになるのか。IR理論も映画も、「まことしやかに見せる」ためには、無視されねばならぬ要素がある。それぞれそれは何であるのか。「流行る仕掛の構造」を解き明かしつつ、映画とIR理論を対置するのである[(15):282-286]。「ひどい映画」である『インディペンデンス・デイ』をあえて用いてIR理論を脱構築する（50）とともに、国際関係論において理論とは何かについて、これらの論文は根源的な問いを提示している。

結語に代えて

以上のサーベイで得た暫定的な知見を整理し、気になったいくつかの点を雑感として記して結語に代えたい。

「教育方法の適用」の節で概観したように、国際関係学に関わる教育現場には、「シミュレーション＆ロールプレイング」をはじめ多彩かつ斬新な手法の導入が進められている。同時に、それらの普及を促進する教材販売あるいは無料の教材提供の充実にはめざましいものがあった。

これらの教育手法と教育内容との間には、一定の親和性がみられた。「シミュレーション」で扱われるテーマは、国際機構や外交交渉等が圧倒的に多かった。「事例（ケース）に

基づく教育」で取り上げられるケースは、そのオンライン教材の構成比率や授業実践の事例数から、自国が関わるケースに偏る可能性が推測された。一方、「ディベート」では歴史事象を扱うのは困難であり、論題の設定に時事問題への傾斜が看取される。

以上の教育手法が教育内容を制限したり規定したりするリスクや、学生参加型の授業の導入と学習範囲の限定化とのトレードオフについては、サーベイした論文のいずれにおいても十分に認識されていた。「古典的著作」への啓発的な導入など、従来の講義方式の長所とされる面をあわせ持つ試みもいくつかみられる。さらに、これらの様々な手法と組み合わされたIT技術の活用も際立った特徴であった。

それではこのような斬新な手法の展開は、教育内容の「制度化」を示唆するのであろうか。アクティブ・ラーニングの活発な導入は、教育内容の「規格化」の進行と軌を一にするのだろうか。ディシプリンが確立し、「完成された学問」においては、同じ内容のことをいかに効率よく学習者に習得させるかが「教科書」や授業の目的となる。このサーベイからは、IR 理論の教育において、その萌芽が看取された。「同じ内容」をいかにわかりやすく学生に理解させるかの工夫の開陳が多くの教育事例紹介のポイントとなっているのである。他方、教科書分析のいくつかは「標準化」とはほど遠い現状を示している。ディシプリンの統一や確立というよりも、その並列状態がむしろ固定化しつつあるとも考えられる。

アクティブ・ラーニングへのありうる批判の一つは、コックスの「批判理論」からのものであろう。シミュレーション＆ロールプレイングにしてもＰBLにしても、既存の国際秩序や制度を前提にした上で「問題解決」を図ろうとする「問題解決ごっこ」である。しかもそれらの国際秩序や制度は、まさにアメリカ合衆国を中心とした「制度」「秩序」にほかならない。もちろんサーベイでも見たとおり、ロールプレイングによりグローバル化の現実を根源から問い直そうとする試みもある。しかし、コンピュータ画面上でのシミュレーションや市販教材の多くが、既存の秩序や制度を所与として作成されているのであれば、国際システム形成の根源やシステム自体に内包する問題に目を閉ざしたままの政策形成志向や問題解決志向の教育に一層の拍車がかかる危惧も否定できない。

同じく、雑感の域を出ないが、サーベイを通じて気になったのは、教育内容における「文化」の不在である。これはアクティブ・ラーニングの方法自体に根ざした問題なのであろうか。

ロールプレイングやシミュレーションは、「役者」（アクター）になって「主体」（アクター）を演ずるゲームである。国際関係において、さまざまな主体を主体にまとめあげるのは、つきつめれば「文化」にほかならない。アクターをアクターたらしめるメカニズムの大きな要因の一つは、文化なのである[24]。この点に目を閉ざして「役者」になりきり紛争解決「ごっこ」を繰り返しても、自文化中心主義の螺旋に陥りかねないのではなかろうか。

これは教育方法そのものに内在する制約ではなく、その適用における問題であるとの見方もありうる。仮に、異文化理解を伴う能動的な「ごっこ」が行われれば、大きな強みにもなる。なぜなら、シミュレーションにおいては、同一の争点が、異なったアクターにどのように異なって映るのかを擬似体験できる点にその教育効果が期待されているからである。ディベートも同様である。明快な「論理」によって是非の決着をつける論争の場に、「文化」の入る余地は少ない。しかし、異なった「論理」の存在を浮き彫りにする教育的ディベートの考案も不可能とは言い切れない。「事例（ケース）に基づく教育」のケースも、異なった文化的文脈での「ケース」を適切に用いれば、偏狭な視野からの解放につながると思われる。但し、このような問題意識に裏打ちされたアクティブ・ラーニングの手法紹介は見当たらなかった。IT 技術を駆使したシミュレーション教材の開発が文化的要因を捨象してのみ可能であるとすれば、学習効率と学習内容のトレードオフの問題は、この点においてこそ十分に認識される必要があるだろう。

検討した文献中、国際的な交渉や紛争解決における「文化」の重要性を強調していたのは、イスラエルでの教育経験をベースとした

（11）など極めて少数であった。教育内容が、ジェンダー・ブラインドならぬカルチャー・ブラインドに陥り、アクティブ・ラーニングの導入がその傾向に拍車をかけるとすれば、教育の現場が米国であるだけに懸念は募る。政治風刺コミックを教材とした（23）では、米国・イラン関係をめぐるコミックを用いた際、描かれていたホメイニーの顔が誰一人わからず、しかも名前を聞いたことがある学生は30人中わずか3名であったとのことである。「文化」は教育の規格化、制度化そしてディシプリンの確立や純化にとって夾雑物であるかもしれない。しかし文化を捨象して構築される国際関係の理論も教育方法の導入も、その代償は小さくないと危惧される。

注

18）ホッブス『リヴァイアサン』(中央公論社、1979（1651））156頁。

19）Karen Mingst, *Essentials of International Relations, 3rd ed.* W. W. Norton & co., 2004, p. 64

20）Mark Boyer et al. ,“ Visions of International Studies in a New Millennium ’, *International Studies Perspectives* (2000), 1(1), 5

21）A. F. K. Organski, World Politics, Knopf, 1958

22）5冊のテキストは、検討される順に、Bueno de Mesquita, B, *Principles of International Politics: People ’s Power, Preferences, and Perception*, Congressional Quarterly Press, 2000. Goldstein, J. S., *International Relations, 4th, ed.* Longman, 2001. Kegley, c. and E. Wittkopf, *World Politics: Trend and Transformation, 8th. ed.* Bedford/St. Martin ’s, 2001. Ray, J.L., *Global Politics, 7th ed.* Houghton Mifflin, 1999. Russet, B. et al, *World Politics: The Menu for Choice, 6th ed.* Bedford/ St. Martin ’s, 2000.

23）メスキータの教科書は、古今東西、国際関係にかかわるアクターの「戦略的行動」の不変性という視点で一貫している。ゴールドシュティンは、扱う理論もカバーする分野も「何でもあり」で、その包括性に、強みと弱みが宿されている。キグリーは時事性を最大限に追求し、重要事件があるたびに、改訂を重ねている。レイは上述の3冊の中間に位置づけられ、国際関係の展開の確率論的性格を強調する。ラセットらは、「分析のレベル」に「機会と意志」を組み合わせた独自の枠組みを提示し、アクターの選択の結果としての国際関係の展開という側面に焦点を合わせる[(40):28-39]。

24）平野健一郎「国際関係論、地域研究、国際文化論―より総合的な理解を求めて」龍谷大学第1回国際文化学会大会記念講演　講演原稿（2007年11月9日）

本研究は、平成19年度静岡文化芸術大学文化政策学部長特別研究費の助成を受けた。本稿は、平成20年10月10日提出原稿の後半部分に、分割掲載に伴う若干の加筆修正を加えたものである。

追記：前号では付録1において、サーベイ対象のInternational Studies Perspectives第1巻（2000）～第7巻（2006）のPedagogy分野の掲載全論文に通し番号を付し、一覧で提示した（『静岡文化芸術大学研究紀要』第9巻、62～64頁）。本稿の本文中でのサーベイ対象論文からの引用は、以下の要領でこの文献通し番号を用いて注記している（凡例：[(3)：47-49]＝文献番号（3）47～49頁より引用）。以下、前号と重複するが、本号の本文中で言及した論文のみ、著者名とタイトル、掲載巻・号数を再録する。付録2は、前号で行った対象論文の類型化を示す一覧表である。

(7) Stienstra, "Cutting to Gender: Teaching Gender in International Relations, "1(3)

(11) Cohen, "Living and Teaching Across Cultures, "2(2)

(15) Weber, "The Highs and Lows of Teaching IR Theory: Using Popular Films for Theoretical Critique," 2(3)

(16) "Symposium on Global Inequality and Teaching: Taking Up the Challenge of Craig N. Murphy ’s Presidential Address, "2(4)

(18) Duffy, "Teaching with a Mallet: Conveying an Understanding of Systemic Perspectives on International Relations Intuitively- Croquet as Experimental Learning, "2(4)

(23) Dougherty, "Comic Relief: Using Political Cartoons in the Classroom, "3(3)

(29) Ba et al., "Making and Remaking the World for IR 101: A Resource for Teaching Social Constructivism in Introductory Classes," 4(1)

(31) Nielsen et al., "Teaching Strategies and Security in Cyberspace: An Interdisciplinary Approach, "4(2)

(32) Hall, "The Standing of International Law in Undergraduate IR Texts, "4(2)

(34) Drainville, "Critical Pedagogy for Present Moment: Learning from the Avant-Garde to Teach Globalization from Experiences, "4(3)

(37) Tickner, "Hearing Latin American Voices in International Relations Studies, "4(4)

(38) Morgan, "Toward a Global Theory of Mind: The Potential Benefit of Presenting a Range of IR Theories through Active - Learning, "4(4)

(40) Enterline, "Balancing Theory versus Fact, Stasis versus Change: A Look at Some Introduction to International Relations, "5(1)

(43) Ishiyama et al., "Survey of International Studies Programs at Liberal Arts Colleges and University in the Midwest: Characteristics and Correlates," 5(2)

(49) Asal, "Playing Games with International Relations," 6(3)

(50) Webber, "Independence Day as a Cosmopolitan Moment: Teaching International Relations," 6(3)

(51) Breuning et al.,“ Promise and Performance: An Evaluation of Journals in International Relations,“ 6(4)
(53) Shinko,“ Thinking, Doing and Writing International Relations Theory,“ 7(1)
(55) Boyer et al.,“ Teaching Theories of International Political Economy from the Pit: a Simple In-Class Simulation, ”7(1)
(59) Erskine,“ Teaching the Ethics of War: Applying Theory to‘ Hard Cases ’, ”7(2)
(61) Brown et al.,“ Consensus and Divergence in International Studies: Survey Evidence from 140 International Studies Curriculum Programs,“ 7(3)
(62) Van Belle,“ Dinosaurs and the Democratic Peace: Paleontological Lessons for Avoiding the Extinction of Theory in Political Science, “ 7(3)

付録 2

番号	タイプ	所属機関所在国	科目	対象学年	教育方法	教育内容	備考
1	A1：方法導入	米国	国際学一般	学部～院	ケース教材（事例に基づく教育）	国際貿易交渉（サンプル）	指南書・マニュアル
2	A1：方法導入	米国	国際関係論	学部	PBL（問題発見・解決型教育）	国際関係の諸側面	指南書・マニュアル
3	A1：方法導入	米国	国際学	学部	シミュレーション+ロールプレイ	グローバル化（麻薬取引）	指南書・マニュアル
4	A1：方法導入	米国	国際関係論	院	IT＋共同学習	政策決定・国際交渉	IT活用による共同学習
5	A1：方法導入 A3：特殊授業	米国	特別授業	学部	シミュレーション（模擬EU）	国際機構 （組織・政策決定過程）	米国・ヨーロッパ15大学で共同実施
6	A1：方法導入 A3：特殊授業	米国	政治学	学部（選抜）	特殊教材（Born to Rebel)の使用	調査研究方法（方法論）	ワシントンDCでのフィールドワークのための導入授業
7	B2：内容批判	カナダ	国際関係論	学部	FGM（女性性器切除）事例	国際関係論へのジェンダー論導入	教科書分析も含む
8	A1：方法導入	米国	国際学	学部	IT＋PBL+シミュレーション	対外政策・国際交渉	ICONS　活用事例・学習効果の測定
9	A1：方法導入	イギリス	国際政治経済	学部1年	シミュレーション（教室内活動）	グローバル化	離れ小島・シアトルの戦い
10	A1：方法導入	米国	特設授業	1年＋3年	映画	外交政策	2つの大学での夏期特設実験的授業
11	A3：特殊授業 B2：内容検討	イスラエル	国際コミュニケーション	非明示	通常	国際関係における文化の役割	イスラエルでの教育体験の紹介とそれに基づく考察
12	B2：内容検討	米国	国際政治経済	大学院	ケーススタディ	理論構築方法	定性分析の理論構築
13	A1：方法導入	米国	比較政治学	非明示	ケーススタディ	フロンティア研究	世界システム論に基づくケーススタディ
14	A1：方法導入	米国	国際関係論	学部	シミュレーション（模擬国連）	国際機構（組織・政策決定過程）	教室内・授業内で行う模擬国連
15	B2：内容批判	イギリス	国際関係論	学部	映画	国際関係理論	国際関係理論を批判的に検討
16	A2：内容伝授	米国・英国	国際学一般	学部	「アクティブ・ラーニング」等	グローバルな格差問題	ISP編集者によるシンポジウム
17	A1：方法導入	米国	非特定	学部	IT＋PBL	国際紛争に関する数量分析方法	ICB Libraryの活用
18	A1：方法導入	米国	国際関係論	学部	クロッケー	国際関係理論（構造的リアリズム）	「芝生の上のビリヤード」用いた導入
19	A1：方法導入	米国	国際関係論	社会人学生	アクティブ・ラーニング一般	国際関係論全般	社会人学生への教育:課題等の留意点
20	B2：内容検討	米国	国際学	学部	ディスカッション	授業での一人称呼称使用の問題	国際問題を全て「アメリカ化」する危険検討
21	A1：方法導入	米国	比較政策学	3,4年	特殊教材（UNDP『人間開発レポート』）活用	グローバルな格差問題	HDI, GEM, GDI概念も習得
22	A1：方法導入	米国	米外交史	学部	特殊教材（回想録）の活用	外交政策	national war college での20年の授業体験
23	A1：方法導入	米国	国際関係論	学部	特殊教材（コミック）活用	外交政策ほか	政治風刺コミックの活用例
24	A1：方法導入	米国	国際学	学部1年	シミュレーション	国際関係諸側面	国際人権条約締結のシミュレーション
25	A1：方法導入	イギリス	国際政治経済学	非特定	ケーススタディ	国際政治経済の理論的視座	教育事例としての世界経済フォーラム
26	A1：方法導入	米国	国際関係・ 個人研究	大学院	歴史的事例	研究方法	個人のリサーチにおいて、歴史的事例を扱う場合の留意点
27	A1：方法導入	米国	比較政治学	学部	シミュレーション	外国国内政治	模擬「ロシア連邦」
28	A3：特殊授業	米国	政治学・国際関係論	学部	学外体験学習（インターンシップ）	人権の国際化	アムネスティインターナショナル就業体験
29	A2：内容伝授	米国	国際関係論入門	学部1年	ケース教材	社会構成主義constructivism)	社会構成主義（constructivism）
30	A1：方法導入	米国	ゼミナール	大学院	IT+共同学習+ロールプレイング	グローバル化	米国と南アフリカの院生　IT活用による共同学習の実験
31	A2：内容伝授 A3：特殊授業	米国	仮想空間戦略と政治	士官候補生（学部レベル）	ディスカッション・少人数教育・ゲストスピーカー	仮想空間内の安全保障	米国陸軍士官学校での授業紹介:他の教育機関での適用提言
32	B1：内容調査	米国	国際関係論	学部	教科書分析（国際関係論）による国際法の国際関係論における位置づけの検討		
33	A1：方法導入	米国	比較政治・国際学	学部	映画	国家論	忠誠の対象としての国家の盛衰を映画で
34	B2：内容批判	カナダ	国際政治経済	学部～院	「歴史的アバンギャルド」手法	グローバル化	批判的教授法に基づく授業実践
35	C：調査研究	米国・トルコ	米外交論・国際政治	学部	トルコ人学生の米国へのイメージ調査		
36	A1：方法導入	米国	EU論	学部	シミュレーション（模擬EU）	国際機関	模擬EUの個別授業での実践報告
37	B1 内容調査	コロンビア	国際関係論	学部	ラテンアメリカにおける国際関係論の教育内容（シラバス）・学術誌調査		
38	A2：内容伝授	米国	国際関係論	学部	アクティブ・ラーニング一般	国際関係理論	抽象的なIR理論をわかりやすく教えるための技術紹介
39	A1：方法導入	米国	国際関係論	学部1年	ロール・プレイング	PKO・外交政策決定過程	ロールプレイングの授業実践紹介
40	B1：内容調査	米国	国際関係論	学部1年	オーガンスキーの教科書を基軸に、5冊のテキストの教科書分析		
41	A1：方法導入	米国	非特定	非特定	シミュレーション(模擬EU)	EUにおける投票制度	欧州理事会の特定多数決方式等
42	A1：方法導入	米国	国際関係論	学部1年	ディベート	対外政策と倫理	武力行使、人道的介入、対ICC政策など
43	B1：内容調査	米国	国際学	学部	中西部66大学の国際関係学専攻カリキュラム内容調査		
44	A1：方法導入	米国	国際関係論	学部	シミュレーション・ロールプレイング	グローバル化（チャド・パイプライン）	20人ゼミ～150人講義
45	A3：授業紹介	米国	特設授業	学部	実地研修・体験学習	国際連合	夏期集中・国連実地研修
46	A1：方法導入	米国	国際機構論	不明	シミュレーション	国連安保理での意志決定	危機的状況における「模擬安保理」
47	A1：方法導入	米国	国際関係論	学部上級	シミュレーション	国際交渉・紛争解決	ラオス・ベトナムでの導入事例
48	A1：方法導入	米国	国際学・国際問題	学部	IT(ウェブベース教材)	リサーチ指導・国際学全般	ウェブベースの教材研究
49	A2：内容伝授	米国	国際関係論	学部	シミュレーション+ゲーミング	国際関係理論	3つのシミュレーション・ゲーミング駆使
50	B2：内容検討	米国	国際関係論	学部入門	映画	国際関係理論	インディペンデンス・ディを使用・脱構築
51	B1:内容調査	米国	国際関係論	学会3誌(International Studies Quarterly, International Organization, World Politics)掲載論文の内容分析			
52	A1：方法導入	米国	アメリカ外交論	学部上級～院	IT(遠隔地教育）+ケーススタディ	ブッシュ政権外交	テレビ会議の活用
53	A1：方法導入	米国	現代国際政治	学部	体験型学習	国際関係理論	ディスカッション、WEBフォーラム、模擬会議
54	A1：方法導入 A3：特殊授業	米国	特設授業	学部	ロールプレイング	世界食糧問題	OXFAMのHunger Banquetへの参加
55	A1：方法導入	米国	国際政治経済	学部	特殊教材活用例	国際政治経済の理論的視座	カードゲーム(Pit)の活用
56	A1：方法導入	米国	国際関係論	学部	シミュレーション	2レベルゲーム（対外政策決定論）	50分授業の想定・クラスサイズ自由
57	A1：方法導入	米国	国際法	学部上級	PBL（模擬裁判）	戦争犯罪・国際人道法	授業期間の3分の1・履修者数18
58	A1：方法導入	米国	国際関係論	学部入門	ディベート	国際問題・国際関係一般	具体的なアドバイス
59	A2：内容伝授	イギリス	戦争と倫理	学部2,3年	講義+ディスカッション+ケース教材	戦争における倫理的問題とディレンマ	ヒロシマ・ナガサキ、イラク戦争、My Lai case, コソボ空爆、グアンタナモ
60	C：調査研究	レバノン	フロリダ大学607人学生を対象とした、アメリカ人学生の対「アラブ」イメージの調査				
61	B1：内容調査	米国	米国140大学の国際関係学（international studies）カリキュラムの調査				
62	B1:内容分析	米国	「民主的平和理論」を事例に、古生物学と政治学の理論比較				
63	A1：方法導入	米国	国際学	学部	シミュレーション	グローバル諸問題（環境、人口、武器拡散、女性）	global problems summit（模擬首脳会議）の有用性検証

ブラジルの中の日本、日本の中のブラジル
ー写真で見る100年、過去から未来へー

Japanese in Brazil, Brazilians in Japan: 100 years in Photos - From the Past to the Future

池上　重弘
文化政策学部国際文化学科
Shigehiro IKEGAMI
Department of International Culture, Faculty o f Cultural Policy and Management

イシカワ エウニセ アケミ
文化政策学部国際文化学科
Eunice Akemi ISHIKAWA
Department of International Culture, Faculty o f Cultural Policy and Management

立入　正之
文化政策学部芸術文化学科
Masayuki TACHIIRI
Department of Art Management, Faculty o f Cultural Policy and Management

古田　祐司
デザイン学部メディア造形学科
Yuji FURUTA
Department of Art and Science, Faculty of Design

本稿では、2008年10月に本学西ギャラリーにて開催された移民パネル写真展「ブラジルの中の日本、日本の中のブラジル～写真で見る100年、過去から未来へ～」について、その背景と目的、組織態勢、交流イベント、写真展の詳細等を報告する。写真展は（1）かつてブラジルに渡った日本人、（2）現在ブラジルで暮らす日系人、（3）現在日本で暮らすブラジル人の3つのセクションから構成された。これからの未来を担う子どもたちや彼らの夢にも焦点を当て、学生実行委員会と子どもたちとの交流イベントを実施した。その内容も展示の中で紹介された。

In this article we will report about a photo exhibition held in October 2008 at Shizuoka University of Art and Culture under the title of “Japanese in Brazil, Brazilians in Japan: 100 years in Photos - From the Past to the Future”. The exhibition displayed the past and present in three sections: "Japanese Immigrants to Brazil in the Past," "Nikkei People Now Living in Brazil," and "Brazilian People Now Living in Japan." We focused on children as the torchbearers of the future and their dreams. We hosted three events to facilitate interaction and deepen mutual understanding between the Japanese people and Nikkei Brazilian children who live in Hamamatsu.

1　はじめに

2008年10月3日（金）から13日（月）にかけての11日間、静岡文化芸術大学西ギャラリーにて移民パネル写真展「ブラジルの中の日本、日本の中のブラジル～写真で見る100年、過去から未来へ～」（以下、写真展と略）が開催された。静岡文化芸術大学が主催し、JICA中部と静岡新聞社・静岡放送が共催に加わったこのイベントは、日本とブラジルとの100年の交流を記念する外務省の日伯交流年事業（認定番号166番）としても認定された[1)]。この写真展の特色は、単に既存の写真を展示するだけでなく、学生たちの手作りによる交流イベントの成果を写真や動画で展示し、子どもたちに焦点をあてた未来志向の展示を意図した点にある。マスメディアでもその点は大きく注目され、学内・学外から1,309人の来場者があった。

本報告ではまず、写真展の背景と目的を明らかにした上で、実施の主体となった組織について紹介する。続いて、写真展に先駆けて実施された子どもたちとの交流イベントについて詳述したい。写真展については、展示内容の紹介とならんで、期間中に開催された関連イベントについても触れる。最後に本写真展の成果について述べたい。写真展の開催に向けたほぼ1年間の経緯をたどると同時に、写真展自体について実施時の写真資料も合わせて紹介し、日伯交流100年目の2008年にブラジル人市民が全国最多の浜松市にある大学で写真展を開催する意義について考察することが本報告の目的である。

2　写真展の開催に向けて

2-1　ブラジルへの移民の歴史[2)]

日本における移民の歴史は、1868年のハワイ移民に始まった。その後主に北米にて貴重な労働力として活躍したが、日露戦争後、日系移民の排斥が激化し北米への移民は制限せざるを得ない状況に陥った。一方1888年に奴隷制度が廃止されたブラジルでは、奴隷に代わる労働力としてイタリアやドイツなどヨーロッパからの移民が活躍した。しかし、劣悪な労働条件によりヨーロッパ各国からの移

民は停止され、ブラジル政府は労働力不足に頭を悩ませていた。そこに目を付けた皇国殖民会社はブラジル政府へ日本人移民の売り込みを行ってサンパウロ州政府と契約を結び、ブラジルへの農業移民の募集を開始した。

1908年、第1回移民船「笠戸丸」が日本人移民781人を乗せてブラジルへと旅立った。当時女性教師の月給が8円、巡査の月給が10円の時代に、ブラジルでコーヒーを採取すれば、一ヶ月で35円程度稼ぐことができるというのが、皇国殖民会社のうたい文句だった。しかし、1日で1人4俵は採れると言われたコーヒーは、実際には3人がかりで1俵にも満たない量しか採取することができなかった。日本人移民は、馬小屋同然の家、朝から晩までの重労働、減らない借金など、理想とは程遠い苦しい生活を余儀なくされた。なかには耐えきれずに農場から逃げ出す者もいたが、多くの移民は苦難を乗り越え、その後ブラジル農業の発展に大きく貢献した。また、都市に出て商業に従事する者も増え、こんにちでは日系人はブラジル社会の重要な構成員となっている。

2-2　日本におけるブラジル人の増加と現状

1980年代に入ると日本は急速な経済成長を遂げ、労働力不足に陥った。一方ブラジルでは景気が悪化し、失業率の上昇が深刻化していた。1990年に「出入国管理及び難民認定法」が改正施行されると、数多くのブラジル人が就労を目的として来日した［池上2001］。2007年12月末時点では日本全国で約31万人のブラジル人が暮らし、製造業が盛んな浜松市には全国最多である約2万人のブラジル人が生活していた。彼らは地域経済を支える労働力として不可欠な存在だったが、2008年9月のリーマンショックを皮切りとする世界同時不況の中で彼らを取り巻く状況は激変した。製造業分野の非正規労働者として働いていたブラジル人労働者の多くは職を失い、家族滞在の増加、滞在の長期化など、定住化が進展しつつあった彼らの生活基盤の根底が崩れ去ることになった［池上2009］。

本写真展が企画されたのは2007年秋であり、開催時の2008年10月時点ではブラジル人の雇用環境の一部悪化がささやかれていたが、こんにちのような深刻な事態が生じることを正確に予想していた者はごくわずかだったと思われる。しかし、経済危機後でもなお日本に留まることを選択したブラジル人も多く、以下に述べる本写真展の目的は変わらぬ重要性を持っていると言えよう。

2-3　写真展開催の背景と目的

写真展企画の発端は、2007年春にJICA浜松デスクに着任した大石真理子氏との会話だった。日伯交流100年の記念としてJICAが移民の歴史をたどる写真パネルセットを作成し貸与するという話（その時点では詳細は未定だった）をうかがい、その後浜松市も含め全国各地でパネルセットの展示が行われると聞き、そのパネルセットを活用しながらも浜松にある本学ならではの企画ができないかと考えた。研究メンバーでもあるイシカワ准教授と相談する中で、ブラジルへ渡った移民の歴史を単に紹介するだけでなく、日本人が案外知らない現在のブラジルにおける日系人社会の様子や、現在浜松で暮らすブラジル人の様子も知ってもらう機会にしようという構想が固まった。

写真展の目的は、ブラジル移民100周年にあたる2008年に、全国で最多のブラジル人市民が暮らす浜松市において、本学の特性を十分に活かし、かつ本学学生とブラジル人児童生徒との交流の機会となるような写真展示と関連イベントを通して、日本人市民とブラジル人市民の相互理解と相互交流を図ることであった。

2-4　写真展の組織態勢

上記の目的を実現すべく本学の学長特別研究として写真展を開催する上で留意した点がふたつある。ひとつは展示の質を高めるために専門の教員を含めたチームを構成すること、もうひとつは学生実行委員会を組織して学生たちの主体的企画を中心としたプロジェクトを実現することであった。

第一の点については、学長特別研究の申請時に4名の研究チームを構成できた。国際文化学科のイシカワ准教授は移民研究の観点から展示内容を監修し、ブラジル人コミュニティとの

調整役を担当した。美術館での勤務経験を持つ芸術文化学科の立入講師はアートマネージメントの観点から展示企画を監修した。映像デザインの専門家であるメディア造形学科の古田教授は、子どもたちとの交流イベントのVTR撮影と編集、子どもたちの顔写真のマルチディスプレイでの展示を監修した。研究代表者である国際文化学科の池上は研究及び展示企画・関連イベント実施を統括し、学外機関との調整を担当した。

第二の点については、本学の6つの学科からさまざまな学年の学生たちが参加し実行委員会を組織した。2007年11月に学生準備委員会が結成され、12月には学生たちから予備的な企画案が提出された。2008年3月末の学長特別研究正式採択を受け、4月下旬に川勝平太学長（当時）も出席して第1回学生実行委員会が開催された。以後、5月には新メンバーを補充して、80名規模の学生実行委員会が動き始めた。

学生実行委員会には全体を統括し教員メンバーとの調整役となる委員長と副委員長がおかれ、広報、コラボ、展示、説明パネル、イベントの5つの部門が作業を分担した。教員メンバーは大まかな方向を示した上で監修役を果たすように機能し、なるべく学生たちの自主性を尊重した。各部門はリーダーの指導のもとに自分たちの希望する活動について企画書を作成し、部門内・部門間で調整と合意形成を図った上で、予算管理についても留意しながら活動を展開した[3)]。

教員側は第1回学生実行委員会で2つの重要なコンセプトを提示した。「ユニバーサルデザイン」と「リスペクト」である。写真展には日本人のみならず日本語を解さない外国人が来場する可能性があるし、高齢者や子どもの来場もありえるため、パンフレット、パネル説明等での多言語表記、文字の大きさや見やすさへの配慮等、ユニバーサルデザインを意識した対応を求めた。また、移民の歴史やブラジルでの日系人の足跡、そして現在の日本における地域産業への貢献に対するリスペクト（敬意を払うこと）の気持ちを忘れずに取り組みよう求めた。

学生実行委員会のうち、各部門は以下のような活動を担当した[4)]。

（1）広報部門はポスターやチラシの作成、フリーペーパーや各種情報サイトへの広告依頼等、外部向けの広報活動を担当し、さらに市内企業に協賛を呼びかけパンフレットへの広告を依頼した。
（2）コラボ部門は、子どもたちとの交流イベントを企画・運営し、その際に展示用の写真や動画を撮影した。また、浜松市内の小学校や日本語補習教室、ブラジル人学校等で学ぶブラジル人の子どもたちの様子やブラジル人家族の暮らしについて写真撮影を担当した。
（3）展示部門は、メイン会場となる本学西ギャラリーおよびエントランスの展示と、浜松市のプレスタワー1階でのプレ展示を担当した。
（4）説明パネル部門は、展示に関わるキャプションやパネルおよびパンフレットの説明文を作成し、翻訳のアレンジを担当した。また、学生実行委員会メンバーの知識を深め、写真展に向けての意識向上を図るため、勉強会を企画し運営した[5)]。
（5）イベント部門は、関連イベントとして会期中の10月4日、日本人小学生を対象にブラジルや日系人について理解を深めるためのワークショップを開催した。また、会期中の土日には来場者にブラジルコーヒーを提供し、ブラジルの味覚への理解を深めてもらった。

3　子どもたちとの交流イベント

本写真展では日本社会で生きるブラジル人（とりわけ子どもたち）にも焦点を当て、未来を担う子どもたちや彼らが持つ夢をテーマに、浜松に住む日本人とブラジル人の子どもたちとの交流・相互理解を深める機会となる3つのイベントを開催した。ここでは、学生実行委員会コラボ部門によるオリジナル企画のイベントについて、学生たちが作成した企画書の内容をなるべく活かしながら、その概要と成果を紹介したい。

3-1　座談会

「ブラジル人大学生と高校生との座談会」は2008年7月19日（土）に静岡文化芸術大

学にて開催された。本学に在籍するブラジル人学生３名が自ら企画し、浜松市内の公立高校（全日制普通科）に通うブラジル人高校生８名と共に４時間ほど、進路や悩み、ブラジル人としてのアイデンティティ等、この国での生活や将来について語り合った（写真１、２）。座談会担当の３人のブラジル人大学生が作成した企画書には、この座談会をどのような場にしたいかが以下のように記されている。

① 日本で育っているものの、今後の進路に悩むブラジル人高校生を対象に、将来の夢や進路について考えるきっかけとなる場。

② 自分と似たような境遇に立つ、近い年齢のブラジル人高校生らと積極的に意見を交わし、またブラジル人の現役大学生と直接話をすることにより、より現実的・多面的に自らの将来を考えていく場。

③ 進路の話だけではなく、日本社会に求めることや家庭での問題、親との意見の相違点など、意見や悩みを共有しあい、より良い未来を考えるための飛躍の場。

その上で、「ブラジル人学生が枠にとらわれない独自の未来を、自らの手で切り開いていくことを最大の目的とする」と明記している。ブラジル人の子どもたちの大学進学の先例がまださほど多くない現状において、浜松で育ち地元の大学に進学した「先輩」の姿は、大学進学をリアルにイメージする上での貴重なロールモデルとなる。企画した本学のブラジル人大学生たち自身、そのことを明確に意識しており、後輩にあたる高校生たちとの座談会実現に向けて並々ならぬエネルギーを注いだ。

また、座談会の最後に、参加した高校生にインスタントカメラを渡した。これは日常生活を写真におさめてもらう企画であり、彼らが普段どのような生活を送っているかを視覚的に知ることで、写真展来場者にブラジル人学生の日常生活や大事にしているものについて理解してもらうための素材となることが期待された。

高校への資料送付とアポ取り、訪問は、ブラジル人大学生たちだけで行った。このよう

写真１　座談会の全体討論

写真３　巨大絵の中心部に手形をつける

写真２　座談会のグループ討論

写真４　巨大絵の周辺部に絵を描く

な学生たちの行動力は、高校側にも強い印象を与えた。メディアも関心を寄せ、座談会当日は新聞各紙の取材があった。また、静岡新聞は座談会の事前準備段階でも記事を掲載したし、NHK静岡放送局はほぼ半年間の丁寧な長期取材に基づきニュース番組の中で 11 分間を割いて紹介した[6)]。

3-2　巨大絵

2008年8月3日(日)、本学の夏のオープンキャンパスに合わせる形で、巨大絵「ドリームキャンバス〜ボアタージ！手をつなごう〜」が行われた。小学生を対象としたこのイベントでは、日本人の小学生、公立小学校に通うブラジル人の小学生、ブラジル人学校に通うブラジル人の小学生がそれぞれ 10 名ずつ、計 30 名が参加した。本学の出会いの広場に、シーツを縫い合わせて作った巨大な布を広げ、「手を取り合って共生していこう」という意味を込めて、絵の具を塗った手で絵を描いてもらうことを最大の主旨とした。当初の企画では、絵の具は赤・青・黄の三原色と白黒の 5 色のみを用意し、あとはそれぞれの色を手のひらに塗った子どもたちが友達と手と手を合わせて新しい色（たとえば、赤と白でピンク）を作り出すことにしていた。実際にはパレット等を使って色を作る場面も多かったが、「夢」をテーマに、モチーフの作成から背景の色付けまで、子どもたちの発想を学生たちがサポートして一枚の巨大絵を作成した（写真 3、4）。

また、布に絵を描き始める前のアイス・ブレーキングとして、白いTシャツに手形をつけるゲームを行った。子どもたちどうしの交流を深めるきっかけとして、また参加した仲間との出会いを形にして残すために、白色Tシャツを用意し、Tシャツにジャンケンゲームをしながら手形をつけていった（写真 5）。熱中症対策で用意した麦わら帽子に赤・青・黄・緑のいずれかの色のリボンを巻いて色別にチームを組み、手にチーム色の絵の具をつける。別のチームの人とジャンケンをして、勝ったら相手のTシャツに自分の手形をつける。制限時間内に対戦相手を次々に変え、手形の数の少ないチームが勝ちとなる。Tシャツは巨大絵を描いている間に乾燥させ、お土産として渡した。

写真 5　　Tシャツに絵の具で手形をつけるゲーム

ブラジル人の子どもたちの保護者が見学に来てくれたが、オープンキャンパス当日でもあったため、イシカワ准教授が学内を案内した。本学には浜松で育ったブラジル人学生も在籍しているため、日本の大学に関心を持つ保護者もおり、ブラジル人保護者に本学を知ってもらう機会にもなった。また、座談会に参加した高校生の一人が通訳を買って出てくれたし、別の高校生は一家四人で参加してくれた。こうして交流イベントを通じて本学の学生とブラジル人高校生とのつながりが強化された点も大きな収穫であった。

3-3　料理会

「ブラジル・日本　まぜまぜクッキングゥ〜♪」と題した料理会では、日本に住むブラジル人の子どもたちと食文化を通して交流し、彼らの生活の様子を知ると同時に、お互いの食文化について興味、関心、知識を深めることを目的とした。

2008年8月9日(土）に本学で行われた交流会には、浜松市内のブラジル人学校に通う中学生相当のブラジル人の子どもたち 13 名が参加した。ブラジル料理、日本料理について紹介し、その料理の意味やどんなときに食べるものなのか、よく食べるものか特別な料理なのか、おいしいのか、好きか嫌いか、家庭での食生活などについて意見を交わした。こうして翌週の料理会につながる信頼関係を築いた。

2008年8月16日(土）にクリエート浜松 4F クッキングルームで行われた料理会に

は、交流会に出席した子どもたちを中心に、ブラジル人学校に通う 10 名の参加があった。実行委員会の学生たちも加わって 6 グループに分かれ、それぞれのグループが日本料理とブラジル料理を 1 品ずつ作った。お互いの国の食文化に直接触れることで、相手の文化の理解だけでなく、自国の文化への理解にもつながった（写真 6）。

交流会実施時には言葉の壁への配慮に欠ける部分があり、参加した子どもたちと十分に交流できない面もあった。そのため、その後の 1 週間で実行委員会は対策を練り、料理会当日は十分な交流を図ることができた。第 1 回実行委員会で提示したユニバーサルデザインとリスペクトという 2 つの基本コンセプトの重要性を改めて痛感する機会となった。

4　写真展の詳細

4-1　展示内容

1908 年のブラジルへの移民開始から 2008 年までの 100 年について、「かつてブラジルに渡った日本人」、「現在ブラジルで暮らす日系人」、「現在日本で暮らすブラジル人」の三部構成でたどるよう展示物を配置した（写真 7）。その際、子どもたちにスポットを当てることにした。未来に向かって生きようとする彼らの姿は、100 年の時間の流れの中でも変わらない。写真や動画に登場する多くの子どもたちの姿を通して、日本人・ブラジル人が「共に生きていく」ことについて考えるきっかけになれば、との願いが込められている。3 つのセクションについて学生実行委員会が説明パネル用に作成した文章を以下に引用しよう。

（1）第 1 章　かつてブラジルに渡った日本人

今から 100 年前、ブラジルへと旅立っていった日本人たちは、誰もが大きな希望を胸に抱いていました。洒落た西洋風の生活や、一攫千金を夢見てブラジルの土を踏んだのです。しかし、そこで待っていたのは想像を絶する貧しい生活、朝から晩までの重労働など、期待とは正反対の厳しい現実。なかには農場から逃げ出す者もいた程でした。大人だけでなく子どもたちも労働に従事し、小さな体で必死に働きました。しかし、多くの人々は夢をあきらめず、自らの力で未来を切り開いたのです。子どもたちも、希望を捨てない大人たちの背中を追って、強く生き抜きました。写真の 1 枚 1 枚から、ブラジルに渡った日本人たちの覚悟や強い思いが感じられるのではないでしょうか。

（2）第 2 章　現在ブラジルで暮らす日系人

移民開始から 100 年。現在でもブラジルには約 150 万人の日系人が暮らしています。かつて農業でブラジルに貢献した日本人の子孫たちは、今ではビジネスマンや店主、料理人など様々な分野で活躍しています。こうして世代が深まっていく中、日本の場所すら知らない子供たちも増えつつあります。日本の伝統芸能や季節行事などについて、子どもたちは本来の意味を理解しているわけではないでしょうが、それを「日本の文化」とし

写真 6　料理会での本学学生（左）とブラジル人中学生（右）

写真 7　西ギャラリー内の展示内容

て捉えています。1 世が「祖国を忘れまい」と伝えた日本の心は、子供たちのアイデンティティの一部となり受け継がれているのです。「ブラジルの中の日本」に生きる彼らのいきいきとした表情に注目してください。

（3）第 3 章　現在日本で暮らすブラジル人

現在、浜松市には 2 万人のブラジル人が暮らしています。しかし、多くの場合、日本人とブラジル人の接点はほとんどなく、日本人のブラジル人に対するイメージは「単純労働者」という程度に止まっています。一口に「ブラジル人」といっても、その境遇はさまざまです。特に子どもたちのなかには、見た目がブラジル人でも日本語しか話せない、学校では日本語だけれど家ではポルトガル語で話す、というような複雑なアイデンティティを持つ子もいます。子どもにとっては言葉や文化などの壁は厚く、いじめなどの理由も加わって、学校に行っていない子どもが数多くいます。しかし一方で、問題に直面しながらも明るく前向きに生きている子どもたちもいます。そんな子どもたちを集めて行った交流イベントでは、国籍に関係なく、皆が楽しんでいました。言葉や文化は違っても、私たちは同じことで笑いあえるのです。本章では子どもたちに焦点を当て、彼らの夢や未来へのメッセージを発信します。日本で懸命に生きる子どもたち。そのキラキラと輝く姿を目にやきつけてください。

第 1 章では、JICA 横浜、海外移住資料館、ブラジル日本移民史料館、毎日新聞社から提供を受けた写真と物品を展示し、100年前に日本からブラジルに渡った日本人たちの様子を紹介した。移民の歴史について知識を持たない日本人にとってはもちろんのこと、来場したブラジル人学校の生徒たちにとってもルーツを知る重要な機会となった（写真 8、9）。

写真 8　かつての移民のパネルを見るブラジル人学校の生徒たち

写真 9　かつての移民のパネルを見る来場者

写真 10　現在ブラジルで生きる日系人 1

写真 11　現在ブラジルで生きる日系人 2

第２章では、現在ブラジルで生活する日系人たちの様子を紹介した（写真１０、１１）。ブラジルのサンパウロ新聞社に所属する４人の日本人記者が撮影した写真を主軸としながらも、特別研究費の資金助成を得て２００８年５月に渡伯した池上が撮影した写真も展示に加えた[7)]。

第３章の「現在日本で暮らすブラジル人」では、浜松市内の公立学校やブラジル人学校等で学ぶブラジル人の子どもたちの様子と、実行委員会が企画運営した交流イベントの様子を写真と動画で紹介した（写真１２）。地域経済を支える工場労働者としてのブラジル人の姿も日本人来場者に知ってもらいたい点だったが、未来に向けて学ぶ子どもたちの姿こそ知ってもらいたいという学生実行委員会の気持ちが反映された展示内容となっていた（写真１３）。「座談会」に参加したブラジル人高校

写真１２　座談会の様子を伝える動画と写真

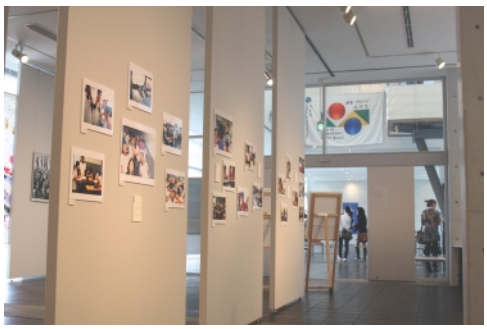


写真１３　日本で学ぶブラジル人の子どもたち

写真１４　座談会に参加したブラジル人高校生が撮影した日常の様子

写真１５　ギャラリー外面に向けて展示した巨大絵

写真１６　エントランス部分の様子

写真１７　マルチディスプレイ（左）とJICA コーナー（右）

生たちがインスタントカメラで撮影した日常生活の写真も、「これが私達です」とのタイトルのもと、コルクボードに貼った形で展示された（写真 14）。

以上が展示の中核部分だが、写真展ではギャラリー外面やエントランス部分も活用して展示内容のヴァリエーションを広げた。ギャラリー外面は本学西側の道路から視認性が高く、また循環まちバス「く・る・る」の停留所にも面している。外面内側に巨大絵をつり下げて展示し、イベントの開催をアピールした（写真 15）。エントランス部分では、TV モニターを 12 台並べたマルチディスプレイが目玉展示となった（写真 16）。パネルとして展示された写真に限らず、今回の写真展に関連した入手した写真から子どもたちの姿を切り出し、それが次々に映し出される展示となった（写真 17）。100 年に及ぶ時間の幅、日本とブラジルという地球の正反対に位置する空間の違いを乗り越えて映し出される子どもたちの顔が、「子どもたちの姿を通して共生を考える」という本写真展の中心的なコンセプトを象徴していた。

写真 18　関連する新聞記事

写真 19　巨大絵で使った T シャツの展示

マルチディスプレイの反対側には関連する新聞記事（写真 18）と、巨大絵の際に学生実行委員会が着用した T シャツを展示した（写真 19）。また、ギャラリー入口手前には、日本からの最初の移民船をサントス港で迎えた 5 人の日本人通訳の一人、平野運平氏（静岡県出身）の等身大写真と彼にまつわる写真を展示した。また、マルチディスプレイの隣には、共催の JICA のコーナーを設け、JICA の事業に関するパンフレットやチラシを配置した。

今回の展示では来場者が展示物の一部を作成できる参加型の展示も導入された。ギャラリー内の最後の部分に色画用紙を丸めて麦わら帽子をかぶせたポールを配置し、「未来に残したいもの」を紙片に書いて貼り付けてもらった。日本語の紙片はもちろん、ブラジル人来場者が記したポルトガル語の紙片も多数あった（写真 20）[8)]。

4-2　会期中の関連イベント

会期中の 10 月 4 日（土）、本学にて「わくワークショップ　ブラ知 ”る－ブラジルと日本のことをもっとよく知ろう－」と題したイベントが行われた。これは学生実行委員会のイベント部門の企画運営によるもので、JICA 中部の共催を得て、浜松市内の小学 5・6 年生の日本人児童 25 名を対象に開催された。このイベントは、日本人児童にかつてブラジルに渡った日本人移民や現在日本で暮らす日系ブラジル人のことを知ってもらい、さらには同じ日本社会で暮らす外国人を理解するきっかけをつくることをねらいとしていた。

写真 20　参加型展示「未来に残したいもの」（手前）と紙片記入コーナー（奥）

「グループワークによる回答選択式クイズ」、「母国を離れ外国で暮らす“外国人”の立場を考えるイメージ体験」等を通じて、自分の持つ先入観に疑問を抱き、自らが相手のことを知ろうとする努力の大切さに気づいてもらうことを意図した（写真21）。「座談会」に参加したブラジル人高校生が自らの体験を日本人小学生の前で話す場面もあり、日本人児童にとって知見を広げる機会であったと同時に、ブラジル人高校生にとっては、2つの文化にまたがる自分の存在をポジティブに捉え直す機会にもなった（写真22）。

また、実行委員会イベント部門は会期中の10月4日（土）、5日（日）、11日（土）、12日（日）の4日間、ブラジルコーヒーを来場者にサービスし、食を通じてブラジル文化に触れてもらう機会を提供した。

10月11日（土）には、静岡文化芸術大学（外国人調査ポルトガル語フォーラム実行委員会）他が主催する「ポルトガル語でのディベートー浜松市におけるブラジル人の生活」と題したポルトガル語でのシンポジウムが本学の中講義室にて開催された。2006年に浜松市で実施されたブラジル人対象の実態調査の結果を報告すると共に、ブラジル人の日本での生活についてポルトガル語で討議する機会であり、80名ほどのブラジル人が参加した（写真23）。事後、軽食を用意した懇親会を西ギャラリー前エントランスで開催したため、参加者のほとんどが写真展に足を運んだ（写真24）。このようにポルトガル語シンポジウムはブラジル人コミュニティと本学との接点を強化する上でも貴重な機会となった[9)]。

10月12日（日）には、本学講堂にて日伯移民100周年記念事業実行委員会、浜松市、静岡文化芸術大学が主催する「日本ブラジル移民100周年記念シンポジウム」が開催され、池上がシンポジウムのコーディネーターを務めた。このシンポジウムは実質的に浜松市国際課が主催するイベントだったが、来場者の多くが同時に写真展も見学した。

4-3　来場者アンケート

来場者1,309人に対し会場出口で無記名

写真21　ワークショップの説明に聞き入る小学生たち

写真23　ポルトガル語でのシンポジウム

写真22　ワークショップで自分の体験を語るブラジル人高校生（中央でマイクを持つ）

写真24　エントランスでの懇親会で意見交換するブラジル人参加者

アンケートへの回答を依頼したところ、553人（42.2%）が回答してくれた。学内開催だったため、本学学生の来場が多数を占めた。そのため女性では20歳代が大半を占めるが、男性では40歳代や60歳代の回答も目立つ。居住地では浜松市内が59%、県内が33%、県外が5%、その他が3%で、浜松市内ないし県内在住者が多かったが、県外からの来場者もあった。職業については社会人が42%でもっとも多く、次いで本学の学生が35%となっている。高校生6%、他学生3%、小学生1%、その他13%と続く。以下では、自由記述の中から典型的なものを5つ紹介したい。

☆ブラジルときくと、様々な固定観念が浮かんでいたのですが、ブラジル人の悩み、苦労を始めて知りました。日本で暮らす勝手な考えでものごとを決めつけず、もっと物事の本質をみていけたらと思いました。（10代女性、学生）

☆普段身近でブラジル人の子供たちの様子などを知る機会がなかった為、こんなことを考えているんだと、リアルな気持ちを知れてよかった。
（20代女性、社会人）

☆学生による座談会が非常に興味深く、有意義な企画だった。特に、子弟の教育、進路を巡る親子の意識の違いは、いままで全く知らなかった。若い日系ブラジル人たちの将来への思いや現在、不安をもっと聞いてみたい。その第一歩として今回の展示は素晴らしい！（30代男性、社会人）

☆これからの社会は（特に浜松）は、外国人と共存していかなくてはいけません。一番共存の国、ブラジルからは私達日本人は学ぶべきことが沢山あるはずです。少しでも浜松の日本人がブラジルに対して興味をもち、心を開いて欲しいと心から思います。
（40代男性、その他）

☆仕事を通じて日系ブラジル人の方々と接点ができ、ポルトガル語を勉強するようになりました。明るくパワフルなところは日本人も見習うべきだし、もっと理解を深め共生の道をさぐる必要があると思います。まだまだ「外国人」に対してバイアスがあるのが本当に本当に残念です。今日見たVTRを見せたい浜松の大人がいっぱいいます。いつかはそんなこと考えなくてもよい環境になるといいと思います。しなくちゃいけない！自分にもできることを少しずつやっていきたいです。
（40代女性、社会人）

5　むすび

今回の写真展が本学の独自性を十分に活かした内容になったことは、本稿の記述からも明らかだろう。この写真展は単に写真を展示する機会としてだけでなく、浜松という地理的条件を反映し、日本人とブラジル人との接点にもなった。学生実行委員会が企画運営した交流イベントや会期中のイベントはもちろんのこと、ポルトガル語でのシンポジウムや浜松市が実質的に主催した記念シンポジウムとの相乗効果も大きかった。

学生実行委員会が主体的に関わったため、文化政策学部の学生にとっては多文化共生やまちづくり、展示イベントの企画立案について深く学ぶ機会となったし、デザイン学部の学生にとっては写真や動画というメディアが社会的意味を持つことについて理解を深める機会となった。また、会期中の10月5日(日)は秋のオープンキャンパスだったため、受験生や保護者にも本学の研究・教育の成果を広報することにつながった。

展示パネルやパンフレットでは、日本語・ポルトガル語・英語の多言語対応をしたことから、ブラジル人学校の生徒たちをはじめ、ブラジル人の来場者も多数あった。

とりわけ、交流イベントの一環として行われた「座談会」は、直接的には本学に在籍する3名のブラジル人大学生と浜松市内の公立高校に在籍する8名のブラジル人高校生が4時間にわたって語り合う貴重な機会であったが、NHKニュースや新聞各紙で取り上げられた上、そのエッセンスを編集したDVDが展示の中で紹介され、大きな反響を呼び起こした。同じ背景ながら日本で大学進学を果たし

た先輩たちの姿は、彼らに続く世代にとってのロールモデルとなり、進学意欲を高めるための大きな動機となるはずである。

写真展終了後の2008年末にはブラジル人の雇用環境は激変し、「座談会」参加者の中にも保護者の失業により一時休学して家計を支える者も出てきた。ブラジル人をめぐる雇用情勢は依然として厳しいが、日本に留まることを決意した家族も少なくない。子どもたちの未来を見据えて開催された今回の写真展は好景気の時代のあだ花ではなく、厳しい時代だからこそ求められる日本人とブラジル人の相互理解に資するものであったと言えよう。

注

1) 本イベントについて、静岡県、静岡県教育委員会、浜松市、浜松市教育委員会の後援と、財団法人はましん地域振興財団の協賛を得た。さらに、浜松市による日伯移民100周年記念事業「浜松記念事業」の一環としても位置づけられ、市のホームページや記念事業パンフレットでも紹介された。
2) この部分は、藤崎［1997］、内山［2001］による。
3) 学生実行委員会は必要に応じて教員メンバーの指導を仰いだ。教員メンバーも数回の情報交換ミーティングを開催したし、実行委員会の全体会議はもちろん、実行委員長、副委員長、各部門リーダーが出席する企画会議にも参加した。
4) 学生実行委員会の活動については、実行委員長が作成したブログを通じて情報提供が図られた。http://suac.zero-city.com/ を参照。
5) 2007年1月、2008年6月、同7月の3回、学内で勉強会を実施した。また、2008年6月にはJICA浜松デスクの大石真理子氏によるワークショップを開催した。このワークショップは実行委員会の学生たちにとって、異文化理解の視野を広げる上で重要な機会となった。
6) 座談会についてはその全貌を文字化した報告書が作成されている［鏡田・池上　2009］。また、そのハイライト部分を編集した25分のDVDも視聴可能である。希望者は池上（ikegami@suac.ac.jp）までご連絡いただきたい。
7) 渡伯時に多大なご協力をいただいた在サンパウロの阿部義光氏と中村進氏に、この場を借りて深く御礼申し上げたい。
8) 展示物の詳細については、ポスターを作成した本学デザイン学部4年（当時）の桑田亜由子氏が作成した図録コンパクトディスクで閲覧できる。ただし、著作権の問題があるため、一般には公開していない。閲覧希望者は池上までご連絡いただきたい。
9) このシンポジウムの実質的主催者は池上とイシカワであった。シンポジウムの内容についてはイシカワ・池上［2009］を参照。

引用文献

池上重弘編. 2001.『ブラジル人と国際化する地域社会－居住・教育・医療－』明石書店。

池上重弘. 2009.「雇用環境悪化の中で外国人労働者が置かれている現状と今後に向けた課題」『自治体国際化フォーラム』235：2-4.

イシカワ エウニセ アケミ・池上重弘. 2009.『ポルトガル語でのディベート－浜松市におけるブラジル人の生活　報告書』静岡文化芸術大学.

内山勝男. 2001.『蒼氓の92年－ブラジル移民の記録』東京新聞出版局.

鏡田彩乃・池上重弘. 2009.『ブラジル人大学生と高校生との座談会－移民パネル写真展の関連イベントとして－』静岡文化芸術大学.

藤崎康夫. 1997.『日本人移民　2. ブラジル』日本図書センター.

フィリピン大学との学術交流報告

A Report on Academic Exchange with University of the Philippines

鈴木　元子
文化政策学部国際文化学科
Motoko SUZUKI
Department of International Culture, Faculty of Cultural Policy and Management

梅若　猶彦
文化政策学部芸術文化学科
Naohiko UMEWAKA
Department of Art Management, Faculty of Cultural Policy and Management

米屋　武文
文化政策学部文化政策学科
Takefumi YONEYA
Department of Regional Cultural Policy and Management, Faculty of Cultural Policy and Management

古田　祐司
デザイン学部メディア造形学科
Yuji FURUTA
Department of Art and Science, Faculty of Design

すでに3～4年間フィリピン大学と学術交流を行ってきた芸術文化学科教授梅猶彦の提案に基づき、大学対大学の学術交流ができないかを探った研究報告である。2008年春にはUPのウマリ准教授が本学に来学された。11月にはUPディリマン校のカオ学長はじめ計4名の代表団を本学にお迎えして、特別講義をしていただいた。2009年3月に、本学の国際交流委員を中心に計4名がフィリピン大学を視察訪問し、同様に特別講義をして、UPの教員及び学生たちにSUACについて紹介することができた。

This is a report on the academic exchange lectures between University of the Philippines and SUAC in the school year of 2008-09, at Prof. Umewaka's suggestion who was a former visiting professor in UP. In Spring 08 Dr. Umali visited SUAC and in Autumn Chancellor Cao with other three professors delivered the special lectures on our campus. In consideration of this, we, four professors of SUAC, visited UP Diliman to do presentations and meet with UP academic staffs as well as many interested students.

第1章　フィリピン大学ディリマン校の概要

1-1　フィリピン大学の概要

フィリピン大学（University of the Philippines）は、1908年（明治41年）に設立されたフィリピン国内唯一の国立大学である。2008年が創立百周年目にあたった。

フィリピン大学は、学生53,389名、教員（Faculty）3,649名を有するフィリピンにおける最高ランクの大学である。授業は英語で行われている。フィリピン各地に、7校（バギオ校、ディリマン校、マニラ校、ヴィサヤ校、ミンダナオ校、ロスバニョス校、オープン・ユニバーシティ）がある。

1-2　UPディリマン校の概要

UPディリマン校は、フィリピン各地にある7つのキャンパスの中で最大の旗艦キャンパスである。マニラ市の北東（車で40分～60分の距離）にある「ケソン・シティ」(Quezon City)にある。ディリマン校の面積は、493エーカーと、一つの町のような広さである。ホームページは、http://www.upd.edu.phである。

ディリマン校の学生数は27,165名で、教員（Faculty）は1,490名である。ケソン・シティに政府の省庁が多いのは、この町がかつてフィリピンの首都であったからであり、歴史的にいうと、1946年のフィリピン独立後、最初の大統領ケソン（Quezon）が造った町であるため、彼の名前が冠された。1976年にはケソンを含め、周辺町村が統合されて、「メトロ・マニラ」になり、首都の拡大と共に成長してきている。戦後の建て直し計画に沿って建造されたため、広々として、緑に溢れ、整然とした都市になっている。UPディリマン校はその象徴的な門で知られ、構内は広く、そこには宿泊施設やショッピングセンターまである。キャンパス内を移動するのに、構内を循環するイコット（回るという意味）やジプニー（ジープ）を利用することができる。

1-3　UPディリマン校のアカデミック・プログラム

建築学部、人文学部（College of Arts and Letters）、工学部、マス・コミュニケーション学部、音楽学部、自然科学部、社会科学・哲

学部、経済学部、経営学部など、本学と共通する教育内容も多い。(大学院も充実しているが、本報告書では省略することにする。)

1-4　UP ディリマン校の施設及びセンター

UPディリマン校の施設には、図書館、保健室、テニスコート、体育館、沈床庭園、プール、ビリヤード・ボーリング、ショッピングセンター、銀行、UP郵便局、コンピューター・センター、大学劇場、映画館などがある。

センターには、UP Creative Writing Institute (CWI), National Engineering Center (NEC), UP Film Institute, UP Vargas Museum, UP Law Center, Local Government Center (LGC), National Institute for Science and Mathematics Education Development (NISMED), Third World Studies Center (TWSC), University Center for Women's Studies (UCWS), UP Center for International Studies (CIS) などがある。

1-5　運営形態

フィリピン大学の最終決定機関は、" the U.P. Board of Regents " (UP 理事会) である。フィリピン大学の現在の総長はロマン総長 (President Emerlinda R. Roman) で、女性総長である。フィリピンでは女性の活躍がめざましく、どこに行っても重要なポストに男性同様、女性が就いているのを目の当たりにして励まされた。

ディリマン校の最高責任者 " Chancellor " (学長) は、Dr. Sergio S. Cao (セルヒョ・S・カオ博士) で、2005 年 2 月に UP 理事会により選出された。

1-6　日本における UP ディリマン校の連携先

UPディリマン校は日本の、(アルファベット順で記すと)、中央大学、同志社大学、広島大学、鹿児島大学、金沢大学、神戸大学、熊本大学、明治学院大学、長崎大学、名古屋大学、名古屋学院大学、日本大学、沖縄大学、大阪大学、立命館大学、東京外国語大学、静岡県立大学、筑波大学など多数の大学と積極的に交流をしている。

第 2 章　フィリピン大学ディリマン校と本学との学術交流

2-1　フィリピン大学の教授たちの SUAC 訪問

2008年11月4日～6日に、フィリピン大学ディリマン校の教員 4 名――カオ学長 (チャンセラー)、ザヤス教授、ウマリ准教授、ザフラ教授――が本学を訪問された。浜松市内や富士山周辺を視察後、最大の交流は、11 月 6 日に本学の大講義室で行われた「特別講義」<英語によるレクチャー>であった。要旨については、次の第 3 章に掲載する。

2-2　SUAC の教授たちのフィリピン大学訪問

11 月の SUAC での交流の返礼も兼ねて、2009年3月6日～11日に本学教員4名 (米屋、古田、梅若、鈴木) で、フィリピン大学ディリマン校を訪問した。キャンパス内の施設・設備を視察すると共に、主な教授陣たちと交流する恩恵に浴した。特に、3 月 9 日にはディリマン校の国際研究センター (CIS) にて「特別講義」を行った。

(左から、ザヤス教授、カオ学長、<鈴木>、ザフラ教授、ウマリ准教授。浜松にて。)

第 3 章　両大学の教授たちによる特別講義要旨

3-1　フィリピン大学ディリマン校の教授たちによる特別講義

3-1-1　Sergio S. Cao, Ph.D.（セルヒョ・カオ学長）、演題：University of the Philippines Diliman's Policy on Arts and Culture（「文化と芸術に関するフィリピン大学ディリマン校のポリシー」）

（要旨）

The University of the Philippines established in 1908 with 7 constituent universities located in 12 campuses spread out across the Philippine Islands is celebrating its Centennial Year. Our theme reflects our mission as the only national University-" One hundred years of Excellence, Leadership, and Service "!

One strategy to carry out our mission in UP Diliman, the main campus, is for a cooperative undertaking outside the country. We are visiting SUAC to explore what each of our universities can do together to advance our academic agenda based on certain philosophies that we share.

The flagship programs being pursued for culture and the arts are through: Linkages and Internationalization which expand opportunities for research, creative work collaborations and cultural exchange; Strengthening of Academic Programs which allow new concepts in research and creative works set in the context of the Philippine setting; Faculty Development and Incentives which recognize and give support to artists and scholars in creative endeavors based on merit; Student Affairs Support and Services which support students and their creative works through publications, exhibits, and performances; Service to the Community which detail major talents to other autonomous units of the University, to the private sector and to the communities to promote arts and culture.

3-1-2　Amparo Adelina C. Umali, III, Ph.D.（アンパロ・アデリナ・C. ウマリ准教授）、演題：The UP Diliman Noh Theatre Experience: Laying the Groundwork for Collaboration and Cultural Exchange（「フィリピン大学ディリマン校における『能』の体験：文化交流およびコラボレーションの礎を築く」）

（要旨）

The University of the Philippines, being the nation's leading institution which is devoted to higher education, research and community service requires a UP faculty member to have a three-fold duty and responsibility: to teach, to undertake research/creative work and to do extension service.UP Faculty members enjoy " academic freedom ", which gives us the right to teach the subject of our specialization and the freedom to choose the subject(s) for research and creative pursuits.

By virtue of this academic freedom and with the support, mainly, of the Office of the Chancellor and UPCIS, we were able to conceptualize cultural exchange and collaborative projects with the Noh Master, Naohiko Umewaka, Ph.D. This paper will narrate and discuss how cultural exchange and collaboration through the Noh Theatre experience enhanced our academic programs and creative initiatives while responding to our three-fold duty and responsibility as a UP Faculty.

3-1-3 Galileo S. Zafra, Ph.D.（ガリレオ・S・ザフラ 教授）、演題：Pushing for a National Language as Language of the Academe: The Philippine Experience（「自国語であるフィリピン語を教育現場や学界の言語として推進すること」）

（要旨）

The complexity of the language situation in the Philippines is rooted in two contexts. First, is the development of a multilingual situation which arose from the archipelagic condition of the country. Second, the different waves of colonialism that brought influences from foreign languages, particularly, Spanish and English.

Presently, the existing Constitution of 1987 contains the following language provisions, namely: Filipino is the national language; Filipino and English are the official languages; and Filipino is the language of instruction, and otherwise provided by law, English. This lecture will focus on the current language policy in the educational system.

Since 1974, the bilingual policy was implemented in the educational system. As implemented, English was used as the language in the teaching of English, Math, and Science; on the other hand, Filipino was designated as the medium in the teaching of Filipino and Social Studies. Recently, the government has been pushing for the strengthening of English as medium of instruction. This move was based on the assumption the English is the sole language of the information and communication technology which at present, is one of the major sources of employment in the country. Two concrete steps have been carried out: an executive order which increases the time allotment for the use of English as medium of instruction, and a proposed piece of legislation which provides for the use of English as the sole medium of instruction in the primary and secondary education.

The University of the Philippines as a bastion of nationalist education counters the direction taken by the government with regards to the medium of instruction and reinforces the validity of the language provision of the Constitution. In 1989, it adopted a language policy that provides for the use of Filipino as the primary language of the academe. This paper elaborates on some of the projects and strategies in pushing for the Filipino as the primary language of the academe. Among these are the following: publication of textbooks in different fields written in Filipino; publication of refereed journals; development of a comprehensive Filipino dictionary and other disciplinal glossaries; promotion of translation as a way of intellectualizing the Filipino language; networking with individuals and institutions to promote the use of Filipino in controlling domains of language use, and others.

3-1-4 Cynthia Neri Zayas, Ph.D.（シンシア・ネリ・ザヤス教授）、演題：Kanin & Ulam — the Taste of the Sea in the Philippine Cuisine（「カニンとウラム——フィリピン料理における海の幸」）

（要旨）

I have chosen to present this lecture in the hope that Japanese students will realize that Japanese home cooked meals have been taken over by fast food meals. In a globalized world food security will always be Japan's waterloo unless there is an initiative to grow once own foods, as in the kitchen garden of the past - hatake（畑）and or have a consumer voice in the production of their basic meals.

This brief presentation will introduce the idea of a Filipino meal. It will focus on the two basic items - kanin‘ cooked rice,’ or in other islands root crops, corn, banana, etc.; and ulam which may be defined as a side dish, viand. Though ulam may be coming from the sea or from the land, but it usually has the element of lasa‘ taste ’of the sea. Therefore, this presentation will argue

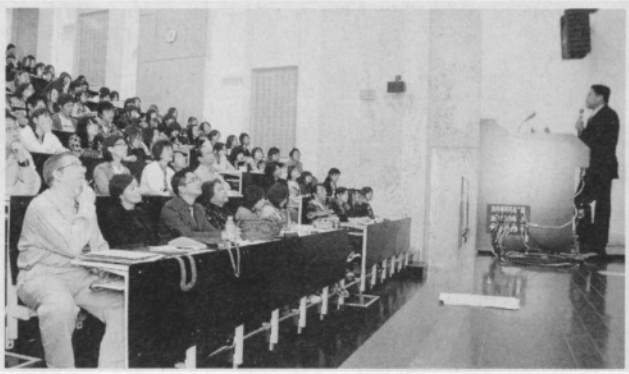
that the ideal kanin and ulam would always be rice, root crops, corn, banana + a taste of the sea.

3-2　静岡文化芸術大学の教授たちによる特別講義

3-2-1　鈴木元子、演題：To Create and Strengthen the Linkage between UP Diliman and SUAC

（「フィリピン大学ディリマン校とSUACとの連携」）

（鈴木元子、右から３人目）



「教育の国際連携必要」

フィリピン大学長が講義

静岡文芸大

浜松市中区の静岡文化芸術大は六日、フィリピン大ディリマン校のセルヒョ・カオ学長らを招き、言語や文化の国際交流などについて学ぶ特別講義を同校で開いた。

カオ学長らフィリピン大の関係……フィリピン大の学長を招いた特別講義＝浜松市中区の静岡文芸大

者四人が通訳を交えずに英語で講義し、フィリピンと日本との国際文化交流などについて話した。カオ学長は今年で創立百周年を迎えるフィリピン大の歴史やポリシーについて述べたほか、教育や研究における国際的な連携の重要性を指摘。その上で、「文芸大とどのようなコラボレーションができるか」などと文化交流の在り方について語った。

このほか、フィリピン大の学生に能楽を指導した静岡文芸大の梅若猶彦教授との体験談や、食文化、言語学について各分野専門の三人が自説を述べ、学生二百三十人が聴講した。

特別講義は両大学の有志による交流事業で、静岡文芸大からも教授四人が三月にフィリピン大を訪れて講義する予定。

（『静岡新聞』2008年11月8日）

（要旨）
Shizuoka University of Art and Culture situated almost in the center of Japan, was established by the local governments of Shizuoka Prefecture and Hamamatsu City, and regional industrial circles in 2000 with two faculties: Faculty of Cultural Policy and Management, and Faculty of Design.

In this presentation, I would like to introduce our University（SUAC), and to share with you a remarkable history of partnership between Filipinos and Japanese, and lastly to suggest some possibilities of our new link of academic exchanges soon.

3-2-2　米屋武文、演題：Development of Various Foods Made from Rice Powder
（「様々な米粉食品の開発」）

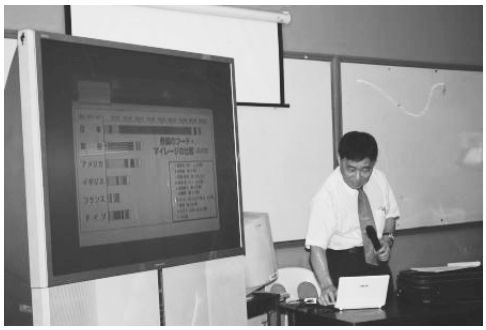
（要旨）
While the area of cultivated land is limited, the population of the world is rapidly increasing. The stock of the grain is gradually decreased so the supply-demand situation becomes quite tight.

In Japan, the food self-sufficiency rate calculated in its calorie is only 40 %, which is the lowest among the advanced countries. Rice is the sole agricultural product that can be self-supported in Japan. Therefore, in order to raise the self-sufficiency ratio for food, the development of new rice food such as bread, cake, and noodle out of rice powder is definitely an important policy in Japan.

As referring to the present food situation, I would like to introduce my research on the development of various foods made from rice-powder.

3-2-3　古田祐司、演題：The Age of Media Implosion
（「メディア・インプロージョンの時代」）

（要旨）
The surge of media innovation has been transformed our inner entity into the unknown aspect. The way how we think and feel has never been the same as it was in the previous century. September 11, 2001 we all noticed this inner change in front of TV monitors whispering, “ This is almost like a motion picture ”. What is real? Through the incessant media experience of a visual image like computer graphics, we seem to lose the answer of this question. More than 40 years ago a prominent Canadian media researcher, Marshall McLuhan defined media as extensions of a human body. He also predicted that human would have another brain and nerve system outside our body through computer technology. Now we need to recognize the drastic alteration in progress inside of us.


（米屋武文）

（古田祐司）

3-2-4　梅若猶彦、演題：The Intangible Art Form within the Intangible Cultural Network

（梅若猶彦）

（要旨）
This paper will explore the preservation and transformation of the Noh Theatre as an intangible heritage from the practitioner's side. It will try to explain how Noh Theatre practitioners have dealt with the idea of the intangible for the past 600 years.

The concept of "intangible art" was introduced by Shoyo TSUBOUCHI （1859-1935）in his book, *Shosetsu Shinzui*（*The Essence of Novels*）. Then,this concept was "institutionalized" by the Japanese government to preserve the endangered Japanese traditional craftsmanship. Through the establishment of the Protection of Cultural Property Act（1950）, pure artistry became the basis of recognition of the intangible art. In 2001, when UNESCO announced its pioneering list of the Masterpieces of the Oral and Intangible Heritage of Humanity, the Japanese Noh Theatre became one of the first to be recognized together with the Hudhud of the Ifugaos in the Philippines.

第４章　本学とフィリピン大学ディリマン校における学術交流に関する提言

4-1　フィリピンに交流協定大学を有する利点と意義

この点に関して、分かりやすいように、以下箇条書きにしてみたい。

（1）英語圏である（フィリピンでは英語が公用語なので英語が学べる）。
（2）日本から近い（中部国際空港から４時間で行ける。航空運賃も欧米に比べて安い）。
（3）物価が安い（物価は日本の約５分の１である）。
（4）フィリピン人は明るくフレンドリーで、おもてなしの心に溢れている。親日的、かつ年長者を大切にする国民性を有する（宗教は国民の９０％以上がキリスト教徒）。
（5）食べ物が日本と類似している（ごはんが主食で、肉・魚・野菜のおかず）。
（6）治安が良く、安心して暮らせる。どこにもガードマンがいる。犯罪発生率は低い。
（日本の犯罪発生率は2.24％、フィリピンの犯罪発生率は０.１０％< 中日新聞２００６年>）。
（7）医療水準が高い（万が一病気やけがをしても高い水準の医療を受けることができる）。
（8）気候（１年中暖かい南国）、豊かな自然（海・ビーチ）、豊富なフルーツ、人に恵まれ、国として将来性が有望である。
（9）東南アジア（アセアン）に本学の交流大学が未だない。
（10）フィリピン大学の教員の約３分の１が日本の大学院に留学した経験を持つ。日本語・日本文化に造詣が深いので、本学生を安心して派遣することができる。ＵＰに留学することで国際感覚を身につけることができる。
（11）ＵＰの学生たちも日本に関心が高く、ＳＵＡＣに交換留学を希望している。

4-2　交流の可能性

交流の可能性については、下記のような具体策が考えられる。

（1）交換留学（両大学でそれぞれ選抜された学生２名対２名を基本に、５年間くらいの期間でほぼ同数を目指す）。

（2）SUAC（学部・院）生の短期フィリピン文化研修、NPO・NGO研修、グローバル学研修。

（3）UPD（学部・院）生の短期日本語・日本文化研修。

（4）教育と研究における教員の交流（ワークショップ、シンポジウム等の共同主催）。

（5）政府基金や財団基金に申請することを含めた共同研究プロジェクト。

（6）音楽、演劇、食文化、メディア・アート。その他の分野での交流促進。

4-3　交流協定締結に向けてのスケジュールに関する提言

（1）今後、協定書の文案を検討し、2010年～2011年に学術交流協定を締結する。

（2）学生の交換留学は、双方とも2011年秋に第１期生を送ることを目指す。

（フィリピン大学ディリマン校の国際研究センター）

4-4　UP ディリマン校へ交換留学する際の情報、条件等についての提言（2009 年 4 月現在）

No.	項　目	内　容
1	費用負担区分	①　留学先に支払う必要がないもの 入学検定料、入学料、授業料、施設利用料及び実験実習費 ②　個人負担を要するもの パスポート及びビザの取得、渡航費、教科書代、教材費、住居費、食費、衣料費、個人的な費用、学生医療保険費等
2	留学期間及び時期	交流協定上、交換留学は1年以内となっている。 その中で、 「①前期の半年間」（本学の後期の最初10日間と重複） 「②前期から1年間」（OK） 「③後期の半年間」（OK） 「④後期から1年間」（本学の後期の最初10日間と重複）のいずれの場合であっても留学は可能である。 ◎2009-2010年度のフィリピン大学の学年暦は以下の通り。 ○前期（ファーストセメスター）：授業開始6月9日から10月8日まで ○後期（セカンドセメスター）：授業開始11月10日から3月23日まで
3	英語能力	フィリピン大学に留学するために、資格・条件としてTOEFL（またはTOEIC）のスコアを提出する必要はない。本学が学生を募集し、選抜を行う。本学で選抜された学生2名をフィリピン大学はよほどの難点が無い限り無条件に受け入れてくれる。 ただし、英語で講義を聞き、英語でレポートを書くことのできる英語力が必須となる。 （本学における選抜の仕方については別途定める。）
4	所属学部等	フィリピン大学における所属は、原則的にどの学部であっても可能。本学との交流に尽力されているウマリ准教授は、UPディリマン校のCIS（国際研究センター）に所属している。
5	履修制限	原則として、特定の科目や科目数等、履修に係る制限はないが、各自の英語能力と専門知識に基づき、履修する科目について、留学生担当の職員に相談する。
6	留学中の住居	留学中の住居に関しては、キャンパス内の留学生寮（International Center）<安いが古い>、少し離れたところにある新しい学生寮、近隣のアパート、ケソンシティでのホームスティ等が考えられる。選択は学生自身に任せたい。
7	諸経費の負担（概算） ↓ 1ペソ=2.1円で換算	①寮費（留学生寮インターナショナル・センターの場合） ・キッチン・T&B付き　3人1部屋 （1500ペソ=約3000円／1カ月） ②食費 物価は日本の約5分の1と考えてよい。食堂で1食100～300円くらいで食べることができる。 ③教材費・教科書代等 個人負担だが、金額の程度は学科により異なる。

この提言は、すでに国際交流委員会に報告書と共に提出済みである。

終わりに

最後に感想めいた言葉で締めくくることになるが、「国際交流」という言葉を最近良く耳にするようになった。今回、数人の教員が集まって、フィリピン大学を訪問した。まさに、「百聞は一見に如かず」であった。日本から近く、フィリピンと日本との交流史はもう500年にも渡る。実際、フィリピン人がたくさん日本に、静岡県に、浜松市に来て働いておられる。ところが、いかにフィリピンを知らなかったことか……。本学キャンパスで開催されたフィリピン大学の教授たちの特別講義を聞いた本学生たちも、「フィリピン文化について何も知らなかった」と率直な感想を述べている。「学術交流」がひとりから数人へ、そして数人から大学全体の動きへと、大きく展開していくことを切に願うものである。

（フィリピン大学の学生たちと。UP キャンパスにて。2009 年 3 月）

（フィリピン大学のロマン総長を囲んで。UP Executive House にて。2009 年 3 月）

〔この研究は、2008年度静岡文化芸術大学文化政策学部長特別研究費の助成により行われました。ここに掲載されている写真の多くはフィリピン大学のザヤス教授が撮影されたものです。心から謝意を表します。〕

ウェールズの昔話研究と国立歴史博物館

Folklore Studies in Wales and the National History Museum

美濃部　京子
文化政策学部国際文化学科

Kyoko MINOBE
Department of International Culture, Faculty of Cultural Policy and Management

ウェールズはイギリスの一地域でありながら、隣接するイングランドとは異なる文化的特徴を持っている。現在ではネイティブの話者は２０％近くにまで落ち込んでいるが、ケルト系のウェールズ語が話され、アングロサクソン系のイングランドとは異なる文化を現在にまで伝えている。
ウェールズの首都カーディフの郊外セント・ファガンズにある国立歴史博物館は、ウェールズの伝統的な人々の暮らしを後世に伝えるために様々な取り組みを行っている。ひとつは歴史的な建物から、伝統的な暮らしにかかわる道具や日用品、民芸品などの収集・整理・展示、そしてもうひとつはウェールズの失われつつある伝統文化をフィールドワークによって調査することである。そうして集められた民俗資料はアーカイブに整理・保存されている。
本稿では国立歴史博物館のコレクションおよびアーカイブの資料について触れながら、博物館がウェールズの民俗学、昔話研究に果たした役割について紹介する。

Wales is a peninsular part of the Great Britain, which sticks out westward into the Irish Sea, bordering England on the east. Welsh people have a Celtic origin and have a unique culture different from that of the English. Since its language is also quite different from English, the language itself may be an obstacle to study Welsh culture.
St Fagans National History Museum has been playing an important role in Welsh folklore studies since its foundation in 1948. Its collection includes historical buildings and such materials as agricultural tools, domestic utensils and costumes, musical instruments, folk crafts, various kinds of manuscripts, and books. The museum also has concentrated on field work around Wales and accumulated a huge amount of materials such as audio-visual recordings, films, photographs, and manuscripts, most of which are invaluable records of the old Welsh daily life that died out years ago. The museum has four kinds of archives to store and organize these collections from its field work: sound archives, manuscript archives, film archives and photographic archives.
The sound archives include material relating to Welsh oral tradition such as folk narratives, linguistics, folk songs, and folk beliefs. Robin Gwyndaf, a member of the museum staff, has recorded most of the folk tale materials in the sound archives. The Welsh folktales are divided mainly into three categories: magic and the belief in the supernatural, history and tradition, and humour.
St Fagans National History Museum indeed has unique characteristics and plays an important role in preserving traditional Welsh culture.

１．はじめに

このたび、ウェールズ大学との交流協定に当たって、学部長特別研究費によりウェールズを訪れる機会を得た。イギリスの口承文芸を研究していながら、ウェールズについては、その言語の特殊性もあり、今までなかなか手が出せないでいたが、これを機会にウェールズの口承文芸についても詳しく知りたいと思うようになった。

ウェールズは、イギリスのグレート・ブリテン島の西部に位置する地域で、１６世紀にイングランドに統合され、連合王国の一地域になっているが、民族的にも言語的にも隣接するイングランドとは全く違った特徴を持っている。イングランドでは、５世紀ごろに大陸から渡ってきたゲルマン系のアングロ・サクソン人の系統をひいて英語が話されているが、ウェールズは紀元前３世紀ごろに渡ってきたケルト系のブリトン人の系統をひき、ケルト語の一派であるウェールズ語が話されている。

１８世紀ごろまでは、ウェールズのほぼ全域でウェールズ語が話されていたというが、その後、産業革命にともない、ウェールズに鉱山や工場で働くために労働者がイギリスのほかの地域から押し寄せ、ウェールズ語は英語に主要言語の座を明け渡した。その後、２０世紀になって、英語によるラジオ・テレビ放送、映画などが広がり、英語の影響力はますます強いものになっていった。そして、２０世紀末までにはウェールズにおけるウェールズ語を話す人たちの割合は２０％以下にまで落ち込んだと言われている。

ウェールズでウェールズ語を話す人たちの割合が２０％以下であると言っても、それは首都カーディフを中心に、イングランドに隣接する東部の人口が集中する地域に英語を話

す人が多くいるためで、北部、西部の方では今でも半分以上の人がウェールズ語を話していると言われているし、ウェールズの言語や文化を守ろうとする取り組みも広く行われている。

今回はその中でもウェールズの国立博物館（the National Museum of Wales）のひとつである国立歴史博物館（St Fagans National History Museum）を中心に、ウェールズの文化を守る取り組みと昔話研究への貢献について述べることにする。

2．ウェールズ国立歴史博物館

ウェールズ国立歴史博物館は、カーディフ郊外のセント・ファガンズに1948年にオープンした。開設当時はウェールズ民俗博物館（Welsh Folk Museum）と呼ばれていたが、その後、1998年（？）にウェールズ生活博物館（Museum of Welsh Life）と名称が変わり、2006年に歴史博物館に変わって、現在に至っている。英語名称の方はこのように2度変えられているが、ウェールズ語の名称は開館以来ずっとウェールズ民俗博物館（Amgueddfa Werin Cymru）で変わっていないという。一般的には所在地の名前をとって「セント・ファガンズ（St Fagans）」と呼ばれることが多い。

博物館の最大の特色は屋外展示で、ウェールズ各地から様々な建物が集められ、敷地内に再建されている。その数は40以上にのぼり、先史時代のケルトの村や木の柱の輪（timber circle）を再現したものから、中世、近代の農家、商家の家屋や学校、郵便局まで、当時のウェールズの人々の実際の生活が再現されている。また、農場には生きた家畜が飼育されており、農作業の実演なども毎日行われている。室内展示の方は、衣服や農機具などの生活用品やラブ・スプーンなどの民芸品、楽器などこちらも人々の日々の暮らしを伝えるものが多く展示されている。また、博物館の敷地内では聖デービッドの日や五月祭、ハロウィーンなどの祝日やウェールズの伝統的な結婚式などの催し、子ども向けの体験イベントなど、実際に伝統的なウェールズの暮らしを体験できるような催しも定期的に行われている。

博物館では、こうした公に展示されたもの以外にも多くのコレクションを集めている。歴史博物館では特に中世から現代に至るウェールズの人々の毎日の暮らしを記録、保存するため、主に7つの部門で資料を収集、整理し、調査、研究を行っている。すなわち、

1．歴史的建造物
2．集団生活に関するコレクション
3．家庭、および衣類のコレクション
4．農業、工芸、交通に関するコレクション
5．文化的生活に関するコレクション
6．各種アーカイブ（資料保管所）
7．図書館

である。

1の歴史的建造物については、博物館の敷地内に移された40余りの建物のほか、建てられた場所にそのまま立っている二つの建物がある。建物だけでなく、室内の装飾品などの付属品も一緒に集められている。

2の集団生活に含まれるものは、商売や取引に関する品物で、金物屋や雑貨屋、その他の店の品物、あるいは、医学、法律、教会などに関する品物である。

3の家庭、衣類に関するコレクションは多岐にわたるが、室内の内装品や家具、流行の服から普段着、制服、職業にまつわる服装、アクセサリー、調理器具、酪農用品、家庭用品、食器、装飾品、家庭用布地などを含む。なかでも、時計や農家の家具、19世紀、20世紀の女性の服のコレクションを豊富に持っている。

4では、18世紀末から20世紀半ばの農業用の道具や乗り物、機械を広く集め、どれもウェールズの製造業に深くかかわるものである。工芸のコレクションは工業化途上のウェールズの田舎の労働生活を表すものであるが、木工や皮細工、金属加工品のほか、籠作りや製粉、焼き物、その他の田舎の仕事を表している。繊維関係の工芸品では、キルトや刺繍、レース作り、仕立て、織り機、毛織物などがある。

5の文化的生活に含まれるものは、音楽や言い伝え、習慣、文化、教育、社会施設、民衆文化、スポーツ、子どものおもちゃやゲームなどである。

6の各種アーカイブは、フィルムアーカイブ、手稿アーカイブ、写真アーカイブ、音声アーカイブの4つの分野がある。なかでも、視聴覚アーカイブにはおよそ11,000の録音資料があり、そのうち9000は博物館のフィールド調査による記録である。記録された口承の資料は民間説話、言語学、民間医療、伝統音楽、民間伝承と習慣、オーラル・ヒストリーなどがある。また470本のフィルムコレクションは博物館のスタッフによる歴史的な記録である。手稿アーカイブは33,000以上の文書からなり、ウェールズの民俗学に関するものである。それに加えて、250,000の写真があり、過去、現在の暮らしを写真で記録している。それぞれのアーカイブには専門のスタッフがおり、ひとつの資料について、何種類かのインデクスが作られ、カードの形でファイルされている（写真）。たとえば、昔話や伝説の資料については、それぞれの内容にしたがって分類するほか、被調査者（インフォーマント）別のカードも作られ、名前、出身地、住所、生年月日、職業、両親・祖父母の出身地、調査時の状況などについて記入し、ファイルされている。

7の図書館では、40,000冊以上の書籍と200タイトル以上の民俗学研究に関する雑誌を揃えている。おもに博物館のコレクションやウェールズの社会・文化史に関する学術的出版物については、特に参照できるようになっている。

博物館では、このようにさまざまなコレクションを収集・保存するだけではなく、独自の研究プロジェクトを立ち上げ、研究・調査が進められている。

3．博物館のフィールド調査

博物館による口頭伝承のフィールド調査が始まったのは1957年のことである。当時失われつつあったウェールズの民俗、特にウェールズ語の方言の保存が緊急の課題であったという。博物館は1960年にウェールズ南東部のグラモーガン州（Glamorgan）でエヴァン・ビーバン（Evan Bevan）の調査を行っているが、その記録が今では忘れられてしまったその地域の伝承の貴重な証言であると同時に、エヴァンはその地域で生まれながらにウェールズ語を話す最後の話者のひとりでもあった。

博物館のフィールド調査の最初の主なスタッフはヴィンセント・フィリップス（Vincent Phillips）であるが、口頭伝承に関して、伝承や人々の生活、昔の記憶などを聞き集めた。当時は電気の通っていない村もあり、車に自家製発電機を乗せて、ウェールズ各地を回ったという。やがて、彼の目的はウェールズの人々の生活のあらゆる要素を記録することになり、フィールド調査のインタビューだけでなく、公刊された音声資料や文書、写真なども利用した。また、民謡（フォークソング）の収集を始めたのもヴィンセント・フィリップスだった。おもに年配の人々に子どもの頃の歌を聞いて回り、できるだけ古い歌を完全な形で残そうとした。そうした歌い手のほとんどは人前で歌ったことがなかったような人たちだったが、そうして集められた資料がウェールズの民謡研究に大きく貢献している。

フィリップスの後を受けて、1963年から民謡調査に加わったのがデイヴィッド・ロイ・セイアー（David Roy Saer）である。ウェールズ各地で、歌だけでなく、歌い手がその歌を最初どのように聞いたかも合わせて記録し、民謡の歴史を研究するようになった。現在はウェールズの民俗音楽の専門家として多くの著作を出しており、2000年にはウェールズ民謡学会（Welsh Folk Song Society）の会長に選出された。

散文による民間説話のフィールド調査を担当したのが、ロビン・グインダフ（Robin Gwyndaf）である。1964年に博物館のスタッフに加わって以来40年以上にわたって、ウェールズの民間伝承の収集に携わった。3000人以上を調査し、そのうちおよそ450がテープに収められており、長さにするとおよそ700時間になる。内容のほとんどは昔話、民間伝承、民間信仰に関わるもので、およそ20000項目に亘る。グインダフは2008年に博物館を退官したが、現在はウェールズ語と英語で本を執筆中だそうで、40年以上にわたる調査の成果をまとめるとともに、ウェールズの昔話をあらゆる面から

包括的に概観するものになるだろう。

4．博物館のアーカイブ

上でも述べたように、博物館のアーカイブでは 4 種類の資料を扱っている。

中でもメインは音声アーカイブで、ほとんどがウェールズ語によるものである。主に地方の方言、伝統的な生活様式が姿を消しそうな地域のインフォーマントから録音したものが多いからであるが、英語による記録もかなり含まれている。古いものはオープン・リールのオーディオテープに記録されているが、新しいものは DVD が使われている。

もうひとつ音声アーカイブで特筆すべきなのはウェールズ民謡学会の主要メンバーであったレディー・ルース・ハーバート・ルイス（Lady Ruth Herbert Lewis）が 1910 年から 1913 年にかけてカーディガン州（Cardigan）で記録した民謡など音楽に関する資料である。それらはエジソンが 1877 年に発明した蓄音機の筒に録音されていた。1969 年、ルースの娘である　キティー・イドウォル・ジョーンズ（Kitty Idwal Jones）が博物館に寄贈したものである。当時それらの蝋性の筒に記録された音声は再生不可能だと見られていたが、最新技術のおかげで、最近になってそのかなりの部分が再生され、12 のトラックが CD に移されている。

音声アーカイブではこの蓄音機の筒のほか、9000以上のフィールドでの記録、BBCが記録したテープやディスク、1000 以上の市販のディスクを保管している。

フィルムアーカイブはおよそ 50 時間の 16mmフィルムを所有しているが、その多くは1970年代に急速に消えつつあった伝統的な生活様式を収めたもので、伝統的な農業技術や調理、工芸などが収められている。またテレビ局との共同で作られたフィルムもある。1960 年代のクリスマスの行事であるマリ・ルイド（Mari Lwyd）やウェールズのジプシーの木靴踊りフウェル・ウッド（Hywel Wood）の映像、ウェールズ語による最初のトーキー映画なども貴重な資料の一部である。

手稿アーカイブに納められているのは、農家の日記や職人の帳簿、年季奉公の契約書、家畜の管理簿、入札の手紙、学校の練習帳、在庫一覧表、ウェールズの音楽祭アイステズボドの歌、調査報告、バラッドなどの歌などである。その他 1930 年代に国立博物館が行ったウェールズの民俗文化に関するアンケートへの回答やウェールズ大学が行った農業語彙に関するアンケートの回答も所蔵している。

中でも最も重要な情報源になっているのが 1960年代に博物館の口頭伝承および方言部門がウェールズのある分野の専門知識を持つ人達に送った「回答集（Answer Books）」である。ここには昔ながらの農業のやり方、市、薬やその他の習慣、娯楽、伝統的食事、工芸、方言やことわざ、19 世紀末以降のウェールズの田舎の生活の記憶などが含まれている。

写真アーカイブにはおよそ 150000 のネガとプリント、15000 のスライドが保管されている。博物館が開設された 1948 年以降に撮りためられたウェールズの人々の暮らしの写真が当時のまま、あるいは複製された形で残されている。こうした写真は研究者や出版社、新聞、雑誌などに利用されている。

5．ウェールズの昔話

ウェールズの民間説話として一番知られているのは 11 世紀から 13 世紀にかけて作られた『マビノギオン（Mabinogion）』であるが、それ以降華々しい魔法昔話や昔の神々の話、英雄の話を数々語るような職業的な語り手は現れなかった。しかし、ウェールズにおいて語りの伝統は今でも生き続けており、現在の生活を映すような笑い話や短い逸話などに重きが置かれている。

ウェールズの昔話は 3 つのおもなカテゴリーに分類される。ひとつ目は魔法昔話および超自然的なものに対する信仰である。魔法昔話は現在では少なくなってしまったとはいえ、なお伝承自体は生き続けている。語られる類話はずいぶん短いものが多いが、そこには中世のマビノギオンの時代に特徴的だった魅力的な魔法の雰囲気を今も伝えるものであると言う。主人公に望みの物を与える魔法の指輪や、浦島太郎のようにこの世とは時間の流れの違う他界訪問について語るものなどはその一例である。ウェールズでは長い国際話

型の魔法昔話は今ではほとんどなくなってしまったが、短い地方伝説の中に、超自然的なものに対する信仰が数多くみられる。

二つ目は歴史的伝承である。中世の語り手や詩人は歴史や伝承、民族の系譜などを伝える役割を担っていたが、ウェールズにおいてもペンケルズ（pencerdd）と呼ばれる王侯貴族に仕える詩人がいた。こうした詩人たちが伝えていた物語（伝説）が今にも伝わっている。そのおもなものとしては、アーサー王やマーリンなどの昔の（偽）歴史的人物についての話、国民的英雄オウェン・グリンドゥル（Owain Glyndŵr）や海賊バルティ・デュー（Bartí Ddu）などの実在のウェールズの有名人についての話、よく知られた地方の人物についての話、地方の歴史的出来事についての話、地名や洞窟、泉、湖、橋などにまつわる話がある。

三つ目がユーモアを交えた話である。これは大きく４つにわけることができる。ひとつ目はほかの国にも似たような類話が見られるもので、型にはまった登場人物が出てくる笑い話である。これはウェールズ全域でよく知られている。二つ目は南ウェールズの炭坑夫や北ウェールズの石切り工などある特定の社会的集団の関心などを反映した話。三つ目は実在の地方の人物にまつわる話として語られるこっけいな話。４つ目は身近な人に起こったこっけいな話で、体験実話や伝聞実話に近い話である。橋の上で寝ていたら川に落ちてしまったなどという他愛もない話も多いが、聞いた人がそれをまた他の人に伝えることで伝承として広がっていく話である。

こうした話が、家庭内や村の中での伝承、仕事仲間の中での伝承、農繁期などに集まってきた季節労働者の間での伝承、地方の祭りや集まりなどの場における伝承、旅人や家畜の遊牧を行っていた人たちが伝える伝承、旅館や酒場での伝承によって、その姿を変えながら現在に伝わって残っている。残念ながら、現在では公の場で語る職業的な語り手はほとんど姿を消してしまい、伝承を伝える人たちも調査者が聞き出すことでようやく話す機会を持ったという人たちが多いようである。

博物館のウェブサイトには９人の語り手たちが語る 30 余りの話が音声ファイルとともに収められているが、そこには国際的に類話を持つ魔法昔話、地方伝説、超自然的な話（死の予兆、妖精や悪魔との取引など）、形式譚、子どものための話、笑い話、ウェールズの歴史や社会の生活の変化などを反映した話や伝承がみられる。これらの語り手も皆職業的な語り手ではなく、調査で訪れるまで人前で語った経験のなかった人も多かったと言う。しかし、このフィールド調査によって、忘れ去られようとしていた前世紀からの伝承を蘇らせ、後世に残すことが可能になった。

日本では『マビノギオン』については近年いくつかの翻訳も出版され、知られるようになってきているが、それ以外の現在に伝わる伝承については『ジプシー民話集』（J・サンプソン編）ぐらいしか紹介されていない。グインダフの『ウェールズの昔話』（*Welsh Folk Tales*）も一部は日本語に訳されているようであるが、まだまとまった形での翻訳紹介はないようである。今後、ウェールズの伝承について研究を進めるとともに、少しずつでも日本にその伝承について紹介できるように及ばずながら力を尽くせたらと考えている。

６．おわりに

この報告をまとめるにあたっては、平成20年・21年度の文化政策学部長特別研究費をいただき、2008年８月に現地を訪れる機会を得た。ウェールズ国立歴史博物館では、音声アーカイブの副資料管理担当者（assistant archivist）であるロウリ・ジェンキンズ（Lowri Jenkins）さんに博物館のアーカイブ内を案内していただき、実際の目録も見せていただいた。また、ほんの短い時間であったが、ロビン・グインダフ教授とも会うことができた。部屋の昔話のインデクスカードがファイルされたキャビネットの前で「私のライフワークです（My life work）」とうれしそうに話しておられた姿が今でも目に浮かぶ。また、ウェールズ大学トリニティ・カレッジのルイーズ・サイモン（Louise Saimon）さんには、博物館を訪れるにあたって、アポイントメントの電話連絡をしていただいた。あらためてお礼を申し上げたい。

音声アーカイブ。昔話のインフォーマント索引

Robin Gwyndaf 教授と Lowri Jenkins さん

テーマごとに分類してインデクスされたカード

民俗風習について絵と説明をつけてカードにしている

資料には個別の番号がつけられ、番号順にファイリングされている

写真はカードに貼られ、説明をつけて並べられている

参考文献

Gwyndaf, Robin. *Welsh Folk Tales*, National Museum of Wales, 1999.

------. Welsh Folk Culture: Publications [2008] 著作目録

------. ”Welsh Folk Tales ’[1985?] 講演での話を翻字したもの

Mabinogion. 『マビノギオン　ウェールズ中世英雄譚』シャーロット・ゲスト英訳　北村太郎邦訳　王国社　1988

『マビノギオン　中世ウェールズ幻想物語集』中野節子訳　JURA, 2000.

Owen, Elias. *Welsh Folk-Lore*.1887. [Rep. Dodo Press, n.d.]

St Fagans: National History Museum.“ St Fagans; National History Museum ” http://www.museumwales.ac.uk/en/stfagans/（公式ウェブサイト）

Sikes, Wirt. *British Goblins: Welsh Folk Lore, Fairy Mythology, Legends and Traditions*. Boston: James R. Osgood, 1881. [Rep.Kessinnger, n.d.]

Simpson, J. 『ジプシー民話集　ウェールズ地方』庄司麻水訳　社会思想社　1991。

Trevelyan, Marie. *Folk-Lore and Folk-Stories of Wales*. London, 1909.[Rep. EP Publishing, 1973]

身体文化とメディアの融合と創造
―グローバル化するスポーツ文化―

The Fusion and Creation of Physical Culture and Media -Globalization of sports culture-

溝口　紀子
文化政策学部国際文化学科
Noriko MIZOGUCHI
Department of International Culture, Faculty of Cultural Policy and Management

トーマス パルス
文化政策学部国際文化学科
Thomas PALS
Department of International Culture, Faculty of Cultural Policy and Management

和田　和美
デザイン学部メディア造形学科
Kazumi WADA
Department of Art and Science, Faculty of Design

マーク D. シーハン
文化政策学部国際文化学科
Mark D. SHEEHAN
Department of International Culture, Faculty of Cultural Policy and Management

本稿では平成２１年度静岡文化芸術大学学長特別研究「身体文化とメディアの融合と創造–グローバル化するスポーツ文化–」の成果として静岡文化芸術大学開学１０周年記念「メディア・スポーツシンポジウム」、さらに研究成果を一般市民や関係者に発表する目的として「SUAC 文化芸術セミナー」について報告する。特に「メディア・スポーツシンポジウムでは、日仏のメディア・スポーツ関係者と意見交換をすることで、日仏のメディアアイデンティティの相違点や共通点が明らかになった。また今後のわが国のメディア・スポーツのあり方やスポーツ・ジャーナリズムに新しい知見を得ることができた。

This paper reports on the 2009 Sports Media Symposium at Shizuoka University of Art and Culture (SUAC), and the Seminar of Cultures and Art which also took place at SUAC in 2009. This is a report on a special research grant received from the President of Shizuoka University of Art and Culture. These events allowed the researchers to clarify differences and learn of common features between the media identity of Japan and France through an exchange of opinions with Japanese and French journalists and others related to the field. The new findings from this project have been informative in illustrating ideal practices for sports media and sports journalists in Japan.

１．はじめに

平成２１年度静岡文化芸術大学学長特別研究「身体文化とメディアの融合と創造―グローバル化するスポーツ文化―」の成果として、平成２１年度８月１日（土）静岡文化芸術大学開学１０周年記念「メディア・スポーツシンポジウム」を開催し、さらに研究成果を一般市民や関係者に発表する目的としてSUAC文化芸術セミナーを平成21年9月20日、27日、10月4日に開催した。メディア・スポーツシンポジウムでは、日仏のスポーツジャーナリストを招き、「グローバル化するメディア・スポーツ」をテーマに、日仏のスポーツメディアの特徴やメディア・スポーツの将来について議論を交わした。これまで、フランスのメディア・スポーツに関する研究については、まったく行われておらず、本研究により新しい知見が得られると考えられる。加えて来年度の本学新カリキュラムから学科専門科目、多文化共生系の中で「スポーツ文化論」が開講されることに関連し、さらに教育基本法の改定により平成２４年度より中学校での武道必修化が始まることを受け、「グローバル化するスポーツ文化―武道を考えるー」をテーマに取り上げることで地域にスポーツ文化の理解を促していくことを目的として開催した。

本稿では、メディア・スポーツシンポジウム、およびSUAC公開セミナー「グローバル化するスポーツ文化―武道を考えるー」について報告する。

２．メディア・スポーツ研究の定義と課題

わが国におけるメディア・スポーツの研究では、橋本[橋本：２０００]は、明治から昭和戦前期までのスポーツとメディアの関係について、既に戦前より、メディアによるスポーツの商業主義的利用、国家によるスポーツの手段的利用などの問題が存在しており、メディアがスポーツの接取、定義、大衆化、高度化、また、日本人の身体スポーツ観に及ぼした影響は大きく、今後、スポーツとメディアの関係史に関する研究が様々な側面から進展し、スポーツとメディアの関係独自の時期区分が

構築されるであろうと報告している。また橋本[橋本:2004]は、メディア・スポーツを構造主義的に理解する研究手法について、「メディア・スポーツは、そのもとになっている文化の内部構造に規定され、与えられたテクストがそれなりの好ましい読み方を提供している」と述べている。さらに、メディア・スポーツ論として、早川は、「マス・メディアによって搬送されるスポーツの国際的呼称」、あるいは、「テレビ、ラジオ、新聞、雑誌、Web」などの多様なメディアからなるものととらえてその意味で「メディア・スポーツ」メディア・ミックスという性格をもつと定義している[早川：2006]。

そこで本稿ではメディア化されたスポーツ、すなわちメディアが主体になっているスポーツとして、メディア・スポーツを定義する。

3．文化・芸術研究センター 開学10周年記念　メディア・スポーツシンポジウム

グローバル化するスポーツ文化　ージャーナリズム、メディア・スポーツの将来とはー

日　時　2009年8月1日（土）
　　14時から17時まで

会　場　静岡文化芸術大学
　　南176大講義室及び講堂

参加者　一般市民、スポーツメディア関係者
　　約300人

■第1部　基調講演時間
　　14時から14時40分まで

題目「フランスにおけるメディア・スポーツ」
溝口紀子（静岡文化芸術大学国際文化学科准教授）

平成20年度文部科学省科学研究費若手研究B「フランスにおけるメディア・スポーツ文化に関する研究」研究課題番号：20700507の中間報告を行った。

◆休憩時間14時50分―15時10に、和田和美講師（メディア造形学科）を中心に作成したadobi「FLASH」による学生作品の映像を公開した。

■第2部　パネルディスカッション
　　15時から17時まで

コーディネーター：溝口紀子　パネリスト：カリム・ベンイスマイル氏（L'EQUIPE 格闘技編集長）、フロリアン・カロウアズ氏（EUROSPORTS サッカーディレクター）、西森大氏（NHKスポーツディレクター）、田村修一氏（日仏スポーツジャーナリスト）
※フランス語逐次通訳兼パネリスト、河合純一氏（シドニー、アテネパラリンピック競泳金メダリスト、北京パラリンピック競泳銀メダリスト、静岡県総合教育センター指導主事）

4．「グローバル化するスポーツ文化ージャーナリズム、メディア・スポーツの将来とはー」パネルディスカッション

4-1　日本とフランスにおけるメディアの特徴

溝口：まず日本メディアからみるフランスメディアの特徴などお話ください。

河合：日本ではその時のイベントや大会に関する質問というのが一般的ですが、海外メディアでは思いもよらない質問がくるんですね。例えば中国の記者から、「今日は中国では月餅を食べる日ですが、月餅を食べましたか？」と聞かれ、周りの選手と戸惑うことがありました。しかし、場の空気が緩んだりして、親近感を感じ新しい取材方法かとおもいました。

西森：日本選手は政治的な質問をされると避け、「自分たちは自分たちのサッカーをするだけです」とか、「自分は泳ぐだけです」としか答えてくれない。それに対してフランス選手をはじめ、ヨーロッパの選手は自分の意見をメディアに対して言うことができますね。

田村：選手自身の個性がはっきりしていて、ジャーナリストがした質問に対して、ジャーナリストにも意見を求めることがある。明確な意見や言葉をもつことを大切にしてそれに応えられることで対等な関係を築きあげているとおもいます。

溝口：フランスメディアからみる日本メディアの特徴、取材方法や選手の対応の違い等お話しください。

ベンイスマイル：まず驚いたのは、仕事の仕方で日本メディアのひとは常にグループでみんな一緒に仕事をしている。フランスはそれとはまったく逆なわけです。たしかに仕事が終わった後は、みんなで食事にいきますけど仕事の時は、お互いの競争であり、ある意味戦いであり、誰が最初にスクープをとるか、その為のポジション取りそういうのがすごく大事ですね。ひとつ例をあげると、アテネオリンピックの100m決勝のレースが終わった後、私と私の同僚のジャーナリストの二人で金メダルをとった選手のドーピングが終わるのを2時間トイレに隠れて待っていました。ようするに彼のインタビューを一番にするために待っていたのです。こんな風にぎりぎりのところで仕事をするわけですね。つまり誰にも得られない情報を読者に提供する。それはたとえテレビでも得られないような情報を自分たちの読者に提供するためにぎりぎりのところまでやる努力を常にしています。

溝口：フランスのメディアは、スクープに対してのモチベーションがものすごく高いですね。独占スクープをとりたいという思いが本当に強いとおもいます。

西森：逆に日本は横並びに意識が強いですね。いわゆる「特落ち」、自分のところだけコメントがうまく取れないことがそうですが、そういうことをすごく恐れますね。だから記者クラブに行って、取れなかった人は周りの記者にお願いして教えてもらいます。そうすると新聞とかにでてくるのが一緒になっちゃうんですよね。そういうところから独自性をだしていくか、ある程度みんな同じ土壌でやってそこから少しずつ違いを出していく感じがします。

カロウアウズ：4年前のキリンカップのフィンランド戦の中継で日本に来たのですが、その時日本のメディアに対してすこしおかしいと感じたことがありました。試合が終わってまずミックスゾーンというインタビューエリアがあってそこに行くんですが、私も一番よいポジションを確保しようと思い、試合が終わってすぐ行ったわけです。実際一番よいポジションを取り、私の後ろには日本人ジャーナリストがたくさんいました。そのインタビューは宮本選手に対して行ったのですが、そのとき奇妙だとおもったのは、ヨーロッパ、フランスの場合、選手と対等な関係で敬語は使わず話し、そこから深い話をどんどん展開していくのですが、日本選手は常に畏まっています。お互い本音が言えず、話が深まっていかない妙な感じがしました。

ベンイスマイル：西森さん、日本メディアが特落ちを恐れたり、新聞なりテレビなりが同じものを書いたり放送するのに、どうして一般の人は、朝日新聞を選んだり、NHKを選んで観たりするんですか。

西森：この質問は会場にいるみなさんに聞きたいですが、それでも書き手やディレクターの微妙なニュアンスなどはでるとおもうんですね、スポーツの好きな人はそういった微妙な違いを好んで選んでいるのではないかとおもいます。

写真1　メディア・スポーツシンポジウム
8月1日静岡文化芸術大学　講堂

河合：最近テレビを観ないのであまりいえませんが、スポーツは面白いものはみますね。今日も朝早く世界水泳をみてきました。また今日インターネットでチェックしたら先に世界水泳の結果が

出ていて、全米オープンや女子ゴルフに負けていると感じました。僕は朝の2時に起きて放送を楽しみにしていたのですが。平日は仕事をしていますので土日くらいはライブで観たいとおもっていたのに。やはりライブで観たかったです。

4-2　障害者スポーツの理解を促すためのメディアの役割

河合：障害者の映像の放映が少ないですね。

西森：そうですね。それは視聴率という問題がすごく影響しているとおもいます。今回北京五輪ですが、オリンピック招致の条件で、パラリンピックを同等に取り扱うことを前提にして開催されたのです。そのことによってパラリンピックにもお金が回ってくるようになったんです。これはすごくよかったのですが、同じくらい問題もあって、オリンピックの1分間の映像を流すのと、パラリンピックの映像の1分間も同じ値段になったのです。人気選手の多くはオリンピックの方ですから、1分間でどちらが視聴率がとれるかとなると・・・。だからオリンピックもパラリンピックも放映権が同じというのは問題があるとおもいます。まだあまり目に触れていない人たちに見てほしいために値段を安くするとか配慮しないとだめですね。日本のメディアだけが問題だとは思いませんが。

ベンイスマイル：南アフリカの陸上400mの義足の選手の話がありましたが、普通のオリンピックの参加が認められなかったことはどう思いますか？

河合：要するに、人間の脚だと、走ると筋肉疲労、筋肉痛がおきますが、義足だとつかれないのではないか。だから公平な競技にならないのではないかということですね。

ベンイスマイル：例えばそれが水泳の場合だと、水着で筋肉の部分のハンディキャップというか弱い部分を克服して勝てる可能性があるとは思いませんか？

河合：そうですね。今変わってきているのですが、ただこれもFINA（国際水泳連盟）の部分で、「水着の規定の中で改良してはならない」と明記しています。つまり水着を販売された状態からセルフで加工してはならないというルールがあるんです。そうなると片足のない人は、その部分をきることになりますがそれがルール違反ということになります。難しい規制があって、なかなか国際ルールを厳格化するというのも、FINAでやっていることを障害者スポーツでやっていこうとすると当然、多少の誤差があるというか、そこの部分を許さないからうまくいかないともいえます。国際レベルでうまくいってないから、国内のレベルでももっとうまくいかないんです。例えば練習場所ひとつとっても、ナショナルトレーニングセンターは文部科学省の管轄だから、厚生労働省の支援をうけているパラリンピックの選手には貸すことはできないと言われるんです。

溝口：オリンピックの選手が使用していない時期もですか？

河合：そうです。オリンピック期間中にも貸せないと言われました。それが残念ですね。

溝口：今後は、メディアを利用してパラリンピックの選手の理解を促す必要性がありますね。

西森：北京パラリンピックの視聴率ですが、日本は世界で第2位なんです。1位は中国。あまり放送していないはずの日本が2位という現状は、日本の人々は興味があるのに日本のテレビ局は映像を流していないということですね。

溝口：日本では長野パラリンピックをきっかけに障害者スポーツに興味関心を持つようになったとおもいます。

4-3 成功する取材の秘訣

溝口：では最後にジャーナリストとして成功する取材の秘訣を聞かせてください。

ベンイスマイル：特に秘訣ではありませんが、いつも取材のたびに、祖父や父から受

けうがれた言葉を心がけています。ジャーナリストは口を使う仕事だけども、口だけでなく五感をすべて使って取材するんだと。

カロウアウズ：私も秘訣があるわけではないですが、インタビューされる人とする人のバランスで成り立っているわけでそのバランスを崩さないことが大事な一方で、いくら事前に下調べしてインタビューに臨んでも予想もつかない驚きがあるときもあり、それ引き出せることができるときもある。そういった「サプライズ」を起こることも想定してバランスをとってインタビューすることを心がけています。例えばサッカーのリベリーにしろ、ジダンにしろ、誰でも彼らをしっているわけでそういう人から新しいもの、今まで誰も知らなかった部分を引き出せれるかが大事だと考えています。

西森：まずやはり取材の下調べを徹底しておこないます。たとえば外国の方の場合、ニュースの映像やその方がどう話をしたらくいついてきてくれるか。ということまで詳細に積み上げたうえで取材に臨んでいます。そのうえでなるべく相手に気持ち良く話してもらえるように心がけています。

溝口：みなさんは世界の第一線で世界一流の選手を相手に取材をしていますが、例えば、カリムさんの写真にあったように、ジダンと一流ホテルの一室でシャンパンを飲みながらインタビューをするというようなことは実は表面的なことで、そこに至るまでたった１時間のインタビューのために、もしくは１年前から準備をして、周囲のプレッシャを受けながら当日を迎えるのですね。華やかな舞台に見える一方で、そこに至るまで入念な取材準備をしていることがよくわかりました。本日は貴重なお話をいただきましてありがとうございました。

5．文化・芸術研究センター 開学10周年記念、グローバル化するスポーツ文化　特別公開セミナー報告 「武道を考える～柔道はJUDOに変わったのか？～」

日　時：2009年9月20日（日）、
　　9月27日（日）、10月4日（日）
　　14時から16時まで
会　場：静岡文化芸術大学 南280大講義室
参加者：約150人（3回の総動員数）、
以下講演内容の要約を報告する。

5-1、第1回　9月20日（日）「術から道へ」～女性柔道家からみる柔道史～
溝口紀子（静岡文化芸術大学国際文化学科准教授）

嘉納治五郎は、明治15年（1882年）に講道館柔道を創設した。それまであった古流柔術と「講道館柔道」は違い、柔道の合理性や科学性を説いて、旧来の柔術との相違、近代社会への適合性を強調した。嘉納が講道館柔道を創造した背景には、東京大学在学中に主任教授であったフェノロサより西洋哲学を学び、さらに英語が堪能で欧米スポーツや教育思想に造詣が深かったことがあげられる。特にスペンサーの『教育論』（1861）を用いて、「知育 intellectual education、徳育 moral education、体育 physical education」を柔道の基礎に置き、柔道の目的は勝負（武術）だけでなく、体育と修心においても見出した。また当時の西欧社会は、工業化が進むなかで衛生問題が大きな社会問題となり、身体の壮健さが重んじられ、スポーツをすることで健全な身体、精神を育成するという教育イデオロギーが涵養されていた時代でもあった[來田2004、33－41]。このように男性ヘゲモニー思想中心であった時代に、嘉納は女性の身体運動をいち早く取り組み、講道館女子部を設けて女性の柔道の振興を図る一方で、女性には試合を禁じ男性とは異なる昇段規定を設定するなど、初期から二重規範を存在させていた。そのため、欧米諸国が第一回世界選手権大会開催（1980）の気運を広げるまでの1970年代まで日本国内では女性の試合が禁止され日本

女子柔道の競技化が遅れることとなった。ちなみに現在もなお女性の講道館昇段規定は男性とは異なり、二重規範が継続されている。

翻って井上は、「一般的に「柔道」は、嘉納治五郎によって発明されたと思われていたが、「柔道」は「講道館柔道」だけではなく、日本古来、伝承されている柔術や海外の思想の複合的なものであり、「和魂洋才」として生まれた武道と考えられる。また武道は「近代の発明」であると同時に、エリック・ホブズボウムらのいう「伝統の発明」の一形態でもあるといえる。古くから伝統とされているものでも、実は特定の価値や規範を正当化するために比較的近年になってから作られたものが少なくはない」と指摘している。[井上,2004]。実際、これまでの武道論における「柔道」の歴史は、『大日本柔道史』[丸山,1936]を代表するように、「講道館柔道」の歴史が、柔道正史と位置付けられており、言い換えれば、講道館以外の柔道、柔術流派の歴史を含めた柔道のパラダイムについては論じられてこなかった。しかし最近になって、井上[2004]や藤堂[2007]、ブルッス[2002、2005]らによって、柔術から柔道への変容について再検証されるようになった。特に「柔道」という名称は嘉納が使用する以前に、直信流や起倒流ですでに「柔道」を用いていたことや、戦前、講道館柔道は柔術の一流派と明確に区別されていなかったと報告されている。

写真2は、ブルッスから発表されたもので、大日本武徳会柔術形選定委員の構成員とその名簿である。大日本武徳会（以下、武徳会）は、明治28年（1895）、初代総裁に小松宮彰仁親王、会長には渡辺千冬が就任し、軍人、内務官僚のほか、武術の大家を役員に、日本の武術の振興、教育、顕彰を目的とし財団法人として設立された。明治39年（1906）7月、武徳会会長の大浦子爵から嘉納に対して、これから柔道や剣道を学ぼうと志す人に対し、流派を拘泥しないで行える「形」作って欲しいという要望があり、武徳会本部にて嘉納治五郎が委員長となり、柔術10流派・師範20名によって「大日本武徳会柔術形制定委員会」が編成され1週間で「大日本武徳会柔術形」が制定された［工藤、1975：118-119]。すなわち講道館柔道は、武徳会の組織を構成する柔術一流派であった。さらに大日本柔道史[丸山、1936：196-197]、川石[吉田、2004：34-35]、道上[真神、2003]によると、戦前には、講道館だけでなく武徳会も段位を発行しており、柔道界には2大組織が構成されていたようである。しかし、武徳会は昭和17年（1942）から武道関係組織を統制する政府の外郭団体となり、戦後、昭和21年（1946）GHQ指令により解散し、それ以降、柔道史において武徳会の存在感は影を潜めている。そこで、本講義では、特に戦前までの武徳会や海外の女子柔術、女子柔道を取り上げて、歴史社会学の視点から女子柔道史を再検証した。

小崎甲子（写真3）は、明治41年（1908）、美術商「清源堂」主人小崎天大の次女として、名古屋市伊勢町（現・丸の内）に生まれる。金

写真2　大日本武徳会柔術形制定委員
出典：Brousse, M. (2002), Le Judo, son histoire, ses success. Minerva

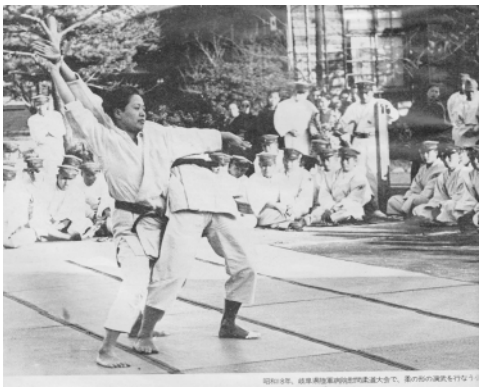


写真3．1942（昭和18）小崎甲子　岐阜陸軍病院慰問柔道大会で柔の形を演武
出典：近代柔道 1990　2月号

城学院高等女子部を卒業後、昭和２年（1927）、19歳の時に武徳会愛知支部に入門し柔道を始める。その後、本格的に柔道を始めるため21歳（昭和４年）の時に、大阪府柔道連盟会長だった戸張滝三郎八段の内弟子となり、柔道に専念する。小崎は、当時の講道館では女性は試合が禁止されていたため、講道館ではなく武徳会に所属し、そして試合で男性に勝つことによって、女性の可能性を実証し、既存の価値観や段位制度を変えていくことになる。そして昭和７年（1932）に武徳会大阪支部にて昇段試合を行い、男性３人を破り武徳会初段に昇段し女性初の有段者（黒帯）となった。また小崎は昭和１０年（1935）、女性で初めて大阪天王寺に「清源館道場」開設し、1939（昭和14年）女性初の「柔道錬士」となった。そして小崎の昇段によって、講道館女子の昇段経緯や前述した乗富政子の飛び級二段の真相が明白になってくる。つまり小崎が武徳会で昇段したことによって、講道館も女子部に対して、昇段の道を開かざるを得ない状況になったのではないだろうか。実際、小崎が武徳会で昇段した翌年の昭和８年に講道館は、小崎に初段を授与し、昭和９年森川、芥川らには女子初段、乗富にはいきなり二段に昇段させている。当時、講道館女子部では試合が禁止されているため昇段試合の機会がなかったのに対し、小崎は武徳会の昇段試合で男性三人に勝って昇段。そこで、講道館女子部は昇段に出遅れために、創設期より斯道発展に功績があった女性たちに配慮し、昇段試合ではなく師範の推薦（評価）をもって昇段させたと考えられる。実際に嘉納は、「閲歴・功労その他の事由により、講道館師範が適当と認めたるものは、女子柔道有段者として待遇することあるべし、その待遇を受けくるものを女子柔道有段者待遇と称す」として明文化し、昭和11（1936）２月22日、嘉納の長女綿貫範子、嘉納の五女鷹崎篤子、そして私立桜蔭女学校の校長の宮川久子ら６人に女子柔道有段者待遇として昇段させていた。嘉納治五郎によって女子柔道の試合は禁止されていたと思われていたが、昭和21年（1946）女性参政権を得られる以前の昭和７年（1932）、武徳会にて小崎甲子が男性を相手に試合が行われ、昇段していたことが明らかになった。また海外において、柔術が「護身術」として普及され女性参政権運動の暴行に対する「護身術」として受け入れられた経緯があきらかになった。近代の女性にとって柔術や柔道は「身体運動」としての活動を促しただけでなく、「護身術」として男性を打ち倒す「術」をみにつけることによって、男性ヘゲモノニーの社会制度を変えていく勇気と自信を与えたのではないかと考える。

5-1、第２回　９月27日（日）「柔道と異種格闘技」～武道としての柔道の拡がり～

松原隆一郎（東京大学大学院総合文化研究科教授）

Ⅰ柔道とは何か：嘉納治五郎の視点

・「知育」「徳育」「体育」

・しかし、嘉納には、実戦武術（護身術）として役立つ武道という視点もあった。

Cf.、寝技を延々と続けると、仲間がやってきて踏まれたりするので立ち技を主体とすることが望ましい。→「武術」「修心」「競技」の三面と読み替えてはどうか。三面あっての「武道」としての柔道

・「競技」：スポーツとしての柔道。ルールによって合法か違法かが決まり、その中ではいかなる技術も許容される（はず）。体育でもある。勝ち負けはゲーム上のものである。

・「修心」：社会に「役立つ」人材の育成。コミュニケーション・ツールとしての武道

・「武術」：護身に役立つ技術。競技のルールの外（柔道競技にとっては「反則」）も考慮し、それにも対処できる技術としての柔道。異種格闘技戦をも辞さない。

・嘉納の言う柔道は、これら三面が均衡するものではないか。

Ⅱ.「競技」の考え方

・「暴力」とは、不定形であり不確実なもの。それを感知するには、競技による接近が必要。

・競技でルールを設定するとその中で新技術が開発され、技は進化する。

・技の全容を知るには、競技化を通じた進化が必要。競技を欠いた流派は、進化によって暴力の全容に接近することができない。

・しかし一方で、ルールは暴力の一部を切り取ったものでしかないから、競技としての発

展は、かえって暴力を見えなくするところがある。
ex．ボクシングは「パンチ」に限定することでパンチの多彩さを導いた。しかし現実の暴力では、パンチ vs パンチになるのは、（双方がパンチ得意との）合意があった場合だけ。
　蹴りや組み技、寝技に終始してしまう可能性も大いにある。

III．様々な言葉：厳密な定義を

・競技における「スタイル」：「日本流」は国際ルールが許容するひとつのスタイルにすぎない。組み方、技等、合法でありながら異なるスタイルは無数にある。
ex．「ロシア流」：身体能力の違い、民族格闘技との混交
・「正しい柔道」：右襟左袖もしくは左襟右袖を持ち、ズボンをつかまないスタイル。講道館関係者は、戦後日本の一時代のスタイルをこう呼んでいるが、フランス等ではスタイルのひとつとしかとらえられていない。
cf．武術的には、この組み方は大変危険である。つまり「正しい柔道」は、武道的ではない。頭突き、パンチをもっとも食いやすい構えである。とくに小柄な人には、護身的には片襟片袖を勧める。
・「一本を取る柔道」：興業プロとして観客の要望に応えるためにKOを狙うK－1同様、競技での勝敗を超えた要請が持ち込まれる柔道。アマチュア競技としては、ポイント勝利も一本勝利も差はないはず。美意識もしくは興業（オリンピック）上の価値観が介在
cf．賭の対象であるムエタイでは、安全に勝つために、ポイント差がつくと5ラウンドには流すことが多い。対照的に地上波で放映されるK－1では、主催者がKOするように強く要請している（KOできない選手は次回から使わない）
・「プロ」：興業の試合に出場する場合と、スポンサーから所得が保障される場合とがあるが、両者は別の概念である。柔道はアマチュアスポーツとされるが、五輪には視聴率や興業収入を目的とする部分が多く、また所得保障（推薦入学・就職）のある競技という意味では、たんなるテレビ放映なしの興業プロよりも双方の意味でよほど「プロ的」である。
・どのようなルールを設定するか：「修心」と「武術」の観点から望ましいものを選ぶのが嘉納の視点であろう。
cf．「タックル（朽ち木倒し、双手刈り）はレスリング的だから禁止する」というのは、武術的な意味では退化。「レスリングには勝てない」と公言しているようなもの。

IV．柔道と異種格闘技

1．国際ルールは様々なスタイルを許容している。
・各国で様々な組み方が開発されている。
2．七大戦について：「柔道」を名乗る別ルール
・団体勝ち抜き戦、一本取り・引き込みあり、専守防衛あり、ピストルグリップ、ズボンつかみ可、寝技時間無制限＊必然性
3．「柔道」に名乗らない着衣格闘技
・ブラジリアン柔術、サンボ、チタオバ
4．異種格闘技戦的な戦い方
・フラビオ・カント（ブラジリアン柔術黒帯）vs 加藤博剛戦

V．問題

・日本柔道は、ひとつだけのスタイル（「正しい柔道」）に固執してはならない
→「石井慧」を排除してはならない。
・国際ルールの変更は、「危険性」以外では、「修心」「武術」の観点で適正なものとするに止めるべきである
・動機付けの面からも、多様なルールの柔道が共存してよい
・「社交としての武道」という考え方→礼法の必要性

5-3、第3回　10月4日（日）「柔道の国際化～フランスのJUDO文化とはなにか～」～

Michel BROUSSE ミシェル・ブルッス（フランス　ボルドー大学教授）

逐次通訳　宗　龍二（国際文化学科3年）
松原由樹（国際文化学科3年）
逐次通訳指導　トーマス パルス、
マーク D. シーハン、溝口紀子（国際文化学科教員）

Cette conférence a pour objectif démontrer que le développement du judo dans le monde est étroitement lié à la perception que les Occidentaux ont du Japon, de sa culture et de

la force de ses armées. Alors qu'au Japon, le judo de Kano se différencie immédiatement du jujutsu, en Occident les deux activités sont souvent confondues. Elles ne se séparent qu'avec l'orientation sportive du judo. Grâce au sport, le judo acquiert une dimension internationale et devient accessible à toux, sans distinction de classe sociale, d'âge ou de sexe.

L'exemple du judo français montre que la réussite de l'implantation passe par l'occidentalisation de l'enseignement, c'est-à-dire par l'adaptation du judo à la société qui l'accueille.

L'introduction rappelle les grandes époques qui jalonnent l'histoire du judo. Aujourd'hui 8 à 9 millions de personnes pratiquent le judo dans le monde. Il convient rapidement d'indiquer les caractéristiques des arts martiaux japonais, de la période de Meiji et du changement de société qu'elle implique, puis de l'exportation de l'art japonais du combat dans le monde avant de présenter la transformation du judo en sport olympique et de conclure sur l'exemple du judo français.

Le contexte culturel, social et politique est un facteur important de compréhension de l'évolution du judo dans le monde. En particulier, la découverte de la culture japonaise a eu des répercussions très fortes sur la conception artistique occidentale. A l'issue de la guerre entre le Japon et la Russie, en 1905, le monde entier s'est intéressé aux techniques d'entraînement -le jujutsu- et à l'esprit guerrier -bushido- du soldat japonais. Le jujutsu est ainsi apparu comme l'arme qui a permis la victoire du Japon sur la Russie.

De nombreux experts ont enseigné l'art de combattre dans la police et dans l'armée de nombreux pays. Ils ont ainsi diffusé le jujutsu et le judo. De la même manière, les communautés d'immigrés japonais, aux USA, au Brésil mais aussi dans d'autres pays ont utilisé le judo dans l'éducation des enfants et la préservation des traditions.

Cependant, les actions des experts ne suffisent pas à expliquer la construction de la mémoire collective. Il est nécessaire d'analyser plus précisément le rôle de la presse, de la littérature, du cinname, de la bande dessinée, des dessins animés pour mieux comprendre la diffusion de l'image du judo dans le monde. Cette analyse met en évidence les représentations sociales du judo comme une technique de défense qui symbolise la sagesse orientale et rend le titulaire de la ceinture noire invincible.

写真 4　ボルドー大学ブルッス教授の講演の様子

Au Japon, Kano a établi une rupture entre le jujutsu et le judo, en Occident, c'est d'une part, la continuité entre jujutsu et judo, et d'autre part la spiritualité orientale, qui ont assuré le succès de la méthode de Kano. Jusqu'au années 1960, le judo était considéré comme une activité réservée à une certaine élite intellectuelle et sociale.

Le judo sportif est apparu en Allemagne dès les années 1920. Si les Jeux de Tokyo avait eu lieu en 1940, le judo aurait été un sport olympique mais il faudra attendre 1964 pour que cette reconnaissance soit acquise. La victoire d'Anton Geesink lors de ce championnat a symbolisé la dimension internationale du judo. En devenant sport, olympique, la méthode de Kano s'est répandue dans le monde et s'est également démocratisée.

En France, la progression du judo est exceptionnelle. Il existe aujourd'hui près de

600.000 licenciés. Cependant, 75 % d'entre eux ont moins de 18 ans. Ceci a une influence très nette sur les contenus qui sont enseignés ainsi que sur la manière dont ils sont transmis. Il en résulte de grandes différences entre le judo des enfants et le judo de l'élite sportive. En créant le judo, Kano a montré son désir d'associer les traditions et la modernité. Il a inscrit sa méthode dans la société de son temps. Le Japon doit jouer un rôle central dans l'évolution du judo et dans son adaptation constante aux changements de la société.

＜ブルッス氏の講演内容＞

■海外における柔術から柔道へ

柔術、柔道そして日本自体のイメージが世界中で定着していった20世紀の始め、西洋の国々で日本人移民の波によって、最終的に柔道の定着になったと考えられます。移民の波は、柔道の実施を増加させ、柔術から嘉納の柔道への移行を決定的なものにさせたとおもいます。特に日本人コミュニティが成長すると、柔道を守るために日系人協会が結成されました。日本人は仏教とキリスト教会に加入し、柔道は宗教の枠を超えて、移民生活の大きな役割となっていきました。日系人たちにとって、神社や教会は精神的なものではなく、日本語学校、移民のための英語教室、女性クラブ、バスケットボールや剣道、柔道などのスポーツ活動などたくさんの活動をしていました。なぜなら当時、日系人は、現地で人種差別をうけていたために、日系人は公的な社会イベントに参加しづらかったという理由が考えられます。そのため、日系二世自身による社会と、スポーツプログラムを構成し始め、海外の移民の間では、生け花や茶の湯、能、俳句、なぎなた、日本料理、剣道、空手、そして柔道の教室は寺や教会で行われていました。

また、武道は日本社会の集団志向や集団意識に通じているとおもいます。道場は日本人の伝統的な価値観や心構えを表すことができる場であったといえます。相撲や剣道、そして柔道は日本人が日本人らしさを向上させたり表したりする方法であったとも考えます。それと同時に、道場ではそれらの価値観や心構え、そして品格を学び、身につけられるといったメカニズムを形成していきました。これらのメカニズムは日本人の武道の指導者が、日本で生み出された専門的知識や伝統の根源を直接指導することで完成されていきました。さらにこれら武道の目的は人生や価値観を教えることであるので、多くの日本人コミュニティでは一世が伝統を続け、二世がそれを学ぶことによって、完璧な伝達手段になると考えていたからです。すなわち相撲や剣道、柔道は日本文化の象徴として理解できるでしょう。

嘉納は日本の柔道大使もありました。当時、旅行するのは経済的に厳しいものであったのにもかかわらず、彼はたびたびヨーロッパやアメリカ合衆国に足を運びました。彼は北米の日本人コミュニティで柔道を促進するためにハワイ、サンフランシスコ、シアトル、ニューヨークを訪れました。彼はすべての会議、展示会、インタビュー、そして、道場のオープニングセレモニーになど様々な場所に訪れました。なぜならば彼の柔道の信念や指導方法を普及させるため意図的に訪れたと思われます。彼は市民の関心を植え付けるために柔術の公演を引き受けました。彼はこの方法でアメリカでの柔道を普及させていきました。なぜこのようなことができたのかというと第二次世界大戦以前では柔術と柔道が同じであると捉えられていたからです。嘉納は、逆にそのような状況を有利に捉え、西洋諸国で新しいシステムやネットワークを作るためにレスリングの技術を用いて柔道の理解を深めていくように試みました。柔術から柔道への変容が日本で起こったのは19世紀末であった。またヨーロッパや特にアメリカ合衆国では、嘉納は彼のすべてを注ぎ込んで普及活動をした結果、1930年代には柔道が一般的になりました。

■柔道のスポーツ化

スポーツとして柔道は1920年代にドイツで最初に行われました。初の国際サマーキャンプはフランクフルトで開かれ、そこでは1920年代終わりに国際会議が開かれるようになりました。その結果、初のヨーロッパ柔道連盟は1932年8月11日にイギリス、ドイツ、スイスによって設立されました。しか

し、日本人指導者ではないドイツの指導者にとっては、柔道はレスリングの試合モデルとして見られていました。このことはドイツ人が「体重別制」を最初に提案したことからも理解できます。柔道とレスリングの類似性によって、「体重別制」の採択は政治的要素も関係していきます。1945年の終わりに日本が占領された結果、GHQすなわち連合国の最高指揮官は武道の稽古を通した軍国主義や超国家主義思想を排除するため命令しました。後に、日本の文科省は剣道、柔道、空手、そして薙刀のカリキュラムをすべての学校、大学で禁止にしました。大日本武徳会と軍に関係する組織は右翼政権によってイデオロギーの目的のため武道の技術の使用されたと考えられて、解散させられました。1950年3月4日、SCAPの教育課主任である作家ルーミスは武道スポーツの復活をテーマにしたメモを書き、その中で学校、大学での武道スポーツの指導の復活をもとめて陳情しました。その中には、解散に追い込まれた政府機関によって作られた武徳会のような不当な扱いを防ぐために、体重別制度やさらに身長別や年齢別での柔道の試合の提案も含まれていました。

オリンピック競技種目に柔道が採用されるまでの道は長いものでした。嘉納は彼の人生のすべてを、世界的な柔道の普及のためにささげました。しかし、彼は組織化されたオリンピック種目への柔道の採用に関しては困惑していました。1936年の小泉軍司へ宛てた手紙で嘉納はためらいを弁明しています。

「私はオリンピックの柔道の採用への考え方には現在、消極的です。もしそれが他の国のメンバーの要望であるならば、私は反対しません。しかし、私は主導権をとって推し進めたいと感じません。なぜなら、柔道の本質は単なるスポーツやゲームではないからです。私は柔道を芸術や科学のように生活の一部であり、それは個人的な文化の芸術であると考えています。オリンピックはあまりにナショナリズムの趣向が強いので、ナショナリズムに利用されたり、講道館が設立する前の柔術に逆行する形として競技柔道が発展したりする可能性があるとおもいます。政治、国家、民族、商業主義、またはその他の組織による利害という外部の影響から切り離し、柔道は芸術や科学と同じように自由であるべきです。そして、柔道で繋がっている全てのものは柔道の根本原理である「世の補益」であるべきです。また柔道は他のスポーツのようなプロスポーツではないのです。個人的な利益のために見世物として参加することは断じて許していません。柔道の指導者たちは、確かに指導報酬は受けていますが、それによって地位や名誉が失われることはないのです。この点では西洋の考え方と全くことなり理解するのは難しいとおもいます。これが成功するか否かは、柔道をオリンピックに参加させたいと考える国の同意や理解次第と考えます。」

20年後、「スポーツと柔道」のディベートが日本とドイツの間で盛んに行われました。初代国際柔道連盟会長イタリアのアルド・トルチ Aldo Torti、西ドイツからのエドルガ・シャエフェ Edgar Schaefer のように、戦後、国際的な柔道の指導者はオリンピック競技の採用に柔道の将来を託しました。アンドレ・J・エルテル Andre J Ertel が1960年にヨーロッパ柔道連盟の会長として選ばれたとき、彼の提案は体重階級制度（68㎏以下、80㎏以下、 80㎏以上） を置くことでした。エルテル Ertel は、「ヨーロッパ柔道連盟の幹部たちは体重別制度を採用しなくては、柔道はオリンピックの公式競技として受け入れられないと気づいていました。しかし全日本柔道連盟は体重制を拒みました。オリンピック公式競技への採用について、最終決定は1960年8月22日にローマで下されました。第58回国際オリンピック委員会IOC会議は、多数決32対2で、国際柔道連盟IJFを国際オリンピック連盟として認め、そして柔道は東京オリンピックの競技種目に含まれた。ポール・ボネモリ Paul Bonet Maury とアンドレ・エルテル Andre Ertel が主な立案者でした。また1964年オリンピックの優勝したオランダのアントン・ヘイシンク Dutchman Anton Geesinkの勝利では少なくとも2つの理由で柔道に新しいスタートを与えたとおもいます。第一に、オリンピックスポーツとして柔道は現代スポーツの世界で新しい考え方を与えることになったのです。第二に、日本人以外の選手にもっとも貴重な無差別級

のタイトルが渡ったことで、柔道は国際的な規模であると立証されたのです。

■文化的なふれあい

オリンピック種目のスポーツになった後の20世紀後半に、嘉納の方式は採用され、ますます多くの国々で文化的伝承遺産の一つになるまで進化しました。しかし海外では柔術から柔道の変容は、日本の影響をあまり受けずに変化していったのです。つまり他の地域では日本の武道つまり柔術の定着の仕方が異なっていて、このことが現代の日本の武道の特性を示しているともいえます。柔道の国際的な発展に貢献した川石酒之助（カワイシミキノスケ）は「柔道はトウモロコシや米に似ていて、その土地の土壌適合し、その土地の柔道に成長しなければならいい」とよく言っていました。この言説でわかるように多くの西洋諸国で柔術と柔道が嘉納の意味することとまったくに異なるというという見解の違いがわかるのではないでしょうか。私が考えるに柔術と柔道は絡み合いながら再構築され、大衆の願望と無敵の神話が20世紀のはじめからしっかりと定着されていたと考えています。

しかしながら、武道の競技化は危険もはらんでいます。武道が競技スポーツになるとルールによって戦闘の有効性を減少させる傾向があるからです。柔道の「スポーツ化の過程」は、社会学者ノルベルト・エリアスがいう「文明化の過程」と読み取ることができます。様々なタイプの文化や社会に柔道の普及から生じた変化は時には修正が考えられ、そして最も目に見えるのが技術の変化でした。相手を殺傷するためにたくさんの柔道の技が考案されましたが、嘉納や彼の弟子たちによって、危険な技は排除され教育的に変更されました。最近では、審判規定は、柔道技術の形成に大きな機能を果たしています。各国固有の伝統的なレスリングスタイルからの技術開発という背景から新しいルールの追加点がみられ、そのルール変更にともない技術研究をする人もいれば、その道義や方法自体を否定する人もいます。その一方で“古い規範”や目的、柔道の本質に帰ることを求める近代の柔道の関係者もたくさん存在していたり、たくさんの伝統的儀式によって、スポーツ化を否定する思想的な側面考えを併せ持つ嘉納思想を唱える崇拝的な柔道家が50年代に存在していたりしていました。

■結論

柔道の国際化は海外の柔術の伝播から始まりとても複雑な過程でした。東洋と西欧の融合、文化違いは、嘉納治五郎の方法論によって発展したといえます。また柔道は日本文化を伝える重要なものであるとも思います。なぜなら現在199カ国もの国で柔道が普及され、フランスでは60万の登録数があり、登録数の75%が18歳以下の子供たちによって構成されているように、国際的な関心を示すものともいえるでしょう。現在21世紀のはじめですが、海外の国々にとって日本の柔道は魅力的で、世界の柔道、憧れ、羨望であり、日本のスタイルを目標としています。そして、世界的な規模になった柔道界でリーダーシップを取っていくことも日本に期待しているのです。（日本語翻訳責任者　溝口紀子）

6．まとめ

本研究はジャーナリズムのグローバリゼーションをテーマに扱った「メディア・スポーツシンポジウム」、さらに日本固有の身体文化である武道をテーマに行った「SUAC公開セミナー」の2つのプロジェクトから、グローバル化するスポーツ文化の現状や問題点を明らかにした。特に最近ではメディア・スポーツといわれるほど、メディアがスポーツに及ぼす影響が大きくなっており、日本固有の身体文化である武道においてもその影響を受けている。今後、スポーツ文化のグローバリゼーションは、ますますメディアによって拡がっていく一方で、メディアによって凌駕されないようスポーツ本来の価値や理念を再構築していく必要があると考える。

謝辞

本研究の遂行にあたり、ご支援ご協力くださいました大学事務局、学生の皆様に深く感謝いたします。

注

本研究は平成21年度静岡文化芸術大学学長特別研究費の助成を受けた。

引用参考文献

* 引用文献は現代漢字、仮名使いに改めた。
Brousse, Michel ,2002, Le Judo, son histoire, ses success、Minerva.
Brousse, Michel ,2005, Les racines du judo français. Histoire d ůne culture sportive, Presses Universitaires de Bordeaux.
Elias.N , Dunning.Eric、大平章訳,1995『スポーツと文明化 興奮の探求』,法政大学出版局.
橋本純一,2000,「スポーツ・ジャーナリズムとメディア・イベント」『現代メディア・スポーツ論2（特集スポーツ・メディアへの視線）』創文企画、52 － 63、
橋本純一,2004,「スポーツ・メディアを批評する（特集スポーツ・ジャーナリズムへの誘い」『現代メディア・スポーツ論』創文企画.
橋本純一,1988,「メディア・スポーツとイデオロギー－日米プロ野球の記号論的研究－」体育・スポーツ社会学研究会編『体育・スポーツ社会学研究七　現代スポーツを考える』道和書院
橋本一夫,1997,「メディア・スポーツの文化史」体育の科学 vol47.12 月号、942 － 944.
橋本政晴, 2002「メディアスポーツ研究の経緯」、橋本純一（編）『現代メディ.ア・スポーツ論』世界思想社、26 － 47
広瀬一郎,1997,『メディア・スポーツ』、読売新聞社.
Hobsbawm. E , Terence Ranger ,1992 ,『創られた伝統』前川啓治・梶原景昭 訳
平野健一郎,2000,『国際文化論』,東京大学出版会.
池波 正太郎,2009,「妙音記」、『剣客群像』,文藝春秋.
池波正太郎,2002,『剣客商売』,新潮社.
飯田貴子,2002.「メディア・スポーツとフェミニズム」橋本純一（編）『現代メディア・スポ ーツ論』世界思想社、
井上 俊,2004,『武道の誕生』,吉川弘文館.
榊原直行,2001,『メディア・スポーツの視点』、学文社.
金山 勉,2003,「デジタル時代のスポーツオンライン戦略－米スポーツ・メディア企業の事例研究」スポーツ産業学研究、vol,13,no13, 53-64.
來田享子,2004,「近代スポーツの発展とジェンダー」飯田 貴子・井谷 恵子編『スポーツ・ジェンダー学への招待 』,赤石書店.
嘉納治五郎伝記編集会,1964,『嘉納治五郎』、講道館.
工藤雷介,1975,『秘録.日本柔道』、東京スポーツ新聞社.
眞神 博,2003,『ヘーシンクを育てた男』,文芸春秋社.
松原隆一郎,2002,『思考する格闘技―実戦性・競技性・精神性と変容する現実』,廣済堂.
松原隆一郎,2006,『武道を生きる』,NTT 出版.
丸山三造,1936,『大日本柔道史』,講道館.
森克己,2006「イギリスにおけるスポーツ・メディアへの法的規制とユニバーサル・アクセス権」日本スポーツ法学会年報 13 巻、69 － 80.
内藤洋子,1992,『女三四郎 83 歳宙をとぶ』エフエー出版.
中村民雄,2007,『今、なぜ武道か－文化と伝統を問う－』,財団法人日本武道館
Pherdac .C, Défendez vous Mesdames,Manuel de défense feminine,Paris,Rueff.
佐々木武人、藤堂良明、柏崎克彦、村田直樹, 1993,『現代柔道―国際化時代の柔道を 考える』,大修館書店.
志々田文明,2005,『武道の教育力 ― 満洲国・建国大学における武道教育』、日本図書センター .
Smith .A.D,1986, The Ethnic Origin of Nations, Blackwell,（巣山他訳,1999.『ネイションとエスニシティ』名古屋大学出版会）
Svinth.J.R., 2001,モ The Evolution of Women's Judo, 1900-1945 モ Journal of Alternative Perspectives.
Storey.John:An Introductory guide to cultural Theory and Popular Culture,pp181-202,Harvester/Wheatsheaf,1993.
早川武彦,2006「グローバル化するスポーツとメディア、ビジネス　スポーツ産業論講座」創文企画　261 － 263.
佐伯聰夫,1997「メディア・スポーツ論序説：メディア・スポーツの構造と機能～問題の所在と分析視点のために～」体育の科学 vol47.12 月号、932 － 937.
多木浩二,1995,『スポーツを考える―身体・資本・ナショナリズム』,ちくま新書.
Thomas, R,1996.『Le sport et les m 仕 ias』
藤堂良明,2009,『柔道の歴史と文化』,不昧堂出版.
内田隆三,2007,『ベースボールの夢：アメリカ人は何をはじめたのか』,岩波書店.
薮耕太郎,2006,「,武道の海外普及に関する一考察－福岡庄太郎によるアルゼンチンへの柔術普及―」『立命館産業社会論集』41-4.
山本礼子,2003,『米国対日占領政策と武道教育―大日本武徳会の興亡 』,学術叢書.
吉野耕作,1997,『文化ナショナリズムの社会学』,名古屋大学出版会 .
山本教人,2000「国内外におけるメディア・スポーツ研究の同行と今後の課題」九州体育・スポーツ学研究第 14 巻 1 － 10.

教師間の連携によるテクノロジーを活用した英語授業の創造と実践

Creation and Collaboration: A team approach to English language course design

トーマス パルス
文化政策学部国際文化学科
Thomas PALS
Department of International Culture, Faculty of Cultural Policy and Management

マーク D.シーハン
文化政策学部国際文化学科
Mark D. SHEEHAN
Department of International Culture, Faculty of Cultural Policy and Management

杉浦　香織
文化政策学部国際文化学科
Kaori SUGIURA
Department of International Culture, Faculty of Cultural Policy and Management

本報告書では、静岡文化芸術大学の英語科目の１つである「マルチメディア英語」における、教材作成と評価基準設定に関する英語教員間の共同取り組みについて述べる。具体的には、３年間をかけて開発した、オンラインコースマネージメントシステムを利用して、自主学習を促進させる補助教材の提供、小テストの実施、また、学生の授業出席や取り組み状況の管理、学期中に随時、成績フィードバックを行なった。また、教師が共同で授業を改善していくために、学生に対して授業の実施方法、教材、学習効果等に関するオンライン・アンケートを実施した。

本稿では、まず、本授業において、マネージメントシステムを使用する理論的根拠を提示する。次に、授業内容・教材の紹介、また、アンケート調査結果を統計データを用いて報告する。最後に、英語教員間で連携をして、効果的に授業開発・運営をしていくことの重要性と、それを援助するテクノロジー技術の有用性について述べる。

Abstract
This paper reports on a collaborative effort among three English language teachers to create materials and standards for an English language course at Shizuoka University of Art and Culture. The project, spanning three years, required the establishment of common syllabi, grading criteria, grading standards, a common set of materials and evaluation tools. By enlisting the latest technology, including an online course management system and supplemental websites, the team members were able to successfully implement the common syllabi. The instructors were able to administer quizzes, keep class records, monitor student performance, keep statistical data on course progress and measure student reaction to the implementation of the course materials. After introducing the rationale behind this approach to course development, a description of the course contents, statistics, and materials will be given. To conclude this report, results from action research on one aspect of this course will be presented.

Introduction

The first step to creating a sound curriculum is collaboration among teachers to create courses that serve the educational needs of students. The next step is to link those courses so that they build on each other and are connected in a meaningful way that is conducive to progress. The project described in this report is an attempt to add to the curriculum at Shizuoka University of Art and Culture at the course level. After detailing the benefits of using an online course management system for administrative functions, a description will be made of the supplementary materials created to aid in student learning. All supplementary materials are available online and can be viewed at the links provided in **Appendix A**.

To conclude this report, the authors will present some data from a preliminary study of the course and its materials. This preliminary study measures student affective factors such as anxiety and confidence and examines how they can be attributed to challenges in speaking English. The study also surveys student experience with pronunciation practice in courses before the tertiary level. The data in this report will be limited to student perceptions of their English pronunciation and their experiences practicing pronunciation on their own. This report should reveal the necessity of using technology in all areas of course design; furthermore, it will show the importance of collaboration among teachers to create courses and develop a sound, relevant curriculum.

Course Management and Technology

In order to manage this Multi Media English course, the instructors enlisted a number of types of technology. The section below on

supplemental material details the use of mind mapping software and puzzle-making software to create course materials. Furthermore, two websites were created to provide students off-campus access to important course materials. However, the biggest tool in the technology tool shed used to build this course is a course management system (CMS). While there are a number of commercial and open source course management systems available on the market, the absence of funding and technical support have made those options unfeasible. The course management system used for this project is the result of a generous partnership with professors in the Department of Science and Engineering at Ritsumeikan University. The CMS is web-based and can be accessed anywhere there is an Internet connection. The CMS provided the instructors of this course with a number of excellent administrative functions. Some of these features are listed below.

- a grading database accessible to students and teachers
- an online quiz administration tool
- course record keeping functions
- course statistic keeping functions
- online syllabus, course policies, and schedule
- course email system
- online TOIEC exercises
- administration of course surveys

The grading database allowed instructors to input student grades on a weekly basis. Students could view their grades at any time and speak with the instructor about any concerns about their standing in the class. Instructors could view individual student grades, monitor class statistics and monitor statistics among courses taught by other instructors. Allowing students to monitor their weekly scores keeps them apprised of their status in the course; allowing instructors to check statistics from other courses provides a good check on grading fairness and consistency. **Figure 1** shows the average grades for both classes.

The CMS also gives a breakdown of grading for the various class activities. Having this feature allows teachers to see student results on quizzes in comparison with other classes. It also allows them to see if they are grading their students on in-class tasks using similar standards. Variables between classes will always occur depending on the department of the students, year of the students and level of motivation; however, **Figure 2** reveals a fairly consistent grading pattern between two different classes of students, taught by two different teachers.

Not only does the course management system allow teachers to monitor student progress and class statistics, but also teachers can administer course surveys quite efficiently. By administering online surveys, valuable resources (paper, envelops, toner, electricity) and staff time are saved. The surveys are conducted online; results are calculated immediately and teachers can receive feedback on their courses by the last day of classes. Furthermore, teachers can, once again, view their survey results in relation to other sections of the same course. This is a valuable function for course development and materials design. **Figure 3** and **Figure 4** are screen shots of results of the surveys conducted at the end of the spring 2009 semester. The data is encouraging because it shows similar student responses from both classes, despite having very different students enrolled in each section.

Figure 4 illustrates the importance of collaboration. By working together, teachers were able to create materials that were at an appropriate level for all students.

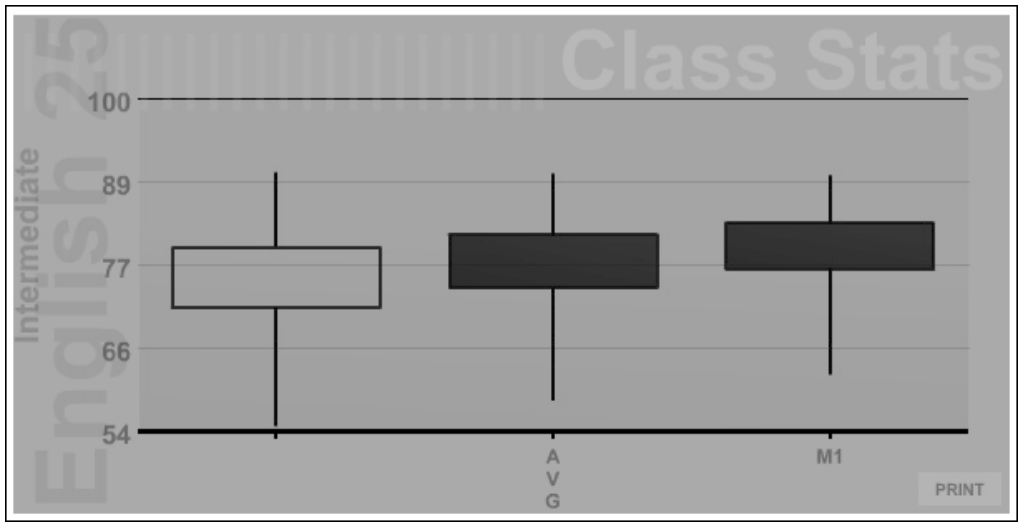


Figure 1. Teachers can monitor class averages and compare them with other classes

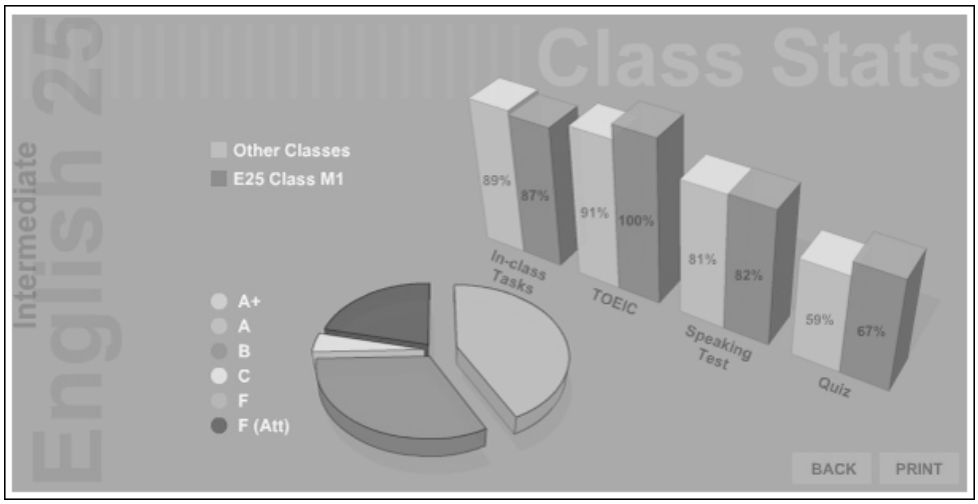


Figure 2. Grading breakdown between two different classes

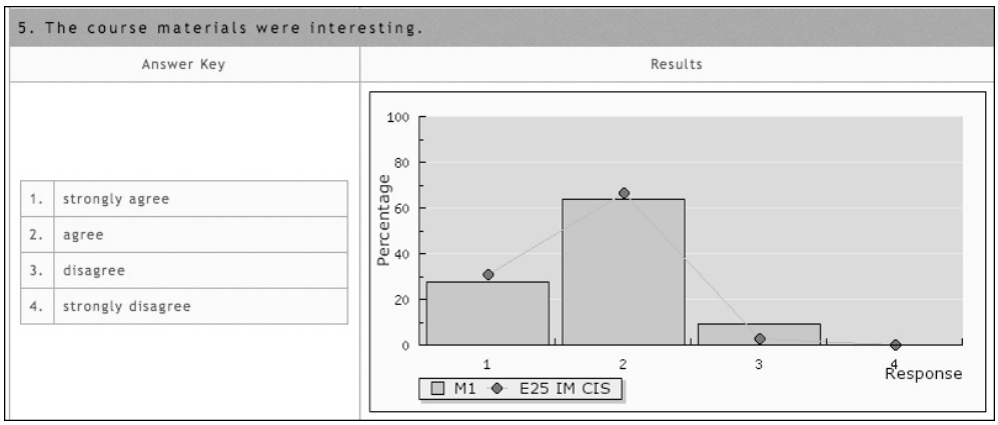


Figure 3. Results from both classes were almost identical

Evidence that students in the course accepted the use of this CMS can be seen in **Figure 5**. Survey results revealed that students from both classes liked being able to view their grades and statistics online.

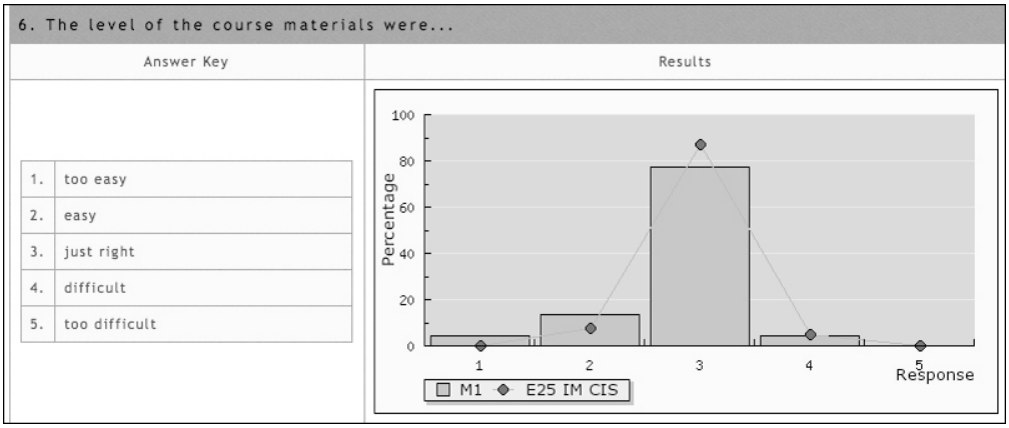


Figure 4. Both classes found the materials "just right"

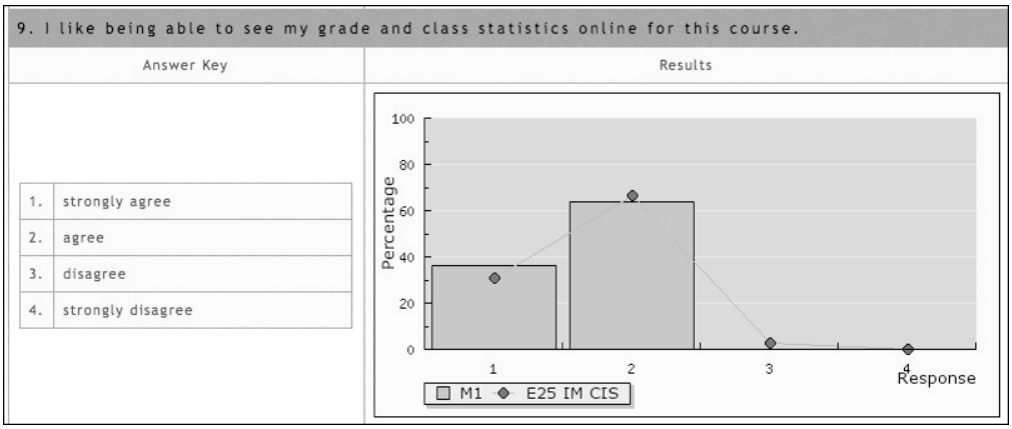


Figure 5. Students embraced the technology introduced in this course

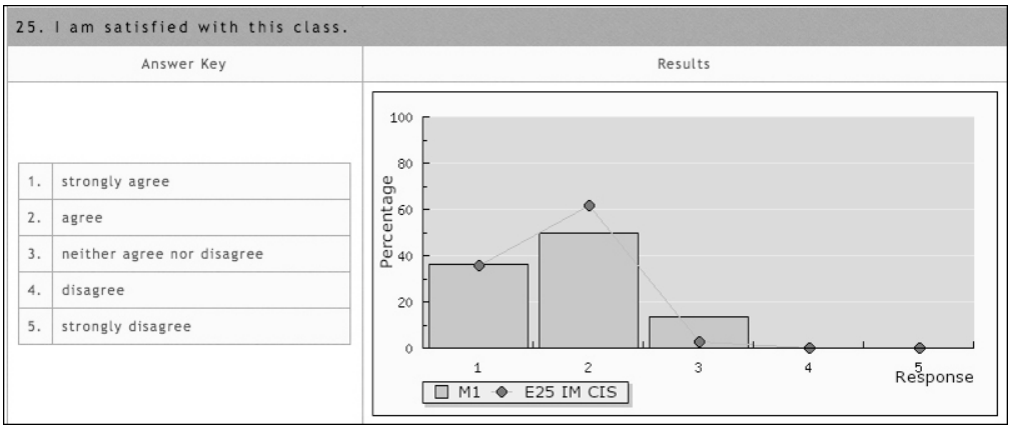


Figure 6. This collaborative course garnered a high rate of student satisfaction

Not only did the use of this technology help teachers manage the administrative side of this course, but it also helped students monitor their progress on a weekly basis. **Figure 6** displays the survey results from students asked to rate their overall satisfaction with the course.
While the course management system was a major feature of the course, a wide range of supplemental materials were also created to make the course a fulfilling educational experience for students enrolled in Multi Media English. The materials are described below.

Supplemental Materials

The core materials for this course consist of a software program called Native World. The program is installed on the university's servers and can be accessed in the university's language laboratory. Students are registered in a database and enrolled in a particular class at the start of the semester. The software program tracks student progress and also keeps track of the amount of time students spend performing exercises. Reports can be issued to student or teacher by accessing the program. Students can access the software outside of class hours if the language lab is available. Recent interest in computer assisted language learning has led to more teachers using the language lab for their courses. As a result, student access to the software is almost entirely limited to class hours.

One of the goals for this course is to give students speaking practice in the context of using daily English. The theme of this course is preparation for a trip abroad. Students use Native World software to practice skits and learn vocabulary. Voice recognition software is used to give students feedback on their speaking tasks.

To give the students greater access to language learning materials and to compensate for limited language laboratory access, the instructors of this course created a number of online supplementary materials for the students to access outside of the language laboratory on their own time. The materials included previewing pronunciation activities to give students instruction in the vocal anatomy and allow them practice with problematic English sounds before performing tasks in class.

Other materials for the course included vocabulary review puzzles that aided students in retaining key words presented in the course units; the puzzles were also instrumental in helping students prepare for quizzes. Another component created to aid students prepare for the quizzes and the final speaking test in this course includes a number of mind maps of the content introduced in the units. The maps, created with mind mapping software, sought to help students make connections among elements in the different units and also to review course content in a non-linear way. All supplemental materials are housed on websites created and maintained by the authors of this paper. See **Figures 7** and **8** for screen shots of two types of supplementary materials. Course materials can be viewed on wwww.suacpals.com and www.suacletters.com.

Fostering Action research

Having built this repository of supplementary materials over three years, it is important to measure the efficacy of the materials and students' experience using them in the course. Space limitations prevent more in-depth analysis of the data gathered from our studies; however, some findings will be presented in the context of this collaborative project. Instructors involved in action research projects realize that the larger the survey sample, the more valid their results. By working together on the same materials and course standards, the creators of this course were able to elicit and combine responses from both of their classes to gather a larger pool of data for this study.

The study conducted for this spring 2009

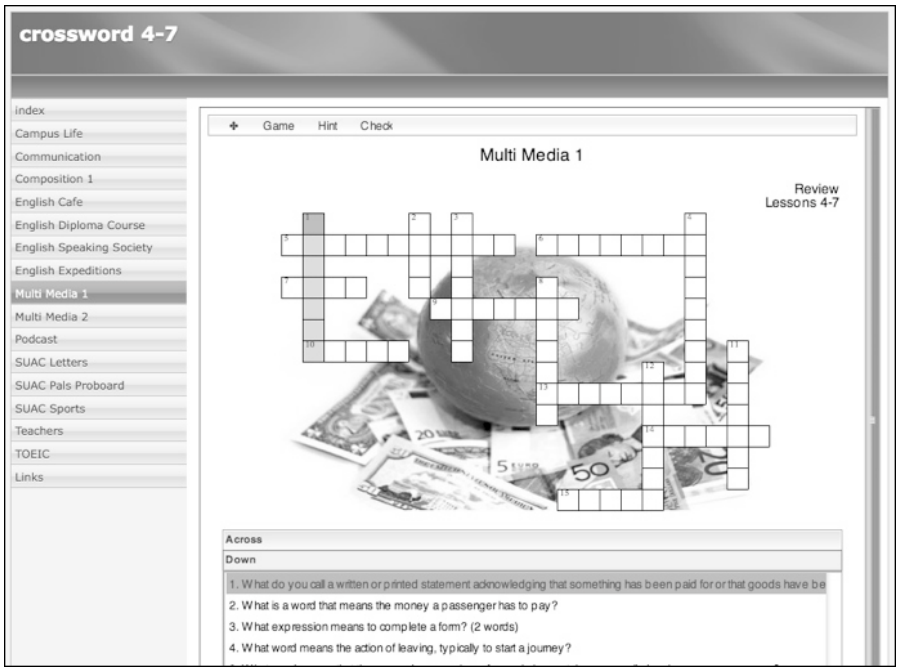


Figure 7. Crossword puzzles created for fun vocabulary review

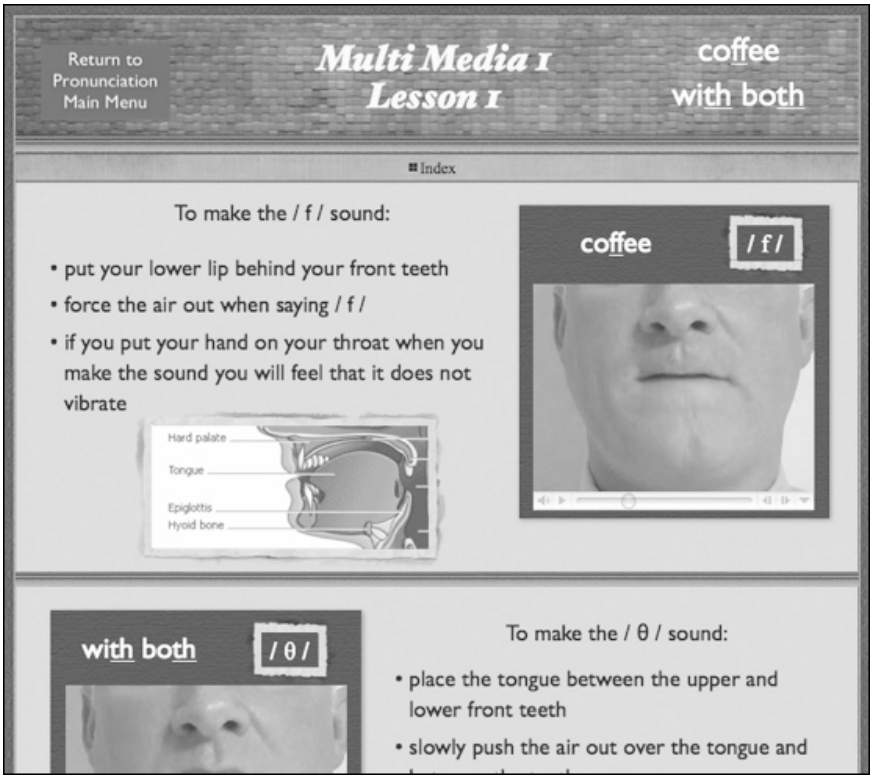


Figure 8. Pronunciation activities foster autonomous learning

semester Multi Media English course at SUAC was designed to answer the following research questions: 1) How do students feel about their pronunciation?, 2) Do students know how to make English sounds?, 3) What type of English pronunciation practice have they had? Some of the data gathered lies beyond the purview of this paper, so the discussion of the survey results will be limited to research questions 1 and 3. In particular, the researchers were interested in learning how students rated their pronunciation before and after taking the course. The authors of this study also sought to understand what, if any, independent pronunciation practice the students had done prior to enrolling in Multi Media English 1; they also measured this factor at the end of the course to determine whether or not classroom practices and materials had a positive influence on autonomous learning in the area of pronunciation.

The project required the administration of two surveys: a preliminary survey conducted at the beginning of the semester before students started participating in language learning activities, and a follow-up survey taken after a full semester of course work. The survey sample consisted mainly of first-year students; however, since this is an elective course, upperclassmen were also enrolled in the Multi Media English course. Students from all faculties at SUAC could sign up for the course. The survey sample consists of students enrolled in courses taught by two of the authors.

Surveys were conducted using an online survey program that allowed instant collation of results. Seventy-nine students answered the survey questions. For the purpose of this report, results from two questions will be presented. Experience teaching previous sections of this course helped the instructors learn that one of the reasons students enroll in this particular English course is to improve English pronunciation by performing exercises on the language laboratory computers. To determine whether or not students perceived an improvement in their level of English pronunciation as a result of taking the course, the survey asked the students to rate their pronunciation at the start of the course and at the end of the fourteen-week semester. See **Chart 1** for a presentation of the data.

The pre-survey results indicate that students

	Excellent				Poor
Pre-survey		6	21	23	29
Post-survey	2	14	39	15	4

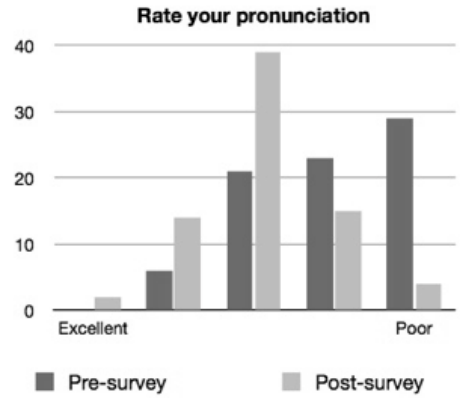


Chart 1. Students rated their pronunciation at the beginning and end of the course

tended to rate their pronunciation poorly. Not one respondent considered their pronunciation 'excellent' and a large number of students checked poor. The post-course surveys were given at the end of a semester of fourteen weeks of activities including Native World tasks, supplementary pronunciation activities, assistance from the instructors and peer speaking activities. Deeper analysis has not been done to determine which of the above-mentioned variables contributed more to an improved perception of English pronunciation; however, the data reveals that the students felt a perceived improvement by the end of the course.

Another item of interest on the survey is the question related to learner autonomy and pronunciation. Since language pronunciation is such an individual matter, the authors sought to find out whether or not students had attempted to practice pronunciation on their own; furthermore, the study also hoped to illustrate whether or not some of the teaching materials and methodologies presented in the course would lead students toward more autonomous learning. The results from this question are presented in **Chart 2**.

Post survey results indicate that some students who had not initially performed pronunciation practices on their own may have become more favorably disposed toward this practice. These are positive findings for teachers interested in student motivation and autonomous learning.

Due to time and space constraints, analysis of the other data gathered via these surveys will be analyzed at a later date and will be used to improve the course. Nonetheless, an initial examination of the data confirmed several assumptions held by the researchers and has

	Yes	No
Pre-survey	39	40
Post-survey	52	22

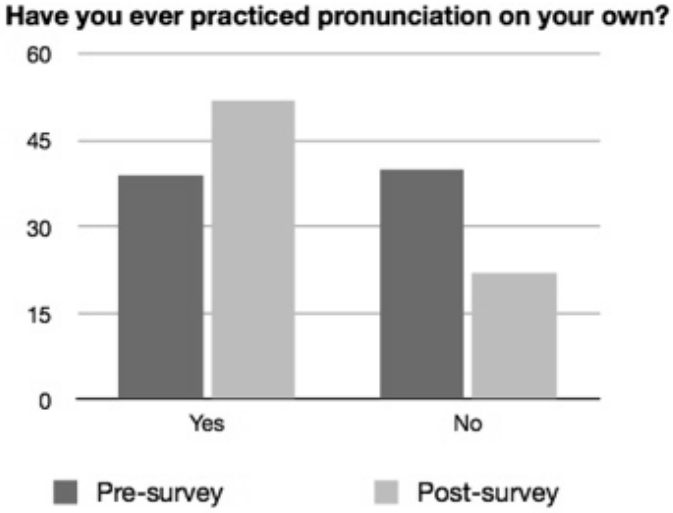


Chart 2. Changes in self-study pronunciation practices

helped inform the creation of supplemental materials and evaluation tools for this course.

Conclusion

In conclusion, this collaboration among English teachers helped achieve ends. By working together to set common course goals and standards, creating common course materials, and maintaining and monitoring fairness and consistency in grading, course goals were made more transparent and perhaps more achievable to the students. On the instructors' side, collaborating helped share the workload, foster collegiality, and contributed to an exchange of ideas that is a necessity to professional development.

It was essential to enlist technology to help achieve the goals of this project. Use of the course management system allowed teachers and students to view course grading statistics, and monitor student progress; furthermore, students were able to view their status at any time of the semester. The supplemental websites used to house the online activities enabled students to continue their studies outside of the language laboratory. The results of this project should encourage more intradepartmental, and one hopes, interdepartmental collaboration on education projects and materials for students at Shizuoka University of Art and Culture.

Appendix A

Websites created to house the Multi Media 1 course materials

www.suacpals.com
www.suacletters.com

英語で教える英文学概論　－ EFL コンテンツ・コース－

A Survey of British Literature in English: Teaching EFL content courses

マーク D. シーハン
文化政策学部国際文化学科

Mark D. SHEEHAN
Department of International Culture, Faculty of Cultural Policy and Management

英文学概要を英語のみで教えるにあたり、本校で用いた手法について説明する。日本の大学においてEAP (English for Academic Purposes: 学問上の目的のための英語)への感心が高まっているが、カリキュラムにコンテントベースの講義を加えるには、相応の配慮と計画を要し、多くの要素を考慮する必要がある。本稿では、まず、コンテントベースの大学レベルEFLコースに関する問題点について指摘する。次に、コース設計とオリジナル教材開発についての詳説をし、最後に、英語で講義を受けた学生の理解度測定結果で締めくくる。

The purpose of this report is to describe the methodology used to teach a Survey of British Literature course at Shizuoka University of Art and Culture (SUAC). Before explaining the steps taken to design the course and create original materials for it, issues related to content-based university-level EFL courses will be introduced. There has been an increased interest in teaching English for Academic Purposes at Japanese universities; however, adding content-based courses to the curriculum requires care and planning. This report addresses a number of factors that need to be considered when delivering academic content to students in a foreign language. To conclude the report, survey results measuring student comprehension of the English lectures will be presented.

Introduction

With more universities in Japan interested in English for Specific Purposes (ESP) and English for Academic Purposes (EAP) courses, it is more than reasonable to expect English literature courses to have the medium of instruction be in English. Nonetheless, a number of obstacles must be overcome if an all English British literature course is to be successful. Most university instructors would concur that the number of hours that university students read each week has decreased since their own university days; this number becomes even greater when reading in a foreign language is included. This trend may negatively impact teacher and student goals for courses in which reading is an essential component.

This paper describes the creation of a Survey of British Literature course taught at Shizuoka University of Art and Culture. Discovering ways to engage EFL students with complex literary, historical and cultural information in an era that has seen a declining reading rate was one of the first tasks presented to the creator of this fifteen-week lecture course. Finding an appropriate method to deliver content, review lecture material, and test comprehension were critical to the success of the course. After briefly introducing some current thinking on English for Academic Purposes courses, the processes used to create this course will be highlighted. A presentation of data gathered from post-lecture surveys will conclude this report on SUAC's first all English Survey of British Literature Course.

English for Academic Purposes

Defining the role of English language education at Japanese universities can be difficult. Many courses carry names that designate them as skills courses; therefore, the instruction practices are often focused on raising students' language levels to the point where they can function in a number of daily situations. While English and other language courses are often pushed to the periphery of the curriculum, most teachers weave content into their lessons; their coursework should certainly be classified as academic. However, in some cases, raising student levels beyond survival, i.e., developing the ability to function in academic situations, is required. Most educators would concur that all courses at university should be academic (Gunning, 2009); nonetheless, finding ways to convey content in English, without compromising the material, is a challenge. Teachers at the tertiary level in Ja-

pan would acknowledge that despite a minimum of six years of English language instruction prior to entering university, some Japanese students still require remediation in English to bring them up to the most basic levels of discourse.

Hammond reports on the issues related to supporting linguistically and culturally diverse students in the English literature classroom (2006). While an experienced educator would be trained in the methodology to deliver content, the next obstacle to be overcome is to find the appropriate materials for what needs to be done in class (Swales, 2009). It is against this backdrop that the Survey of British Literature course at SUAC was created.

The Survey of British Literature Course

The goal of this course is to give students a greater understanding of the historical, cultural, and literary significance of British Literature. Because it is a survey course, a number of literary periods are introduced in order to give students a greater appreciation of the trajectory of language and literature. For a complete list of the literary works studied in the course, refer to **Appendix A**. The medium of instruction for this course is English. All materials for the course, including online content, worksheets, and reading materials are in English. This course was taught in the Spring 2009 semester. Enrollment data for students who responded to an online survey at the end of the semester showed that 70% of the students attending classes were sophomores; the

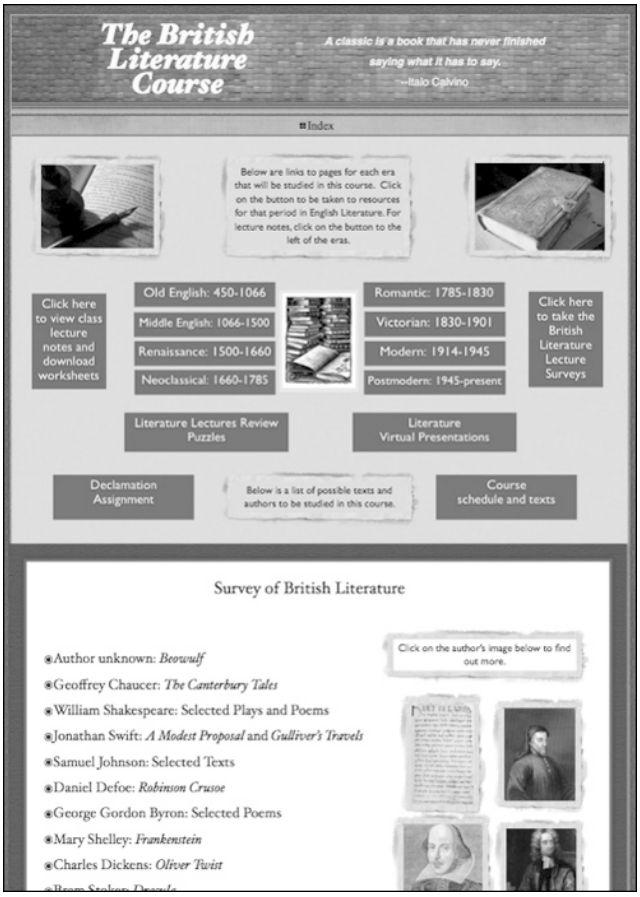


Figure 1. The website created for the course

remaining 30% were juniors. The class also had four auditors enrolled. Over 80% of the students on the class roster reported that they took the course because they wanted to study English more. This response suggests a high level of motivation among a significant majority of the learners and a willingness to receive content-based English instruction.

The materials for this course consisted of a course website: www.suacletters.com (**Figure 1**), which housed all course content, instructions and guidelines, and the course syllabus. Transmission of the course subject matter consisted of three steps: preview, present, and review.

Each lesson attempted to maintain a balance between teacher-centered lectures and student collaboration. The steps for each lesson included:

- Warm up: peer check and instructor check of homework assignments
- Slide show 1: instructor transmission of content and guided note taking
- Peer check and instructor check of lecture comprehension
- Collaborative learning: peer work for reading or discussion
- Slide show 2: instructor transmission of content, free note taking
- Peer check and instructor check of lecture comprehension

Figure 2. Online previewing exercises

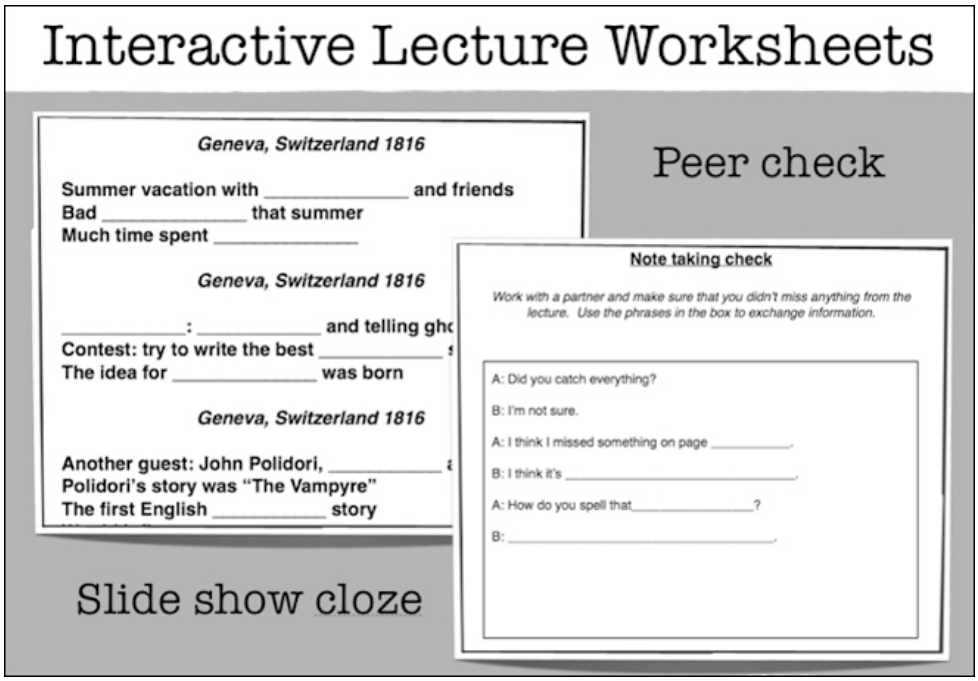


Figure 3. Students learn note-taking skills during the lecture

Figure 4. Review of lecture slides available on YouTube

- Wrap up: distribution of homework materials, Q&A

Each week, students were given a homework assignment that required them to view a specific page on the course website (**Figure 2**) to set a context for the following week's lesson, activate schemata, and learn biographical data about the author to be presented in the lecture. Students also read a short passage or summary of the text that would be the focus of the lesson. Students had to complete a worksheet for homework each week. At the start of each lesson, students peer-checked their work while the instructor monitored them to verify completion of the assignment.

In-class activities consisted of a slide show lecture delivered using presentation software. Cloze worksheets (**Figure 3**) of the text of the lecture were distributed at the start of class. During the lecture, students followed along and filled in the blanks on the worksheet from information gleaned by listening to the instructor and viewing the slides. This activity allowed students to learn note-taking skills in a more structured way. After a peer-check and a plenary question and answer session, students worked in pairs, or in small groups discussing a featured text or working on an important literary passage or summary of a text. Following this hands-on textual work, students were shown a second slide show to reinforce content and expand on the theme of the week. The second slide show was not accompanied by worksheets; students were free to note down any pertinent details from the presentation. A number of key points were repeated in the second slide show to ensure retention of important content. By inserting a peer check at various stages of the lecture, student anxiety could be mitigated and student collaboration encouraged (Adamson, 2006). Following each lesson, lecture slide shows were uploaded to the popular video website YouTube (www.youtube.com) and made available for review (**Figure 4**) by accessing the course website.

Lecture Comprehension Survey Results

As discussed earlier, student comprehension during the lectures was a main concern when designing the course and accompanying materials. In order to measure the level of understanding in each lecture, a set of online surveys were created. The surveys were given to students as part of a homework assignment. The survey questions were updated to reflect the topic of the lectures; they were administered on week 5, week 9, and week 13 of the semester to measure post-lecture comprehension and retention of content. Students were not allowed to consult their notes when responding to the surveys. There were a total of 13 questions on each survey including rating, ranking, and free responses. For the purposes of this report, a discussion of the data will be limited to the question: "I was able to understand the _____ lecture." Results from surveys of all twelve lectures are shown in **Charts 1, 2,** and **3**. There are a number of variables that could have influenced the level of comprehension reported on the surveys, among these factors are: student level of interest in the content, prior exposure to and familiarity with the topics, and the motivation and language ability of individual students. Nonetheless, the survey results show a higher level of comprehension and retention than was expected and, therefore, are encouraging to the instructor of this course.

Because this was a survey course, the material was presented in chronological order to trace the trajectory of the English language and British literature. Those familiar with the British Literature canon would agree that the early works are not light reading. Nonetheless, the data in **Chart 1** represents a high level of comprehension of the early lectures. Furthermore, in the free response sections, students were able to retain and reproduce certain key de-

tails that every student of literature should hold in his or her head. Coping with thousand-year old content is no mean task. Nonetheless, the free response sections on the surveys elicited excellent answers. Students described the provenance of *Beowulf*, the historical and religious issues raised in the *Canterbury Tales*; they also remembered the details of Shakespeare's life, and wrote about the influences on and political significance of *Robinson Crusoe*. As the course moved further into the modern period, student comprehension seemed to improve in some areas and with some topics. However, students did have some difficulty with the Romantic Poetry lecture and the lesson on Modernism. Such trouble with these dense topics was not unexpected; even some native speakers struggle with texts from these eras.

One of the factors that may have contributed to greater comprehension of the lectures was the assignment of graded readers in conjunction with lectures on particular works. In this course, students were required to read and report on three readers: *Gulliver's Travels; Oliver Twist;* and *1984*. By having students read these special books created for English language students, it was hoped that students would 1) enjoy the story, 2) develop more proficiency in English, 3) model the same type of activities as those of native English speakers in English Literature courses, i.e., reading a canonical text and discussing it.

Results from the post-lecture surveys will be presented below. **Chart 1** shows survey questions related to the lectures on *Beowulf*, Chaucer, Shakespeare and Swift. **Chart 2** reports on the Defoe, Byron, Mary Shelley, and Dickens lectures. **Chart 3** displays student comprehension of the Stoker, Woolf, Golding and Orwell lectures. The question reported on is: "I understood the _____ lecture." Students were asked to indicate their agreement with this statement by checking a number along a five-point scale; 1 signified "strongly agree" and 5 signified "strongly disagree".

Chart 1, displaying data from the week 5 survey, shows that over 30% of students strongly agreed that they could understand the Jonathan Swift lecture. Almost 70% of the class agreed that they could understand the lecture on Swift and *Gulliver's Travels*. In general, student responses seem to lean more toward

	Strongly Agree				Strongly Disagree
Beowulf	8.57	28.57	51.43	11.43	
Chaucer	17.65	35.29	26.47	20.59	
Shakespeare	8.57	42.86	34.29	11.43	2.86
Swift	34.29	34.29	22.86	2.86	5.71

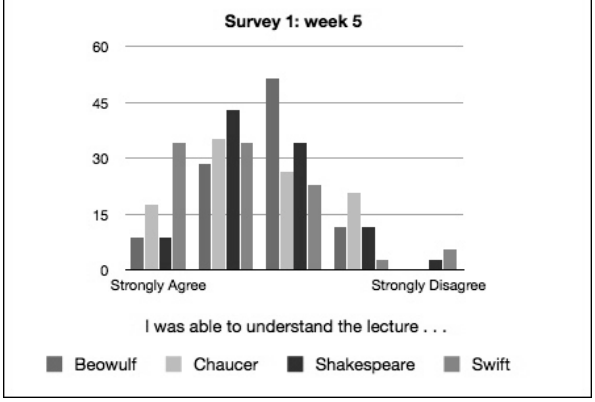


Chart 1. Comprehension of lectures 2-5

comprehension of the lectures than not.

Chart 2, displaying data from the week 9 survey, shows that almost 80% of the students agreed that they could understand the lecture on Dickens and *Oliver Twist*. Overall, a majority of the students reported favorably on their level of understanding of all subjects in this set of lectures.

Chart 3, displaying data from the week 13 survey, shows that almost 60% of the students agreed that they could understand the lecture on George Orwell and *1984*. While comprehension reporting appears to be lower than that of the other two surveys, these results are encouraging considering the heavy political and historical content in*1984*. Once again, a significant number of responses seem to be

	Strongly Agree				Strongly Disagree
Defoe	3.12	25.00	50.00	21.88	
Byron	0	15.62	50.00	25.00	9.38
Mary Shelley	8.57	53.12	18.75	6.25	
Dickens	18.75	59.38	15.62	3.12	3.12

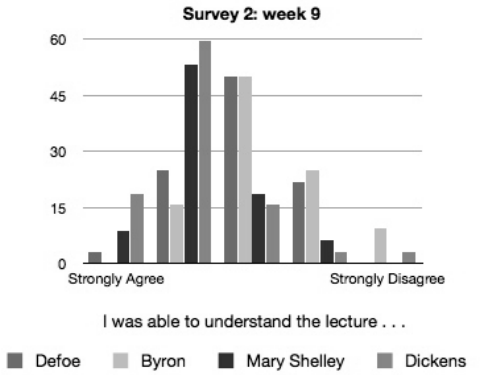


Chart 2. Comprehension of lectures 6-9

	Strongly Agree				Strongly Disagree
Stoker	16.67	46.67	30.00	6.67	
Woolf	3.33	30.00	43.33	20.00	3.33
Golding	3.33	43.33	43.33	10.00	
Orwell	6.67	56.67	26.67	10.00	

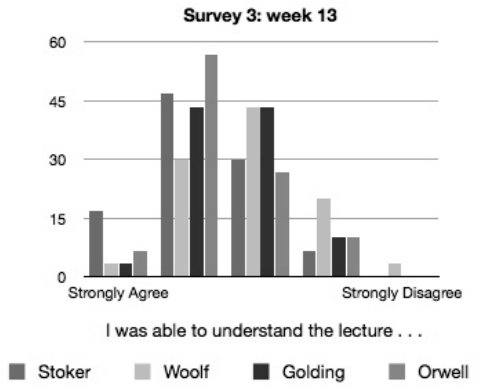


Chart 3. Comprehension of lectures 10-13

grouped to indicate understanding.

Conclusion

In conclusion, while space limitations prevent a deeper analysis of the course survey data, a preliminary examination of results appears to be promising. The Survey of British Literature Course incorporated the latest technology to deliver course materials and lectures; furthermore, it enlisted EFL teaching practices to address the needs of students. The ingredients used to create this original course include research from scholars in the fields of EAP and ESP, the application of Web 2.0 technologies, English language teaching methodology, and an instructor with a background in, and a passion for English literature. Three different types of surveys were conducted on students taking this course. Two of the surveys were instructor-initiated and sought to gather information from students about their learning experience; the third survey was the official, university-sponsored survey given to gather administrative data related to the course. Across the board, students reported that their understanding of British literature increased and that they had a fair level of comprehension during the all-English lectures. Furthermore, students commented that they enjoyed the learning experience. Improved understanding of the subject matter, a high level of comprehension during delivery of the content, and enjoyment of the learning process are, indeed, outcomes sought by all teachers. A follow-up study and more detailed data analysis is required to continue to improve upon ways to best deliver materials related to teaching British literature to English as a foreign language students in the medium of English. Nonetheless, the process of creating the course and implementing the materials was a tremendous learning experience for the instructor; it is hoped that the students had a positive educational experience with this English lecture course on British literature.

Appendix A

List of works introduced in the course

Beowulf
The Canterbury Tales
Henry V
A Modest Proposal and *Gulliver's Travels*
Selected Romantic Poems
Robinson Crusoe
Frankenstein
Dracula
Oliver Twist
Mrs. Dalloway
The Lord of the Flies
Animal Farm and *1984*

References

Adamson, J. (2006). From EFL to content-based instruction: What teachers take with them into the sociolinguistics lecture. *Asian EFL Journal, (2),* 171- 179. Retrieved September 3, 2009 from www.asian-efl-journal.com.

Gunning, J. (2009). An immodest proposal for tertiary level EFL: An interview with Mike Guest. *The Language Teacher, 33(9),* 15-18.

Hammond, J. (2006). High Challenge, high support: Integrating language and content instruction for diverse learners in an English literature classroom. *Journal of English for Academic Purposes*, 5, 269-283.

Swales, J. (2009). When there is no perfect text: Approaches to the EAP practitioner's dilemma. *Journal of English for Academic Purposes, 8 (1),* 5-13.

イタリアにおけるパゾリーニ現象
－自身の研究をふりかえりつつ－

The Pasolini Phenomenon in Italy

土肥　秀行
文化政策学部国際文化学科

Hideyuki DOI
Department of Intenational Culture, Faculty of Cultural Policy and Management

詩人・小説家・映画監督ピエル・パオロ・パゾリーニ Pier Paolo Pasolini（1922-75）をめぐるイタリアでの一連の社会的な現象について概括する。死後30余年を経ていまなお注目される存在であるものの、その都度スキャンダラスな死ばかりが話題となってきた。一方、近年では全集の出版などによりニュートラルな研究基盤が築かれつつある。著者のこれまでの研究もその地平に位置付けられる。またモラルの規範としてのマエストロ（師）像が作り上げられ、左派・右派問わず広範な支持を得ている。とはいえ生前は時代遅れの詩人とみなされ、1960年代の後半から「もと詩人」とでも呼べる姿勢で詩作に臨まなければならない試練にも直面している。ここではその一例、1970年の詩「瞑想の語り」を挙げる。

The Pasolini Phenomenon in Italy
The article presents a reading of the whole of the "Pasolini Phenomenon" in Italy. First, the article discusses the unstoppable, even meaningless, succession of images of the assassination scandal which has continued for more than thirty years after the death of the poet. Second, the article tries to find a neutral ground upon which to base these studies about Pasolini; it also attempts to orient future studies on the poet. The article concludes by outlining the shape of a "maestro" for our times, longed for by a vast population of even opposing political orientations. The so-called Pasolini Phenomenon is recognized, but once the poet was regarded as a poet "passed" it forced one to assume an attitude of "ex-poet". Finally, a proposal for the reading of a poem from 1970, *Oral Meditation*, written on commission for a collaboration with Ennio Morricone, will be given as an ex-poet's example.

序

筆者はこれまでイタリアの詩人･小説家･映画監督ピエル・パオロ・パゾリーニ Pier Paolo Pasolini（1922-75）についてモノグラフ研究をしてきた。2005年にボローニャ大学に提出した博士論文 *L èsperienza friulana di Pasolini e i suoi sviluppi (1941-1954)*「パゾリーニのフリウリでの経験とその後の展開（1941-1954）」で一区切り付いた感があるが、アウトプットせずにいるトピックも少なくない。新たな大学で仕事をはじめる節目に、またようやく博士論文のイタリアでの出版の目途も立ったところで､自分のこれまでの研究をふりかえりつつ、あらためて、今なぜパゾリーニが語られる必要があるのか、いささかエッセイ風の文書にて検討してみたい。「論文」とは異なる性質のため、註を構成すべき事項も本文に含めていることを予めことわっておく。

まずパゾリーニの芸術そのものよりも、イタリアでのパゾリーニ現象とでも呼べるものについて考察することからはじめよう。パゾリーニ受容はイタリアの社会状況に左右され、劇的な変化を重ねてきた。

近年最も多様な動きがみられたのは没後30周年にあたった2005年である（ひときわイタリアは記念行事を好む）。筆者の予想、期待というよりも、をはるかにこえて盛り上がった。シンポジウムや回顧上映会など多数のイベント、テレビ放送（国営放送局RAIは、パゾリーニの映像をアーカイブからふんだんに流していた）､そしてなんといっても非常に多くの出版がなされ、年間30点を優に越えた。2005年に開催されたシンポジウムの報告集や、博士論文の刊行などによって、翌年、翌々年も高い出版点数が続いた。この何年か、筆者の例を挙げずとも、博士課程でパゾリーニを扱う人は多い。フィレンツェのボンサンティ資料館（ガッダやモンターレ、ベトッキ、カプローニなどの現代作家の手稿を所蔵し、パヴィーア大学と並ぶ現代文学アーカイブとなっている）にパゾリーニの手稿が収められており、閲覧を希望する研究者はたえない。

2005年の関心の高まりが筆者にとって驚きであったのは、2002年（生誕80周年）の低いトーンと比べてあまりにも桁違いだったからでもあった（ちなみに没後20周年の1995年のイタリアも経験したが30周年ほどではなかった）。やはりパゾリーニは、圧倒的にその死によって記憶される人物である、というほかない。生というよりも、当時16歳の少年が犯人とされる死に結びつく。

パゾリーニの生と死

とはいえ、あまり知られていないがパゾリーニの出生事情もなかなか興味深い。父カルロ・アルベルトはラヴェンナの伯爵家の出身であり、母はフリウリ地方カザルサの商家の娘である。母の母はピエモンテ出身であり、そのバラエティ富む血筋から、パゾリーニは「イタリア統一の産物」とたびたび自己規定していた（*Pasolini su Pasolini. Conversazione con Jon Halliday* [1968-71], ora in Pier Paolo Pasolini, *Saggi sulla politica e sulla società*, a cura di Walter Siti e Silvia De Laude, Milano, Mondadori, 1999, p. 1285、邦訳はジョン・ハリデイ、『パゾリーニとの対話』、波多野哲郎・訳、晶文社、1972年、33頁）。それに1922年、ファシストによるローマ行進の年に生まれている。父は、貴族の慣例に倣って将校となり、中尉の位にまで就いた。熱心なファシスト党員として、1925年のマッテオッティ暗殺事件で隠密に重要な役割を果たしたにも関わらず、報いとしての厚遇は得られなかった。要するに「使われ損」に終わった。一説に1926年10月31日にボローニャで起きたムッソリーニ射殺未遂事件において、犯人の15歳の少年アンテオ・ザンボーニを取り押さえたのがパゾリーニの父とされるが、おそらくデマであろう。その場でリンチにあい死亡したザンボーニが犯人であった確証はなく、謎の多い事件である。いずれにしてもパゾリーニの父は軍隊内で挫折し、虚しさを内に抱えていた。

長男ピエル・パオロも例に違わずファシストとして成長しており、青年大学ファシストGUFの活動に携わる。その一貫で1942年にワイマールで開かれたナチスヨーロッパ作家会議を取材し（イタリアからは夭逝の思想家ジャイメ・ピントルも参加）、ファシズム時代のいわゆる優等生であった。将校の息子として士官学校に入るためのキャンプにまで参加し、1943年9月のイタリアの休戦直前に徴兵されている。後年の反体制知識人のイメージからは想像がつかない、健全なファシスト青年の姿がみとめられよう。

パゾリーニが、父のマッテオッティ事件への関与を知っていたか定かではない。父は終戦まで3年ほど英軍勢力下のケニアで捕虜生活を送った。そのため精神に異常をきたし、復員後、死をむかえる1959年まで隠居生活を送った。

こうした父と政治的に対照的だったのは、パゾリーニではなく、弟グイド・アルベルトである。行動党に加わりパルチザン活動に身を投じた。そして終戦間際に起こった悲劇、かのポルツスの虐殺事件においてティトー派との内部抗争の犠牲となった。こうして父、弟とも20世紀前半のイタリア史の直中にいた。

先ほど指摘したとおり、パゾリーニは死によって記憶される。スキャンダラスな死もしくは謎の死が、常につきまとう一種のアウラを形成している。これはパゾリーニを語る際の障壁と筆者は感じている。彼の死はどのようにこれまで扱われてきたかというと、たとえばミステリー作家カルロ・ルカレッリによって再三テレビで怪事件として取り上げられる。また最近のイタリアの本ではハリウッド・スキャンダルと並べられたりもする。日本でも有名なマルコ・トゥッリオ・ジョルダーナ監督の映画『パゾリーニ、あるイタリアの犯罪』（1995）とその原作本からはじまった流れだ。ジョルダーナの映画と本は没後20周年の際に作られたが、2005年には本の仏訳出版までが行われた。彼はパゾリーニに影響を受けているというが、その死をめぐる映画のミステリー仕込みといい、『ペッピーノの百歩』（2000）や『輝ける青春』（2003）でのパゾリーニの詩の恣意的な引用方といい常に見過ごせない歪曲がある。

パゾリーニ現象を死からの周期で検討してみると、1985年の10周忌は、まだ死の謎についてばかりでトラウマは相当強く、全般的にパゾリーニについて語りにくい状況だった。親しい友人であった小説家アルベルト・モラヴィアは「あれは下層の人々のやっかみがひきおこした事件だ。一番の悲劇は、連中がパゾリーニとは何者か知らずにいることだ」と死の直後から叫び続けていた（一理あり）。その他、作家ダーチャ・マライーニ、女優ラウラ・ベッティといったパゾリーニの友人の言説が支配的であった。

次いで没後20周年にあたる1995年は、回顧の動きにおけるローマ一極集中が崩れは

じめる契機となった。つまりローマの文人サークルの存在感が薄まり（モラヴィアはすでに1990年に亡くなっていた）、「パゾリーニのフリウリ地方（母の故郷、処女詩集に使用された方言の土地）」、「パゾリーニのボローニャ（生地、大学に通った街）」、という視点をとることが可能となってきた（AA.VV., *Il maestro delle primule: dalla meglio gioventù alla nuova preistoria*, Provincia di Pordenone, 1997 や AA.VV., *Pasolini e Bologna*, Bologna, Pendragon, 1998 に記録が残る）。フィレンツェでも、手稿が留まる関係上、展覧会が開かれた。こうして相対的に、パゾリーニの元友人の発言が全体に占める割合は減っていく。

それでは没後 30 周年の 2005 年はどうだったかというと、高齢となった友人たちにとっては最後の登場機会となった。在ローマのアーカイブを兼ねたパゾリーニ財団は、資金難ゆえ閉鎖されていた。そこで、ローマで労働組合の雄であったセルジョ・コッフェラーティがボローニャ市長に選ばれてまもなく、その財団の資料を市に買い取らせる措置をとらせた。そうしてボローニャの市営シネマテーク付属図書館内に資料館が入居する。その移設後まもない2004年夏、財団をひとりで牽引してきたラウラ・ベッティは息をひきとった。7月の暑い日にこの世を去った彼女を墓地で見送ったのはたったの5人だけであったという。その後、ボローニャのシネマテークは彼女に捧げる特集をいくつか組んだ。ちなみに彼女の祖父はボローニャ大学の学長も務めた言語学者である。ラウラ・ベッティは、キャバレーやレヴューの歌手として舞台で活躍し、『甘い生活』（1960）、『アロンサンファン』（1974）、『1900年』（1976）といったイタリア映画を代表する作品に出演し、パゾリーニのもとでは、『テオレマ *Teorema*』（1968）、『カンタベリー物語 *I racconti di Canterbury*』（1972）で個性的な演技をみせる。皮肉なのが、『エクソシスト』（1973）の迫力ある吹替で一般に知られるところになってしまったことだ。彼女の吹き替えといえば、パゾリーニ作品にもいくつか例があり、『ソドムの市 *Salò o le cento venti giornate di Sodoma*』（1975）のヴァッカリ夫人は忘れずにおきたい（フランスでは、亡くなる数日前にパゾリーニが監修した仏語版こそが「オフィシャル」と主張されるが）。いちはやく 1978 年にパゾリーニの伝記『パゾリーニの一生 *Vita di Pasolini*』を発表した、弟子のエンツォ・シチリアーノ Enzo Sicilianoはもはやパゾリーニ研究の第一人者ではなかった。彼は、パゾリーニ回顧年の最中、2005 年 7 月に亡くなる。2003 年に完結した全集の編纂は、こうしたローマの人脈とは遠いところでニュートラルに行われていた。

パゾリーニをめぐる言説の担い手の変化の契機は、まさしくメリディアーニ叢書におけるパゾリーニ全集の刊行にあるだろう。1998 年にはじまり、5 年の間に最終的には全 11 巻という前例のない大規模プロジェクトとなった。ちなみにイタリア文学を代表する詩人ジャコモ・レオパルディですら 10 巻である。このとてつもない作品量に、評論家フィリッポ・ラ・ポルタ Filippo La Portaは「アンソロジーが必要」と即座に悲鳴を上げていた（L'Unità紙 2003年5月17日付）。たしかに未発表の原稿を大幅に取り入れることに当初から大きな反発があった（アントニオ・トリーコミ Antonio TricomiのL'Indice誌 1999 年 4 月号の書評など）。実際全集では、生前に刊行されたもの、未発表であったものが入り乱れ、どれが正当なパゾリーニ作品 corpus なのか見極めるのは困難である。客観的な検討の土台ができたとはいえ、同時に、どうにも扱いようのない巨像＝虚像が提示されてしまったのだ。ゆえにそれまで決まりきった定義に頼ってきた、パゾリーニに「近かった」人々の発言は控えめにならざろうえなくなった。

しかし 2005 年 11 月 2 日の命日が近づくにつれ、パゾリーニをめぐる言説は反動的かつ保守的になる。このような展開に、筆者は残念に思うと同時に「やはり」という気がした。パゾリーニによって町のごろつきから映画監督となった弟子のセルジョ・チッティは、30 回目の命日を目前にした自らの死の間際まで「パゾリーニの死の真相を知っている」と主張した。またもやパゾリーニの「死の謎」に関心が集められてしまうのだった。ちなみ

に彼の説に新しい発見はなく、パゾリーニ殺害の前にチネチッタのスタジオで起こったネガ盗難事件のゆすりがうまくいかなかった腹いせ、というものだった。以前から唱えられていた説だが、確かに『ソドムの市』のネガは盗まれているけれども、同時にフェッリーニの『カサノバ』(1976)も被害に遭っていたので、パゾリーニだけがねらわれるのは辻褄が合わない。唯一、公式にパゾリーニ殺害犯と認定されているピーノ・ペロージ“カエルのピーノ”は国営放送に登場し(これで何度目か)、やっと複数犯であったことを認めた。とはいえかつて裁判所の判決にも記された公然の事実であった(「未特定者との共犯」と1979年にペロージは裁かれた)。チッティの告発を受けてお決まりの再捜査請求が出され(その後却下)、さらにはどちらかというとパゾリーニ後の若い世代に属する評論家ジャンニ・デリーアGianni D'Eliaまでもが、未完の小説『石油 *Petrolio*』に死の真相があるなどと言い出した。物語の途中、「覚書その21、エニへのスポット」(ENI「炭化水素公社」はイタリアの石油戦略をうけもつ電力供給公社)はなぜ本文が抜けているのか、重大な秘密を含んでいた原稿が盗まれ、さらにパゾリーニは消されてしまったのではとの推論である(*L èresia di Pasolini. L àvanguardia della tradizione dopo Leopardi,* Milano, Effigie, 2005などにおいて)。すぐさま反論が上がり、パゾリーニの姪で版権継承者グラツィエッラ・キアルコッシGraziella Chiarcossi(文献学の大家アウレリオ・ロンカッリアの弟子)は、そのような盗難はなかったと証言している(La Repubblica紙12月31日付)。2006年に生誕100年を迎えたエニの元総裁エンリコ・マッテイの1962年の飛行機事故死は、未だタブーで陰謀が解き明かされることはない。パゾリーニの死とマッテイの死が、共にミステリアスに扱われて、いかがわしく重ねあわされるというレベルにまで後退してしまった。

エンリコ・マッテイといえば、公社に身をおきながらも、アメリカやイギリスの石油メジャーを“セブン・シスターズ”と呼んで果敢に挑戦を挑み、また原油国にOPEC結成をはたらきかけたイタリアの雄である(もちろんクリーンでない面も多々あるが)。1950年代から1960年代にかけて、同じようなエネルギー問題を抱えていた日本でも注目され、今なお出光佐三とも比される存在である。マッテイは生誕100周年を2006年にむかえ、イタリアで再び話題となった。その動きにあわせたのか、2005年末にはパゾリーニの件の小説『石油』が、1998年に出た全集版とは異なる新たなエディションでオスカル・モンダドーリ叢書に入れられた。改めて校訂を行ったのは、全集も担当したシルヴィア・デ・ラウデであるが、マッテイ事件につながる「陰謀説」をにおわせるような新注釈といい、真っ黒の表紙といい、どこか話題作り先行型の出版であった(彼女は文献学の基礎もあやしい)。パゾリーニといえばスキャンダルという一般のイメージをあおる動きに加担しては研究者としておしまいである。パゾリーニ自身は、スキャンダルすなわち「動転し憤ってさわぎたてること」をブルジョワ的態度として忌み嫌ったのを思い出してほしい(1963年のドキュメンタリー映画『愛の集会 *Comizi d àmore*』の電車内でのシーン、「あなたは憤ってさわいだりscandalizzarsiしますか」とパゾリーニは一等車の乗客である紳士にたずねる)。

『石油』とは1970年代のイタリアのアレゴリーであるが、作者パゾリーニがかぎとっていたのは、いわゆる「鉛の時代」の空気であった(もちろん「鉛の時代」とは1980年代になってから作られた用語である)。これまで「鉛の時代」は、1969年12月12日のミラノのフォンターナ広場にはじまるとされていたが、パゾリーニはそれよりはるか以前のマッテイ事件を起点とする時代観をもっていたに違いない。しかしパゾリーニの『石油』とは関係なく、こうした1960年代から1970年代を一続きでみなす傾向は、いまや一般に浸透しつつある(さらにはイタリアのフリーメーソンP2の発覚する1980年代までも続く)。つまり1968年や1977年の「革命」による断絶はない、とする見方である。少なくともイタリアの国家statoの在り方についてはそう言えるかもしれない。

没後30周年オマージュとマエストロ待望論

さて筆者自身はなにをしたか。やはり2005年は特別な年であったかもしれない。先に、ボローニャ大学でパゾリーニについての博士論文を提出した、と書いた。他にも2005年3月にフィレンツェのヴェッキオ宮殿の二百人広間を会場とし、「象徴と時代」文化協会Associazione Segni e Tempiによって催されたパゾリーニについてのシンポジウムで報告を行った。同年2月に90歳で亡くなった詩人マリオ・ルーツィが代表を務めていた協会である。このシンポジウムへの参加を、フィレンツェが生んだ20世紀を代表する詩人へのオマージュとしてもとらえていた。さらにボローニャのパゾリーニ財団との共催とあっては、ボローニャとフィレンツェで活動する筆者が出ていかないわけにはいかない。そこでデビュー時のパゾリーニにおけるルーツィの影響について語った。うったえるべきは、フリウリ方言で書かれた有名なパゾリーニの処女詩集『カザルサ詩集 *Poesie a Casarsa*』(1942)とルーツィの散文集『エーベ日記 *Biografia a Ebe*』(1942)の同時代性であり、両タイトルに認められるaという前置詞の破格的な用法がいかにも錬金術派(エルメティズモ)的であることだ。そうパゾリーニ自身も評しており、ルーツィの影響を認めるが、下って1950年代末に2人は論争を行う。パゾリーニはルーツィに代表されるエルメティズモを批判し、過去のものとして清算しようとする。それは自らの作家生命への危機感ゆえであり、案の定、1960年代に入るやいなや、今度は「最新詩人たち」によってパゾリーニの文学が否定される。

2005年12月のフィレンツェ大学イタリア文学科でのパゾリーニ・シンポジウムには著者は不参加におわる。せめてパゾリーニの専門家が中心となって全体をオーガナイズしてほしかったのだが、結局、散漫なプログラムとなった。フィレンツェ大学のマルコ・マルキはパゾリーニについてこれまで折に触れ書いているが、3月の会には参加したものの12月の会には関わらなかった。

これまで30回忌の報告をしつつ、最近のパゾリーニを巡る動きを描いてきた。あらためてパゾリーニ現象について考えてみると、いま彼が持ち上げられるのは、主に1970年代前半に書かれた社会評論ゆえであるといえよう。保守派を代表する新聞「コッリエーレ・デッラ・セーラ」などでの連載をまとめた『海賊論集 *Scritti corsari*』(1975)や死後出版となった『ルター派書簡 *Lettere luterane*』(1976)における文明批判、義務教育撤廃、反テレビ、アルカイックな過去へのノスタルジー、反進歩、反グローバル化、反ヨーロッパといった主張が、最近になって共感を得ているのである。21世紀になってはじまった混迷期における予言者=預言者期待論がパゾリーニに向けられた。いわばイタリアでよく言われる「マエストロ」(師)の不在に対し、パゾリーニはなんらかのかたちで応えてくれる。カリスマ待望論ならぬマエストロ待望論である。マエストロとしてのパゾリーニ像は、たとえば現在もイタリアの良心として注目を集める前民主党党首ヴァルテル・ヴェルトローニについての記事において、学生時代の彼がパゾリーニと共に映っている写真がしばしば用いられることからも確認できる(Il Venerdì誌 2009年8月21号など)。パゾリーニは現在のリーダーの洗礼者であった、ということなのだろう。

盟友ラウラ・ベッティが監督した2001年のドキュメンタリー映画『パゾリーニ　夢の論理 *Pasolini: la ragione del sogno*』(翌年の東京のイタリア映画祭で上映)の最後のシークエンスでは、合成によって現在のニュースの現場にパゾリーニが立ち会い、「現代の英雄」として描かれる。主に左派の知識人や若者に支持されるが、それだけでなく右派の人々にもうけがよく、これは生前の状況からは考えられないことである。彼はイタリアの左翼や若者からもそっぽを向かれていたのだから。1990年代末からパゾリーニは、「良識」としての保守を吸収してきたが、離婚反対や中絶反対を唱えるのはむしろ、欺瞞を斥け、離婚や中絶が可能であれば即リベラルというわけではない、という逆説による批判的態度の表明であることに気付くべきであろう。

時代遅れの詩人

実際、彼の社会評論がアクチュアリティをもつか疑問である。たしかに「均一化 Omologazione」、「非文化 acculturazione」、「文化の抹殺 genocidio culturale」、あるいは「人類学的変質mutazione antropologica」などと今では頻繁に用いられるキャッチフレーズを流布させたのはパゾリーニである。しかしこれらの用語のもとにはグラムシがいたことを見逃してはならない（アントニオ・グラムシの用語法について、筆者は2009年2月にボローニャ大学イタリア文学科でレクチャーを行った）。それに、パゾリーニの友人かつライバルであった詩人フランコ・フォルティーニが喝破していたように、1960年代に社会学の分野ですでに言われていたことをパゾリーニは繰り返したにすぎない。とはいえパゾリーニにおいてはマスメディアの使い方が新しく、必ずしも大衆の支持は得られたわけではないが、1970年代の時流に乗ることは果たされたとはいえよう。テレビに代表されるメディアの批判をさかんに行っていたパゾリーニだが、実はそれとうまくたわむれ利用する術を知っていた。パゾリーニを偶像視する向きには不快かもしれないが、この点は指摘されるべきである（たとえば、1970年の『デカメロン *Decameron*』がポルノとうけとめられてヒット作となったのは、予想外というよりねらいのうちだったのではないか）。メディアをうまく使ったが、やはりパゾリーニに新しい主張はなかった。1960年代においてすでにイデオロギーの消える時代、テロの時代の到来は予想されており、実際1970年代はそのとおりとなった。

予言者のように扱われるパゾリーニだが、実は1950年代の終わりに時代を読み誤っていた。それは新資本主義の到来が見抜けなかったことを意味する。新資本主義とは高度成長時代、マスの創出（プチブルの出現）、規範の見直し、ヒエラルキーの崩壊などといった一連の現象を伴って生起したものである。戦後に流行ったネオレアリズモでもなく、1950年代半ばに興った実験主義でもないといわれるなか、先に書いたように、パゾリーニは「時代遅れ」とみなされるようになった。もはや文学は、ブルジョアあるいは知的エリートの戯れではありえず、新前衛派へと向かう。文学は終わり、パゾリーニは文学的に終わった。まさしくこの時期に彼は映画を撮りはじめた。と同時に、文学的に終わった詩人、時代遅れの詩人、「もと詩人」として書き続けていく。

「もと詩人」としての姿勢は、機会に応じて詩を書くことにあらわれる。1962年からは、映画台本への付録（映画撮影の合間に書いたという体裁で）、あるいは散文の合間に挿入されるものとして詩が発表される。詩の不可能性、または不可能性における詩は、1960年代における言語一般の変化によってひきおこされたとも考えられよう。フリウリ方言詩でデビューし、イタリアにおける純粋詩を標榜していたパゾリーニには常に詩語の問題は切実であった。もともとイタリア語ではなく方言こそ詩に適していると考えていたパゾリーニにとって、イタリア語の変質に伴い、詩語そのものの概念を変えなければならない事態となっている。それが「もと詩人」としての再出発につながったのだろう。1960年代半ばにいたっては、『実験室より（マルクス主義的言語学のための詩的覚書）*Dal laboratorio (Appunti* en poète *per una linguistica marxista)*』（1965）に代表されるように、言語学的、さらには文化人類学的、記号論的なアプローチによる評論活動に精を出している（新たなアカデミズムへの接近は多分にジェスチャーでしかないようにも映る）。そうして書き貯められたものは1972年の論集『異端的経験論 *Empirismo eretico*』にまとめられることになる。

「もと詩人」の詩とは、「〜のような詩」である。たとえば「抒情詩のような詩」の例となりうるのが、1974年の詩集『新しい青春 *La nuova gioventù*』であり、今日パゾリーニの最も美しい作品集とされる1954年の『最良の青春』のリメイクとなっている。しかも1954年にフリウリ方言で記されていた詩は、1974年の新しい方言である折衷語（テクニカルな標準イタリア語と方言の混声言語）によって書き直される。そこには、1970年代におけるアルカイックな文明の喪失にあわ

せた内容の改変も伴われる。こうした根本的な社会考察と言語的な作業を経た詩は、あくまでも偽抒情詩的としか呼べなくなってしまう。だから詩人本人によって、『新しい青春』は評論集『海賊論集』とあわせて読むべし、と指定される。かつてパゾリーニが志向した純粋詩は不可能となっているのだ。

1970年代の詩

ここで具体的に、「もと詩人」の「抒情詩のような詩」となる例をひとつ挙げてみる。1970年の「瞑想の語り *Meditazione orale*」である。映画音楽の大家であるエンニオ・モッリコーネの旋律のためにあえて用意された、まさしく「共作」と呼べる詩である。よって1960年代に頻出した、機会に応じて作られる、頼まれ仕事としての詩である。詩はもはやこのようなものでしかありえないというひとつの例となろう。

ちなみに注文主はローマ市当局であり、遷都100年を記念したレコード向けであった。ローマの下町すなわちボルガータの詩人という1950年代のかつてのイメージをみずから再生産しつつ、ラジカルな社会構造の変革（例の「人類学的変質」）を抒情詩的感性でもってとらえている。自己のパロディという手段を用いた新たな社会批評のかたちといってもいい。

詩人本人の朗読と、モッリコーネの現代音楽（実は彼の持ち味はこれにあり、パゾリーニ監督『テオレマ』での仕事が思い出される）が重なりあった作品であり、良質の録音が残っている。今ではインターネット上で比較的簡単に見つけられるだろう。

瞑想の語り

ローマは植民市であった
バカンスに訪れるところ
多くの人が住んでいた、社会的立場を明確にしない詩人たちが、
役人からは自由でも、警察にはいくらか畏れを抱いている。
20世紀には晴れ間が足らなかった。
消えゆくものは刹那の苦しみをもたらす。
唯一真なる苦しみは夢のなかにあった。夢のなかでは
この街を永遠に去らねばならないようだった。
植民市を惜しみ泣くことはない、それでもこの軒の下で大半の歴史が流れていった
（日没の色でもって）
非情な歴史だった。
ファシストとリベラルのあいだの賭けだった。
意外にもリベラルが、臆病でどこか間抜けだったが、
（度胸のない南部人たち）
賭けに勝った。強き者がうち負かされたのだった。
国家機関が知らぬところで大半の歴史が流れていった
しかし涙がこの街の夢に降り注いだ、
奇跡のように、まったく理解不能だ、
激しい涙が、宇宙に降り注いだようだ、
帰還なき出発のための別れの涙
それからバカンスがまたはじまり、
孤独のあくなき願望もはじまる。
このアスファルトの上を大半の歴史が流れていった
8月の太陽にもびくともしない岩の壁に沿って、
大半の歴史が流れた。年老いた議員たちが、かくれず
厳かにたたずんで
自らの場所を取り戻す、笑みと厳めしさで
支持者に向けて、世界と調和しつつ。
レアリズモは人それぞれ！
輝かしい北部と秘された南部において
賭けに勝った、
民衆の笑みかプチブルの真面目さか
とにかく再確認された自負が
階級から解放された詩人の巡礼を再開させ
義務も予定もない詩人
ひとしきり泣いたあとに、ありえないことに
あの孤独の欲求。
自分にそのままとっておいた、完全なる幸せを与えてくれる孤独。
夢のなかで泣いていた目は
いまや見つめている

制限時間も終わりもなく。
この先ずっと昼や夜を使って。
歴史が忘れていたことしか起こらない時間。
もちろんだとも、本気じゃないさ。
バカンスだったんだ
まったく非難のもとでしかなかった
ローマは新たな戦いの中心地だった。
この野蛮人はどこからやってきたんだ？
なに、ここで生まれたのさ、メルラーナ街、エウクリデ広場、
チェントチェッレなんかで。だいたいいくらか元気がないのがいい。
そうすれば彼らの父親の顔そのものだ、敗北の父や勝利の父、
とはいえ一様に過去にうもれている、涙がなんの意味もなく、
孤独の欲求は本気でない。
歴史はふたたび流れはじめた、
しかし午後４時の駐車場には静寂と太陽があり、
コンコルディア宮のうらの空き地には誰もいなかった

P.P.P., *Meditazione orale* [1970], da *Poesie per musica*, in Id., *Tutte le poesie*, vol. II, a cura di Walter Siti, Milano, Mondadori, pp. 1325-1326

意味がとれたとしても不可解な詩である。ただ「永遠の都」の記念事業であることを鑑みれば、パゾリーニにとってのローマが、処女長編小説『生命ある若者 *Ragazzi di vita*』（１９５５）や初監督映画『アッカトーネ *Accattone*』（1961）の舞台となった前近代的なスラムの集合体であるユートピア（理想郷かつ非存在との意味における）ではなく、1970 年代的な陰謀うずめく官庁 Palazzo（すなわち権力 Potere）の街とのメタファーを帯びる転換期をむかえていることはわかる。しかし Palazzo は、ここではまだ「国家機関 Ministeri」と直接的に呼ばれる。1975 年の死の直前に纏められた『海賊論集』で繰り広げられる Palazzo 論から、その後、ジャーナリストであるエンツォ・ゴリーノが取り上げることで、この語は政治用語として一般にも浸透した（Enzo Golino, *Pasolini: il sogno di una cosa. Pedagogia, eros, letteratura dal mito del popolo alla società di massa*, Bologna, Il Mulino, 1985）。同じくパゾリーニの指摘した「ホタルの消滅」が、いまでは1970年代のトポスとしてアルカイックな文明の消失をあらわすようになっている。

注意すべきは、この時期の詩を、作者自ら「まずい詩」と呼んでしまっている点である。この定義が実際に用いられたのは、パゾリーニが学生運動に異をとなえた、1968 年の詩「イタリア共産党を若者に*Il PCI ai giovani!!*」に付した「弁明」の文中である（*Apologia*, in «Nuovi Argomenti», n.s., n. 10, aprile-giugno 1968, ora in P.P. Pasolini, *Bestemmia: tutte le poesie*, Milano, Garzanti, 1993, v. IV, p. 695、詩の邦訳は四方田犬彦、「藝術学研究」、第４号、明治学院論叢 544、1994.3、pp. 60-63）。対極として念頭にあるのは１９４０年代から１９５０年代の自己愛の詩、それも方言詩であったろう。「まずい」と言ってしまうのは、もちろん方便であるが、1960 年代末の扇動的な態度さらには美的判断の回避のためであったろう。

一方で 1971 年から 1973 年にかけて失恋の悲しみ（監督作品の多くに出演したニネット・ダヴォリが結婚したことによる）をこめた連作『趣味のソネット *L hobby del sonetto*』をひそかに書きためていた。もちろんシェイクスピアの模倣であって、純然たる美しい詩だが、当時発表されることはなかった。いわゆる抒情詩を依然として書けたわけだが、それはきわめて個人的、自らにとっておくべきものであって、「まずい詩」や散文のような詩とはまったく異なる扱いであった。

上に例として挙げた詩と同種のものが、『テオレマ』（1968 年当時としてはめずらしくメディアミックスとして映画と同時に小説が発表されている、邦訳 1970 年講談社刊）の巻末、あるいは『王女メディア』（邦訳 1973 年講談社刊）の付録に、米川良夫氏の訳で確認することができる。すなわちそれらは異なる構造のものなかに紛れ込むもの、パゾリーニが生涯通して好んだ「パスティーシュ」を生みだすものとして副次的に存在している。

結

当時まったく見向きもされなかったパゾリーニの「まずい詩」だが、皮肉にも、近年編まれるアンソロジーにおいて1970年代以降のイタリア詩を代表するものとしてあらためて評価されている（たとえば *Il pensiero dominante. Poesia italiana 1970-2000*, a cura di Franco Loi e Davide Rondoni, Milano, Garzanti, 2001）。

一般的にもいま1970年代の詩に関心がいく。というのも時代自体があまりに重すぎて、そのときしか通用しない詩が残されてしまったからだろう。もちろん詩に限った現象ではなく、1970年代の芸術はあまりに時代性が強く、その時にしか共感・共有できない性格をもつ。当時、そのような事態を自覚していた人は少なかったろうが、パゾリーニは極めて意識的であり、時代性のなかにあえて自分を投企したのではないだろうか。時代性とは、それに居合わせた者にとってはまったくアクシデンタルなものである。もともと普遍を目指すべきものである詩を、恣意性に委ねてしまう確信犯パゾリーニであった。

スキャンダラスな存在としてパゾリーニをみなし、死の瞬間ばかり取り沙汰する傾向に抗って、無作為に作品を取り上げてパゾリーニを照射してみたい、それが当論考の隠れたねらいのひとつであった。それは死を特権化しないためである。パゾリーニの最初期の詩について討論していたとき、全集の監修者ヴァルテル・シーティは「パゾリーニにとって死はさほど意味はない」と言った。死はそれくらい当たり前であり、死は遍在するということでもある。

本稿では昨今の「パゾリーニ熱」について述べてきたが、最後に2007年より毎年発刊されている国際的な学術専門誌「パゾリーニ研究 Studi pasoliniani」を紹介しておきたい。パドヴァ大学のグイード・サンタート教授を中心に編集がなされ、パゾリーニ学の確立と今後の新たな展開を主眼としている。著者の論文「日本におけるパゾリーニ *Pasolini in Giappone*」が2010年秋発行の第4号に掲載決定との過日の知らせと共にこの小論を終えたい。

リバプール、海商都市の歴史観光

Liverpool-Maritime Mercantile City, a historic city tour

種田　　明
文化政策学部文化政策学科

Akira OITA
Department of Regional Cultural Policy and Management, Faculty of Cultural Policy and Management

本研究は２００８年欧州文化首都リバプールを分析の対象にしている。中世の小さな漁村は、１８世紀第一四半期から１９世紀初頭まで「（いわゆる奴隷）三角貿易」の中心の港として繁栄した。奴隷貿易廃止（１８０７年）以後は、南北アメリカ・オーストラリアおよびその近隣やその他への海外移民の送出港として、ある研究者によると９００万人（かそれ以上）のヨーロッパの人びとを見送ってきた。
こうした「負の遺産」にもかかわらず、２００４年にはユネスコ世界遺産リストに登録され、２００８年には欧州文化首都に選定されている。　（文化政策研究科長研究費０８調査研究報告 / 種田担当分）

This paper analyzes Liverpool. Its waterfront area of the city, Liverpool-Maritime Mercantile City, was granted UNESCO World Heritage and was registered with the WHC-List in 2004.
Liverpool, but we know was mainly in the 18th and in the beginning of the 19th century the apex of the 'slaving triangle' in which manufacturing merchandise of Britain was traded for African slaves, who were then shipped to the West Indies (now Caribbean) and America where they were in turn exchanged for raw cotton, sugar and tobacco.
Liverpool, after the abolition of the trade (1807), was the port that continued to grow and to cope with wholesale British and European emigration, which a researcher counted up to 9 million people leave for the Americas, Australasia and so on between 1830 and 1930.
Although Liverpool has its 'negative' inheritance, the city is selected as European Capital of Culture for 2008.

奴隷貿易、負の遺産を見すえて

リバプールは近世以降、世界有数の港湾都市として発展したところである。また、１９６０年代に一世を風靡した音楽グループ“ビートルズ”の出身地であり、サッカーではイングランド・プレミアリーグ（プロ１部）でビッグ４（*）の一角をなす人気チームを擁する大都市でもある。

＜＊リバプール、マンチェスター United、とロンドンのチェルシー、アーセナル＞

しかしながら世界的海港都市リバプールの発展の、そのかなりの部分を担ったのは１８世紀を最盛期とする“奴隷貿易”であった。ヨーロッパ中世から近世にかけての海上商業貿易の繁栄は、１５世紀までの「地中海⇔北アフリカ」諸都市を結ぶものから、１６世紀以降大西洋側の「カナダ、アンティル諸島（西インド諸島）、西アフリカ ⇔ イギリス・フランス・オランダほか大西洋につながる諸国」の間の、いわゆる三角貿易へと移行していった。この間、約４００年間、１６～１９世紀にわたりアフリカと北アメリカ‐ヨーロッパ間、大西洋を横断する奴隷貿易において、取引された奴隷の約１０分の１、約１５０万人のアフリカ人が船でリバプールに、またリバプールを経由してブリストルやロンドンその他へ輸送されたのである。

リバプールから最初に出港した奴隷船はリバプール商人の船で、１６９９年１０月３日２２０人のアフリカ人をバルバドスへ運んだという。それから２０年、奴隷貿易はゆっくり発展した後、急激に成長する。１７５０年頃までリバプールからは、アフリカへよりも他の主要奴隷貿易港ブリストルやロンドンへ、より多くの船が出航していった。リバプール商船こそ、奴隷取引が禁止される１８０７年まで、奴隷貿易の中心に位置していたのである。奴隷貿易が合法だった最後の１５年間、リバプールは英国の奴隷取引の８０%、ヨーロッパの取引の４０%以上を扱っていたのである。(1)

奴隷貿易は、リバプールの形成と今日の大都市への発展に大きく寄与した。しかるに、「全体としての奴隷貿易がイギリス経済にどういう意味をもったかという問題は、これとは別に論じられるべき」（川北稔）(2) である。また一方に、奴隷貿易と砂糖プランテーション（西インド諸島）こそがイギリス産業革命を生んだとするグループがおり、他方には奴隷貿易やカリブ海の砂糖プランテーションは「誤った投資」だ、とするアダム・スミス以来

の説を支持するグループがいた。計量経済学的な手法によっても、奴隷貿易は100%以上の利益をもたらしたという見解がある一方、収益率は意外に低く、末期にはリバプールの商会の多くは破産状態にあったとする説もある。

さまざまな学説・数量計算があり、奴隷貿易に関しては推計で論じられることがほとんどである。諸説の中で一致している事実は、リバプールがイギリスの、さらにはヨーロッパの奴隷貿易の“首都”であったことである。人権侵害・人種差別を言うまでもなく、奴隷貿易はリバプールの「汚点、負の遺産」である。しかしながら奴隷貿易による発展こそ、リバプールに都市としての固有の歴史的文化的性格を付与し、都市インフラの背骨となったもので、これを抜きにしてリバプールを語ることはできないのである。

リバプールの港湾や市内にある産業遺産を含めた歴史遺産と博物館（後述）の展示・内容は、ほとんどが“18世紀リバプールの「奴隷貿易」「港湾設備」「都市」「商業」に関係するもの”である。以下にリバプールの成長・発展・展開をたどってみることにする。

都市リバプールの発展

現在、イギリスの十大都市の1つであるリバプールの人口は、約47万人である。（表（1）参照） 日英比較をすると、日本の政令指定都市（人口要件70万人程度以上）19と中核市[3]の39を加えた58市が、イギリスでは人口要件のみのベスト10で3位～10位に入ってしまう。また日本の海港都市でリバプールとほぼ同規模なのは、中核市の長崎市（45．7万人：2005年）、横須賀市（43.3万人：同）、人口要件だけでなら倉敷市（46.8万人：同）である。

都市については、地域・民族・宗教などの違いから歴史研究の4つの領域〔日本・中国・ヨーロッパ・イスラム圏〕で、それぞれに「都市論」「都市史」「都市政策」があり一般論としては論ずることができない。したがってここで、ヨーロッパの都市の発展はいったいどのようなものであったか、を人口の増加の変遷だけから英・仏比較し300年を概観したのが次の表（1）である。

周知のように、第2次大戦まで輸送の主役は海洋・河川・運河の利用、すなわち船舶であった。表（1）の都市を地図で位置確認してみると、内陸都市で河川・運河に沿う少数をふくみ、すべての都市が物流の拠点である「港湾」設備をもち、水運で他とつながっている。

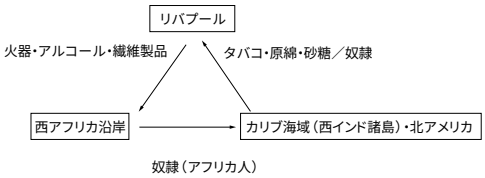
リバプールは、1207年にジョン王から「チャーター（自治都市勅許状）」を獲得したが、その後のほぼ500年間はちっぽけな“漁

表（1）：英・仏十大都市の人口比較[4]

イギリス 1700年		2001年	（万人）	フランス 1700年		1800年		2004年	（万人）
1)ロンドン	575000	1) ロンドン	717.2	1)パリ	500000	1)パリ	550000	1) パリ*	964.5
2)エディンバラ	36000	2) バーミンガム	97.1	2)リヨン	97000	2)リヨン	109000	2) マルセイユ	79.6
3)ノリッジ	30000	3) グラスゴー	63.0	3)マルセイユ	90000	3)マルセイユ	101000	3) リヨン	46.8
4)ブリストル	20000	4)リバプール	46.9	4)リール	60000	4)ボルドー	96000	4) トゥールーズ	42.7
5)エクセタ	14000	5) リーズ	44.3	5)ルアン	50000	5)ルアン	80000	5) ニース	33.9
ニューカスル	14000	6) シェフィールド	44.0	6)ボルドー	45000	6)ナント	77000	6) ナント	27.6
7)グラスゴウ	13000	7) エディンバラ	43.0	7)トゥルーズ	43000	7)リール	56000	7) ストラスブール	27.3
8)アバディーン	12000	8) ブリストル	42.1	8)ナント	40000	8)トゥールーズ	50000	8) モンペリエ	24.5
ヨーク	12000	9) マンチェスター	39.4	9)アミアン	35000	9)ストラスブール	49000	9) ボルドー	23.0
10)コルチェスタ	10000	10) レスター	33.1	10) オルレアン	32000	10) オルレアン	48000	10) リール	22.2
ダンディー	10000							パリの(*)印:都市的地域を含む、の意。	
グレート・ヤーマス	10000								

村”にすぎなかった。1700年（表（1））ではまだまだ十大都市には入っていない。ということは、人口が1万人にも達していなかったということである。ところが1715年、リバプールに最初の奴隷貿易のための商船建造ドックができると、リバプールは「三角貿易」（図（1））の一角として重要性を増し、1807年の奴隷貿易廃止までに一気に大都市の仲間入りを果たしていったのである。

図（1）：三角貿易（slaving triangle）



ロンドンやブリストル、あるいは産業革命期に勃興した諸都市と比較しても、また当時イギリスのライバル・フランスの諸都市と比較しても、リバプールの固有の歴史的文化的性格（＝奴隷貿易）はきわだっていた。フランス奴隷貿易には、三角貿易の「投資（＝奴隷船の艤装に出資）者は多数・多層〔商人以外からも〕」だったこと、一港でなく「多数の港（ナントほか小港町ラ・ロシェル、サン・マロ、さらに大都市ボルドー、ルアンまで）」が奴隷船の母港であったという特徴があった。川田順三は：

> 三世紀にわたる奴隷貿易の結果、数千万人という規模（…略…）の黒人がアフリカから連れ去られ、北・中・南アメリカ諸国の多くは、その後遺症として今日でも、黒人問題をかかえている。しかし奴隷貿易で多くの利益を得たフランスの港町を今歩いても、博物館や古文書館で調べないかぎり、これらの港町がそういう暗い過去をもっていることはわからない。…略…[5]

という。リバプールの国際奴隷博物館や市内の建造物の標識に、奴隷貿易関連事項が明示解説されているのとは対照的である。

さらなる同時代の比較対照のために、鬼頭宏の日本の都市人口のデータをみてみよう：[6]

> 江戸は幕府所在の政治的中枢都市であり、巨大消費都市として、大坂に次ぐ経済センターとして、寛永期（＊）には町方人口だけで15万人、元禄期には35万人、享保期には50万人、武家人口をあわせ100万都市となった。
>
> 石山本願寺の寺内町、秀吉による政治都市としての歴史をもつ大坂は江戸時代に入り、全国各地の商品や年貢米の集まる中央市場の地位を確立した。大坂三郷の人口は町人が大多数を占めるが、寛永期に28万人、明和期（＊）には42万人を数えた。
>
> 宮都として長い歴史をもつ京都は、寛永期には全国一の41万人の人口があったが、享保期には34万人に減少して、江戸・大坂に次ぐ第三の都市になってしまった。
>
> 江戸時代中期以後、人口10万人以上の都市は三都に金沢・名古屋を加えて5都市、人口1万人以上の都市は50以上存在した。このほか各藩の大名城下町や港町・宿場町・鉱山町・寺社門前町に加え、地方の比較的小規模な人口数千人程度の在郷町の発展もみられた。
>
> （参考（＊）寛永（1624‐43）；
> 元禄（1688‐1703）；
> 享保（1716‐35）；
> 明和（1764‐71））

海港としてのリバプール、そして現在

リバプール大聖堂は港からほど近く、イギリス国教会（アングリカン・チャーチ）建築として第1級のものといわれる。かつては修道僧が、小舟でマージー川をわたっていたと記録にあるが、どこの修道僧なのか不明である。この小舟が現在の「マージー・フェリー」になったのである。マージー川河口にドック（前記：1715年）ができた時期はまた、“産業革命”が始動しはじめる時期でもあった。近代の工場制機械工業の先駆けとなるR・アークライト（1732-92）がクロムフォードに水力紡績機を稼働（～1991年まで操業）させたのは1783年。拠点の産業都市マンチェスターは、リバプールからわずか40kmほど東に位置する。リバプールはマンチェスターと川と運河・道路そしてのちに鉄道で結ばれ、産業革命の拠点と貿易の拠点（海港）として、楕円の2つの重心のようにして発展していったのである。

エイザ・ブリッグズは「のちにブリストルに代わって発展をとげる北部の港湾都市リヴァプール（ママ：以下同）は、1800年には王国で二番目に大きな都市となり、「優雅な邸宅」と堂々たる公共建築を誇りにしていた」。そしてさらに「社会史にとって画期的な出来事である1801年の最初の社会調査では、2万人以上の人口をもつ都市の数は15にすぎなかったのが、1851年に28、1891年には63を数えるまでになった。」「…マンチェスターには多数の大「資本家（キャピタリスト）」が存在し、…一方のバーミンガムには小規模の雇用主が多かった。商業の町リヴァプールはまたべつの特徴をもっており、膨大な数の季節労働者をかかえていた。」(7) と記している。

（下線、和数字を算用数字に変換：種田）

すなわち、奴隷貿易の廃止後もリバプールは発展を続けたのである。リバプールのドックの規模は、港湾をとりまいて全長約7哩（マイル）（約10km）にもおよび、リバプール港が扱ったのは普通貨物の輸送だけではなく、ヨーロッパからアメリカ・オーストラリアとその近辺の南洋諸島への大量の“移民”（1830年～1930年に推計約900万人：海事博物館資料より）であった。現在、観光の中心となっているアルバート・ドックが開設したのは1846年。そして歴史上に著名な船舶「タイタニック」「ルシタニア」「エンプレス・オブ・アイルランド」号等は、リバプールで建造されたか、リバプールから出港したものであった。奴隷から移民へ、三角貿易から貨客輸送・商業貿易へと遅滞なく移行・発展・展開できたことが、リバプールの現在につながったのである。

18世紀の中ごろ、マージーサイドはすでに発展の中心になっており、「リヴァプールの港湾計画も構想されていた。すでに1759年には、リヴァプールのある技師が人工運河「サンキー運河」を建設していたのである。」「ペンニン山脈を横断するもっとも重要な水路、リーズ＝リヴァプール間運河は、1770年に着工され、1816年にようやく完成した。」(8) 運河時代の初期は馬車時代の全盛期でもあり、運河建設の最盛期（1790年代）はすぐに鉄道の時代にとって代わられるのであった。

現代、かつての奴隷の子孫がイングランドに逆流してくる事態へ眼を転じてみよう。リバプールも移民・（経済）難民を数多く抱えているのである。A・ブリッグズ（同上書）は次のように記している：(9)

…1948年以前においては、イングランドへの非白人系移民の数はごくわずかにとどまっていた。非白人系移民たちが「よく見かける」存在になったのは、1950年代のことである。初期には、旅行会社が派手な宣伝をうって、おもに西インド諸島からの出稼ぎを積極的にうながした。現地の低賃金と高い失業率とあいまって、イギリスの豊かさと当時の労働力不足が出稼ぎブームに拍車をかけた。1948年に、ジャマイカだけで547人が入国した。…1955年になると、入国者の数は1万8561人にものぼり、その3年後には1万9920人になった。1957年以前は入国者の大多数が成人男性だったが、その年からようやく女性と子供の姿がちらほら見かけられるようになり、その後の2年間に、女性と子供の数は男性をしのぐまでになった。これは、入国者たちが定住する徴候のひとつであった。新たな移民たちは、そのほとんどがイギリスに「母国」としての期待を寄せており、かつ、イギリスに入国して定住する権利（1948年の連合王国国籍法で定められていた）をもっていた。…略…

偏見と衝突が渦巻く中で、人種差別（レイシャル・ディスクリミネイション）（まだ「人種的偏見（レイシズム）」とは呼ばれていなかった）や移民制限、治安活動などの諸問題がようやく議論されはじめた。…ドイツやスイスに労働者として移ってくるトルコ人やスペイン人やポルトガル人とはまったくちがって、イギリスに働きにくる移民はイングランドとなんらかの文化的つながりをもつ旧植民地の出身者であった。にもかかわらず、彼らがやって来る背景や彼らの生活様式について、イングランド人が知っていたことはごくわずかであった。忘れ去られていた歴史がいまやつぎつぎとよみがえってきた。カリブ海周辺からの移民ラッシュのあとには、インド亜大陸周辺からの移民が押し寄せてきた。…71年には移民人口が120万人になった。…略…

緊張が高まる中で1981年の（改正）連合王国国籍法は、「本国と植民地の住人に同一の市民権を与えていた「700年の伝統」に終止符をうち、市民権を3種類、すなわち本国人にたいする市民権、英領植民地住民にたいする市民権、英連邦加盟諸国の住民にたいする市民権」に区分することとなった。この間に、EC[ヨーロッパ共同体：現在のEU]への加盟（1973年）やメディアを通じてのアメリカ文化の影響、そしてその後のサッチャー時代（1979～1990年）を経た時点で、社会史家A・ブリッグズは言う「私たちは、（コンピューターを手にもって）イングランド社会の歴史がはじまった地点に舞い戻っている」のである、と。

リバプールは2004年に世界遺産に登録、そして2008年の欧州文化首都[10]に指定された。世界遺産、文化首都への登録・選定にあわせ、“マージーサイド”一帯はおよそ1億ポンド（約160億円）をかけた再開発と整備が進んだ。すでに7つの博物館施設[11]が開設され更新されている。なかでも「海事博物館」と、2007年《奴隷貿易廃止200年記念の年》に一部開館した「国際奴隷博物館」は、リバプールの「固有の歴史的文化的性格」を来館者に真正面から呈示している。市内各所には、文化首都の“イメージキャラクター”の犬が、象徴的な意味をあらわすように彩色され、たたずんでいた。

この彩色はいったいなにを象徴しているのだろう。そしてこれから先、これまでの歴史の汚点、負の遺産に正面から向き合ってきたリバプールはいったいどこへ向かっていくのだろうか。同市には「Mersey Waterfront Regional Park」建設計画があり、さらなる再開発が進捗し始めたという。それゆえ、リバプールの将来のキーワードは「海」「国際／世界」「人」ではないか、と私はいま考えている。

【注記・備考】

（1）“International Slavery Museum”（National Museums Liverpool, Liverpool 2007：博物館の解説パンフレット）から引用・略訳。また最近の研究では、当時のリバプールの富の少なくとも40%は奴隷関連事業からもたらされたものであると示唆されている。（同パンフより）

（2）川北稔（責任編集）『歴史学事典 1 交換と消費』弘文堂、1994年、p.643～645。

（3）地方自治法改正（1994年）で制度化された、人口30万人以上・面積100平方km以上の都市（39市）をいう。政令指定都市に準じた国の事務が移譲されるが、行政区の設置はできない。

（4）イギリス「1700年」、フランス「1700年」「1800年」の出所：深沢克己『海港と文明　近世フランスの港町』山川出版社、2002年、p.57（表3、表2、表4）より。イギリスの人口「2001年」、フランスの人口「2004年」は：『2006データブック オブ・ザ・ワールド―世界各国要覧と最新統計―』二宮書店、2006年より。

（5）川田順三「「善き野蛮人」から「野生の思考」へ」（二宮宏之編『深層のヨーロッパ』（民族の世界史9）山川出版社、1990年所収：p.193～224、引用はp.205～206）

（6）鬼頭宏『文明としての江戸システム』（日本の歴史19）講談社、2002年、p.147‐8。

（7）エイザ・ブリッグズ（今井宏/中野春夫/中野香織訳）『イングランド社会史』筑摩書房、2004年（原著は1994年：本訳書中には明記されていない）、p.279；302‐303。

（8）同上書 p.328，330：「ジョージ・スティヴンソンの「ロケット号」は1830年にリヴァプール＝マンチェスター間の機関車競走で勝利をおさめた。」（p.330）ここから鉄道ブームとなる。そして「鉄道熱」は「運河熱」をはるかに超えていたのである。

（9）同上書 p.482, p.484；p. 507

（10）「真のヨーロッパ統合には、お互いのアイデンティティーとも言うべき、文化の相互理解が不可欠である。」というギリシアの文化大臣メリナ・メルクーリ（当時）の提唱により、1985年より「欧州文化首都」制度が発足。…一年間を通して様々な芸術文化に関する行事を開催し、相互理解を深める事となりました。…後略…（http://www.eu-japanfest.org/ousyuu/index.html：2008年4月検索）

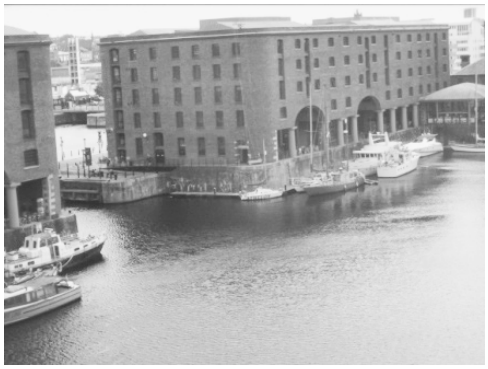
「開催地一覧」抜粋：

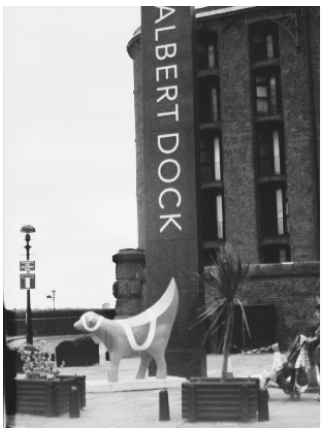
1985年　ギリシア/アテネ	2007年　ルクセンブルグ/ ルクセンブルク ルーマニア/ シビウ
1986年　イタリア/フィレンツェ	2008年　イギリス/ リバプール ノルウェー/ スタバンガー
1987年　オランダ/アムステルダム	2009年　オーストリア/ リンツ リトアニア/ ヴィリニュス
1988年　ドイツ/ベルリン	2010年　ハンガリー/ ペーチ ドイツ/ ルール[地域] トルコ/ イスタンブール
1989年　フランス/パリ	2011年　フィンランド/ トゥルク エストニア/ タリン
･･･中略･･･2000年はミレニアムを記念して9都市が指定された。	2012年　ポルトガル/ ギマランイス スロヴェニア/ マリボル
2005年 アイルランド/コーク	･････以下略･････
2006年　ギリシア/ パトラス	

(11)「リバプールの博物館」
（http://www.liverpoolmuseums.org.uk 2009.06.18.検索）参照：7つとは1）ワールドミュージアム・リバプール、2）ウォーカー・アートギャラリー、3）ナショナル・コンサベーション・センター、4）国際奴隷博物館、5）マージーサイド海事博物館、6）レディ・リーヴァー・アートギャラリー、7）サドリー・ハウスである。また冊子“Liverpool City Region Heritage Open Days 11－21 September 2008”（Liverpool Culture Company/Liverpool City Council,2008）には、文化施設・ツアー・イベントなど113件が紹介されている。

なお、リバプールの観光公式サイトは http://www.visitliverpool.com/（英語版）;（末尾がjpの）http://www.visitliverpool.jp/（日本語）である。

Photo（1）：　リバプール、港湾の点景





建築物や倉庫は補修され、さまざまな用途に再利活用され多くの人びとで賑わっている。ピア・ヘッドの三美神（Three　Graces）と呼ばれる建物（3つのビルディング）が造るスカイラインは、世界有数の眺望と称えられている。

【写真】（種田撮影 2008.08.16.；以下同）

Photo（2）：マージーサイド海事博物館

Photo（3）ビートルズ・ストーリー展示（マージーサイドの倉庫の地下）、入口

写真の右下の「犬」形デザインのオブジェ（ビートルズのジョン・レノンを模した）は、文化首都“イメージキャラクター”である。

Photo（4）：国際奴隷博物館入口：海事博物館に隣接

Photo（5）：国際奴隷博物館内の展示の１つ／著名黒人のポートレート集成

浜松市東区における地域福祉デザインのための現状調査（1）

A Report on Fundamental Research for Community-based Welfare Design in Higashi-ku, Hamamatsu City (1)

黒田　宏治
デザイン学部生産造形学科

Kohji KURODA
Department of Industrial Design , Faculty of Design

本稿は、浜松市東区内において、福祉サービスに携わる職員・市民からなる研究会を編成し、望ましい地域福祉デザインに向けての調査研究を行った活動の記録である。今回の調査研究の内容は、地域特性の把握を目的とした地域の健康診断の試行と在宅高齢者ケアの困難事例の調査・検討である。前者では、今回調査のレビューを経て方法的改善が課題である。後者については、継続的な情報収集・分析を経て、より包括的な地域福祉デザインの検討にも取り組んでいく予定である。

This report is a record of the activity that performed research for the desirable community-based welfare design with citizens engaged in community-based welfare in Higashi-ku, Hamamatsu city. The contents of this research are investigation for living environment evaluation and investigation of the difficult example of the at-home senior citizen care. About the former, the improvement of the investigation method is necessary. About the latter, I perform continuous research , to design a comprehensive community-based welfare system.

1．はじめに

2000年に介護保険法が施行され、今日の高齢者福祉の制度的基盤が整えられた。そして、2006年の同法改正により、被介護者である高齢者の尊厳の保持が掲げられるとともに、地域包括支援センターの設置、小規模多機能型介護の創設がなされるなど、地域に密着した福祉サービスの充実が図られている。また、2005年の障害者自立支援法の制定に伴い、障害者の施設・病院から地域への移行が進められるなど、総合的な地域福祉が方向付けられるに至っている。

しかしながら、地域福祉の現場では、公的な福祉サービスだけでは高齢者や障害者への対応が困難な例も指摘されるところであり、インフォーマルサービスとの補完、地域住民やNPO団体などとの連携やネットワーク化も模索されているところである。また、地域によって福祉ニーズは多様であり、一方で地域資源にも制約があり、地域福祉の充実には地域に即した具体的な問題抽出、解決方策検討が必要である。

しかも、2005年から2030年にかけて、日本の65歳以上の高齢者人口は1,000万人以上増加し、高齢者の一人暮らし世帯は387万世帯から717万世帯へと2倍近い増加が見込まれるなど、生活基盤の脆弱な世帯の急速な増加が危惧され、総合的な地域福祉システムの構築が急がれる状況である。

そのような地域福祉の置かれた状況も鑑みて、浜松市東区内に焦点をあて、当該地域において福祉サービスに携わる職員・市民からなる研究会を編成し、望ましい地域福祉デザインに向けての調査研究を行った。今回の調査研究の内容は、地域特性の把握を目的とした地域の健康診断の試行と既存の公的福祉サービスの枠内では十分かつ円滑な支援に難しさを有する在宅高齢者事例（困難事例）の調査・検討である。ここでは、それらの調査研究の実施状況について報告する。

なお、本調査研究を実施した研究会のメンバー構成、開催経過は次の通りである。

●さぎの宮地域福祉研究会
黒田宏治（静岡文化芸術大学　教授）：座長
脊古光子（NPO法人ねっとわあくアミダス理事長）
戸田昌代（浜松市　民生委員・児童委員）
協力機関：地域包括支援センターさぎの宮

●研究会開催経過（2009年）
第1回（6/16）調査計画の検討
第2回（6/22）調査計画の検討
第3回（7/11）地域診断の実施方法
第4回（8/27）地域診断の実施報告、困難事例の調査方法
第5回（9/3）地域診断の集計分析、困難事例の抽出整理
第6回（9/25）困難事例の検討・評価

また、困難事例調査の抽出・評価にあたっては、関口進（介護支援専門員）、薗田和夫（社会福祉士）の協力も得て実施した。

2．地域健康診断調査の試み

2-1. 調査の目的

地域福祉の充実には、対象とする地域の実態や特性の把握が重要であるが、地域包括支援センターの立場からは経験的に漠然と見え始めているものの、まだ体系的に把握されているとは言えず、またそのための方法も全国的に確立されているとは言えない状況にある。そこで、地域包括支援センターさぎの宮の所管地域である長上地区・笠井地区を対象に、地域の実態・特性把握の契機とするために「地域の健康診断」調査を試みることとした。

2-2. 調査の方法

長上・笠井両地区の民生委員・児童委員（以下、民生委員と記述）を対象にアンケート方式で調査を行うこととした。各地区で開催される民生委員児童委員協議会の中で、調査担当（地域包括支援センターさぎの宮）による調査趣旨説明の後に、回答記入の時間をとり、調査票を回収した。アンケート調査の実施概要は次の通りである。

・長上地区：8月20日（さぎの宮寮別館）回答数35名（全委員出席）
・笠井地区：8月24日（笠井公民館）回答数23名（全委員27名のうち出席23名）

2-3. 各地区の概要

①長上地区：面積8.90km^2、人口25,329人、9,780世帯、高齢化率20.0%。単身高齢者324人（人口関係は平成21年4月）
大型ショッピングセンターやスーパーが点在しており、日常の生活には便利そうな環境である。しかし、地区内の交通手段が限られるため、高齢者にとっては通院や外出が容易とは言い難い状況にある。地区社会福祉協議会の活動は比較的活発であり、高齢者対象のサロン活動にも参加者は多めである。

②笠井地区：面積10.49km^2、人口15,042人、5,097世帯、高齢化率22.8%、単身高齢者193人（人口関係は平成21年4月）
以前は街道筋に商店街が栄えていたが、最近は大型のスーパーもでき、昔からの商店は減少気味である。公共交通も不自由であり、徒歩や自転車の利用が多い高齢者にとっては買い物等で誰かの援助を必要とする場合も少なくない。地域コミュニティの結びつきは強い印象で、困りごとがあっても地区内で解決しようとする気風が強くある。

2-4. 集計結果

今回実施したアンケート調査の集計結果は、（表1）長上・笠井地区「地域の健康診断」調査集計表、（表2）長上・笠井地区「地域の健康診断」調査自由記述整理の通りである。

2-5. 結果の考察

①生活の利便性について

民生委員の普段の交通手段は、長上・笠井両地区とも自動車の比率が高い。ただ、笠井地区は自動車が8割超であり自動車生活圏といえるが、長上地区では自動車が6割のほか、バス・自転車・徒歩が3割を占めており、地区全体が自動車生活圏というわけではないようである。民生委員本人にとっては、長上・笠井両地区とも医療・福祉施設、日常の買い物、銀行利用等生活面での不便は感じていないが、地域の人（主に高齢者が想定される）にとっては両地区とも便利とばかり言えないようであり、特に笠井地区については買い物、銀行利用等で不便な環境との回答も少なくない。

②相談の内容について

長上・笠井両地区とも、民生委員それぞれの担当エリア内の子供のいる家庭は10軒程度と思われる。高齢者世帯については笠井地区では10軒程度であるが（8割が1～10軒と回答）、長上地区では平均的には10軒を上回ると察せられる。そのような世帯構成もあってか、両地区とも子供のことでの相談は「ない」が7割を占め、高齢者のことでは本人から、家族・近所からともに「時々ある」が5割を超えており、民生委員に寄せられる相談の大半は高齢者関連であると考えられる。

③民生委員の相談相手・機関について

民生委員が困ったときの相談相手・機関については、長上・笠井両地区とも8割が「ある」との回答であった。自由記述を見ると、長上地区では地域包括支援センター17名、民生委員17名、区役所9名などがあげられており、関係先との日常的なコミュニケーションは確保されていると考えられる。一方笠井

（表 1）長上・笠井地区「地域の健康診断」集計表

質問項目		長上地区	%	笠井地区	%	計	%
◎回答数		35	100.0	23	100.0	58	100.0
●男女別（回答者）	男	13	37.1	13	56.5	26	44.8
	女	22	62.9	10	43.5	32	55.2
●年齢（回答者）	20代	0	0.0	0	0.0	0	0.0
	30代	0	0.0	0	0.0	0	0.0
	40代	2	5.7	2	8.7	4	6.9
	50代	10	28.6	4	17.4	14	24.1
	60代	19	54.3	12	52.2	31	53.4
	70以上	4	11.4	5	21.7	9	15.5
（1）普段利用の交通手段（回答者）	バス	3	8.6	1	4.3	4	6.9
	自動車	22	62.9	19	82.6	41	70.7
	自転車	5	14.3	1	4.3	6	10.3
	徒歩	3	8.6	0	0.0	3	5.2
	バイク	2	5.7	0	0.0	2	3.4
（2）病院や医療・福祉施設は身近に利用できるか？	A.自分／できる	34	97.1	20	87.0	54	93.1
	A.自分／どちらでもない	1	2.9	3	13.0	4	6.9
	A.自分／できない	0	0.0	0	0.0	0	0.0
	B.地域／できる	20	57.1	12	52.2	32	55.2
	B.地域／どちらでもない	14	40.0	6	26.1	20	34.5
	B.地域／できない	0	0.0	4	17.4	4	6.9
（3）日用品や食料品の買い物は便利か？	A.自分／便利	27	77.1	15	65.2	42	72.4
	A.自分／どちらでもない	5	14.3	4	17.4	9	15.5
	A.自分／不便	3	8.6	4	17.4	7	12.1
	B.地域／便利	17	48.6	6	26.1	23	39.7
	B.地域／どちらでもない	10	28.6	6	26.1	16	27.6
	B.地域／不便	7	20.0	10	43.5	17	29.3
（4）郵便局、銀行、区役所などは身近に利用できるか？	A.自分／便利	31	88.6	19	82.6	50	86.2
	A.自分／どちらでもない	4	11.4	3	13.0	7	12.1
	A.自分／不便	0	0.0	1	4.3	1	1.7
	B.地域／便利	14	40.0	8	34.8	22	37.9
	B.地域／どちらでもない	19	54.3	7	30.4	26	44.8
	B.地域／不便	2	5.7	7	30.4	9	15.5
（5）近くに中学生以下の子供を持つ家庭があるか？	ない	0	0.0	4	17.4	4	6.9
	1～10軒	24	68.6	18	78.3	42	72.4
	10～20軒	6	17.1	1	4.3	7	12.1
	20～30軒	3	8.6	0	0.0	3	5.2
	30～40軒	0	0.0	0	0.0	0	0.0
	40～50軒	0	0.0	0	0.0	0	0.0
	50軒以上	0	0.0	0	0.0	0	0.0
（6）子供のことで1月に何件ぐらい相談があるか？	ない	25	71.4	17	73.9	42	72.4
	1～10件	10	28.6	6	26.1	16	27.6
	10～20件	0	0.0	0	0.0	0	0.0
	20～30件	0	0.0	0	0.0	0	0.0
	30～40件	0	0.0	0	0.0	0	0.0
	40～50件	0	0.0	0	0.0	0	0.0
	50件以上	0	0.0	0	0.0	0	0.0
（7）地域の人口は増えているか？	以前より増加	20	57.1	10	43.5	30	51.7
	どちらでもない	11	31.4	10	43.5	21	36.2
	減っている	4	11.4	3	13.0	7	12.1
（8）近所に単身高齢者または高齢者のみの世帯はあるか？	ない	1	2.9	2	8.7	3	5.2
	1～10軒	19	54.3	19	82.6	38	65.5
	10～20軒	10	28.6	2	8.7	12	20.7
	20～30軒	4	11.4	0	0.0	4	6.9
	30～40軒	0	0.0	0	0.0	0	0.0
	40～50軒	1	2.9	0	0.0	1	1.7
	50軒以上	0	0.0	0	0.0	0	0.0
（9）高齢者自らの相談を受けることがあるか？	よくある	3	8.6	2	8.7	5	8.6
	時々ある	19	54.3	13	56.5	32	55.2
	ない	13	37.1	8	34.8	21	36.2
（10）高齢者の家族や近所の人から相談を受けることがあるか？	よくある	1	2.9	0	0.0	1	1.7
	時々ある	18	51.4	14	60.9	32	55.2
	ない	16	45.7	9	39.1	25	43.1
（11）困ったときの相談相手・機関はあるか？（→自由記述）	ある	29	82.9	18	78.3	47	81.0
	ない	4	11.4	5	21.7	9	15.5
（12）地域の活動は活発だと思うか？（→自由記述）	思う	9	25.7	6	26.1	15	25.9
	どちらともいえない	24	68.6	15	65.2	39	67.2
	思わない	2	5.7	2	8.7	4	6.9
（13）住民の地域活動への参加率はよいと思うか？	思う	6	17.1	5	21.7	11	19.0
	どちらともいえない	23	65.7	14	60.9	37	63.8
	思わない	6	17.1	4	17.4	10	17.2
（14）地域に足りない感じることはあるか？（→自由記述）	ある	21	60.0	9	39.1	30	51.7
	ない	11	31.4	12	52.2	23	39.7
（15）地域に問題が多いと思うか？（→自由記述）	思う	10	28.6	3	13.0	13	22.4
	どちらともいえない	18	51.4	11	47.8	29	50.0
	思わない	7	20.0	9	39.1	16	27.6

※　一部に未回答があったため合計が 100%とならない項目がある。

（表 2）長上・笠井地区「地域の健康診断」調査・自由記述整理

	長上地区	笠井地区
(11)困った時の相談相手・機関	・地域包括支援センター（17） ・民生委員（13） ・区役所（9） ・さぎの宮寮（3） ・自治会（2） ・民児協（2） ・主任児童委員 ・地区社協（行政） ・会長さん（民生委員） ・保幼小　行政　児相　警察	・民生委員（7） ・民生委員の会長（2） ・東区役所（4） ・地域包括支援センター（4） ・主任児童委員 ・自治会長 ・民児協会長 ・市社協
(12)地域の活動	・老人クラブ（3） ・福祉サロン（2） ・地区防災 ・防災訓練 ・若草会（老人会）＋カラオケ ・自治会まつり ・お祭り ・納涼祭 ・青壮年会 ・スポーツ全般（与進北小体育館等使用） ・公民館活動 ・趣味 ・民生委員を知らない人が多い ・高齢者サロン活動のサポーター ・老人は参加していない活動はあるか	・地域歴史クラブ（昔を語る会） ・お祭り ・運動クラブ ・地区社協の活動 ・子供会活動 ・地区防災
(14)地域に足りないと感じているもの	・子供達が屋外で遊べる公園がほしい。不足している。 ・子供達が安心して遊べる公園 ・公園等があれば老若の交流ができるのでは？ ・子供達の遊び場 ・ボランティアの絶対数は多くない。 ・ボランティア（若者） ・ボランティア ・ボランティアをする人が決まっていて、一定の人にだけ負担がかかりすぎる。 ・高齢者福祉のボランティアの後継者 ・地域活動のボランティア ・ボランティア等 ・日常生活用店舗 ・施設 ・交通安全対策 ・奉仕精神に欠ける ・遊歩道の整備（河川） ・図書館等文化的施設 ・図書館があれば ・自分自身の居場所 ・特養 ・いろいろな公報が足りないように思う。 ・交通の便	・施設（2） ・公園 ・高齢者の交通手段（じゅんかんバス） ・若い世代がボランティアに参加していない ・ボランティアが少ない ・気安く人が集まれる店がほしい ・老人クラブ、婦人会などがない ・図書館
(15)地域の問題	・近隣の人達の声かけが不足している。 ・他人への思いやりが少々たりないのではと感じることがある。 ・隣近所のコミュニケーション不足（マンション等新しく入居した人が多いからか） ・人と人とのコミュニティ等ソフトの面 ・全体的に老齢になった。 ・夜遅くまで小さな子供がイオンで親と一緒にいる（ゲームセンター等）。 ・小中学生の非行等 ・歩いていける病院 ・商店が少ない ・騒音、交通マナー ・防災組織 ・ゴミの出し方、犬の糞、猫の糞 ・道路、公園等ハードの部分	・交通手段（リブロスへ買い物へ行くのが大変） ・困っていても相談や身近な人に言わない。 ・老人（家庭内の孤立）
(16)その他	・田舎で近所づきあいは有り。少し離れていると上石田町でも知らない人多い。民生委員の仕事のおかげで人つきあいも広がり、地域のことがわかりだした。困った時は包括センターへつなげるようにしている。 ・80才近くの人が多くなり、これからがこわくなってくる。	・20代～30代の人の地域参加が少ない。 ・不安、問題が起きた時は行政、地域包括支援センターの応援を受ける。 ・老人の問題で地域包括センターに相談してましたが、早急に対応していただきよかったです。 ・比較的問題の無い地区だと思います。

	・せっかく立派な公会堂があるからもう少し利用するといい。さぎの宮寮が気軽に開放して下さるといいと思います。 ・ひとり暮らしの男性は衣類の汚れが気になります（特に夏はうすぎなので）。 ・民生委員活動はボランティア活動である。にもかかわらず強制的な言葉が会長から発せられることは、この組織の活動の主旨に反していると思う。 ・地域包括支援活動を活発にやって欲しい。 ・色々と相談に来ていただきありがとうございます。 ・足りないと思いません。逆に私が知らない事だらけで、ボランティアのグループなど乳幼児対象から高齢者対象まで知らない活動が多い事に、民生委員をやり始めて知りました。知らなすぎるぐらいに思います。もっとアピールできたらと思います。 ・新人民生委員になってようやく２年目を迎え、少しずつ理解が出来てきたように思われます。	

地区では「ない」との回答も２割を占め、自由記述でも民生委員１１名、地域包括支援センター４名、区役所４名などで回答が少なめであり、関係先とのコミュニケーションには多少危惧されるところがある。

④地域活動について

地域活動の多寡や住民の参加率については、長上・笠井両地区とも「どちらともいえない」が６割以上を占め、民生委員の考える地域福祉の観点からは十分とは言えないようである。なお、自由記述を見ると、長上地区では老人クラブ、福祉サロンなど延１５件があげられているが、笠井地区では記述が６件に過ぎない。そこから長上地区の方が地域活動がやや活発であると察せられる。

⑤地域の問題について

地域に足りないと感じることについての回答では、長上地区では「ある」:「ない」が６：４、笠井地区では４：５と対称的である。また自由記述を見ても、長上地区では「ボランティア」「子供の遊び場」「図書館」など具体的な指摘も少なくないが、笠井地区では一部委員より「ボランティア」などが指摘されるにとどまっている。また、地域の問題をめぐっては「思いやり」「安心」「コミュニケーション」の不足はじめ数々の意見が長上地区では指摘されているが、一方笠井地区では「困っていても相談や身近な人に言わない」との記述が特徴的であるが他の記述は少ない。そこから両地区の比較のなかでは、長上地区は相対的に問題が多い、ないし問題意識が高い、一方笠井地区は相対的に問題が少ない、ないし問題が顕在化していないと考えることができる。

３．困難事例の抽出・評価

3-1. 調査の目的・方法

地域福祉の現場では、既存の公的福祉サービスの枠内では十分かつ円滑な支援には難しさを有する在宅高齢者事例も少なくない。しかも、ケースによって困難な事情も単一とは言えず、数々の事例収集の中から困難類型を抽出するとともに、類型毎の対応方策検討の必要性が想定されるところである。とはいえ、現在研究会においては基礎的情報蓄積が十分と言えず、体系的な情報収集・分析には相応の準備・実施体制を要すところである。そこで、今回の調査分析では、まずは研究会メンバーの経験のなかから数件の困難と思われる事例を抽出・整理するとともに、事例毎に困難要因分析、対応可能性などについて検討することとした。

3-2. 困難事例の抽出・評価

困難事例①　Ａさん（８３歳、女性、要支援２）

Ａさんは、住宅地の一軒家で一人暮らしです。ご主人を８年前に亡くされており、息子さん夫婦が市内の別のところに住んでいます。息子さんが週に一度は食料品等の買い物をして届けており、ほかにも時々総菜の届けられるサービスを受けているようで、それでＡさんの食生活は支えられています。性格的には穏やかな方ですが、右目にやや不具合があり、８３歳と高齢なこともあって年齢的、体力的に毎日の家事や庭の草取りなどを自身で行うのは難しい状況です。それで自宅敷地内の草木が伸び放題になっており、近所の方に申し訳ないとよくこぼしています。以前にシル

バー人材センターに庭木の剪定と草取りを依頼したことがあるようですが、そのときに予想以上の額（4万円以上）を請求されたようで、以来庭の手入れも滞りがちになっているような経緯です。また、Aさんには物取られ症候群みたいなところもあり、そのため自宅内に他人を入れるかたちとなるヘルパーも利用していません。お金に困っているかというと、そういうわけでもなさそうで、担当のケアマネージャーを通して息子さんに支払いを頼めば、息子さんは必要と思えば了承するのですが、Aさん本人が自分のためにお金を使おうとはせず、それで介護保険サービスもヘルパーもシルバー人材センターなどの利用も、ことごとく拒否してきているわけです。ただ猜疑心が強い一方で、一度信頼すれば心を開くようなところがあり、現在は市役所が紹介した福祉NPOの家事支援サービスだけは受け入れています。時々庭の手入れなども、その福祉NPOに依頼するようになっています。とはいえ家事支援等を依頼する場合でも、二言目には「明日死ぬかもしれない」からとサービスチケットのまとめ買いはせず、サービス利用時にその都度支払うかたちをとっています。Aさんは、お上の世話になりたくないようなところもあり、担当のケアマネージャーが定期的に諸々の相談に応じてはいるようですが、現在までのところ介護保険サービスを利用してはおりません。なお現在、Aさんには軽い認知症があり、前回の介護認定の際には「要支援2」でしたが、当時よりも身体状況等は悪化しており、今度調査することがあれば介護度の上がることが予想されます。

■評価コメント

a. 現在の80代、90代の高齢者は習慣的に自分のためにお金を使えないところがあり（必ずしも生活費に困窮しているわけではないが）、それが介護保険サービスの利用上のネックになっている。

b. 一人暮らし高齢者の場合には、家事支援サービスを利用の場合でも、訪問スタッフとの会話や心の通い合いを求めていることも少なくない。その辺りの対応が現状の介護保険の枠内のサービスで対応できているかは疑問がある。

困難事例②　Bさん（78歳、女性）

Bさんは、集合住宅で娘さんと二人暮らしです。Bさんは、日常の家事も行えるので、いまのところ介護保険の申請はしていません。ただ、食事が思うように食べられず、体重も30kg台で決して健康的とはいえない状態です。それで毎日点滴に病院へ通っており、医療的に相談したり治療を受けてはおりますが、なかなか改善の兆しが見られません。そして、同居の娘さんも、年齢的には30代ですが、病気があって継続的な就労ができない状況です。病気のせいか娘さんも思うように食事ができず、やはり体重が30kg台ぐらいです。Bさんともども液状の健康食品で栄養を補っているような状態です。Bさんは体力的にも衰えてきており力仕事はできず、同じ市内ですが少し離れた所に住んでいる弟さんがときどき訪ねて来て、いろいろ家事や買い物などを手伝ってはくれてはいるようです。ただ、いつでもBさんを支援できるような状況にはなく、何かのときには対応が懸念されるところです。最近のBさんは気力が低下してきて、外に出て人と交流したり何かしようという意欲が無くなってきており、自宅に引きこもりがちになっています。それで、病気で家にいる娘さんと二人で顔をつきあわせていると、「死にたいね」といった感じになることもあるようです。とはいえ、Bさんの場合には要介護認定では「自立」なので、介護保険のサービスを使うというわけにもいかず、でも明らかに食事には困っている状況であるので、地域包括支援センターとしてはBさんから生活や健康の悩みを聞きながら、配食サービスを利用するような相談を始めているところです。

■評価コメント

a. Bさんのように介護保険の枠外の人は、現状では福祉有償運送の対象外である。今後団塊の世代が高齢化を迎えるなか、介護保険のグレーゾーンの人たちの急増が見込まれ、そのような人たちの利用についても介護予防の観点から考慮していく必要がある。

b. この事例ではBさんが介護保険の枠外であるため、現状では地域包括支援センターとしては訪問して相談に応じてはいるが、生活改善への具体的なサービス提供は制度上行えない。広義の地域包括ケアの観点から

生活改善支援のあり方の検討が望まれる。

困難事例③　Cさん（84歳、女性、要支援2）、Dさん（88歳、男性、要支援1）夫婦

Cさん、Dさん夫婦は、昔からの住宅地の一軒家に二人でお住まいです。息子さん夫婦が近くに住んでおり、また日常的な近所づきあいもないわけではありません。Cさんは平成17年以降に何度か転倒して骨折の既往症があり、胸や腰に痛みがあったりして外出の際には杖を使い、家事も十分にこなせない状況です。Dさんは心疾患、呼吸器疾患があり、大腸半分切除手術をされていたりで、最近では少し歩いても息切れして、家の中でも移動が困難となる日もあります。それで、二人ともたいへん生活に苦労されている状況です。いまCさんが「要支援2」で、Dさんが「要支援1」で、それぞれ介護保険のサービスを利用しています。Dさんはデイサービスを週1回利用しており、Cさんの方で週2回、食事の支度などでホームヘルパーを利用しています。ただそれだけでは足りずに自費（3,000円／時間）で週3回ホームヘルパーを頼んでいます。近くにスーパーも無いわけではありませんが、二人の身体的状況からそこまで出掛けるのもかなり困難で、買い物については近所の方が野菜を届けてくださったり、ときどき息子さんが手伝ってくれたりしてくれています。それでも二人だけでは調理や片付けなど含めて毎回の食事にもかなり困っているようです。もう一つ問題があり、Cさんは身体の痛みの関係で靴下が自分で穿けないとか、湿布の貼り替えも誰かに頼まなければいけない状況なのですが、Dさんの方では息切れが酷くそのような作業ですらたいへんな日もあるようで、難しいところです。とはいえ収入が年金だけで、1時間3,000円の自費ヘルパーは負担なようで、もう少し安いところ探せたらと言っていますが、土日の利用とか、いまのヘルパーが親切で変えたくないという気持ちもあって、その辺りが課題です。なお、Dさんは以前は「要介護1」だったのですが、制度の改定で「要支援1」に変更され、明らかに以前より状態は悪くなっているにもかかわらず、介護保険サービスを十分に使えなくなってしまったという問題もあります。

■評価コメント

a. 高齢者も施設入所より在宅を希望するケースが多いが、インフォーマルな家事支援サービス制度が充実すれば、「要支援1」でも自宅での生活は十分に可能である。

b. 都会ではチラシを見て午前中にインターネットで注文すれば午後には届けられる買い物サービスがあるが、高齢者向けのそのようなサービスがあれば便利である。あるいは昔のご用聞きのシステムの現代版があれば高齢者世帯にはありがたい。

c. 夫婦二人で施設入所を検討するなら、ケアハウスが候補にあげられる。1階ホールに行けば朝昼晩の食事には困らないし、自室にキッチンがあり調理・食事も可能である。これからは高齢者住宅と大学生下宿の組み合わせも考えられる。

困難事例④　Eさん（54歳、女性、要介護5）

Eさんは3年前に歯科医師のご主人を癌でなくし、自宅で一人暮らしでした。平成21年1月に自宅で脳内出血で倒れて、一命は取り留めましたが後遺症で右半身麻痺、高次脳機能障害など残り、特に運動性の失語症でコミュニケーションが非常に取りにくい状況です。その後リハビリをしてだいぶ収まってきましたが、それでも話がうまく通じないと騒ぐことがあり、その時の対応が一番の難しいところです。歩行は手すりがあれば何とかできますが、普段は車椅子で自走、手すりがあれば自分でトイレには行ける状態です。

初めは老人保健施設への入所も考えたようですが、まだ年齢が54歳と若いので、いくら介護保険で該当するとはいえ不憫ではないかと、現在Eさんの金銭管理も手伝う親しい知人（近所の同年配の女性）の尽力があり、ケアマネージャーに相談して在宅介護で進めることとなりました。Eさんは経済的にはかなり裕福で、家政婦やヘルパーを組み合わせれば在宅でも可能な状況です。ただ一人暮らしは無理だろうと、8月末にそれまで別居していた父親との同居を条件に自宅に戻ったところです。現在、介護保険のサービス利用は、デイサービスを週6回、訪問介護を週6回（毎朝の通所の送り出し、通院等乗降介助）、福祉

用具貸与（ベッド、車椅子）、ショートステイ（利用予定）です。介護保険以外にも自費で配食サービス（夕食）、家政婦（緊急時）を利用しています。ただ、同居の父親も 84 歳とかなりの高齢で体力、判断力ともに不安があり、娘である E さんと少し疎遠だったこともあってコミュニケーションにも難があり、生活支援にも多くは期待できず、実際には一人暮らしに近い状況です。知人との関係なども勘案しながら、金銭管理等での成年後見人や生活支援の家政婦など管理面での体制づくりも課題と考えられます。

なお、E さんには言語の障害が残っており、言語聴覚士（ST）のリハビリをやって普通に喋れるようになりたいという希望が強くありましたが、介護保険の関係でSTが配置されている施設が少なく、適切なリハビリ施設が見つからず、普通のデイサービスを利用してコミュニケーション訓練もできればと試みています。ただ、通所を始めると周囲がみな 70～80 歳の人たちで、それで感情失禁が出て大声を出したりで対応に苦慮しているところです。高次脳機能障害は回復にかなり時間を要しますが、それが介護保険制度には無い分野で、一方医療保険の方でもリハビリには様々な制約があるようで両立が難しく、現状ではどうしたものかといったところです。

■評価コメント

a. この事例では、知人（近所の同年配の女性）のかかわりが難しく思える。金銭管理もしているようだが法律的な裏付けがあるわけでもないので、E さんの判断能力の回復も見ながら、成年後見人制度の活用も視野に入れる必要がある。

b. 円滑な地域包括ケアの展開を考えると、介護保険サービスの枠を越えて、医療やリハビリ、法律、助け合いなど様々な専門分野の連携による総合的なサービス提供システムの構築が課題である。

困難事例⑤　F さん（88 歳、女性、要介護 3）

F さんは、次女と同居で、3 階建ての住宅の 2 階にお住まいです。3 階に暮らす次女が自営の仕事（衣料品販売）をしながら F さんの介護をしています。夫に先立たれて、お子さんが 3 人いて、以前は隣の長男夫妻と同居で介護保険サービスも利用していましたが、お子さんたちの間で介護方針を巡り議論があって、施設入所の話題を契機に調停となり、在宅を主張する次女との同居に至った経緯があります。なお、長女は横浜在住ですが、月に 1 泊浜松を訪ね母の介護を続けています。F さんは重度の認知症ですが、お住まいが 2 階なので突然どこかに出て行ってしまうことはありません。最近左足に痛みが発症して、現在は車椅子の生活で、ショートステイを延長しているところです。

F さんの収入は月 8 万円の年金ですが、次女とは生計は別にしております。ただ月 8 万円では種々のサービスを使うと足が出てしまうので、後見人を立て介護費用負担は兄妹で話し合いで決めましょうとのことでしたが、兄妹は絶縁状態のまま今日に至ります。もともと F さんは平成 14 年頃に認知症が発症して、初めは他の施設のケアマネージャーの担当でしたが、施設入所の話から次女との折り合いが悪くなり、ケアマネを変えたいということで、市役所職員の紹介で現在のケアマネの担当となりました。いままでにもデイサービスやショートステイなど様々な介護サービスを使ってきたわけですが、同居の次女の仕事が不規則であることもあり、仕事の都合にあう事業者への変更も繰り返しています。また、次女は常に F さんへの最高のケアを望む感じで、施設でのケアに落ち度があったりすると、職員とトラブルになったことも少なくなく、主治医と投薬の関係で口論になったこともあります。次女と後見人との間の信頼関係に欠けるといった問題もあります。

F さんは、いままで毎月デイサービスに加えショートステイ 3 泊 4 日を 4 回くらい利用するなど、介護保健を限度額一杯使っています。ただショートステイは介護保険のルールでは有効期間の半分までしか利用できず、次女の仕事の関係で利用を増やしたくとも、増やせずに困っています。またデイサービスも帰りの時間が 5 時とかですが、無理を頼んで 7 時頃まで利用している状況です。日程変更もしばしばで事業者との調整もケアマネの苦労の種となっています。現在、次女の仕事の事情や介護保険サービス利用の制約から F さんの在宅介護も限界に近づき、いま次女も含

め施設入所の検討を始めているところです。

■評価コメント

a. 働く女性が介護することを考えると、決められたショートステイの日数制限やデイサービスの利用時間が必ずしも実状にそぐわず、システムとして改善の必要がある。
b. 現在の介護保険制度では、一人暮らし高齢者は緊急で特養などに施設入所できるが、家族が同居・介護の場合は入所に相当待機させられる状況にある。「やさしい」ところに負担の皺寄せが来るのは問題である。
c. Fさん本人への介護サービスよりも、同居家族によるトラブル対応にケアマネ等の多くの時間・労力が割かれており、円滑な介護サービスの提供を困難にしている。

困難事例⑥　Gさん（90歳、女性、要介護4）

Gさんは住宅地の借家にお住まいです。現在は、病気がちの長女と二人暮らしで、長女が肉体労働をしながら介護をしています。Gさんは、平成12年頃に右大腿骨を骨折し、重度の認知症でもあり、ほぼ寝たきり状態です。以前は長男夫婦と一緒に生活していましたが、長男病死の後に、お嫁さんと長女の間で、たぶん金銭問題と思われますが、確執が生じ、長女が引き取り介護することとなりました。長女は離婚しており、子供もなく、同居の背景には、母親の年金をあてにしているようなところもあったみたいです。いまも長男のお嫁さんとは絶縁関係になっています。

平成17年頃からGさんに認知症が出始め、自宅での入浴が難しくなり、訪問入浴を利用するようになりました。ただ、訪問入浴の利用中に圧迫骨折をしたことがあり、それ以来長女はサービス事業者に対して不信感を抱いています。現在、介護保険サービスの利用は、長女の仕事の都合で週4日、9時、13時、16時の3回、トイレ介助や清拭を依頼、月に1回訪問入浴も利用しています。訪問入浴については、以前の経験もあって、また医師の往診を得るまでに時間を要した事情もあり、実現までに1年半ほど要しました。ただ、長女がGさんの施設入所は頑なに拒否しています。長女にとって母親であるGさんの介護が生き甲斐というところもあります。

なお、長女は電話魔みたいなところがあり、朝早くとか、夜遅く、休日にまでケアマネに電話をよこし言い合いになったこともあり、関係の修復までちょっと時間がかかりましたが、いまのところ何とか長女とケアマネとの信頼関係はできています。ただ、ヘルパーとはたびたびトラブルになって交替させたり、気に入らないとすぐに管理者に電話したり、県や市の担当課に苦情を言ったりと、ともかく苦情の多い方です。長女は介護保険制度にもずいぶん不満を持っているようです。例えばヘルパーは雨戸を閉めてはいけないとか細かいルールがあって、最近は減ってきましたが「制度がおかしい」「役に立たない」とよく言っています。あと長女は親族や知人に借金があるようですが返済してない様子です。それで人間関係がどんどん途切れてしまっているようです。最近は不景気で長女の仕事も減って光熱費等の支払いも滞りはじめています。Gさんは毎月約15万円の年金収入で、いままでは生活保護は拒否してきましたが、長女の医療費や介護保険負担も考えて、申請したいと言い始めています。

■評価コメント

a. Gさん本人への介護サービスよりも、同居家族によるトラブル対応にケアマネ等の多くの時間・労力が割かれており、円滑な介護サービスの提供を困難にしている。
b. この事例では、Gさんへの介護サービスを進めるに伴い、生活保護など家庭の経済基盤の確立や親族や知人との関係修復（借金返済など）含め、総合的な生活再構築への支援も必要と考えられる。
c. 介護保険ではヘルパーのサービス範囲に細かいルールが定められ、利用者からの不満があるとともに不合理な面もあるようで、もう少し実状に即した柔軟な対応ができるよう検討も必要かもしれない。

3-3. 総括的な考察

今回は6件の困難事例を抽出したが、困難事例①・②・③は介護認定のグレーゾーンとも言いうる事例であり、困難事例④・⑤・⑥は要介護状態が重度の事例である。ここでは便宜的に前者を困難タイプA，後者を困難タイプBと呼ぶこととし、若干の考察を加えることとする。

困難タイプＡは、要介護状態が軽度である、あるいは既存の介護認定の枠外であることから、生活機能の低下が見られるにもかかわらず、十分な介護サービスを受けることができない、あるいは公的福祉サービスの担い手では対応が制約されるようなタイプである。このタイプの問題解決に向けては、介護保険制度の裾野の拡大が求められるとともに、インフォーマルな生活支援サービスの充実、ないし福祉型社会に即した新・生活サービスの構築などが、課題として考えられる。

困難タイプＢは、要介護状態が重度であるが、被介護者へのケアでなく周辺とのトラブル解決が問題となる、あるいは介護面に加え医療面、経済面など総合的な対応が必要とされるようなタイプである。このタイプの問題解決には、介護保険制度においてより柔軟かつきめ細かいサービス提供が行えるような運用改善や、地域における様々な専門分野の連携による総合的なケア体制の構築などが、課題と考えられる。

４．おわりに

今回の研究活動報告は、とある出会いの中から浜松市東区で地域福祉に携わる様々な方々の勉強会に参加させていただくこととなり、そこでの１年余の議論の中から沸々と湧き出だした実践的な課題をとりあげて、地域福祉の現場の方々に手を引かれて調査・検討に取り組んできたものである。最近の大学関連の用語法に倣うならば市民協働研究になるのだろうか。ともあれ、そこでは実践的であり、地域社会に溶け込めるような解決方策が、求められることとなる。冒頭にも述べたが、いま、そして近未来に向けて、地域福祉の分野は課題山積である。かといって、現場では歩みを緩めることもできず、一つひとつの課題を解決しながら全体を組み上げていくこととなる。今回の調査研究は、そのための一里塚に位置づけられるものである。地域の健康診断調査に関しては、地域の実態・特性把握に向けての試行であり、今回調査のレビューを経て方法的習熟･開発が図られるとともに、他地域に展開されることにより情報蓄積が期待されるところである。また、地域特性に応じた地域福祉デザインのあり方の検討も課題となるだろう。そして、今回は６件の困難事例の収集・分析であったが、今回調査を一つのステップにした継続的な情報収集・分析などを経て、困難事例の体系的かつ広範な観点からの検討も進めながら、より包括的な地域福祉デザインの検討にも取り組んでいく予定である。なお、本調査研究は、平成２０・２１年度デザイン研究科長特別研究費も得て実施したものであることを付記しておく。

＊参考資料

１．（財）さわやか福祉財団「インフォーマルサービスが尊厳ある暮らしを実現する――地域包括ネットワークの現状と将来展望――」２００６年
２．これからの福祉のあり方に関するする研究会「地域における「新たな支え合い」を求めて――住民と行政の協働による新しい福祉――」厚生労働省、２００８年
３．地域包括ケア研究会「地域包括ケア研究会報告書――今後の検討のための論点整理――」厚生労働省、２００９年（平成２０年度老人保健健康増進等事業）
４．浜松高齢者と家族の生活を考える研究会「浜松市東区内の高齢者とその家族をめぐる地域資源実態調査事業１報告書」２００８年
５．浜松高齢者と家族の生活を考える研究会「浜松市東区がんばる地域応援事業地域資源ネットワーク調査報告書」２００９年

三遠南信景観色調査研究　－第２次報告書－

A Report of Landscape Color and Image in SAN-EN-NANSHIN (Part2)

宮内　博実
デザイン学部メディア造形学科

Hiromi MIYAUCHI
Department of Art and Science,Faculty of Design

この研究は,昨年に引き続いて三遠南信と呼ばれる広域連携地域における景観のあり方を色彩の観点から探ることを目的としている。かなり広域における「景観色」調査から「地域らしさ」を具体的なカラーイメージとして抽出する事である。プレリサーチと同じイメージ調査手法を活用して，イメージ言語から地域の特徴を抽出し，代表的な都市の景観写真の色分析結果と比較検討している。地域のイメージキーワードの抽出と地域固有色の収集結果を踏まえて、三遠南信「らしさ」の抽出につなげている。

This contents is continue study from last year. Reserch and inquire into SAN-EN-NANSHIN area with appearance landscape color.
I wish succeed in what an abstraction from landscape color and image in SAN-EN-NANSHIN. Its suitable and strong point by image word from this wide area. I investigate with original analysis from photograph image collarge in the main city.In the last stage on sampling from landscape color is typical of THE SAN-EN-NANSHIN. I wish to select of suitable image inSAN-EN-NANSHIN from this result by analysis.

1　はじめに

「地域らしさ」とは，はたしてどこで誰が何時どのように感じるのか。直感力で感じられる「全体の印象」と，構成する要素のディテールの「集合体」・「共通性」とも考えられる。そもそも地域自体は，様々な構成要素の総体であり,長年にわたって徐々に培われた印象（イメージ）の産物である。2008年に引き続いて、この地域らしさの「印象」を構成する重要な要素として「色」を取り上げ，その成立条件をいくつかの手法を組み合わせて推測している。

この研究では、色から滲み出て来た「地域らしさ」を視覚的な「カラーイメージ」として言い換えている。そこで,このカラーイメージを地域共通の「デザインコンセプト」構築における重要な要素として置き換え，地域における特徴のある景観形成や商品開発などに，この成果が具体的な展開につながることを想定している。

この「地域らしさ」をふまえて、開発テーマや、地域の特徴をいかしたアイテムの選定などに展開されることをねらっている。

本研究では，この地域における「景観色」とは何かを具体的に考えている。地域の環境全体から何となくその「イメージ」に相応しい，「らしさ」として印象づけられた視覚的な「記憶残像」を，色とイメージから抽出される集合体＝「カラーイメージ」として置き換えて、何とか実態に近いイメージとして導き出せないか。さらに色の具体的な使い方や「ガイドラインの策定」などに向けての基礎研究として計画している。

ここでの「景観色」とは，環境構成物が相互に関係しながらも，かなり「簡略化」や「抽象化」された状態を配色で示すこととしている。そして見る側の記憶に残る感性的な印象や雰囲気が「全体配色」として統合された状況としている。

2　地域イメージ調査

2-1　調査手法

前回のプレリサーチと同様に、三遠南信地域における景観色をイメージで捉えるための基礎的なアンケート調査を実施している。それぞれの地域における一般住民,行政団体,民間協力団体などを披験者対象に実施。

実施方法は，それぞれの行政団体，地域，市町村ごとに集計分析するために，出来るだけ広範囲に男女均等,年齢もばらつくように,アンケート用紙を配布している。　市町村毎に，およそ披験者は30名から40名を選定している。披験者の条件は，3年以上そこに住み，年齢が20才から70才までの範囲としている。

設定された地域と市町村の都市イメージについて，45言語アンケートから直感的に相応しい言葉をそれぞれ5つ選択するオリジナル調査ソフト”WAT9”を使用し、簡単な言語選択で直感的なイメージ評価を分析抽出している。

2-2　調査概要

全地域の三遠南信プロジェクト参加行政団体全てに配信し、回答が得られた市町村は、3地域 2 2 市町村で詳しくは、下記の通りである。

東三河地域 / 豊橋市　豊川市　新城市　設楽町　東栄町豊根村　小坂井町　田原市（8 市町村）

遠州地域 / 浜松市　袋井市　湖西市　森町　新居町

（5 市町村）

南信州地域 / 飯田市　阿南町　阿智村　平谷村　下條村

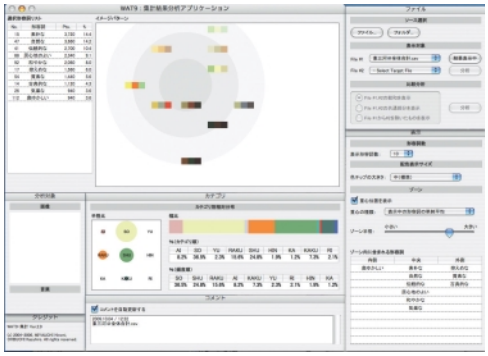
売木村　天龍村　泰阜村　豊丘村　（9 市町村）

2-3 調査結果

図は、地域毎に集計した結果を出力している。グレーのサークルで示した範囲が中心的なイメージであるが、簡単に見た目でこの 3 地域を比較すると、かなり似たような分布になっている。地域連携エリアとしては広いが、隣接している状況を考えると大幅に違った結果となる事も想像しがたい。

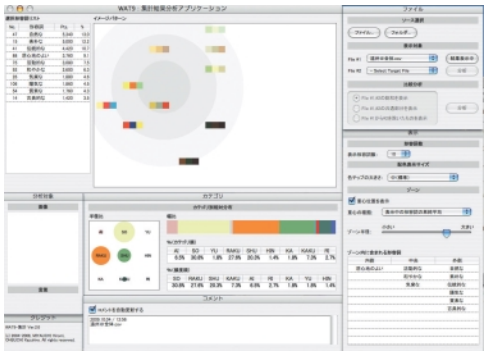
地域別のイメージ分析の結果から、そのイメージ言語の出現頻度を基本として、それぞれの関係性をこれまでの経験則を踏まえて、構造図に仕上げている。最も基本となる 3 つのキーワードは、多少数値は違うが全く同じ言語が選ばれている。全体としてはプレリサーチの結果とほぼ同じ傾向を示している。

東三河 / 全体イメージ



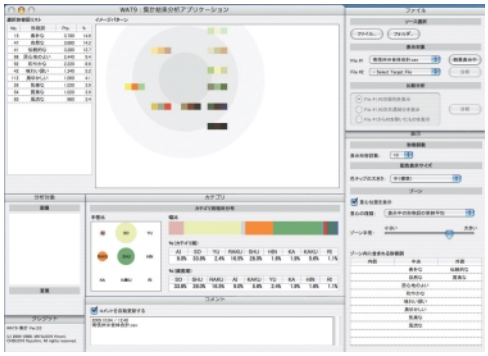
特徴イメージ / 素朴な、自然な、伝統的な　**図 -01**

遠州 / 全体イメージ



特徴イメージ / 自然な、素朴な、伝統的な　**図 -02**

南信州 / 全体イメージ



特徴イメージ / 素朴な、自然な、伝統的な　**図 -03**

東三河 / イメージ構造図

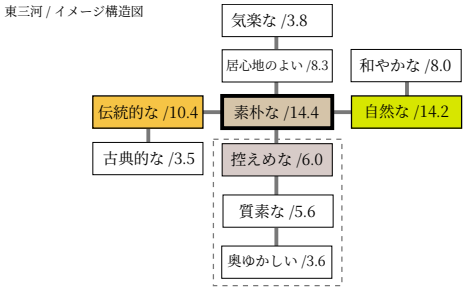


図 -04

遠州 / イメージ構造図

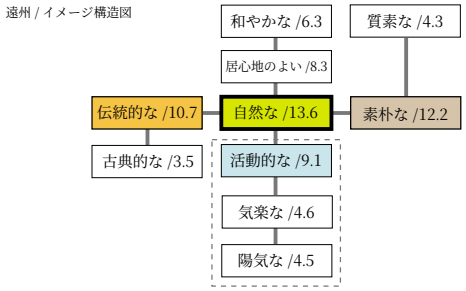


図 -05

南信州 / イメージ構造図

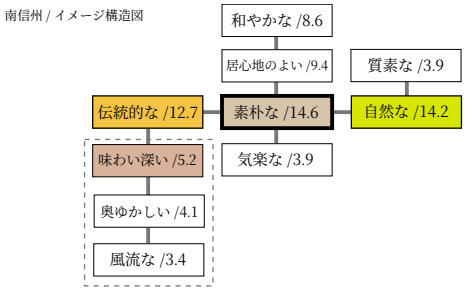
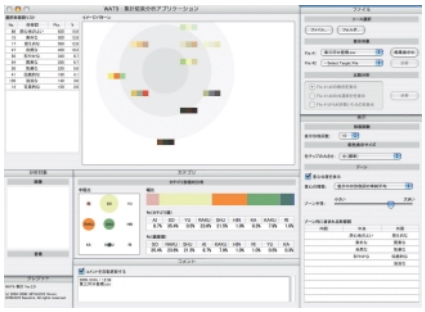


図 -06

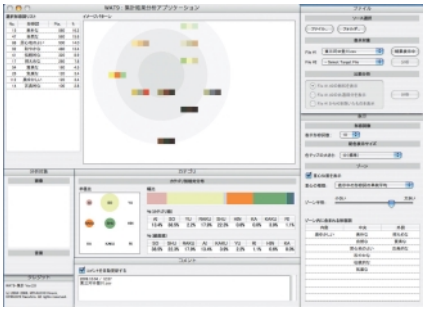
2-4 市町村別調査結果 / 東三河

豊橋市



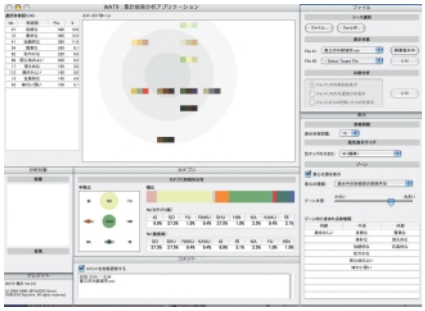
特徴イメージ / 居心地のよい、素朴な、控えめな　**図-07**

豊川市



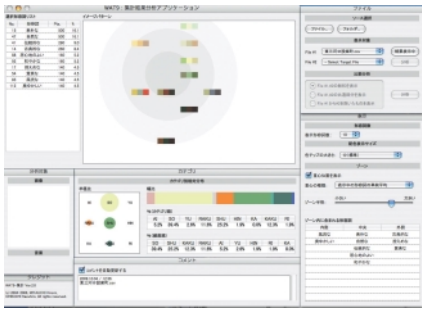
特徴イメージ / 素朴な、自然な、居心地のよい　**図-08**

新城市



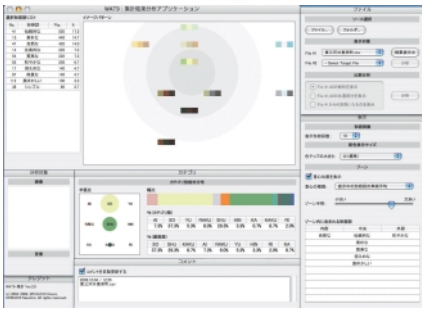
特徴イメージ / 自然な、素朴な、伝統的な　**図-09**

設楽町



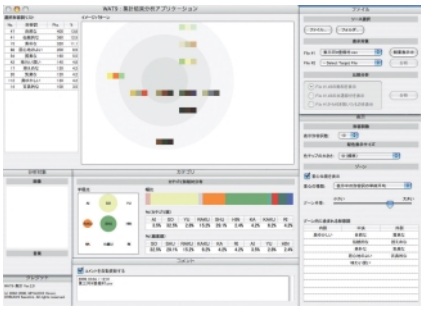
特徴イメージ / 素朴な、自然な、伝統的な　**図-10**

東栄町



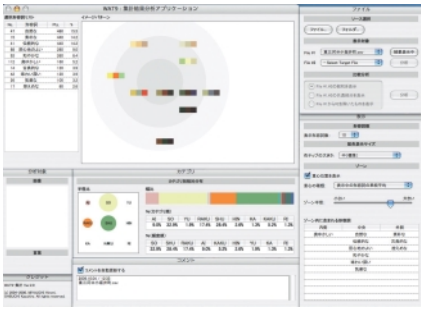
特徴イメージ / 自然な、伝統的な、素朴な　**図-11**

豊根村



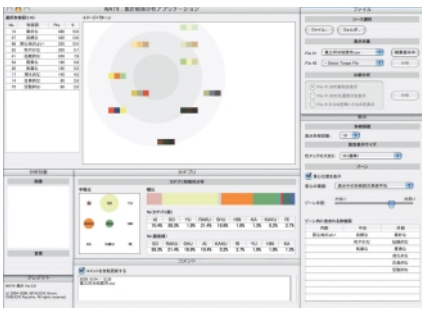
特徴イメージ / 自然な、素朴な、伝統的な　**図-12**

小坂井町



特徴イメージ / 自然な、素朴な、伝統的な　**図-13**

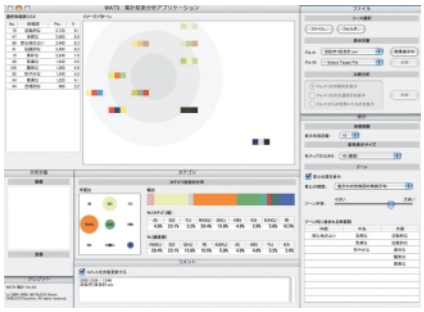
田原市



特徴イメージ / 素朴な、自然な、居心地のよい　**図-14**

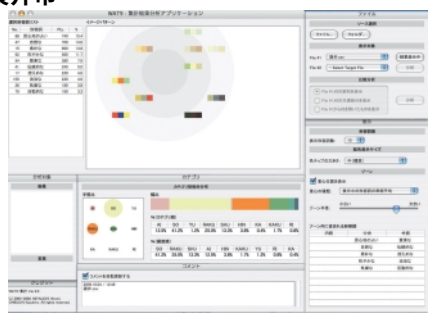
2-5 市町村別調査結果 / 遠州

浜松市



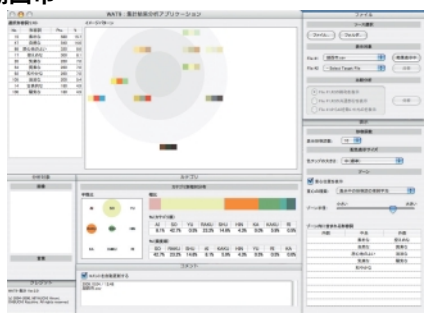
特徴イメージ / 活動的な、自然な、居心地のよい　**図 -15**

袋井市



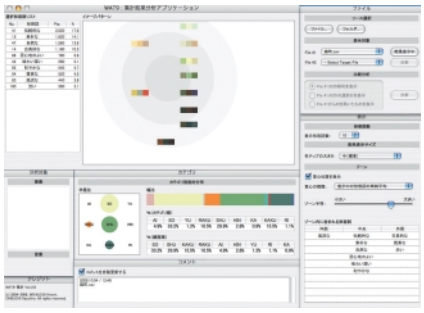
特徴イメージ / 居心地のよい、自然な、素朴な　**図 -16**

湖西市



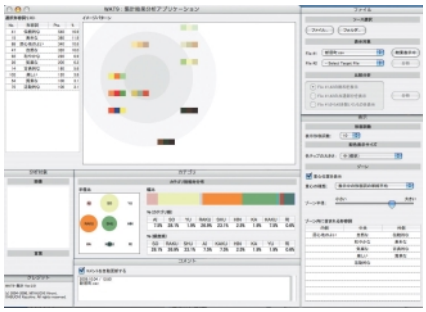
特徴イメージ / 素朴な、自然な、居心地のよい　**図 -17**

森町



特徴イメージ / 伝統的な、素朴な、自然な　**図 -18**

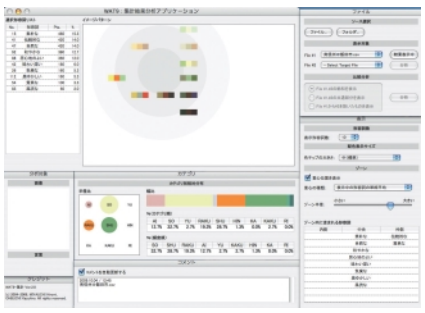
新居町



特徴イメージ / 伝統的な、素朴な、居心地のよい　**図 -19**

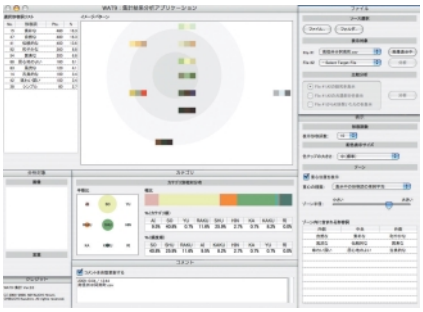
2-6 市町村別調査結果 / 南信州

飯田市



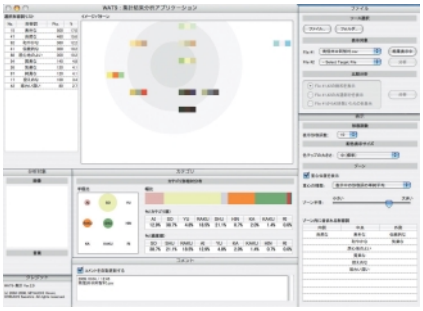
特徴イメージ / 素朴な、伝統的な、自然な　**図 -20**

阿南町



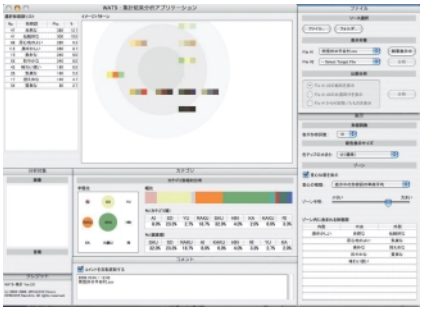
特徴イメージ / 素朴な、自然な、伝統的な　**図-21**

阿智村



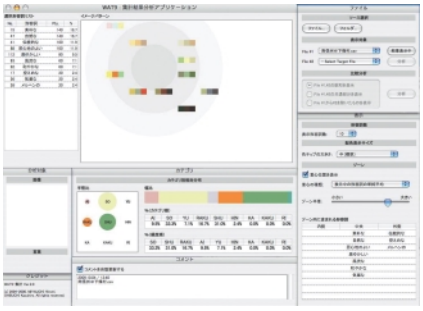
特徴イメージ / 素朴な、自然な、和やかな　**図-22**

平谷村



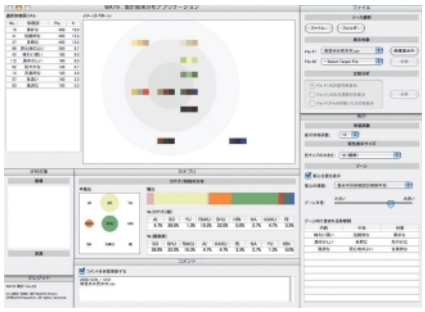
特徴イメージ / 自然な、伝統的な、居心地のよい　**図-23**

下條村



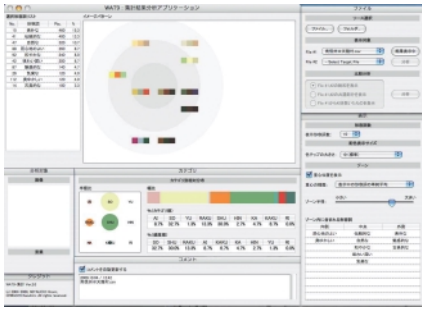
特徴イメージ / 素朴な、自然な、伝統的な　**図-24**

売木村



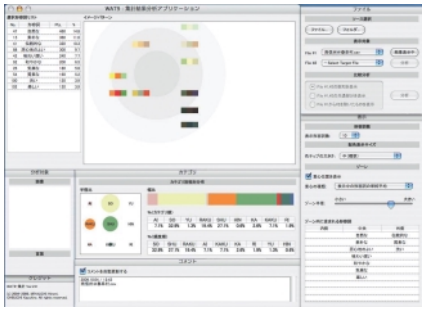
特徴イメージ / 素朴な、伝統的な、自然な　**図-25**

天龍村



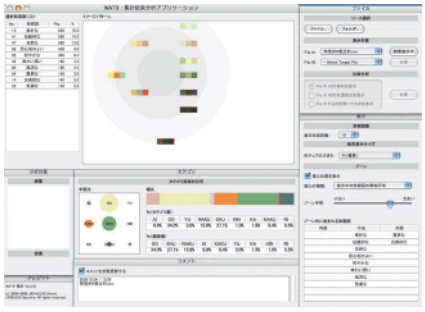
特徴イメージ / 素朴な、伝統的な、自然な　**図-26**

泰阜村



特徴イメージ / 自然な、素朴な、伝統的な　**図-27**

豊丘村



特徴イメージ / 素朴な、伝統的な、自然な　**図-28**

2-7 イメージ調査のまとめ

それぞれの地域毎のイメージ調査の結果を相対的に位置関係が比較出来るように中心ゾーンの位置をプロットしている。そして地域全体の中心部分と思われる地点をその地域のイメージ的な原点と設定して抽出している。3 つの地域は多少の違いが判明したが、かなり微妙な違いと受け取られている。

今回の本調査では、それぞれの地域毎に現在居住している地域のみを調査対象としているので、3 地域全体を同じ座標で示す事は出来ないが、相対的なイメージの位置関係を崩さずにプロットし、その広がりを下記の図のようにまとめている。ページ１３７のイメージ構造図の結果も同時に傾向を知るために、参考として記載している。

イメージ調査は、あくまでも地域毎の特徴を把握するために行っている。三遠南信全体を一つの地域として捉えると「自然な」「素朴な」「伝統的な」がキーワードとして抽出されている。そしてそれぞれの地域だけで特徴としてあげられるキーワードが、東三河は「控えめな」、遠州は「活動的な」、南信州は「味わい深い」となった。

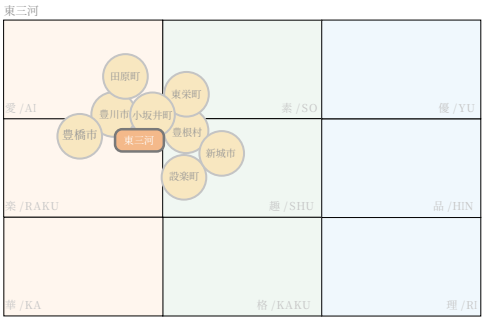


図 -29

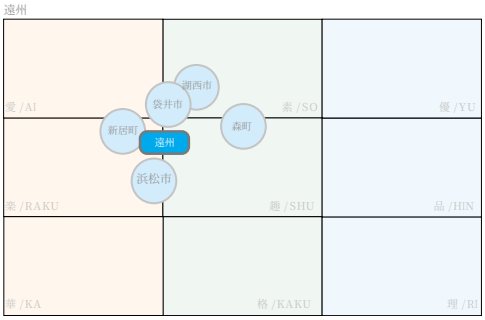


図 -30

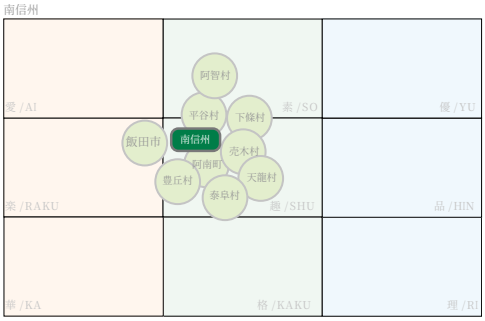


図 -31

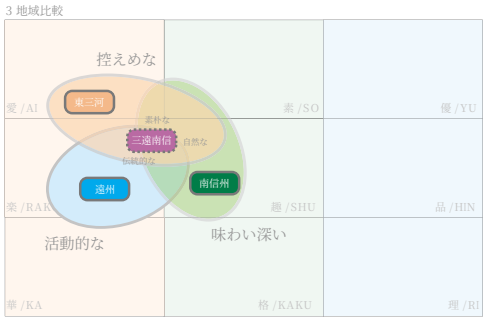


図 -32

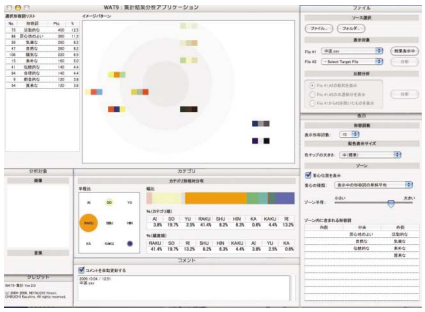
中心イメージからそれぞれの地域の特徴を関連させて分析を進めると、控えめで質素で奥ゆかしい東三河、活動的で気楽で陽気な遠州、自然が豊かで味わい深く風流な南信州と読み取る事が出来た。

この結果から、実際の地形や自然環境の状態、地理的な条件などと関連させて詳しく見直す事も可能である。イメージとして都会化された都市イメージは、開放感や賑わいなどから「楽」が多く出現する。反対に「素」や「趣」が強く出てくる地域ほど、ゆったりとした田舎的なイメージと受け取られていると思われる。

プレリサーチの結果と比較しても、イメージとしての大きな違いはなかったと言える。しかも、愛知県や静岡県、そして長野県などの県イメージだけを除くと、今回のイメージの位置関係とほぼ変わらない結果となった。今後の景観色抽出における地域毎のイメージの方向性の検討と、三遠南信らしい景観色の絞り込みには、十分な結果が得られた。

3 浜松市 -7 区別調査結果

中区

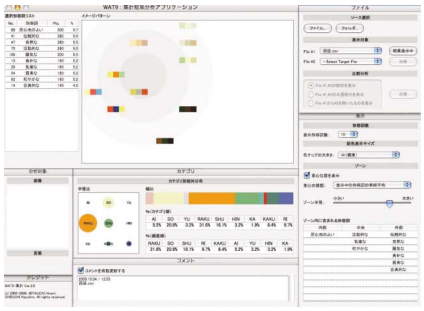


特徴イメージ / 活動的な、居心地のよい、気楽な　図 -33

北区

特徴イメージ / 活動的な、伝統的な、自然な　図 -37

西区

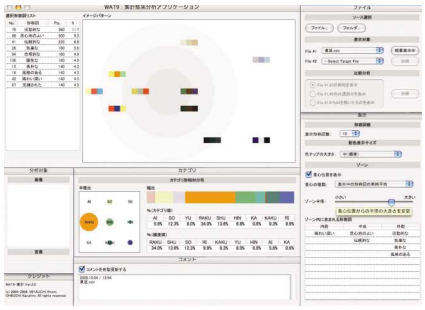


特徴イメージ / 居心地のよい、伝統的な、自然な　図 -34

浜北区

特徴イメージ / 活動的な、自然な、伝統的な　図 -38

東区



特徴イメージ / 活動的な、居心地のよい、伝統的な　図 -35

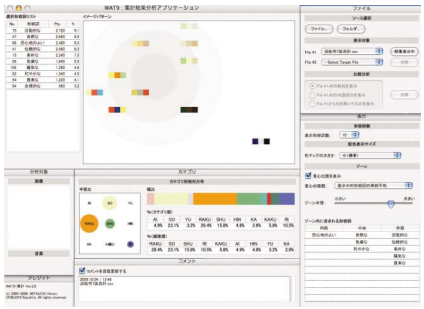
天竜区

特徴イメージ / 素朴な、伝統的な、自然な　図 -39

南区

特徴イメージ / 自然な、素朴な、気楽な　図 -36

浜松市 /7 区全体



特徴イメージ / 活動的な、自然な、居心地のよい　図 -40

3-1 浜松市 -7 区詳細調査結果まとめ

今回の本調査では、特に浜松市の協力で７区それぞれに調査を実施している。政令指定都市となって一つに合併したことで、どの程度区毎のイメージが集約出来るか。プレリサーチの結果では、披験者数も少なく、都会的なイメージに集中が見られた。しかし今回は「遠州」地域イメージにほとんど近い結果が得られた。

それぞれの区ごとに集計結果から９イメージ分布を取り出したのが下図で有り、さらに中心ポイントだけを標記したのが７区イメージ比較である。７区全体と比較すると、中区と西区を融合させ、さらに東区を重ね合わせるとほぼイメージが形成される。大きく違うのは、天竜区と南区であるが、一番大きなイメージは「楽」で有り、浜松らしい都市の特徴を表している。

７区９イメージ分布の比較

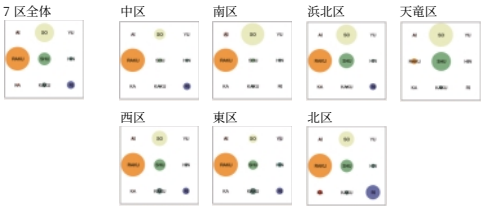


図 -41

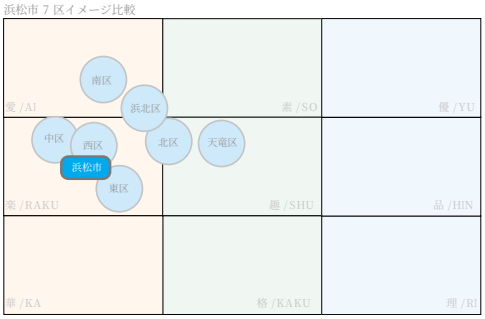


図 -42

選択されたイメージ言語の分布から、僅かな差を見つけ出し、９分類上にゾーニングするとなるとかなり難しいが、何とか見た目で出来るだけ比較しやすい位置にプロットする事で、具体的な区毎の特徴をイメージで比較出来る。自然環境や地理的な条件はイメージを形成する大きな要因であるが、それ以上に大きな構造物や施設なども、その区の構成要素として影響されていると思われる。

三遠南信の分析と同様にイメージ言語の構造図を作成している。浜松市７区総合集計の結果からその出現率に上位１０個使って作成している。

浜松は自然環境に恵まれ、居心地も良く、活動的な都市であり、気楽で陽気、しかも素朴で質素なイメージが和やかさにつながっている。取り立てての先進性は、イメージ構造からはあまり強くは感じられない。過ごしやすく積極性も少ないために、その点の反動として「やらまいか」精神が必要なのかもしれない。

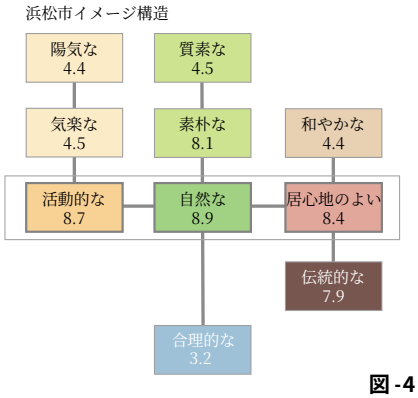


図 -43

3-2　浜松市イメージ分析のまとめ

これらの浜松市におけるイメージ分析の結果から言えそうな事は、７区の特徴はそれほど明確に認識されていないが、概ね３つか４つに集約が可能である。

浜松らしさは、旧市街を構成していた中区と西区であるが、都市としての中心的な機能だけでなく、イメージとしても「住みやすさ」や「楽しさ」を感じさせている。郊外に広がる北区、浜北区も、全体とはそれほどかけ離れてはいない。目立って違うのは天竜区のみである事から、今後は中心部に東区と南区の組み込み方と、市の外周郊外地域の特徴つけが重要な課題と思われる。

そこでこのイメージ調査の結果を踏まえて、景観色調査の結果と関連させた分析によって、今後予想される「都市景観色ガイドライン」等の策定の際には参考にして欲しい。

4　代表都市のイメージコラージュ

4-1　作成趣旨

三遠南信を代表する都市における「イメージコラージュ」作成の趣旨は、ばくぜんとしたイメージを出来るだけ解りやすい画像の集合体として提示する事である。

それぞれの都市の印象を，出来るだけ解りやすく,しかも簡単な方法で表現してみる。そのために次のような手順で行っている。宮内博実研究室のゼミ生が 2 人でペアーを組み，それぞれ都市を数日に渡って撮影取材として調査を行っている。当初から明確に目的を示され、何とか自分たちの感じた「都市イメージ」をビジュアルな表現に置き換える事を目指している。

まずは若い学生の新鮮な目を通して，既成の情報にとらわれないように，それほど詳しくは与えずに短時間で都市を見て回れる範囲としている。市内の中心部からはじまり，そこで目についたスポットを取材と撮影を行っている。そこから得られたビジュアル情報を使い，ラフな「イメージコラージュ」を編集，さらに 7 都市のイメージを比較しながら微調整したのち，画像のサイズや重なりを考慮して最終的なコラージュとして完成させている。

作成されたコラージュを画像として取り込み、色彩分布自動生成ソフトにかけてそれぞれ解析を行った。そこで、基調となるイメージとアクセントとして出現する色を見きわめることにつながるデータが得られた。

色彩分布自動生成ソフト -Image2 Assort

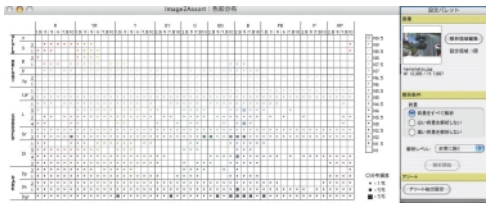


図 -44

ここで作成されたコラージュは、街全体の印象を捉えることを狙いとしているが、基調となるイメージだけでなく、アクセント的にインパクトのあるモチーフも同時に見つけ出し、イメージとしての広がりを視覚的に表現する事も目的としている。当然、出現頻度の高い色は、その都市のイメージカラーとなるが、それ以上にアクセントとして効果的な色も重要である。景観を構成する要素として色を考えるならば、ここで得られたアクセントカラーを調和させたアソートで、具体的な地域の特色作りにつながると思われる。

4-2　浜松市 - イメージコラージュ

写真 -01

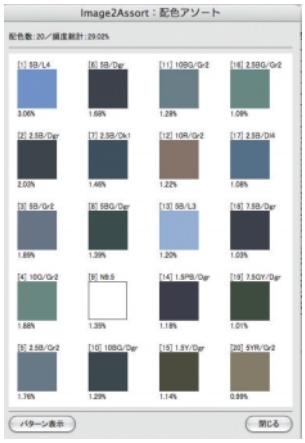


図 -45

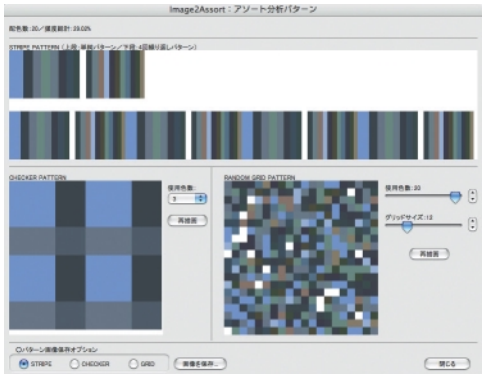


図 -46

4-3　磐田市 - イメージコラージュ

写真 -02

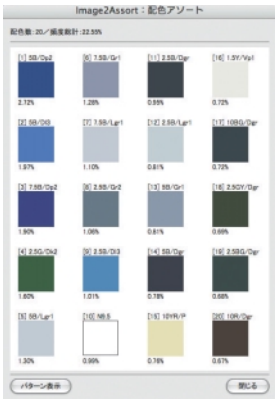


図 -47

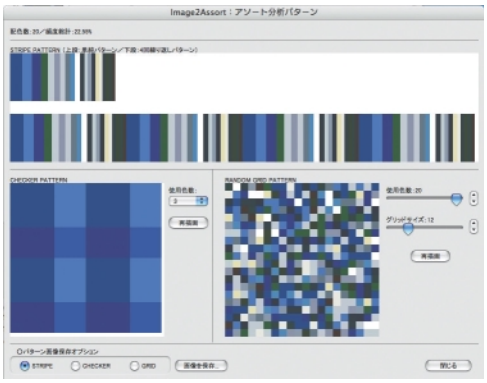


図 -48

4-4　袋井市 - イメージコラージュ

写真 -03

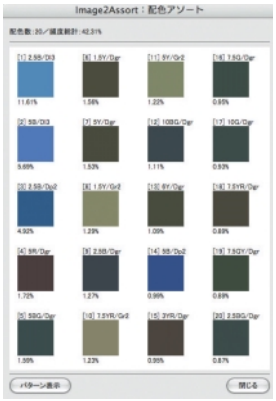


図 -49

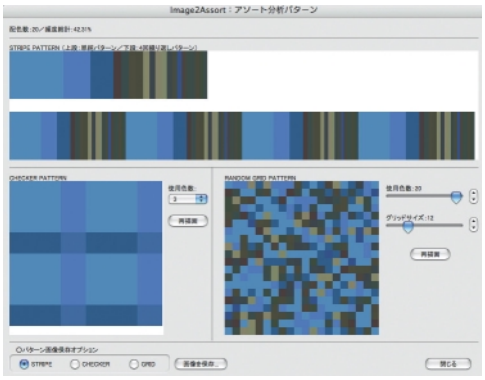


図 -50

4-5　豊橋市 - イメージコラージュ

写真 -04

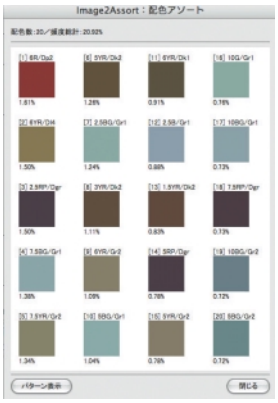


図 -51

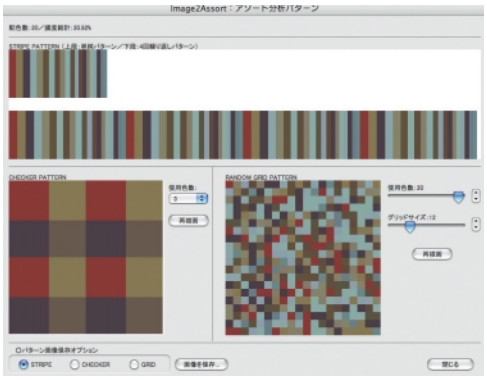


図 -52

4-6　豊川市 - イメージコラージュ

写真 -05

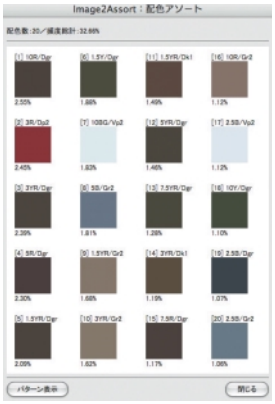


図 -53

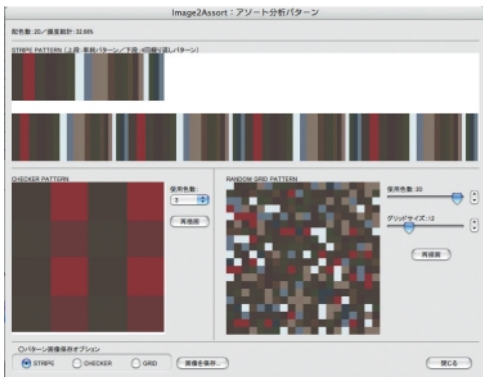


図 -54

4-7　蒲郡市 - イメージコラージュ

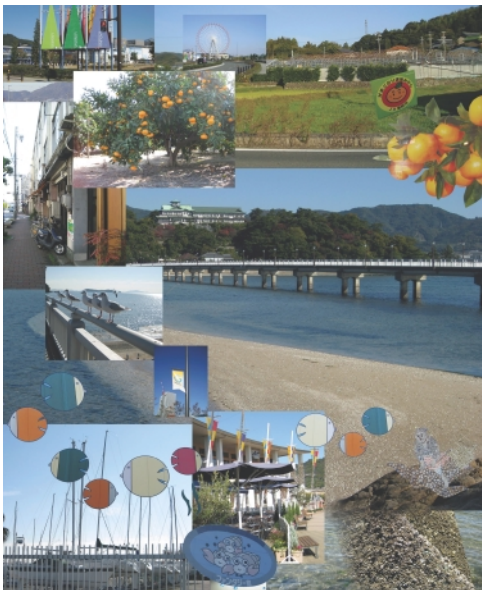


写真 -06

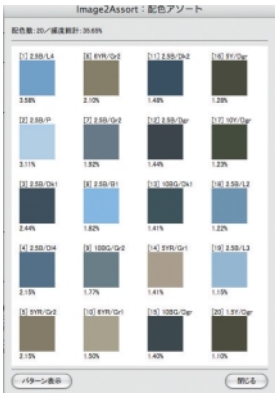


図 -55

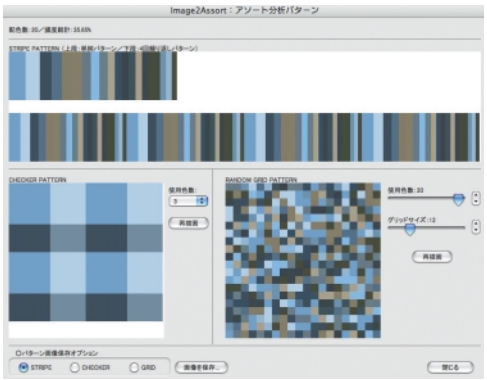


図 -56

4-8　飯田市 - イメージコラージュ

写真 -07

図 -57

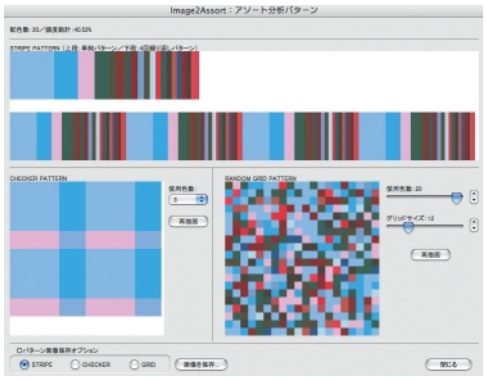


図 -58

5　地域代表画像色彩分析

プレリサーチで収集されたそれぞれの地域を代表する画像データから、イメージ分析の結果と対応させて代表的な８配色をそれぞれ抽出している。

控えめな東三河、活動的な遠州、味わい深い南信州に相応しくイメージ連想がしやすい配色に絞り込む事で、地域の特色を明解にしている。

東三河は全体にオーソドックスな配色であり、一つ一つの印象性も弱く、地域全体としての基調色が見つけにくい。それと比べると遠州は、空や海の色が大きな面積を占めて、配色としてメリハリが利いたスッキリした印象を与える。特に南信州は、ほかの地域とは違って、かなりこってりとした深みのある配色である。全体に四方が山に囲まれているために、建物や街全体に陰影がつき方がかなり影響していると予想される。

今回の本調査として行ったイメージ調査そのものは、あくまでも「言語」で答えているが、その地域らしさをイメージングする際には、風景や建物等全体の景観を色に置き換えながら想像した結果を、反映した状態でビジュアルから選定していると思われる。

ここに登場した色をそのまま使うとその地域の環境に自然と馴染むが、反対に出現して

東三河地域／控えめな

図-59

南信州地域／味わい深い

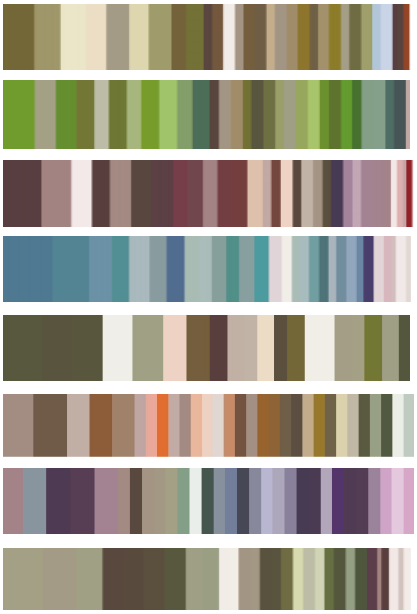


図-61

遠州地域／活動的な

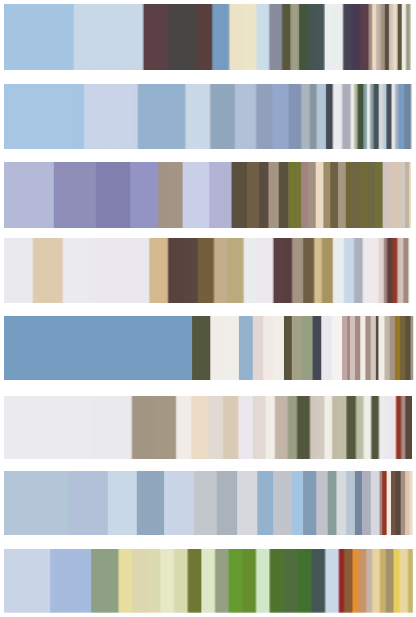


図-60

いない色を大胆に使うほど目立つ事になる。あくまでも景観色を考えるには、全体での相対なバランスが重要であり、遠景でバランスが取れていて、しかも近寄っては一つ一つ個性があるような状態が理想と思われる。

6 まとめと今後の展開

これまで２年間の研究成果をふまえ、最終的な段階では、地域の景観色として相応しい「ガイドライン」として提案する事を当初からの目的としている。現地でのイメージ調査の結果と画像データ収集、写真撮影等からコラージュ作成後の分析結果などを総合すると、おおむね地域らしさは、今の段階でも十分に集約出来たと思われる。そこで次の段階へ進むには、最終的な色の絞り込みにあたって、あらかじめ景観における配色基準や色彩計画の考え方をいくつかにまとめて整理しておく必要がある。

配色の基準と視点からの距離感

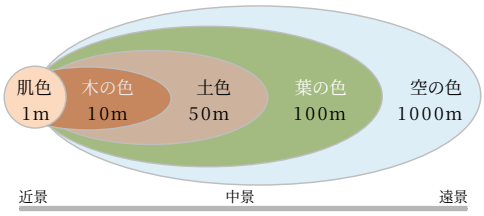


図-62

配色を考える際の基準となる色の捉え方と視点から対象物までの距離の関係を示した図である。景観全体を通じて、基準色は肌色、木の色、土の色、葉の色、空の色などの自然環境色とのバランスで考える。

色彩計画の基本的な考え方

図-63

1：消去の関係

図と地がほとんど同じ色のため、全体として消える効果。存在を主張する必要がない構造物や、背景となる壁面、橋桁などが考えられる。

2：融和の関係

図と地が曖昧で、類似した印象が調和につながる効果。ほとんどの構造物はこの調和に置き換わると、自然環境とのバランスが計画しやすくなる。

3：強調の関係

地に対して図が目立ってコントラストを強く見せる効果。現状では多くの看板から建造物、店舗に始まり、橋や公共建造物までが、主張し合って混在している。

今後の展開として

三遠南信地域としての「らしさ」はある程度イメージとして抽出されたが、しかし、今の段階では実際の色の選定は具体的に進められていない。そのためには、それぞれの地域を特徴づけるような「強調色」（アクセントカラー）の選定が必要である。それぞれの特産品や、花や樹木、祭りや行事などに一時的に出現し、多くの人にしっかりとした記憶に残るような色である。

引き続き画像データによる色彩分析の結果から、全体景観色として、近景から中景、遠景までの距離感と配色方法などを具体的に想定しながら「基調色」（ベースカラー）の範囲を絞り込む研究段階へ進めたい。

最終的に出来上がった三遠南信地域の景観色の抽出結果は、これからの景観に対する地元住民一人一人の考え方や行政団体などで策定が予想される具体的な景観色「ガイドライン」のあり方にも参考にして欲しい。

そのためには、研究結果の解りやすく活用しやすいまとめ方や、啓蒙するためのビジュアル提案手法の検討が必要である。是非、次の３年目の研究段階では、このレベルまで進めたいと考えている。

参考データ

1）静岡文化芸術大学　研究紀要2008年　Vol.9 page 99-117
三遠南信景観色調査研究　第１次報告書
2）117 言語によるイメージ分析手法のシステム開発 ー感性評価手法の理論とプロセスー宮内博実 , 大渕一博 感性工学会　2005 年
3）117言語によるイメージ分析手法のシステム開発 ーアプリケーション開発と適用事例ー大渕一博 , 宮内博実　感性工学会 2005 年
4）PC 上で動作する景観色彩解析アプリケーションの開発　大渕一博 / 宮内博実　札幌高等専門学校 2002 年紀要

発信するSUAC印
―ユニバーシティ・グッズの開発と大学ネットショップの展望 第2章―

The brand SUAC which sends as an unique existence
- The development of university goods and the view of university online-shop (stage 2)-

和田　和美
デザイン学部メディア造形学科
Kazumi WADA
Department of Art and Science, Faculty of Design

坂本　鐵司
デザイン学部生産造形学科
Tetsuji SAKAMOTO
Department of Industrial Design, Faculty of Design

鳥居　厚夫
デザイン学部空間造形学科
Atsuo TORII
Department of Space and Architecture, Faculty of Design

山本　一樹
デザイン学部生産造形学科
Kazuki YAMAMOTO
Department of Industrial Design, Faculty of Design

佐藤　聖徳
デザイン学部メディア造形学科
Kiyonori SATO
Department of Art and Science, Faculty of Design

羽田　隆志
デザイン学部メディア造形学科
Takashi HADA
Department of Art and Science, Faculty of Design

的場ひろし
デザイン学部メディア造形学科
Hiroshi MATOBA
Department of Art and Science, Faculty of Design

本稿は、H19年度から引きつづき学長特別研究により遂行された「ネット販売の教育的可能性に関する研究」の研究成果報告である。メディア造形学科、空間造形学科、生産造形学科の、デザイン学部3学科で取り組む課題として、大学公式のネットショップのあるべき姿の展望を図り、実施に向けたユニバーシティ・グッズの研究・開発を行っている。

This paper reports the result of "The research about educational possibility of online-shop" which was accomplished and continued on president special research in 2007. We, three department of faculty of design attempted the view of the way it should be of the official online-shop of an university, and researched the unique university.

1．H19より継続する成果として

本研究は、本学における研究成果のアピール手段の一つとして、ネットショップが果たす役割を考察し、試作検証等を通じて商品像を検討・提案し、大学の「ネットショップ開業にいたる準備検討のプロセス」「ネットショップ実現のための諸開発」「ネットショップ運営」の各フェイズを実践的に学ぶことで、本では学べない各種ノウハウや、運用上の留意点を体得することのできる、教育システムの構築可能について、調査及び検証実験を行い、本学で備えるべき実践的な基盤の形態を提案することを最終目的として、平成19年度にスタートしたものである。

また、ネットショップに関する潜在的需要を持つ、浜松、静岡の地元企業に対して、実践的なアドバイス、コンサルテーションを行うための、ノウハウの蓄積、システム基盤の構築を行うことで、地元の貢献にも役立てるねらいも持っている。

これらを踏まえて、今年度は大きく「ネットショップの構築」と「ショップで扱う商品開発」に的を絞り、研究開発を進めた。

商品開発面では、既存の学生・教授の制作物やアイデアを元に、具体的に商品化できる物と、商品化する取引業者を選定し、効率良く製品化するプロセスを考察するのと併行して、本学内で商品アイデアを募る方法も検討した。

2．　商品候補の試作

前年度はデザイン学部を擁する特徴を活かして、現行の大学が持つネットショップや美術館のミュージアム・ショップの商品ラインナップを参考にしつつ、本学ならではのユニークな分野を選択、商品企画開発をしていくために、以下のような5つの方向を設定して進めた。

1　ユニバーサル・デザイン関係
2　教員の研究・教育活動から生まれるアイ

デアグッズ
3　地場産業・地元企業との共同開発
4　学生による企画に基づく商品
5　学生制作絵本

これらはいずれも、量販店のような品物数は必要なく、ユニークな商品を選び、集める形態が最適である美術館のミュージアム・ショップのような、セレクトショップ的な形態を目指す方向性の中で開発が進められた訳だが、前年度終了時に、一般的なお土産としても買いやすいモノを、という声が文政学部から上がったことから、商品開発のカテゴリーを再考する必要性を感じた。そこで本年度は、まずニーズに応えるべく、教職員を対象にしたアンケートを実施した。その結果を得て、文房具／生活雑貨／食品／おもちゃ／ユニバーサル・デザイン／記念品という６つのカテゴリーを設定し、ロゴ入りマグカップからエコバッグまでラインナップを再検討し、最終的に約９３種の商品候補をリストアップした。

試作を始める前に、ショップのロゴ・タイプは、生産造形学科卒業で浜松のグラフィック・デザイン事務所で働く稲垣澄世さんに制作依頼した。インターネット業界ではよく@(アットマーク)を使用するが、このアットマークを、本学の略字[SUAC]のＡに当てはめて、SUACの文字にネットショップが含有されているようなイメージで、以下のようなロゴマークが誕生した(図０１)。さらにショップのカラー・アイデンティティーとして、第一カラーにオレンジ色(DIC１６４)、第二カラーにシルバー(DIC６２１／使用できない場合は灰色DIC６５２)、そして第三カラーに大学カラーの青色(DIC２２２)(図０２)を設定し、制作したショップ・ロゴもその３色で展開した。

図０１：ショップロゴ

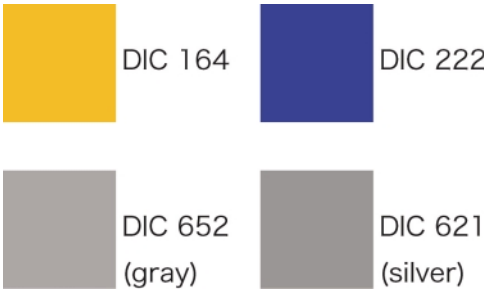


図０２：ショップカラー

商品試作の方法としては、学生や教員から出てきたアイデアを元に、地元企業に依頼するオリジナル型あるいはコラボレーション型、すでに売っているユニークな商品を卸してもらうセレクト型、大学のイメージに則したノベルティグッズをセレクトして名入れするノベルティ型の３つの方法をとった。カテゴリーと試作の方法は、部分的に偏りすぎないよう、あるいは特化しないよう、うまくバランスをとりながら発注していき、結果的に約８０種ほどのラインアップを揃えることができた。以下はカテゴリー毎、試作方法毎に主な試作物を紹介していく。

商品カテゴリー
Ａ：文房具
Ｂ：生活雑貨
Ｃ：食品
Ｄ：本／ＤＶＤ／おもちゃ
Ｅ：ECO
Ｆ：記念品

試作方法
1. コラボレーション型
2. セレクト型
3. ノベルティ型

● Ａ：文房具
A-1：A5 ノート３種

これは印刷物なので、コラボレーション型でもないが、文房具マニアの和田としては真っ先にオリジナルを制作したいと考えていたＡ５仕様のノートなので、デザインは和田が担当した。ショップ・カラーで設定したオレンジ色、シルバー(試作は灰色)、青色の３種

で、色違いで仕様が判別できるように、ドットパターン／グリッドパターン／Ｃ罫を制作した。展示会では、併せて無地仕様のも作ってほしいという要望が相次ぎ、意外に無地ノートが市場にないことに気づかされた。試作ではシルバーで印刷できなかったので、灰色でＣ罫を作ったが、Ｃ罫は試作同様灰色展開にして、無地を新たに制作する際は、シルバーで印刷して４種をまかなうよう今後検討を考えている。

A-2：フレキシブルUSBキーボード

ユニークな輸入雑貨を取り揃えるショップをインターネットで発見し、いくつかを卸してもらったうちの一つ。海外のミュージアム・ショップ等でも絶えず面白グッズを探している身としては、日本でも購入できる利便性に着目し、試しに卸して、リストに加えてみたが、展示会での反響は大きく、改めて面白グッズを紹介していくセレクトショップとしての機能の必要性を実感した。実用性はどちらかというと棚上げモノであるが、比較的安価なことから人気が集中し、欲しいと思ったものに丸いシールを貼るという学生アイデアの人気投票では、みごと１位を獲得した。

A-1：A5ノート３種

A-2：フレキシブルUSBキーボード

A-3：ネームカードケース・ミラー付

A-3：ネームカードケース・ミラー付

文房具や生活雑貨など、機能性を伴う製品は、一から制作すると非常にお金と時間がかかることから、すでにあるものでまかなう方法も有効だと考え、名入れ印刷してオープンキャンパス等で配ったりする、いわゆるノベルティ方面も視野に入れた。その代わりセレクト型同様、ショップ・カラーに即してデザイン的にも統一感あるラインナップを心がけた。このネームカードケースは特に、本体の色はシルバー系、材質は、ステンレスやシルバー色の樹脂といったセレクトしたシルバーシリーズの一つである。

● B：生活雑貨

B-1-1：カレンダー卓上型「祝日暦」

偶然であるが、オリジナルのカレンダーも試作したいと考えていた所、H20年当時3年生だったメディア造形学科の小田真弓さんが、メディア造形総合演習１における制作物として、CDケースに収まる卓上型のカレンダーを提案、試作したので、そのデータを元に印刷所にて試作印刷した。日本の少ない祝日の

意味を知り、より楽しめるように、特に祝日の情報を特化させたデザイン展開で、展示会でもとても評判が良かった。今後も制作・販売していく場合、データを更新して印刷していく必要性と、安価に抑えるためのその部数が課題である。

B-1-2：テーブルウェア「cedemo」

この作品は、共同研究者の生産造形学科の山本先生より紹介されたもので、生産造形学科の卒業生である山浦陽介さんが制作し、第17回テーブルウェア大賞にて佳作入選している。土器のような3種の形は、上の曲線や突起が微妙に異なり、塩・こしょう・砂糖というように形で使い分けることができるユニバーサル仕様でもある。

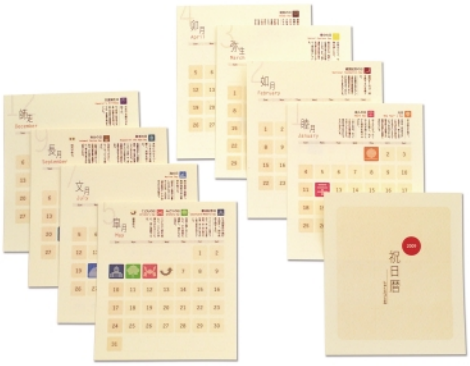
B-1-3：オリジナルデザインTシャツ

オリジナルデザインを反映させるメディアとしては、Tシャツは最適であるが、今回はアパレル・メーカーのように、いっそのこと、とんがったデザインを冒険してみようと試みることにし、緻密なデザインを描き込むH20年当時メディア造形学科3年の伴多絵子さんのデザインに集中することにした。プリントする地のTシャツ自身もデザインに大きく影響するので、非常にこだわって業者を検索した結果、香川県のプリント業者に委託した。ここは、Tシャツの種類が多いだけでなく、つなぎやマグカップのプリントも請け負っていたので、3色、3種類のデザインTシャツの他、デザイン学部では欠かせないつなぎの名入れ、マグカップの名入れも併せて試作してもらった。

B-2：「お茶のせっけん・Duthe」

結果的にセレクト型に属するが、商品を扱わせてもらう大学の存在意義としてパッケージデザインを制作させてもらうという条件で扱わせてもらうことになった商品もいくつかある。これは近年クローズアップされているお茶のせっけんが、浜松の緑茶メーカーでも制作・販売されていることを発見し、直接交渉して卸してもらうようにした商品である。展示会では、すでに売られているパッケージ・デザインの仕様のまま展示したが、今後SUAC仕様のパッケージ・デザインを制作させてもらうことで話が進行している。

B-1-2：テーブルウェア「cedemo」



B-1-1：カレンダー卓上型「祝日暦」

B-1-3：オリジナルデザインTシャツ

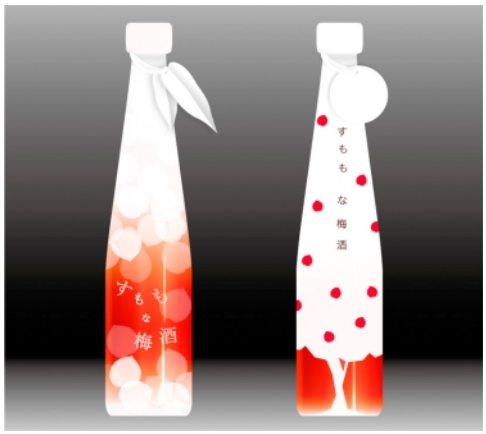
B-3：「緊急避難セット」

地震地帯として必須であるグッズでまず考えたのが、この緊急避難セットである。多くのセットや内容構成をリサーチしたところ、実際に企画・販売されている規格は非常に多様であるが、いずれも中身に対して高価であることが、緊急避難グッズ普及のネックにもなっていることが伺えた。まずはデザイン性を損なわない程度に基本のセットをノベルティ関係からセレクトし、さらにカンパンやハザードマップ等を追加することに検討している。結果、価格設定が難しいことになるが、商売を目的としているのではないので、上代が例え下代の九掛けになっても学生が持ちやすい価格設定で商品規格を引きつづき進める予定である。

● C：食品

C-1：浜松酒造「すももな梅酒」「空の雫」

やらまいかブランドの伝統工芸等を持つ企業を当たっていく中では、「浜松酒造」は学生に機会を与えてくれる非常に好印象の相手である。すでに蔵のビール釜で学生に仕込ませて、SUACビールを提供してくれているが、今回はお土産に最適なラインナップとして、企業としてすでに販売しているお酒のパッケージデザインを別途企画・制作させてもらうことになった。一種はスモモと梅の勾配種でできる、学生が好みそうな赤い梅酒「李梅」、もう一種は蔵出しの純米酒「天滴」で、瓶の青が鮮やかな一品。聞けば青の瓶の色は、この品種の特性や味わいに合わせて決められるそうで、一方「李梅」の方は中身が鮮やかなロゼワインのような色がそのまま見える透明の瓶が使用されていた。それらをそのまま生かしたパッケージ・デザインを考案することが検討された。また、ネーミングも新規に提案して欲しいという企業側の要望もあり、学生の視点でのネーミング会議が連日進められた。特許庁にすでに登録されていない名前をやっと割り出し、併行してメディア造形学科のH20年当時３年の依田芙侑さんがデザインを担当し、瓶の青と梅酒の赤を活かした美しいデザインが仕上がった。今後「すももな梅酒」「空の雫」の２種の商標を登録する必要がある。



C-1：浜松酒造「すももな梅酒」

「空の雫」

C-2：「みんなのお店[わ]クッキー／クッキーセット」

C-2：「みんなのお店[わ]クッキー／クッキーセット」

安全基準がきびしい昨今、なかなか食品の開発には手が出せないが、ぜひラインナップに加えたいカテゴリーであるので悩んでいた所、このクッキーシリーズは、生産造形学科の高山靖子先生が紹介してくれたもので、非常においしかったので、セレクト型として扱わせてもらうことにした。河原林先生が長として、高山先生も関わっている「静岡県作業所連盟」いわゆる授産所関係の「わ」という作業所で長年商品化を進めていたもので、すでに人気があるようで、また展示会にて試食コーナーを設けた所、非常に評判が良かった。扱わせてもらうことにした時点では知らなかったが、生産造形学科の卒業生がパッケージ・デザインを制作したとのことで、結果的にコラボレーション型であるともいえよう。

● D：本／ DVD ／おもちゃ

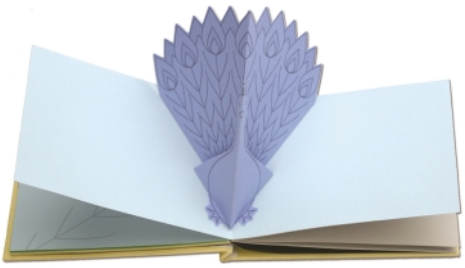
D-1：学生手作り飛び出す絵本

「どうぶつさん、だぁーれ？」「いたずらねこのかくれんぼ」

学生の手作り絵本は、前年度に計 14 冊×10 冊ずつ、製本試作したが、この中で 2 種類は開くと飛び出したり扉を開くといった仕掛けがあるもので、前年度にその作業までまかなうことができなかったため、今年度の中で仕掛けの部分を印刷してもらい、学生に貼る作業をしてもらった。

D-2：「DROP BATH LIGHT」

USBキーボードを卸してもらったショップで同様に発見した面白グッズの一つ。風呂の中でプラネタリウムが楽しめる「BATH PLANETARIUM BLACK」とともに、パッケージ・デザインも含めてトータルでハイレベルなデザインは、癒し系でもあり、展示会でも非常に人気が高かった。「DROP BATH LIGHT」は、風呂に沈めて初めて発揮するので、展示会で体験に近づけるよう、ボールに水を張って中に入れ、色の変化を再現した。電池仕様とはいえ、水の中で扱える照明器具の企画制作は、商品開発の参考にもなった。



D-1：学生手作り飛び出す絵本
「どうぶつさん、だぁーれ？」

D-2：「DROP BATH LIGHT」

● E：ECO

E-1：「遠州綿紬」ぬくもり工房「My 袋セット」

やらまいかブランド「遠州綿紬」を扱う企業「ぬくもり工房」には、いくつかの商品企画を提案し、2 種ほど試作してもらい、2 種ほどすでに販売されている商品を扱わせてもらうこととしたが、この「My袋セット」はさらに、メディア造形学科 H20 年当時 3 年の前田侑穂さんのデザインを、静岡県作業所連盟の作業所が制作したという、まさに 3 者のコラボレーションが成立した一品。

E-2：「もったいない携帯カトラリーセット」

MOTTAINAIシリーズは、「もったいない」という言葉のすばらしさに喚起したアフリカ人女性が決起した運動で、このカトラリーセットの売り上げの一部が、アフリカの植林運動の基金に還元されるというシステムが確立している。昨年このアフリカ人女性が国民栄誉賞を受賞したのはまだ記憶に新しい。前

から商品の存在を知っていたため、卸業者を探していたところ、これを扱うノベルティ業者を発見した。ノベルティ扱いとして名入れをしたが、意味的にはセレクト型といえよう。

E-1：「遠州綿紬」ぬくもり工房「My袋セット」

E-2：「もったいない携帯カトラリーセット」

E-3：「コンパクトトートバッグ」

E-3：「コンパクトトートバッグ」

現在、エコバッグは実に多様に展開していて、使い勝手がよさそうで、かつデザインや色もショップに即しているものを探す中で、このエコバッグの制作業者選定が実は一番難航した。当初から外国で買って重宝していた、コンパクトに折り畳めてバッグの中に入れて携帯できる「Bag in Bag」仕様を探していたのだが、これはリサーチしていくうちに、いわゆる「エコバッグ」と言われるものの解釈とは微妙に違うことがわかってきた。つまりエコバッグではあまり、折り畳んでコンパクトになるような仕様がない。それで結局、コンパクトに折り畳める仕様を中心に探し始めたが、すでに規格であるものは「帯に短し、たすきに長し」で、あまりコンパクトでなかったり、色が中途半端できれいでなかったり、どれもこれも今ひとつ選びきれなかった。そこで最終的につなぎやTシャツ、マグカップの印刷をお願いした香川県の業者で、このバッグの名入れサービスも行っていたので、ついでに少ない枚数で試作してもらった。到着したら、やはり、というか、インターネットの写真で見ていたのとは大分違うので驚いた。色も違うしサイズもイメージより大きすぎるし、折り畳んでもあまりコンパクト、という状態ではない。これは和田的には「失敗作」の一つとなった。リベンジで作成しなおすことを検討している。

●F：記念品

F-1：ポストカード「イラスト編」「写真編」

せっかくイラストを描く学生が大勢いるのだから、ということで、デザイン学部がある大学ならではのラインナップとして、学生イラストのポストカードを試作するために、メディア造形学科のめぼしい学生にイラストのデータ提供を要請した。写真編はSUAC校舎の特徴的な建築を活かした写真を取り急ぎ撮影したが、冬の時期だったため、緑があまりきれいでなかった。これはデータを更新するというよりも、イラストも写真もバリエーションとして追加していって、ミュージアム・ショップのポストカードコーナーのように、多くのポストカードを追加で随時作成し、ラインナップを増やしていくよう検討してい

きたい。

F-2：「遠州綿紬」ぬくもり工房「ネクタイ」

文政学部の教員側からの要望として、ぜひネクタイを、というものがあったため、「遠州綿紬」のぬくもり工房にて扱わせてもらう商品を選定している際に、ネクタイがあったのでとりあえず卸購入させてもらったが、作家が制作した一点物だったため、卸の時点で下代が5,000円とされた。商品ラインナップにおけるリサーチの際に、ネクタイを使用するシーンやネクタイのターゲット層も検討していたが、単純なイメージとして学生が就職活動前に買うという設定で行くと、下代で5,000円という価格では非現実な感じがしたので、お土産に買うもしくは中年層がちょっといいものを買うという設定で、カテゴリーを「記念品」扱いとしてみた。しかし同工房の商品の扱いがショップのラインナップの中でも割と多かったため、バランスを考えて最終的にこのネクタイは展示するものからははずした。後に中年男性と話をしていく中で、ネクタイで5,000円は高くない、と言われたので、価格設定はこの辺で、再検討してみたいリストとなった。

F-3：「太軸ウッドペンセット(ローズ入)」

木工製品のラインナップは、やらまいかブランドでもある「天竜杉」でぜひ試作してみたいものがいくつかあったが、当たった業者が建材専門で、小さい商品試作には到底たどり着けないと判断し、一時途方に暮れてしまった。後に静岡県では島田方面に、小振りの木工製品を扱う業者がいくつかあることを口コミで知ったが、業者探しで時間が取られてしまい、結局間に合わなくなったので、ノベルティ関係の中で木工製品を探した。名入れがレーザー刻印で工業製品的だが、手作りとはまた違う印象のバリエーションとしてのラインナップとなった。

F-1：ポストカード「イラスト編」

F-3：「太軸ウッドペンセット(ローズ入)」

●番外編 1

山本一樹先生作　カレッジリングのための参考作品「シルバー・ジュエリー」

海外の有名大学のカレッジリングをまねて、試作してみようと試みたが、日本国内でリサーチした所、カレッジリングを大学として制作しているところは皆無に等しく、カレッジリング制作企業がメインで、しかも価格も１－２万以上とかなり高価であった。いずれも個々の名前と卒業年度を入れるため高価になるのだが、そういった規格とは別のタイプで、比較的安価で企画する術を探った。大学の工房や機材、専門家の力を借りて、元の型等、内部でまかなえるモノはまかない、量産する分は浜松のジュエリー制作業者に委託する方法が考えられた。H20年度中は試作までこぎつけなかったため、年度をまたいでH21年度に催した、商品試作候補の展示会では、生産造形学科で銀作品を扱う山本一樹先生のプライベート作品を展示させてもらったところ、やはり何かモノがあることで、商品候補としてのカレッジリングが具体的にイメージしてもらえたようであった。

●番外編２
佐藤聖徳先生作「おざぶコースター」など木工製品数種

木工作品を専門とする佐藤先生には、以前よりぜひショップのための商品企画の提供を要請していたのだが、木工であるがゆえに、どうしても量産しにくいというネックがあった。しかしこれも参考作品ということで、作品を展示させてもらうことになったが、量産あるいは卸入荷が確保されている他の商品とはすみ分けて、参考作品はポイントによる人気投票からははずしていた。しかし展示会が始まって４－５日経ったところで、気がつけばシールを貼るブロックメモが参考作品にも設置されていて、すでに大量のポイントが投票されてしまっていた。図らずも参考作品も人気投票に取り込まれてしまったが、前年度から試作していた「音球」は、量産業者が未定にも関わらず人気投票で２位に入ってしまい、この佐藤先生の「おざぶコースター」も４位に入ってしまった。いずれも今後は、これらの量産体制確保が最重要課題である。

3. おわりに

商品試作と併せて、和田の座学「エンタテインメントシステム論」におけるプロジェクト編成時に募った、メディア造形学科の３年生有志がネットショップ本体のウエブページ制作を進めた。「エンタテインメントシステム論」ではまた、ショップのグッズ企画制作チームも編成し、展示会までの色々なプロセスは、このショップサイト制作チームとグッズ企画制作チームが中心となって作業してくれた。こうして実質、学生が積極的に関わってくれたことで、内容的にはまだまだ問題があるかもしれないが、実践としての作業が学生を大きく成長させたようなので、特別研究の意味が実現しつつあるように思われる。

ショップの構築は今後、決済システム等セキュリティ面を強化して構築するために業者に制作委託する必要があり、グッズも再試作するものや、新たに別の教員のCADの演習にて学生がデザインしたものの試作等があるが、今まで関わったスタッフの努力が報われるよう、ショップ開設、グッズ販売までこぎつけようと追い込みをかけている。

サイトイメージ例

ユニバーサルデザインの地域での実践に向けて（その 3）

Practicing Universal Design in the Community (Part 3)

古瀬　　敏
デザイン学部空間造形学科
Satoshi KOSE
Department of Space and Architecture, Faculty of Design

根本　敏行
文化政策学部文化政策学科
Toshiyuki NEMOTO
Department of Regional Cultural Policy and Management, Faculty of Cultural Policy and Management

ユニバーサルデザインの理念を地域に根付かせてそれが具体的な実践につながるようにするにはどうすればいいだろうか。これまで何年かにわたって米国などでユニバーサルデザインを推進してきた専門家を招へいして講演会などを企画してきたが、平成２０年度にはセンターフォアユニバーサルデザインでユニバーサルデザインの父と呼ばれたロナルド・メイス教授を支えてきたレスリー・ヤング女史にお話をお願いし、関係組織からの情報提供と合わせて有用な情報を得た。なお、本報告は平成２０年度の文化・芸術研究センター長特別研究報告として位置づけられる。

What can be done to implement the concept of universal design in the community, not just in words but in action? The authors have tried for the past several years to organize lecture sessions with invited speakers from the States and UK, and in 2008 the invited speaker was Ms Leslie Young, who has worked with late Professor Ronald Mace at the Center for Universal Design from its establishment. Her lecture gave new insights into the realization of universal design.

はじめに

今年度は静岡県がユニバーサルデザイン室を設置してから１０年目ということから、この間にどれだけユニバーサルデザインが普及したかを見直すことを意図して、「しずおかユニバーサルデザイン国際シンポジウム」が静岡県と静岡文化芸術大学との共催で、１１月１３日と１４日に行われた。本特別研究ではその実施を研究活動の一環として位置づけることになった。

シンポジウムでは、県が行政として行ってきたことを振り返るというよりは、民間がどのくらいまでユニバーサルデザインの理念を踏まえて動きつつあるかを見つめようということで、シンポジウムの企画としては地元企業の取り組みを紹介しながらさらに推進するきっかけづくりを目指した。もちろん、県が行ってきたこと、そして静岡文化芸術大学が地域に関与していることについてはパネル展示などで情報を提供した。

初日は基調講演として大宅映子氏に「誰のためのデザインか」と題して辛口のお話を依頼、また米国から記念講演者としてユニバーサルデザインの父と言っていい故ロナルド・メイス教授とともに研究所でずっと仕事をしてきたレスリー・ヤング女史を招へいして、「ユニバーサルデザインの到達点と今後」についての講演を実施した。

これらの講演と組み合わせて、地元そして日本での成果を事例として紹介する発表をパネルトークも含めて設定して議論を行った。また２日目にはワークショップを設定し、地元企業であるヤマハ株式会社とヤマハリビングテック株式会社での製品開発をテーマに議論を行った。さらに希望者には、午後の時間を用いてユニバーサルデザイン関連施設の見学が設定された。これまで本学で実施したユニバーサルデザインのシンポジウムでは、ワークショップは人手の関係などもあって行えなかったので、参加者はどちらかといえば受け身という感じだったが、今回は積極的な参加の場を提供できたと考えている。

本研究の一連の流れの中で、これまで何度か米国と英国から専門家を招き、ユニバーサルデザインの理念と実践を県民に紹介してきたが、今回はとくに多様な内容が含まれており、全体を通して見ると、フォントデザインから住宅関連製品、自動車、住宅、そして公共交通機関まで、さまざまな局面でユニバーサルデザインがどのように考えられ、どのように実現されているかを参加者に伝えることができたと考えている。

ユニバーサルデザインの原点から見直す

今回招いたレスリー・ヤング女史は、現在はノースカロライナ州立大学付属のユニバー

サルデザインセンターを離れてしまっているが、同センター設立以前からメイス教授のもとでユニバーサルデザインの仕事にずっと携わってきた。同教授が亡くなったあとも、センターの活動を支えてきたが、センターの運営が次第に本来の方向からずれてきたという事情から、センターを離れたということである。今回の講演では、在籍中にメイス教授といっしょにユニバーサルデザインの事例を分析した連邦政府からの委託研究報告書からいくつか選んで重要なポイントを説明してくれた。これまでの公刊されたさまざまな書籍や報告書などで、実例分析を行いながら全体を通してユニバーサルデザインのあるべき姿の議論をしているものはじつはあまりなく、またこうした報告書の内容を説明するのはなかなか作成当事者以外はやりにくいということもあって、米国から今まで紹介されることもなかったので、いい機会だったといえよう。

なお、ユニバーサルデザインセンターの成果物として、下記の 2 つが参考になる。いずれも Web アドレス
http://www.design.ncsu.edu/cud/pubs_p/pud.htm **からダウンロードできる。**

A）Case Studies on Universal Design, 1998

B）The Universal Design File: Designing for People of All Ages and Abilities, 1998

上記の報告書では、製品から建築、公共交通機関などがカバーされ、それぞれの事例について議論がなされている。ユニバーサルデザインとして成功に至った比較的共通な要点を挙げると、以下のとおりであるとまとめられている。

1）関係者の個人的コミットメントは大きい：それをやらなければならないという固い決意を持つと、通常では突破できない周りの逡巡を吹き飛ばせる可能性が大きいということである。

2）ADAのインパクトは大きい：これは米国の事例ということから出てくるわけだが、法律が規制していると最低限やらねばならぬことが見える。それ以上を目指す場合も目標が設定しやすいといえる。

3）外部コンサルタントの利用：内部だけでは突破しにくい場合、第三者の立場からの報告があると、組織内での説得がやりやすい。

4）必ずしもUDを事前に知っていたわけではない：「ユニバーサルデザイン」ということばや概念の知識がなくとも、その理念を理解していれば成果が達成される。ときには成果を見て外の人がそれはユニバーサルデザインだ、と指摘されることもありうる。

5）コスト感覚は消費者製品では重要：値段が高くても売れる、ということはあり得ないのが消費者製品の宿命であろう。1セントでも安い物を、という消費者の一般的購買動向は侮りがたい。

6）「障害者・高齢者向け」という概念はじゃま：ユニバーサルデザインは対象を特定しないわけであり、自ら利用者層を絞り込むような発想は逆効果になりやすい。実際にそのようにして失敗した例も少なくない。

7）市場一番乗りは広報面で有利：一番乗りであれば、対外的に広報発表がなされた際に、広告を申し込まずとも経済面、あるいは社会面で記事として取り上げられる可能性が高い。これは信憑性が高い情報として社会的に評価してもらえるので、よりいっそう効果がある。

以上の各項目は、日本の事例を思い浮かべるとほぼ該当するものが見つけられる。もちろん、国情の違いがもたらす差異もあるので、一概にはいえないが、ユニバーサルデザインを意識して何かを打ち出そうとする際には有用な物差しになるであろう。

トイレのあり方について

昨年度の本報告で言及したトイレのユニバーサルデザインに関する議論は、2009年4月初頭にロンドンの王立芸術大学で開催されたInclude2009で論文として発表した。また、関連報告として、2009年5月にハワイのホノルルで行われたPacific Rim Conference on Disabilitiesでポスター発表を行った。トイレ事情は国によって大幅に異

レスリーヤング女史の講演。手話通訳がついている。

講演後、対談時のレスリー・ヤング女史

なっているものの、あってほしい姿はさほど違わないこともあって、それなりに参考になるコメントなどが得られた。なお、コンビニエンスストアの現在について記述した書籍が最近出版されたが、そのなかには興味深い事情が書かれている。

おわりに

2010年10月には、浜松市において第3回国際ユニバーサルデザイン会議が開催される。2002年から4年ごとにわが国で開催されてきた会議は、その間にどのくらいユニバーサルデザインが進んだかを検証する場である。各所での取り組みを見つつ、自らが何をなすべきなのかを振り返る場とすることが求められよう。

参考文献

Kose, S. (2009) How can we assure that everyone will have a toilet s/he can use? *Include 2009 Proceedings*, London: Royal College of Art (ISBN 978-1-905000-80-7), 6 pages.

Kose, S. (2009) Can you find a suitable toilet when you are somewhere outside? Presented at the Pacific Rim Conference 2009, Honolulu, Hawaii, May 2009.

鷲巣力 (2008) 公共空間としてのコンビニ、朝日選書

地域におけるサスティナブルデザインの展開の可能性
－持続可能な地域公共交通ネットワークをめざして－

Possibility of designs for sustainable communities in the western area of Shizuoka Prefecture

宮川　潤次
デザイン学部空間造形学科
Junji MIYAKAWA
Department of Space and Architecture, Faculty of Design

坂本　鐵司
デザイン学部生産造形学科
Tetsuji SAKAMOTO
Department of Industrial Design, Faculty of Design

鳥居　厚夫
デザイン学部空間造形学科
Atsuo TORII
Department of Space and Architecture, Faculty of Design

伊坂　正人
デザイン学部生産造形学科
Masato ISAKA
Department of Industrial Design, Faculty of Design

佐井　国夫
デザイン学部生産造形学科
Kunio SAI
Department of Industrial Design, Faculty of Design

羽田　隆志
デザイン学部メディア造形学科
Takashi HADA
Department of Art and Science, Faculty of Design

古瀬　　敏
デザイン学部空間造形学科
Satoshi KOSE
Department of Space and Architecture, Faculty of Design

本稿は、平成２０年度本学学長特別研究「地域におけるサスティナブルデザインの展開の可能性」研究の概要を示したものである。本研究は、平成１８年度及び１９年度に行った「持続的な社会を支えるサスティナブルデザインの基礎的研究」の成果をふまえて、県西部地域の持続可能な地域づくりにおけるサスティナブルデザインの展開の可能性を探ることを目的として行われた。

平成２０年度研究では、サスティナブルデザインにおける課題領域である交通領域に焦点をあて、これまでの研究成果と日常交通調査（パーソントリップ調査）等による現状認識をふまえ、浜松市とその周辺地域における日常的な移動手段として、これまでの自動車依存からマルチモーダルな移動体系づくりを目指して、バス・鉄道、自転車や徒歩などを活用する体系への移行を推進するための具体的な啓発・普及活動の内容や手法、実施体制を探った。研究成果は、平成２１年度「ノーカーデーはままつ２００９」キャンペーンとして実現された。

また、本学における環境負荷の少ないライフスタイルの啓発と教育の一環として、学生が主体となったサスティナブルデザインの実践活動「eco-SUAC2008」を実施した。

This paper will show the outline of study for "Possibility of designs for sustainable communities in the western area of Shizuoka prefecture" in 2008.

This study was based on the result of fundamental research of the designs for sustainable communities “Fundamental study of the Sustainable Design supporting continuous society." done in 2006 and 2007.

The purpose of this study was to explore a possibility that a “Designs for sustainable societies” can be developed in the western area of Shizuoka prefecture.

Depend on the prompt report of the “person trip survey in 2009.” in this area, this study tried to clear the means to change ways of daily transportation, from own cars to public transportations, like as bus, railroad, bicycle, and on foot. The result of this study was realized as “No car days in Hamamatsu 2009” campaign in Hamamatsu city.

Moreover, as a educational event for students for “Design for sustainable societies”, an ecological event named "eco-SUAC2008" was hold in Shizuoka University of Art and Culture.

１．産官学民協働による地域公共交通ネットワーク研究

平成１９年度研究では、地域公共交通ネットワーク研究のための準備会を立上げ、官学民の協働による研究体制づくりと具体的な研究テーマの抽出を行った。準備会には、学内のサスティナブルデザイン研究会を母体として、浜松市交通政策課、ＮＰＯ法人日本都市計画家協会、遠州鉄道が参加した。また、平成２０年３月には、浜松まちづくりセンターとともに本学を会場として「自転車のまちづくり」フォーラムを開催した。

平成２０年４月には、地域公共交通ネットワーク共同研究会を正式に発足し、同年４月から平成２１年３月までに１０回の共同研究会を開催した。共同研究会の活動は平成２１年度も継続して行われている。研究会は公開

で行い、準備会からのメンバーに加えて、NPO法人スローライフ掛川、静岡大学教員などが参加した。

1－1．現状認識

1）西遠都市圏パーソントリップ調査結果の検討

平成19年度に実施した西遠都市圏（浜松市、磐田市、袋井市、湖西市、森町、新居町）の第4回日常交通調査（パーソントリップ調査）結果速報をもとに、浜松市と周辺地域住民が日常的に利用する交通手段について検討した。調査では、調査対象数約145,000人のうち67.7%にあたる約98,000人から回答を得た。標本率は、都市圏全体の9.2%であった。

●自動車の利用状況

通勤や買い物などの日常的に使う交通手段として「自動車」利用の比率をみると、西遠都市圏全体では68.3%、平成7年の前回調査の61%から1割以上の増加。昭和50年と比較すると32年間で37%から約1.9倍に拡大した。浜松市でも66.8%に達しており、都市域全体と同様の傾向が見られた。現状では、静岡県西部地において約7割の人が車を日常的な交通手段として利用していることが明らかになった。自動車の利用目的では、業務目的の移動の88%、通勤目的の78%で自動車が使われた。

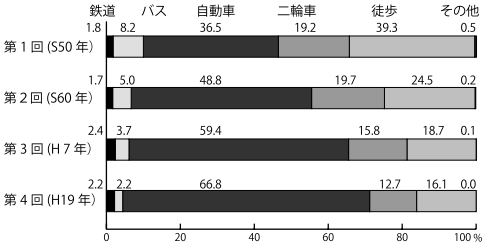
●鉄道・バスの利用状況

公共交通の基盤ともいえる鉄道・バスの利用状況では、平成7年の前回調査と比較して12年間で鉄道の利用率は2.9%から2.7%にわずかに減少、バスの利用率は2.5%から1.7%に大きく減少した。昭和50年の第1回調査との比較では、鉄道の利用率が2.6%から2.7%と変動が少なかったのに対して、バスの利用率は7%から1.7%に急減した。バスの利用者では通学目的の利用が最も高かったが、他の日常的な移動でのバス離れの現象が明確に現れている。

●高齢者の移動状況

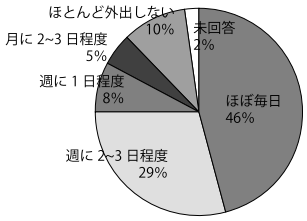
65才以上の高齢者を対象とした日常交通実態調査では、外出頻度について、46%がほぼ毎日外出しており、週2～3回外出する人29%を加えると75%が日常的に外出していた。目的地は、スーパー等商業施設、郵便局・銀行、病院が多かった。一方、ほとんど外出しない、または週に1回程度と言う回答が23%あった。高齢者の2割以上がほとんど外出しないと言う状況について、交通システム面での問題と解決方法について検討を要する。

外出時の交通手段としては、36%が自ら自動車を運転しており、送迎の20%と併せて56%が自動車を利用していた。高齢化によって自動車の運転をやめた人への質問では、運転をやめた後に外出頻度が減ったと言う回答が67%を占めた。高齢者のための交通を考える上での課題のひとつである。



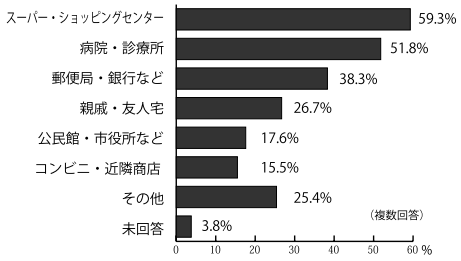
浜松市の代表的交通手段の推移

図-1：浜松市の代表交通手段の推移／浜松市交通政策課



高齢者の外出頻度

図-2：高齢者の外出頻度／〃



高齢者の主な外出先

図-3：高齢者の主な外出先／〃

高齢者が外出時に不便に思うこととしては、「自宅から駅やバス停まで遠い」、「電車やバスの本数が少ない」、「目的地に直行するバスがない」、「歩道や自転車道がなくて危険」などがあげられた。これらは鉄道・バスなどの公共交通に対する一般的な不満点と一致しており、高齢者に対してだけでなく公共交通全体の問題点としてあげられる。

2）自転車走行ルート調査

浜松まちづくりセンターとの協働による「自転車のまちづくり」推進活動のひとつとして、浜松市駅南地区を対象とした自転車走行ルート調査を行った。平成20年5月から7月にかけて計3回の自転車走行調査を行い、調査結果を「はままつポタリングマップ／駅南地区」にまとめ、ホームページ上で公開した。

第1回調査では、浜松駅周辺から天竜川に近い飯田緑地までの東西ルートと安間川沿いの南北の水辺ルートを調査した。第2回調査では、馬込川と芳川の南北の水辺ルートの調査を行い、第3回調査で、水辺ルートをつなぐ東西方向の安全な走行ルートを探した。調査の結果、駅南地区では、南北方向は馬込川、方川、安間川の川沿いに自転車走行に適したルートがあるが、これらを結ぶ安全な東西ルートが少ないことが明らかになった。東西方向の交通路としては旧街道筋があるが、これらの多くは道幅が狭いうえに通過車両が多く、自転車や歩行者の安全・快適な通行が確保されておらず、自転車走行ルートから除外された。住宅地区の裏道や田園部の農道は車が少なく自転車が走りやすかったが、幹線道路で分断されて大きく迂回しなければならないなど、利便性、快適性に欠ける箇所が多く見られた。また、歩道走行が可能な道路においても、段差や歩道上の障害物が多くあり、安全性に問題が残った。

図-4：ポタリングマップ試行版／駅南地区

3）カーフリーデー活動の状況

環境負荷の少ない公共交通システムの普及啓発の先駆的手法として、カーフリーデーの実施状況等を調査した。日本での窓口になるカーフリーデージャパンによれば、カーフリーデーは、街の一部で車を規制して歩行者天国にすることにより都市と車、人と車との関係を見直そうとする活動で、1997年にラ・ロッシェル（フランス）で始められた。毎年9月22日に行われており、世界の1400以上の都市が参加している。欧州では規模が拡大され、欧州委員会のプロジェクトとしてカーフリーデーの前の1週間を含むエコモビリティーウィークが各地で実施されている。カーフリーデーでは、自動車を使わずにすむように、バスや電車の増発、料金割引や無料化、シャトルバスの運行などの代替交通が用意される。カーフリーデーの実施には、ヨーロッパモビリティウィークへの登録や、原則として9月22日に行うことが求められる。日本では、国立市、横浜市、松本市、名古屋市など6都市で開催されている。

1－2．啓発・普及活動

1）まちづくりフォーラム「自転車のまちづくり」（第2回）

平成20年8月23日（土）に本学を会場として、浜松まちづくりセンターとの協働によるまちづくりフォーラム「自転車のまちづくり」（第2回）を開催した。フォーラム前半では、駅南地区の自転車走行ルート調査、地元企業のエコ通勤等の情報提供の後、自転車ジャーナリストの白鳥和也氏が「自転車で変わる世界観」として、自転車で各地を巡るサイクルツアーの魅力などについて講演した。

後半は自転車のまちづくりをテーマに参加者全員でフリートークを行った。

フリートークでの意見では、自転車のまちづくりの目標・理念について、「スポーツサイクリストのような特定の人だけでなく家族で走れるような道づくりをめざす」、「自転車文化、道中を楽しむスローな旅の文化を育成する」、「歩きやすいまちづくりを進め、その結果として自転車も利用しやすい環境をつくること」などの意見が出された。

現状での自転車利用に関わる問題点としては、「道路構造／車道左側（路側帯）が狭く車との距離が近いため、車道を走行する自転車が危険を感じる」、「車の交通量が多い道路で一般的な自転車が車道を走ることはほぼ不可能に近い」、「子供が自転車で走ったり、親子で一緒に走る空間がない」、「駐輪施設／駅などの乗り換えの場で、自転車を置くスペースがない」、「社会的ソフト／自転車通勤時の事故が労災の対象外になるなど、自治体や企業の対応が遅れている」などの具体的な問題点が指摘された。

これらの問題点に対して、「自転車が安全に走行できるよう、道路構造を見直す」、「走りやすい道、目的別ルートなどの情報を提供する」、「自動車の運転免許更新時に自転車走行のルールを教える」、「高速車、低速車、子供用など、自転車のそれぞれの格に応じた対応を行う」、「環境負荷が少なく季節感が感じられるエコ通勤の手段として自転車の利用を進める」などが提案された。

2）eco-SUAC 2008

平成20年6日～平成21年3月実施。今後のエコキャンパスへづくりへの布石として、学内での環境負荷の少ない生活スタイルへの意識を高めるることを目的として、学生と教職員の協働活動 eco-SUAC2008 を試行した。約30名の学生と教職員が参加して6つのエコプロジェクトを実施した。活動の様子は、新聞記事やTVニュースで大学生によるエコ活動として報道され、また、静岡県 STOP 温暖化アクションキャンペーンのエコしクール部門で入賞するなど、学外への広報効果も認められた。結果として、このような活動の効果の予測とともに普及への問題点が明らかになった。

① eco-market

学生の不要品や保管期間が過ぎて廃棄される遺失物のリユース・リサイクル活動。不要品の物々交換に代わるエコマネー「e-co（イーコ）」の利用を試みた。会場では「1e-co＝1円」で取引が可能。不要品の再利用を進めるために、持ち込み品の評価は自己申告制にして、販売価格を買い取り額の半値に設定することにより、エコマネーを使えば使うほど学内の不要品が消えて行く仕組みにした。その結果、物々交換に不慣れな人でも参加しやすいシステムとしてエコマネーの仕組みが有効であることがが明らかになった。

また、今回の学内イベントでは、衣類など元の所有者が特定されそうなものを敬遠する傾向が見られた。

写真 -1：eco-market 会場

② ecoSUAC バッグ

レジ袋をできるだけ使わないためのエコバッグや風呂敷の普及活動。不要な布や地元織物（遠州縞）の端布などを利用した「吾妻（あづま）袋」づくりと、風呂敷の様々な利用のしかたを広報するためのワークショップをで開催した。吾妻袋は、風呂敷や手ぬぐいを縫い合わせてつくる簡易な手提げ袋で、江戸時代後期に関東で始められたと言われている。学生ラウンジで行われたワークショップの様子は、地元 TV 局のニュース番組で大学生によるエコ活動への取り組みとして紹介された。

③グリーンカーテン

校舎の南窓の一部を緑のカーテンで覆って室内温度を下げる試み。デザイン学部空間造形学科 3・4 年教室のベランダにプラ

ンターを置き、ゴーヤ 10 数株を育てた記録を「ゴーヤ日記」にまとめた。

結果として、活動に参加した学生は植物を育てることを通して身近な環境を守る活動を続ける重要性を理解できた。しかし、活動の主な期間が夏期休暇と重なるため、緑のカーテンの効果を体感するという啓発・広報効果と、屋外給水栓が無いために水やりがしにくいなどの課題が明らかになった。

④エコリンコ（放置自転車再利用）

毎年、卒業生などにより学内に放置される 30 ～ 40 台の自転車を修理して再利用する試みを行った。放置自転車の修理については、浜松市内の自転車店（ミソノイサイクル）と自転車ジャーナリストの白鳥和也氏の協力を得て、解体と再組み立ての行程を体験した。

結果として、修理技術については専用工具があれば比較的容易に解体再組み立ては可能であるが、見えない部分の錆による強度不足などについては各部品の素材や形状、経年変化などに対する経験的知識＝職人技が重要であることが理解できた。放置自転車の再利用については、遺失物法と自治体の条例による保管期間（現状では3ヶ月）の経過、及び警察での盗難自転車リストとの照会などの手続きが求められた。

写真 -2：エコバッグ・ワークショップ

写真 -3：自転車の解体・再組み立て作業

⑤ Dustars（ゴミ箱調査とデザイン）

ゴミの分別・再利用を進めるためのデザイン活動。学内のゴミ分別の状況を調査したゴミ箱マップの制作、オープンキャンパス等のイベントでゴミ分別が容易にできるゴミ箱のデザイン提案、生ゴミコンポスト「バクちゃん」づくりの活動を行った。結果としては、学内のゴミ箱については、大学及び清掃委託業者が設置したものや自動販売機の回収箱など 11 種類が確認された。分別の種類や表示が統一されておらず、特にペットボトルの区分がわからなどの問題が明らかになった。

⑥エコファッションショー参加

静岡新聞社・静岡放送が主催した「エコファッションショー」への参加依頼を受けて、デザイン学部学生など 8 名が、学内に放置された傘の布や菓子袋などを再利用した子供服を制作し、エコファッションショーで発表した。

1－3.「ノーカーデーはままつ2009」への展開　／H21 年度実施

本研究の成果のひとつとして、浜松地域での持続可能な地域公共交通に向けた具体的活動の展開があげられる。平成 20 年度の地域公共交通ネットワーク共同研究では、自動車への依存率が高い浜松市において、市民自らが自動車に過度に依存した生活を見直して、鉄道・バスなどの公共交通機関や、徒歩、自転車を利用する生活スタイルに移行するきっかけを提供する「ノーカーデーはままつ 2009」の準備を進めた。実際の活動は平成 21 年度に行われているが、本研究が目的とした研究成果の地域への展開の具体化として重要であることから、主な実施イベントの概要をここに示す。

①「5km 圏走行実験」

国土交通省の自転車利用推進関連資料によ

れば、一般的な都市圏で5km以内の移動では自動車よりも自転車を利用した方が所要時間が少ないという。NPO法人日本都市計画家協会内の自転車まちづくり研究会が平成18年に東京都内で約8kmの距離を実際に走った実験でも、自転車（車道走行）が最も早く目的地に着いたことが報告されている。浜松市では、これまでの自動車を主とした市街地の道路構造の見直しを進めているが、現状では、幹線道路の横断が地下道に限られて自転車の横断が困難な箇所も多い。このような状況で自転車の優位性が保たれているか検証することを目的として、2回の走行実験を行なった。

・第1回走行実験　5／11（日）

市中心部から郊外のショッピングセンターまでの約5kmの距離を、自動車、バス、鉄道＋バス、鉄道＋折りたたみ自転車、自転車で走行して所要時間を計測した。結果は、バスを除く全てが20分前後で到着できた。所要時間の比較では、自転車が車道走行（スポーツ車）で17分、歩道走行（普通車）で21分に対して、自動車は21分、鉄道＋バスと鉄道＋折りたたみ自転車は22分であった。路線バスは待ち時間8分が大きく影響して33分で他の交通手段に比べて約1.5倍の時間を要した。

・第2回走行実験　6月7日（日）

郊外住宅地から中心市街地の商業施設に向けて約3kmを、自動車、バス、自転車で走行して所要時間を計測した。険しい坂があって自転車には厳しい条件だったが、結果は、自転車が車道走行7分・歩道走行10分に対して、自動車が10分、路線バスは16分であった。自動車は目的地近くまでは最も早いが、駐車に時間を要した。

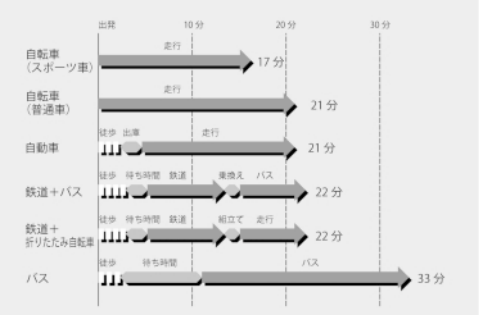


図-5：第1回5km圏走行実験の結果

実験結果から、浜松市街地では、3～5km、一般的な自転車で15～20分程度の距離であれば、自動車よりも自転車の方が手軽で便利だと言える。今後の市街地の公共交通の主な手段のひとつとして、自転車利用の有効性が確かめられた。

②「自転車に乗らない1週間」

自動車に依存しすぎた生活を見直すきっかけとして、できるだけ自動車を使わずに1週間を過ごすチャレンジイベントを平成21年8月～9月に実施した。通勤や買い物など日常的に車に乗っている方たちに1週間以上、できるだけ車を使わずに歩いたり、バスや電車、自転車で移動してもらい、その結果をエコマイレージなどで評価する試み。浜松市内に居住し、通勤などで日常的に自動車を利用している約30名がチャレンジモニターとして、鉄道・バス、自転車に乗換えて1週間を過ごした。自動車が無ければ暮らせないといわれる浜松で、本当に自動車に乗らずに生活できるのか?と心配されたが、モニターの中間コメントでは、健康面や精神面でのメリットが大きいことや、自動車に乗ることへの疑問を感じていてもなかなか離れられなかったが今回のチャレンジイベントが良い機会になった、という声が多く寄せられた。特に、自転車利用者にその傾向が強く現れた。自転車利用者10名に自転車を貸し出したが、中間時点で既に3名が自転車を購入して自転車中心の生活に移行した。片道20km以上の距離を自転車通勤に切り替えた事例もあった。

問題点として、バスの停留所が自宅や目的地から遠いことや、道路構造が自転車の安全な走行に適していないことなどが改めて指摘された。

また、今回のイベントではモニターの経済的負担を低減するため、バス・鉄道事業者、自転車販売店、電動アシスト自転車メーカーの協力を得てバス・鉄道パスと自転車の貸出を行なったことが評価された。自動車から公共交通への乗り換えを進めるきっかけづくりとして、このようなインセンティブが有効であることが改めて認識された。

③「ノーカーデーはままつ in 秋穫祭」

「まちなかモビリティ・ショーケース」

平成21年10月3・4日に浜松市中心部で開催された中区「秋穫祭」の歩行者天国に展示ブースを設け、人と環境にやさしく、また中心市街地のまちづくりにとって重要なエコ・モビリティについて楽しみながら知ってもらうための啓発活動を行った。浜松市内のNPOと本学教員が共同開発した小型電気自動車の展示、公共交通に関わるアンケート、クイズなどを通して、環境負荷の交通手段の利用を呼びかけた。

④「道でお絵描き」

平成21年10月4日の中区「秋穫祭」の歩行者天国で、かつてクリチバ市（ブラジル）で子供たちの絵描きイベントによって歩行者モールを反対派から守ったという事例にならった「道でお絵描き」イベントを行った。歩行者天国の路上に、子供たちが自由に絵を描けるアートスペースをつくり、道を子供たちの絵で飾った。いつもは車のための道路も、この日は子供たちが主役となった。

写真-4：道でお絵描きを楽しむ子供たち

⑤「ノーカーデーはままつ　市民フォーラム」

「ノーカーデーはままつ」2009年アクションのまとめとして、チャレンジアクションやイベント等の活動報告を行なった。その後、フォーラム参加者が、市民自らがこれまでの車の利用のしかたを見直して環境負荷の少ない公共交通や自転車を利用できる、歩きやすいまちづくりについて意見を交換した。その結果を、これからの社会に求められる持続可能な交通のありかたについのメッセージとして浜松から発信することとした。

まとめと今後の展開

平成18年度の基礎的研究では、本学におけるサスティナブルデザインの概念を、地球や地域環境への負荷の少ないライフスタイルに関わる「エコロジカルデザイン」と、そうした価値観を実現するための社会的な仕組みに踏み込んだ「ソーシャルデザイン」の二つの要素を複合的に持つものと定義した。また、共同研究の重点的課題を抽出した。

平成19年度研究では、産官学民の共同研究体制を設けて、「持続可能な地域公共交通ネットワーク」について、地域におけるニーズの抽出と地域での展開手法の検討等を行なった。その成果として、「自転車のまちづくり」を切り口とした地域公共交通ネットワークの再構成と、地域への展開を進めるための啓発・普及に関わる実践的活動を提示した。

平成20年度の本研究では、これまでの産官学民の共同研究、及び平成21年度の「ノーカーデーはままつ2009」キャンペーン活動を通して、静岡県西部の浜松市周辺地域における持続可能な地域公共交通ネットワークの重要性が改めて認識された。また、地球温暖化の原因となる温暖化ガスの排出が少ない交通手段への移行について、理解から実行への段階にあることへの認識が高まっていることが明らかになった。

一方で、浜松地域では路線バスの利用者が30年間で約30%に減少しているという現状がある。利用者の減少による路線廃止や料金アップが更に利用者減少を生むというマイナスのスパイラルに落ち込んでおり、基幹的な

公共交通としての路線バスの存続が危機的な状況にある。これは、中心市街地の衰退や中山間地におけるライフラインの確保にも結びついた大きな社会的課題と言える。自動車への過度の依存を見直すための手段として、「車に乗らない１週間」などの誘引イベントが有効であることが明らかになったが、その中でも自転車の利便性に比べてバス利用の不便さが指摘された。

今後の展開としては、比較的に自動車からの乗り換えが容易な自転車の利用を進めるとともに、自転車とバス・鉄道をシームレスにつなぐ交通システムの構築が不可欠と考えられる。そのため、自転車が安全に走行できる自転車レーンなど道路構造の再構成、バス停や商店街などへの利便性の高い駐輪施設の設置などのハード面の整備、及び、自転車走行ルールやモラルの徹底、自動車利用者への教育、などのソフト面の充実が求められる。また、こうした分野の産業（ハイブリッドを含む自転車関連産業やシニアカー、軽便な電気自動車産業など）を育成し特長ある地消地産による地域活性化も検討課題となろう。

（参考資料）

- 浜松市交通政策課「平成２０年度西遠都市圏パーソントリップ調査」２００８年
- カーフリーデージャパン「カーフリーデー／ヨーロッパモビリティウィーク日本担当」
- 国土交通省統計資料「旅客自動車輸送人員の推移」２００７年
- 服部圭郎「人間都市クリチバ」学芸出版社　２００４年

SUAC の学習環境についての考察

Considerations on the Possibility of Improvement of Study Environment in SUAC

花澤信太郎
デザイン学部空間造形学科
Shintaro HANAZAWA
Department of Space and Architecture, Faculty of Design

林　左和子
文化政策学部文化政策学科
Sawako HAYASHI
Department of Regional Cultural Policy and Management, Faculty of Cultural Policy and Management

伊坂　正人
デザイン学部生産造形学科
Masato ISAKA
Department of Industrial Design, Faculty of Design

的場ひろし
デザイン学部メディア造形学科
Hiroshi MATOBA
Department of Art and Science, Faculty of Design

和田　和美
デザイン学部メディア造形学科
Kazumi WADA
Department of Art and Science, Faculty of Design

大学における学習環境はそのあり方に注目が集まり、ラーニングコモンズの事例に見られるように新しい取り組みが試されている。本研究では静岡文化芸術大学（SUAC）における学習環境の改善の可能性に着目し、今日の技術を応用した蔵書の配置、学習成果の展示、図書館の有効利用といった側面から考察を行う。

The aim of this report is to seek for the possibility of improvement of study environment in SUAC. Its main points of view are as follows:
1) The possibility of new allocation of books by using current infomation technology.
2) The way of displaying works and research results to encourage mutual understanding between people in SUAC and the community.
3) How to make more effective use of the SUAC Library.

1．はじめに

現在、執務空間としてのオフィスの空間が注目され、そのあり方に注目が集まっている。先端的なオフィス空間の試みはデザインに関係する業界のみならず、オフィスの知的な生産の場としての効率がその成果に直接結びつくコンサルティング業界や広告業界においてもさまざまな事例が実現されている。また、大学における取り組みでは、IT 関連の機器を使用した教室や会議室の設備について多くの実例が報告されており、更に大学の特色であり一般企業に対してのアドバンテージが考えられる図書館およびその蔵書も含めた学習環境の構築という点においても、ラーニング・コモンズなどの流れを受けて、これから更に研究と提案の可能性が残されていると考えられる。

そこで本研究では、静岡文化芸術大学（以下SUAC）における新しい学習環境の構築の可能性について、次の 3 つの観点からの研究報告を行う。

1）現在の技術を利用したハードウエアの検討に基づく、SUACにおける新しい書籍配置に関する提案。
2）大学内外における学習や研究成果の相互理解を促進するための展示システムの提案。
3）授業や学習時における図書館の有効利用を促進する方法についての考察。

2．新しい書籍配置の可能性の検討

2-1．最近の技術の可能性

ここで RFID を含む最近の技術の学習環境への応用について考えると次のような可能性がある事がわかる。

a. 固体の識別を含めた物品管理の自動化
b. 特定の動作に対する反応の自動化

そこで、つぎにこの 2 つの可能性を念頭におきながら、SUACにおける新しい書籍配置の可能性について検討する。

2-2．書籍管理の自動化とその展開

写真１はRFIDによる図書管理のためのガラス製アンテナと、アンテナのモジュールに合わせた試作の木製ボックスを使用した、書籍の読み取りテストの様子である。このテストからガラス製アンテナを使用したシステムでは書棚の中にある書籍の自動読み取りが可能な事が確認された。更に、このシステムに遠隔式の電磁ロックを組み合わせる事により、専門的な雑誌など、使用者が限定される事が予想される書籍に関しては、ある程度までの範囲で図書館以外の場所に集中的に書籍を配置して、自動管理をする事が可能になると考えられる。

写真１
ガラス製アンテナを用いた読み取りテスト

このシステムを利用する事で、学内における書籍資料の分散配置と偏在化が可能になると考えられるが、つぎにその事を前提としてSUACにおける書籍配置の可能性について考えてみたい。

2-3. SUACにおける書籍配置の提案

昨年度の本学紀要にて報告した『SUAC図書館の将来の可能性に向けての提言』でも触れた様に、このままの毎年の増加を前提とした場合、本学における書籍の収蔵スペースはあと数年で飽和状態になる事が予想されている。この問題に対して体育館のスペースを書庫とする案もあるものの、体育館の床については設計で見込まれた床荷重に対して書庫に要求される床荷重が大きい事もあり、この部分における大幅な書籍収蔵の増加が難しい状況では、他の方法による対応の検討が必要となっている。

そこで、現状における大学内の敷地を検討した場合に、建物増築の可能性のある場所としてあげられるのが大学北東側の教職員駐車場および駐輪場の部分である。この部分に新たな図書館を増築することで、書籍の収蔵に関しての新たなスペースを確保する事が可能になると考えられる。またその際に、SUACにおける書籍の収蔵のあり方を再編成する事も可能になると考えられる。

例えば、現在の図書館を文化政策学部および文化政策研究科に関連する資料のための図書館として、新しく大学東側に計画する図書館をデザイン学部およびデザイン研究科に関連する資料のための図書館とし、その中間の北棟の各階に各学科および研究科に関連する書籍を配置する方法が考えられる。この方式のメリットとして次の点があげられる。

1）　書籍配置の分散化による横溢化への対応。
2）　大学の東西の端に図書館を配置し、その中間部にも書籍資料を収蔵する事による、書籍と学習環境の融和。
3）　デザイン環境を考慮した図書館とすることによる、デザイン制作時における図書館利用の促進。

3．学習・研究成果を展示するシステム

3-1．作品や研究成果の展示に関する現状

次に、SUACの学習環境の向上についてのもう一つの可能性である、学習内容や研究成果を展示する方法について考えて見たい。SUACの現状を考えた場合に、文化政策学部・デザイン学部およびその両研究科からなる構成は、非常に様々な分野を包含するものであり、両分野が、それぞれの研究内容や制作物を通じてお互いに触発される事で、更なる成果が期待されるが、現状では両分野における相互理解は必ずしも十分であるとは考えられない。

そこで、お互いの研究成果や学生の制作物を展示して相互理解を促す事は、本学における新しい発想を導き、有益な結果をもたらす可能性があるものと考えられるが、その様な

写真 2
現状における SUAC の展示台

展示への検討項目としてあげられるのが作品や研究成果を置く展示台のあり方である。

写真2は現状におけるSUACの展示台の様子である。現状においてこれらの展示台は学内の常設展示や企画点において有効に利用されているが、将来的なニーズを考えると次の様な点に検討の余地が残されている。

1）周囲及び展示物を置く部分がクロス貼りとなっているため、経年変化による劣化が生じ始めている点。
2）台の下部にキャスターが付いているが、実際上はキャスターを使用して移動する場面が少なく､外観上も好ましくない点。
3）台が分解できないために、写真でも見られるように展示していない時点では、台自体を収納するためのスペースが必要な点。
4）メディア系の作品など配線やコンピュータが必要な展示や、文科系の論文や書籍の展示への対応が考慮されていない点。

ここで、この様な問題点を解決するための展示台について、既製品を使用する場合の事を考えると、一般的な美術館で使用する展示台については、1台あたり定価で数百万円という価格の問題もあり、複数の台数を大学で導入する事は現実的に難しいと考えられる。一方で、店舗に使用する様な什器およびケースについては、価格の面で現実性があるものの、形状やデザイン面においてニーズを満たすものが見当たらないのが現状である。

3-2．新しい展示システムの提案

そこで、本研究ではSUACの実情に応じた応用可能な展示システムについて検討することとした。写真3はこのシステムのベースとなるアルミフレームである。

写真 3
展示台のベースとなるアルミフレーム

このフレームは既製品であり、基本となるアルミのフレームとそれらを接合する黒色のジョイント部分が分解可能であることから、さまざまな大きさに組み替える事が可能であり、使用しない時にはコンパクトに収納できるという利点がある。また、上部に天板を設置すればそれ自体が展示システムとして使用可能なものであるが、本研究で想定する展示については、さまざまな展示方法が考えられるため、コンピュータや配線の収納が可能な方が望ましい。また、場合によっては展示物を保護する必要が出ることも考えられる。

そこで、フレームで形成された立体の周囲をアルミパネルで包んだものが写真4の展示台のベース部分であり、上部には展示物を保護する必要のある場合の展示イメージを確認するために、既製品のアクリルボックスを載せてある。

この様にフレームをアルミパネルで外装するシステムの利点として、次の点が挙げられる。

写真 4
アルミパネルで外装された展示台

1）展示台の内部を隠蔽する事ができるので、コンピュータを内部に設置する事や、下部に転倒防止のための錘を入れる事が出来る。
2）配線や器具も隠蔽可能になるのでＬＥＤを使用した照明を、美観を損なうことなく取り付ける事が可能になる。
3）展示台の大きさに関しては、ベースとなるアルミフレームが１００ｍｍから1200mmの範囲でモジュール化されているために、それらを組み合わせることで様々な大きさの台を制作することが可能となる。
4）パネル自体はアルミで出来ているためにクロスに比べて経年変化による劣化が生じにくい。
5）部材相互はアルミフレームにビスで止めているために、使用しない時にはフレームとパネルに分解してコンパクトに収納できる。

また写真４では、イメージ検討のため、上部にアクリルボックスを置いているが、更にアクリルボックスとアルミ部分の組み合わせを簡単に取り外せない構造にすれば、比較的小さい作品の場合にも、持出しなどを防止しながら展示する事が可能になると考えられる。この展示システムについては、上部のアクリルケースの固定やセキュリティなど細部の検討が必要な部分が残されているものの、市販の美術品展示ケースに比べて１台あたり１/１０か、それ以下の価格で製作可能になると考えられる。

以上、本システムは将来的にＳＵＡＣにおける制作や研究成果の展示、あるいは広報の分野において有効に利用できる可能性があると考えられる。具体的には映像作品や大学案内のビデオ放映や、（写真６）学生の優秀作品の展示を行うことで、学内外に対して情報を発信したり、学外の関係者との相互理解を促す効果や、課題制作時におけるモチベーションの向上を促す事が期待できると考えられる。

写真 6
試作台を利用したビデオ上映イメージ

4．授業や学習時における図書館の有効利用を促進する方法についての考察

4-1　図書館を活用させる授業の試み

大学図書館の有効利用を考えるにあたって、まず学生の利用状況や図書館利用の問題点などを把握する必要がある。このため、2008年度「地域情報サービス論」の授業で図書館を活用させる課題を３回与え、それについてのアンケートから、学生の利用状況や問題点を把握することにした。

この授業は、文化政策学部共通科目で学部

2 年生を対象としている。今年度の登録者は 150 名、アンケートの有効回答は 89 件であった。

課題 1 では調べる図書を指定、ただし指定図書として一箇所集めることはせず、請求記号を手がかりに探させる方法をとった。課題 2 は調べる図書は指定せず、各自で参考図書を探させるものであった。課題 3 では、地域に関する調査、テーマに関する図書、雑誌論文の探索も行わせた。その上で、それぞれの探索で難しかったことなどをたずねた結果が表 1 と 2 である。

「資料を探すのが大変であった」に対して課題 1 が 17% であるのに対して、課題 2 は 27% になっている。指定された図書を書架上で探すことは容易であるが、テーマに適した参考図書を探すことは難しいと感じている

表 1

設問	課題1	課題2
1. 資料をすぐ見つけて調べることができた。	54(61%)	42(49%)
2. 資料の配架場所はすぐわかったが、所定の場所にないことが多かった。	18(20%)	13(15%)
3. 資料を探すのが大変だった。	15(17%)	27(31%)
4. その他	1(1%)	3(3%)

表 2

設問	回答数
1. 自治体についての調査	17(20%)
2. 図書、雑誌記事の探索	54(60%)
3. 図書、雑誌記事の入手	53(60%)
4. 関連する機関、団体の調査	32(35%)
5. 調べている図書館のサイトから必要な情報を見つけること	32(35%)
6. その他	1(1%)

ことがわかる。

課題 3 で特に難しいと感じたことに選ばせた表 2 においても、図書、雑誌記事の探索と入手が 60% と最も多い。

この結果から、本学の学生の場合、テーマに適した参考図書や図書、雑誌論文の探索にまず困難を感じていることがわかる。

学生は普段どのように図書館を使っているのだろうか。普段どのように図書館を使っているかをたずねた結果が表 3 である（3 点まで選ぶ）。全体に対してと、図書館をゼミ・卒論のために利用すると回答した 3 年生の回答

表 3

利用方法	全体	ゼミ・卒論のため
回答数	89	20
1. 図書を読む	23(25%)	10(50%)
2. 図書を借りる	54(51%)	17(85%)
3. 図書のコピー	9(10%)	2(10%)
4. 新聞・雑誌を読む	5 (5%)	2(10%)
5. 新聞・雑誌記事の検索	5 (5%)	2(10%)
6. 百科事典などで調べる	27(30%)	3(15%)
7. インターネットにアクセス	37(41%)	9(45%)
8. メディアステーションで課題作成	66(74%)	15(75%)
9. 自習場所	23(25%)	3(15%)

結果を並べてみた。

全体では、「メディアステーションでの課題作成」が 4 分の 3 を占めており、「図書を借りる」がそれに続いている。それに対して、「図書のコピー」や「雑誌・新聞を読む」「雑誌・新聞記事の検索」は非常に少ない。この傾向は「ゼミ・卒論の為に利用する」を選んだ学生にも共通している。

学生は図書館を、「図書を借りる場所」「課題を作成する場所」として利用しており、調べるための利用が少ないようである。

学生はこの授業履修以前に、情報検索について学んだ経験はあるのだろうか。WebcatPlus と CiNii あるいは雑誌記事索引での検索経験があるかどうかをたずねた結果が表 4 である。

これによればほとんどの学生が、これまでに探した経験をもっている。

4-2 学生に図書館を活用させるための提案

4-2-1 図書館を活用させる授業

以上の結果から、学生は図書館を調べる場所として使っておらず、テーマに即した参考図書、図書、雑誌記事の検索も難しいと感じていることが明らかになった。

表 4

		WebcatPlusで特定分野の図書を探した経験		CiNiiもしくは国立国会図書館雑誌記事索引で雑誌記事を探した経験	
	学年	ある	ない	ある	ない
国際文化学科	2	19（60%）	13（40%）	23（72%）	9（28%）
	3	11（79%）	3（21%）	11（79%）	3（21%）
文化政策学科	2	24（82%）	5（18%）	22（76%）	7（24%）
	3	3（100%）	0	2（66%）	1（33%）
芸術文化学科	2	8（73%）	3（27%）	8（73%）	3（23%）

これに対しては、情報リテラシーを高める科目の充実も必要ではある。しかし表 4 に見られるように、授業で図書、雑誌論文を探す経験をしていても、日常の利用には結びついていないようである。このため、学生の自主的な学習に期待するだけではなく、授業で教員が図書館を使わなければならない課題を出すことが重要となってくるのではないか。

4-2-2　図書館の整備

参考図書や図書、雑誌を探すことが難しいと感じている学生へのサポートも必要である。調べ方を身につけていくためには、実際あれこれと資料を手にとって見ることになる。ここでサポートを期待したいのが、図書館のレファレンスサービスである。教員の場合、常時図書館で待機していることはできない。教員に教えてもらうのではなく、自発的な学びの姿勢を育てるためにも、教員以外のサポートが好ましい。さらに、情報の探索は、大学卒業後も必要となってくるが、その場合、常に教員のアドバイスが受けられるわけではない。しかし図書館員のサポートが受けられることがわかっていれば、探索の第一歩として地元の公共図書館などを使うことができる。

5．まとめと展望

以上の平成20年度における研究成果から、本学の学習環境の向上に関して次の可能性が見出された。

まず、現在の技術を応用した学習環境向上の可能性としては、次の 2 点が挙げられる。1 点目は学内において新しい図書の配置をとることによって、学習環境における図書のあり方に新しい意味づけを持たせて、従来の図書館とその他のスペースという関係性から、偏在化した図書の中での学習という関係性の構築の可能性が見出されたことである。このような配置の考え方は、将来的に学習時における図書の利用のあり方について新しい関係性を持たせる可能性にもつながると考えられる。

2 点目として挙げられるのは、システム化した展示方法を採用することによって、学内における制作や研究の成果を学内外に向けて展示する可能性が確認された事である。学習と研究成果の展示については、学内における相互理解の促進や優秀作品を展示することによるモチベーションと成果のレベルの向上、また学外に向けての PR 効果など様々な波及効果が考えられる。

次に授業における図書館利用の可能性の検討から、教員と図書館員が一体となった仕組みをつくることで、学生に図書館を活用した学びの習慣を身につけさせる可能性が考えられる。

今後は、本学における与条件を勘案しつつ、SUACならではの図書館と新しい学習環境のあり方について検討を行う予定である。

※　本研究活動は、平成 20 年度学長特別研究「新しい学習環境の研究」よりの研究費を得て実施されたものである。また、書籍自動管理システムの検討に関してはお茶の水女子大学の塚田特任助教のご協力を頂き、展示台のシステムに関しては、生産造形学科の山本教授のご協力ならびに、空間造形学科の鳥居教授と原田実習指導員に試作品制作についてのご協力を頂きました。ありがとうございます。

マンメド・アミン・ラスルザーデ著　改訳 『あるトルコ民族主義者のスターリンと革命の回想』（その 1）

A New Translation of Məmməd Əmin Rəsulzadə's *A Turk Nationalist's Memoirs on Stalin and the Revolution*, Part 1

徳増　克己
文化政策学部国際文化学科

Katsumi TOKUMASU
Department of International Culture, Faculty of Cultural Policy and Management

以下に紹介するのは、20世紀前半のアゼルバイジャンを代表する民族運動の指導者マンメド・アミン・ラスルザーデ(1884-1955)の晩年の著作『あるトルコ民族主義者のスターリンと革命の回想』の冒頭部分の翻訳である。この回顧録は、もともと1954年にトルコの新聞《デュンヤ》紙に連載された。著者ラスルザーデは、20世紀の初めからロシア帝国内の産業都市バクーで政治活動に入り、その中で労働運動の組織化に携わっていたボリシェヴィキの活動家スターリンとも接触をもつようになった。彼はアゼルバイジャンのみならず、イランやオスマン帝国（とトルコ共和国）、さらにはヨーロッパでも幅広い活動に従事したが、今回はまず、スターリンとの出会いにいたるまでを扱った、回顧録の冒頭部分を訳出した。

The following article is the first part of a translation of *A Turk Nationalist's Memoirs on Stalin and the Revolution*, written by a famous leading Azerbaijani nationalist Məmməd Əmin Rəsulzadə (1884-1955). The original text of the memoirs was once serialized in a Turkish newspaper *Dünya* in 1954. The author Rəsulzadə began to engage in political activities at the beginning of the 20th century in his hometown Baku, which was a booming industrial city under the Tsarist regime at the time. Meanwhile he came into contact with a Bolshevik political activist Stalin, then known as Koba, who had tried to get the support of oil workers in Baku. In fact Rəsulzadə's political career is not confined to activities in Baku and Caucasian Azerbaijan. Rather afterwards he also engaged in broad activities in Iran, the Ottoman Empire (and Turkish Republic) and Europe. Though these activities may be very interesting, for the present I translate the outset of the memoirs, which refers to his first contact with Stalin.

はじめに

以下に紹介するのは、ロシア革命後にカフカース（コーカサス）東部に成立したアゼルバイジャン民主共和国（1918～1920）において国家元首として重責を担ったマンメド・アミン・ラスルザーデの回顧録『あるトルコ民族主義者のスターリンと革命の回想』を訳出したものである。この回顧録は1954年5月22日よりトルコの新聞《デュンヤ（世界）》紙に連載されたものであり、著者の広範囲にわたる活動の軌跡を反映して興味深い情報を含むものとなっている。(1)

以下の訳文は、かつて「M.Ä. ラスルザーデ「スターリンと革命の回想?」」として同人誌『トルコ文化研究』第8号（平成4年）に掲載した小訳を全面的に改訳したものである。旧訳は、当時オリジナルのテキストが入手できていなかったために、アゼルバイジャン共和国の首都バクーで刊行されたアゼルバイジャン語訳を底本とした重訳であった。(2)その後、《デュンヤ》紙に掲載されたオリジナルのテキストが入手できたため、このたび全面的な改訳を施し、旧訳では未完のままであった訳文の完成へ向けて、ひとまず冒頭部を公表する次第である。

なお、《デュンヤ》紙には連載開始に先立って原著者ラスルザーデに関する紹介記事が掲載されているので、回想録本体の訳文の前に、この記事も訳出しておいた。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

《デュンヤ》紙、1954年5月21日金曜日(第3年、802号)

人物像

あるトルコ民族主義者のスターリンと革命の回想の著者 M. アミン・ラスルザーデとは何者か。

明日以降、本紙第4面にて［読者諸賢が］その興味深い回想録を読まれることになるマンメド・アミン・ラスルザーデは、1917年と1919年にバクーで招集された党大会において、カフカース（コーカサス）におけるアゼルバイジャン共和国の形成と民族解放運動において歴史的な役割を担った民族アゼルバイジャン《ミュサヴァト（平等）》人民党の党首に、全会一致で選出された。

［ラスルザーデは］1918年5月28日に共和国の独立を宣言したアゼルバイジャン国民評議会の議長であった。国外にあってはアゼルバイジャン民族運動を何年にもわたって代表してきたアゼルバイジャン国民センターの

所長職を務めた。

ムスリム世界の著名な著述家であるラスルザーデは、1905～1908年にバクーで発行されていた［アゼルバイジャン・］トルコ語新聞諸紙上で活躍し、1915～1917年には再びバクーで有名な《アチュグ・ソズ（率直な言葉）》紙[3]を創刊・発行した。1908～1911年にはテヘランで、イラン初のヨーロッパ方式の日刊紙《イーラーネ・ノウ（新イラン）》紙[4]の主筆と編集長を務めた。（この点に関しては、E. G. Browne, *Literary History of Persia*, London を参照のこと。）イスタンブルで出されたさまざまなトルコ語の新聞や雑誌（特に《テュルク・ユルドゥ（母国トルコ）》誌）で活動し、1923年から1929年まではイスタンブルで発行されたアゼルバイジャンの諸雑誌の運営にあたった。[5]

カフカースの人々によく知られた政治家［ラスルザーデ］は、ザカフカース・セイム（1918年）においてはムスリム党派を率いた。ザカフカース政府が、1918年にトラブゾンに、後にはバトゥーム［バトゥーミ］に、当時のトルコ代表らとの協議のために派遣した代表団に加わった。

＊＊＊

1884年にバクーで生まれたマンメド・アミン・ラスルザーデはまだ若かった時分に政治活動に身を投じ、1903～1904年以降ツァーリ体制に抗するさまざまな秘密の活動に加わった。自らによって代表されるアゼルバイジャン人の青年革命家サークル[6]を率いた。このころ、地下活動の最中でスターリンと接触を持ち、両人の間には良好な関係が築かれた。

1908～10年にはイランにおける立憲運動に奔走し、その地でイラン・デモクラート党の中央委員会に加わり、この党のイデオロギーを同党の指導者セイエド・ハサン・タギーザーデ（イラン上院議長）とともに練り上げた。

1910年には影響力を強めつつあったツァーリ政府の公使館の要求と圧力のために、イランを去ってイスタンブルへやって来た。この地でトルコの政治結社、とりわけ《トルコ人の炉辺》のメンバーとともに活動した。同時に、この地からバクーで組織されつつあったアゼルバイジャンの地下活動との連絡を続け、1911年にはミュサヴァト党の結成を促した。

1913年にはロマノフ朝治世300周年記念に関連して布告された恩赦を存分に利用してバクーに戻り、そこで出版活動を開始するとともに、《ミュサヴァト》党の非合法活動や半ば非合法の極めて多数の組織や結社の活動にも影響を及ぼした。

1915年には、第1次世界大戦のさなかにバクーの軍政長官により収監されたが、1917年には軍法会議にかけられようとしていた矢先にロシアで勃発した革命のおかげで放免された。

1917年には、民族アゼルバイジャン《ミュサヴァト》人民党統一大会と同年バクーで開催されたカフカース・ムスリム大会の場で、カフカースとアゼルバイジャンがロシアから分離して自治的で独立的になるというテーゼを擁護した。同年5月10日にモスクワで開催された［全］ロシア・ムスリム大会の場で、ロシアが複数の民族国家に分かれることを求める決議案を採択させた。[7]

その後ティフリス［トビリシ］で開催されたザカフカース・セイムにおいてはカフカースのロシアからの分離を要求し、この要求は1918年2月に採択された。

1918年5月26日にはザカフカース［連邦］が解体したため、アゼルバイジャン民族評議会は1918年5月28日にアゼルバイジャン共和国の独立を宣言し、この評議会の議長の任にあったM. ラスルザーデはオスマン政府との条約に調印した。この条約にしたがってトルコ軍はボリシェヴィキの占領下にあったバクーの解放のため、アゼルバイジャンの武装勢力を支援した。

＊＊＊

［アゼルバイジャン民主］共和国のロシア・ボリシェヴィキによる占領に際して（1920年4月27日）、M.Ə. ラスルザーデは収監される。収監中にスターリンが彼のもとを訪れる。結局、［ラスルザーデは］モスクワへ連れ

ていかれ、そこで2年間軟禁状態におかれる。1922年にフィンランド湾方面から脱出してヨーロッパへ出ると、そこからイスタンブルへ来て、出版と政治活動を続ける。

［彼は］定期刊行物および不定期の刊行物を通じて、ボリシェヴィキの政策、とくに共産主義者たちの東方政策を暴露する。ソヴェトの策謀と外交過程の結果、イスタンブル退去を余儀なくされると、彼は自らの活動をヨーロッパに移した。この地では、《プロメテウス》協会（ロシアの被抑圧諸民族の統一戦線）と（1934年にカフカース連合協約に調印した）カフカース諸民族同盟の場で活動する。ロシアの被抑圧諸民族の共同機関誌としてパリでフランス語により発行されていた《プロメテウス》誌に定期的に論文を掲載する（1928～1939年）。(8)

彼は4年間暮らしたワルシャワで第2次世界大戦に遭遇する。ポーランド人の友人たちとともにブカレストへ赴く。ドイツがソヴェト・ロシアと始めた戦争に際し、ドイツ外務省の代表フォン・シューレンベルク（のちにヒトラーに対する暗殺計画事件への関与のために殺害される）の招聘により1942年にはカフカース人の他の諸民族の代表らとともにベルリンへ赴く。カフカースの、とりわけアゼルバイジャン共和国の運命に関して交渉に取りかかったが、ナチが諸民族が望むことを理解する能力を欠くこと、ドイツ政府がアゼルバイジャン人民の諸権利を認める気がなく民族解放運動の必要性に敬意を表していないことを確信すると、自らのドイツの政策に関する否定的な見解を1943年8月5日付の覚書で表明して、ベルリンを去りブカレストへ戻る。

1944年にボリシェヴィキがブカレストに接近すると、諸般の事情により彼自身は西欧に引き返すことを強いられる。スイスに行くためのビザ取得の見込みが得られなかったので、スイス国境に近いフライブルクーイムーブライスガウ市に赴く。1944年10月にはこの都市になされた恐ろしい空襲のおかげで、彼自身は中部ドイツへ避難せざるを得なくなる。1945年4月24日には、アメリカ占領地域にいる。結局、1947年9月にはトルコに来ることができ、その時以来アンカラで暮らしている。トルコ百科事典［の編集の場］で働いている。1951年にはトルコ共和国国民教育出版局から『アゼルバイジャンの詩人ニザーミー』という表題で代表的な著作が出版された。ソヴェト・ロシアおよびアゼルバイジャンの問題に関する彼の手による様々な論文や小冊子が出版されている。［ラスルザーデは］共産主義に抗してカフカースの大義のために不断の闘争を続けている。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

《デュンヤ》紙、1954年5月22日土曜日(第3年、803号)

あるトルコ民族主義者のスターリンと革命の回想

［連載］第1回

スターリンの訃報記事を書いた人物のひとりは、その記事を「途方もない人物の途方もないキャリアが終わった。73年前、［グルジアの都市］ゴリの貧しい靴職人の家庭に生まれた男の子は、クレムリンにて世界最大の帝国の最大の独裁者として死んだ。」と書き出している。

実際、人類が経験してきた全世界の歴史においてヨシフ・ヴィサリオノヴィチ・ジュガシヴィリすなわちスターリン以上の絶対的な支配者はいなかった。相当程度まで彼個人の働きによって確立されたソヴェト体制よりも全体主義的な体制は世界に存在したことがなかった。

我々の時代の歴史を書く人びとは、この史上最大の圧制者について様々な宣告を下し、彼の神格化された人格を様々な角度から分析するであろう。しかし、我々は彼を総体として研究するつもりはない。ロシアの最も恐るべきツァーリたちにも恵まれなかった権力を以て、30年近くもの間、ソヴェト帝国内の2億人の運命を支配し、地球の3分の1を統制下におき、あらゆる宗教を否定する共産主義という宗教の預言者と目されている、全体主義のなかの全体主義体制の最大の代表者スターリンを、また、彼がいかなるデマゴーグで外交官で独裁者であり、いかなるテロリス

トで革命家で元帥で大元帥であり、ファラオやネロやチンギス［・カン］たちを後悔せしめる暴君で赤いツァーリであったかを、自由諸国民の社会で知らない者はいない。我々は知られている事柄を繰り返すつもりはない。

1905年と1917年にロシアの諸条件の内に出現した社会主義の諸潮流に属する革命家たちの間では冴えない人物であって、さほど重くみられてはいなかったスターリンのミイラ化した遺骸は、今、マルクス以降共産主義の第2の預言者レーニンのミイラ化した遺骸のそばに横たわっている。

レーニン主義はマルクス主義の一解釈として現れたものであった。スターリン主義はこの両者を完成した体系である。ヒトラーの国民社会主義の定式をひっくり返して社会国民主義の形態に置いたスターリン主義をよく理解できるためには、スターリンの途方もない個性を正しく理解することが必要である。これを行ないうるには、歴史家たちがスターリンについて書かれた回想録、語られた印象や説明された観察を資料として吟味することが必要となろう。

スターリン主義という怪物の特徴的な輪郭をその真相に近い形で描きうるためには、各人が自分で見て理解した「スターリン」像が比較されることが大いに有益であることは、疑いをいれない。

同じ時代に同じ条件のなかで同じ世代に属して生き、様々な時に様々な条件下でスターリンとあれやこれやの形で接触する経験を持ったひとりの人間という立場から、我が回想録の彼にまつわる部分を公刊することを決意した。ツァーリ体制に対する闘争、ソヴェトによる侵略と捕縛、モスクワへの道中、モスクワでの2年間およびモスクワからの逃走といった一節を含むこの回想録が同時代の歴史家たちの仕事に役立つとすれば、費やされた労力が無駄になることはあるまいと確信している。

いろいろな提案をいただいてはいたが、この回想録はスターリンの存命中には公刊したくなかった。というのも客観的に語られることになる諸々の事件の一部が、ある観点からは、誤った解釈に余地を与え得たからである。今ではこうした可能性も消えてしまい、スターリンはもはや歴史に溶けこんでしまった。

－1－

半世紀前のロシア帝政に対する闘争

カフカースの一部を成している私の国アゼルバイジャンがロシア帝国に征服されてから100年近い時間が経過していた。この間に我々のあらゆる民族的な基盤を解体する政策を推進してきたロシア帝政は、その目的を十分に達成してはいなかった。民族的特性を片時も忘れなかった我が人民にあっては、自由と民族独立の思想を身につけた新しい開明的な世代が育っていた。この世代は自らが属している民衆に対して、自らが利用できる様々な手段を以て貢献することを望んでいた。

1903年に極東で歴史的な事件が発生した。(9)ヨーロッパ文明に適応した日本が、対馬付近の公海上ではるばるバルト海を発ってやってきた大ロシア帝国の艦隊を一撃で海底に沈めた。それから、ポート・アーサー［旅順］の攻略と相次ぐ日本の勝利が到来した。

全世界、とりわけ近東と親しくロシアを震憾させたこの出来事は帝政の数世紀を経た屋台骨を揺るがせた。ロシア国内の自由主義分子や革命分子が動きだした。これらの人びとはツァーリ体制に満足していない人民大衆を革命化するために自分にできることは惜しまなかった。こうした目的で、至るところで自由と民主主義の思想の普及をはかる組織が設立された。

帝政に抗して闘っている政治集団や諸階級は、帝国を構成している諸民族、諸集団や諸階級のようにあらゆる種類の色彩や調子を帯びた幾多の党派に分かれていた。しかし、全ての反対党や革命政党および同様の集団は、共通する分割線により2つの戦線に分けることができた。このうちの一方の部分は、ロシアにおける議会政治の確立で満足し、専制的なツァリーズム体制の代わりに立憲君主制の樹立を望んでいた。これらが自由主義ブルジョア諸政党であった。急進的民主主義者と社会主義者が第2の部分を構成していた。これらの人びとは帝政の打倒と、それに替わる民主的な共和制の樹立を追求していた。同時

に、政治革命では満足しない、このグループに含まれる社会主義諸政党は、ヨーロッパの資本主義とは異なった社会改革の綱領の適用を必須とみていた。

［さらに］社会主義諸政党は、観念論的ナロードニキ・イデオロギーの社会革命党員（略称エスエル）らと、史的唯物論イデオロギーを奉ずる社会民主［労働］党（略称エスデー）の諸集団とに分かれていた。

ボリシェヴィキとメンシェヴィキの抗争

社会民主党員たちは有名なロンドン大会(1903年)で2つに分裂した。[10]その一派がレーニンの指導するボリシェヴィキ派を、他の一派がマルトフの指導するメンシェヴィキ派を代表していた。（続く）

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

《デュンヤ》紙、1954年5月23日日曜日(第3年、804号)

ある日バクーでスターリンが我々に会いたがっていると知らされた

［連載］第2回

その当時、カフカースは帝政の行政機構の枠内において総督領の形態で統治されていた。たいていは帝室に属している皇族により統治されていたカフカースの行政と知的活動の中心を成していたティフリスではメンシェヴィキが、油田によりかなり繁栄していた工業の中心であるバクーでは鉱業労働者や港湾労働者の間でボリシェヴィキが巣をつくっていた。社会民主党はティフリスとバクーにいつものように司令部を開設したが、同党のこれら2つの敵対する分派は革命運動に対して影響力を及ぼすべくカフカースの人民大衆を掌握しようと尽力していた。

周知のように、この2つの分派を互いに衝突させた主要な主題とは、有名な戦術問題であった。メンシェヴィキは、体制に抗して政治的な手段で闘って帝政を倒し替わりに共和政を樹立することを支持しており、社会主義の諸原理が社会の構成に影響を及ぼすことを求めてはいたが、現存する資本主義の諸条件の下で社会構造が暴力や革命によらずに漸進的発展の諸原則により発展させられることを推奨していた。このため、彼らは、ブルジョア階級の［うちの］帝政体制に反対している自由主義的かつ急進的な諸集団との政治な連携を組むことが必要だとみていた。革命政党として策謀や地下活動に従事してはいたものの、この分派のメンバーたちは状況が好転した際には法的な規定を活用することが必要だと考えていた。このため、彼らは労働組合に浸透して、これらをして労働者階級の真の利益を擁護することに第1の重要性を付与するよう励ましていた。革命政党として渦中にあった地下活動下においてさえ、メンシェヴィキは、民主主義の諸原則の尊重を必要だとみており、組織内の諸委員会の下部から上部へと進む民主的な選出のヒエラルキーに決定的な重要性を与えていた。

しかしながら、ボリシェヴィキはこれとは正反対の戦術を用いた。まず第1に、これらの人びとはブルジョア諸政党とのいかなる種類の連携にも反対した。政治体制としての帝政体制とともに、彼らは、経済体制としての資本主義をも打倒する決意であった。労働組合を労働者の経済的利益を擁護する以上に、これらを体制に抗して常に反対し闘争する革命組織として使った。党それ自体の内なる組織機構については、下部から上部へ進む民主的な機構ではなく、上部から下部へ向かう革命的な機構を推進していた。《革命的少数派》支配と集中制がボリシェヴィキ党の不変のスローガンであった。

当時の状況におけるバクー

アゼルバイジャン共和国の首都を成すバクーは、当時の状況にあっては、単にロシア国内の社会主義の諸潮流やツァーリに反対する様々な運動の煮えたぎる温床であったばかりではなく、同時にカフカースに居住しているムスリムたち特にアゼルバイジャン・トルコ人たちの民族運動にとっても中心的役割を果たした都市であった。

アゼルバイジャンの民族的活動のあらゆる種類の政治的・社会的・経済的ならびに文化

的な諸運動に影響を及ぼしていた中心的な諸機関は、たいていこの地にあった。バクーの産業のうち油田で働いている労働者の大きな部分と中等教育機関で学んでいる青年層の重要な部分を、アゼルバイジャン・トルコ人が構成していた。こうしたわけで、この地で活動していた広汎な革命的かつ反体制的な諸潮流の傍らには［これらの潮流から］距離を置いて運動に従事していた地元の民族的なグループや組織もあった。その中には、私が組織したものであって、そのメンバーたちがロシアの様々なリセその他の中等教育機関で学んでいるアゼルバイジャン・トルコ人の学生たちから構成される、秘密のサークルがあった。このサークルは、メンバーの民族的な感情を鼓舞すること、ロシア語学校では教えられていない［アゼルバイジャン・］トルコ語［の能力］を互いに向上させること、地元の文学者の作品を読むこと、帝政を批判して書かれた革命詩を暗誦したり時には印刷されたマニフェストを頒布すること、労働者たちの間に入って自由と革命の思想をこうした人びとの間で体系的に広めること、といった活動をしていた。サークルには、謄写版で発行される《ヒュンメト（精励）》という名を冠した雑誌があった。(11)

社会ととりわけ青年層の内にみられるあらゆる種類の人づきあいや集団形成を自らの勢力下に収めようと張り合っていたボリシェヴィキやメンシェヴィキの抜け目のない教宣活動家たちは、当然ながら、我々のサークルにも浸透しており、どうにかして我々を自分の側に引き入れることを望んでいた。ボリシェヴィキ派はティフリスに比べてバクーでいっそう勢力があった。

上述のこの我々のサークルに浸透しつつあった教宣活動家たちからか、わたしが別の状況で出会った帝政反対派の数人の人からか、バクーのボリシェヴィキ派を統轄しているコバという名の精力的な人がいることを耳にしたことがあった。

スターリンとの最初の接触

バクー石油産業労働者組合という名を持つ組織があった。専ら労働者の経済的利益にのみ関心を示していたこの公的な組織のヴェールの下では、秘密裏に政治的な活動も行なわれていた。帝政に反対して非合法の活動をしていた民族組織のメンバーのうち、私の従兄弟［父方のおじの息子］メヘンメド・アリは、上述の組合で書記の仕事をしていた。ある日、彼が、コバが我々に会いたがっていると知らせてきた。*

バクー近郊のバラハヌ油田地区にある工場労働者向け専用住宅のひとつのごく簡素な部屋で、我々の前にやせて弱々しく並みより少しばかり背の高い男が現れた。(12)わたしが質素な身なりをしたこの人物のあばたで凸凹になった顔(13)に注意を向けると、彼はまじめそうに微笑んだ。［その男は］我々を自然で率直な態度で出迎えた。グルジア訛りが強く感じられるロシア語で話していた。ありきたりの挨拶がすむと、話は政治や社会の問題にうつった。

疑いなく、会談は当時の最も差し迫った問題に関するものになろうとした。当時の社会主義者たち、一般にマルクス主義者たち、特にボリシェヴィキたちの間では、とりわけ労働者階級と殊にプロレタリアを理想化することが流行であった。コバは、プロレタリア階級が他の諸階級と比べて歴史的に卓越した階級であることを滔々と述べ、「世界における不公正の根本的な原因は［私的］所有制度という土台に依拠した資本主義体制にあるのである」といった。「世界を真に幸福にしようと望む真の自由と正義の支持者たちは」彼によれば、「この体制を根底から打倒せねばならない。諸民族と勤労人民をその暴虐と専制の下に置く帝政はこの体制に基盤を置いている。帝政の根をすっかり断つには、この所有制度が打倒されねばならない。このような深甚な革命に対しては、所有関係のないプロレタリア階級のみに備えがある。なぜならば、プロレタリア階級はいかなるものも所有しておらず、その所有物は自分の両手と頭だけであるからだ。革命の問題においてはプロレタリアの誠意のみが信頼できる。」マルクス主義者たちの有名な選ばれた階級の理論に適合させられたこの定式を、スターリンは、さらに実際に遭遇した明白な例を以て描写した。「私は」と彼はいった、「あるグループの労働者たちと

地下活動下で時おり出会い、組織化と宣伝の活動に取り組んでいた。」（続く）

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

《デュンヤ》紙、1954年5月24日月曜日(第3年、805号)

バクー近郊における革命家たちが参加した協議会

［連載］第3回

「このグループに出入りしていた連中のひとりについて、ある日、同志たちに対し、私が疑念を抱いていることを告げ、『この男は全く気にいらない』といった。『わたしは信頼できないのだ。』その後、このグループと幾度か顔を合わせる機会があったが、件の男を我々の間で見かけることはなかった。ある日、私は興味にかられて、『例の同志はどうしたのか』といい、『なぜ来ないのかね』と尋ねた。労働者たちは『コバ同志、あなたはこの男は信用できない、といわれましたよね！我々は奴を早速粛清してしまいました！』といった。」

初めて知りあった我々に対して《プロレタリアの誠意》について説明したこの小話から引き出される教訓は、明白である。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

［原註］

＊よく知られたように、コバは、ヨシフ・ヴィッサリオノヴィチ・ジュガシヴィリが最初に用いた変名である。［彼は］カフカースにいた頃はこの名前を使っていた。スターリンという名は後に、ロシア内地で活動し始めた際に用いたものである。これもよく知られたように、コバとはグルジアの長篇小説から採られたロシア帝政と闘うパルチザン英雄の名である。［なお、アイザック・ドイッチャーによると、のちのスターリンが偽名コバを使い始めたのは1901年11月のロシア社会民主労働党ティフリス委員会の委員就任直後にオスマン帝国国境に近いバトゥームに赴いた時からであり、その由来については①「不屈」を意味するトルコ語の方言とする説と②グルジアの詩人カズベギの作品に登場する民衆のために当局と闘った英雄の名に帰する説とがあるという。Isaac Deutscher, *Stalin: A Political Biography (revised ed.)*, London: Penguin Books, 1966 (Original ed., 1949), pp.63-64.（アイザック・ドイッチャー『スターリン－政治的伝記［第2版］』上原和夫訳、みすず書房、1984年、［第1巻］47～48頁。）］

［訳註］

（1）原題は、Mehmet Emin Resulzade, “Bir Türk Millietçisinin Stalin’le İhtilal Hatıraları”, *Dünya Gazetesi*, Sayı: 803 (22 Mayıs 1954) -830 (21 Haziran 1954). また、連載本体に先行するラスルザーデの紹介記事は、その前日に《デュンヤ》紙に掲載された “Portreler: Bir Türk Millietçisinin Stalin’le İhtilâl Hatıraları yazarı M. Emin Resulzade kimdir?”, *Dünya Gazetesi*, Sayı: 802 (21 Mayıs 1954) を訳出したもの。なお、この回顧録は、のちにトルコ人の研究者シムシルによりまとめられ、小冊子の形で出版されている。Mehmet Emin Resulzâde (Sebahattin Şimşir Haz.), *Bir Türk Millietçisinin Stalin’le İhtilal Hatıraları*, İstanbul: Turan Yayıncılık, 1997. ただし、この小冊子には、ごく一部ではあるが細部に欠落がみられる。また、連載に先立って《デュンヤ》紙が掲載したラスルザーデの紹介記事は採録されていない。

（2）旧訳の際に底本としたアゼルバイジャン語訳は、Мәммәд Әмин Рәсулзадә, *Сталинлә ихтилал хатирәләри*, Бакы: Елм, 1991 である。

（3）《アチュグ・ソズ》紙はラスルザーデの編集により1915年10月20日～1918年3月の時期に発行されたアゼルバイジャン語の日刊紙。ミュサヴァト党の機関紙としてアリ・ベイ・ヒュセインザーデ［ヒュセインザーデ・アリ・トゥラン］が唱えた「トルコ化、イスラーム化、近代化」の影響を受けたスローガンを広めた。また、民族学校の開設などの

文化的要求の実現を求めつつも、第１次世界大戦においては「ムスリム市民」にロシア政府への支持を呼びかけた。Alexandre Bennigsen et Chantal Lemercier-Quelquejay, *La presse et le mouvement national chez les musulmans de Russie avant 1920*, Paris: Mouton & Co., 1964, p. 119; Tadeusz Swietochowski, *Russian Azerbaijan, 1905-1920: The Shaping of National Identity in a Muslim Community*, Cambridge: Cambridge University Press, 1985, p. 82; Audrey L. Altstadt, *The Azerbaijani Turks: Power and Identity under Russian Rule*, Stanford: Hoover Institution Press, 1992, p. 77.

（4）《イーラーネ・ノウ》紙は1909年8月24日に創刊された、イランにおける立憲革命（1905～1911年）の「小専制（1908年6月～1909年7月）」後の時期を代表するペルシア語の日刊紙。同紙は、タギーザーデらが指導する当時の有力党派のひとつデモクラート党寄りの論調でかねてより知られていたが、1910年10月以降は名実ともにデモクラート党の機関紙となった。ラスルザーデは、創刊当初から1911年5月にロシア公使館の圧力でイランから追放されるまで同紙の実質的な編集者と主筆をつとめ、《ニーシュ》等の筆名で健筆をふるった。同紙は自由主義を擁護し、社会改革に関する論陣を張るとともに、イランに初めてマルクス主義の要諦を紹介したと評されている。Edward G. Browne, *The Press and Poetry of Modern Persia*, Los Angeles: Kalimat Press, 1983 (Original ed., Cambridge: Cambridge University Press, 1914), pp. 52-53; Ervand Abrahamian, *Iran Between Two Revolutions*, Princeton: Princeton University Press, 1982, pp. 103-104; Janet Afary, *The Iranian Constitutional Revolution, 1906-1911: Grassroots Democracy, Social Democracy, and the Origins of Feminism*, New York: Columbia University Press, 1996, p. 273 ff.

（5）《イェニ・カフカスヤ（新カフカース）》誌、《アゼリー・テュルキュ（アゼルバイジャン・トルコ人）》誌、《オドル・ユルドゥ（火の国）》誌などの存在が知られている。Vilayet Muhtaroğlu, “Azerbaycan XX. yy Türk Edebiyatı (1920’ye kadar),” *Türkiye Dışındaki Türk Edebiyatları Antolojisi 4: Azerbaycan Türk Edebiyatı IV,* Ankara: Kültür Bakanlığı, 1993, s. 302.

（6）ヒュンメト党もしくはその前身を指すものと思われる。

（7）この大会（1917年5月1日～11日）におけるロシア領内のムスリム諸民族の自治と国家の形態をめぐる論争において、アゼルバイジャンの代表ラスルザーデは民族ごとの領土的自治をともなった連邦制を主張し、オセット人メンシェヴィキのアフメド・ツァリコフらと対立した。ツァリコフはヴォルガ・タタール人ブルジョアジー（サドリ・マクスドフ［サドリ・マクスディ・アルサル］など）や社会主義者、汎イスラーム主義者らの立場を代弁してロシア帝国の行政機構を維持した上での文化的自治を支持する論を張った。一方、バシュコルト人のアフメド・ゼキ・ヴァリドフ［アフメト・ゼキ・ヴェリディ・トガン］やクリミア・タタール人らは連邦制導入に同調する姿勢を見せた。大会では、446票対271票で連邦主義者の提案が採択された。この大会の模様とその意義については、Serge A. Zenkovsky, *Pan-Turkism and Islam in Russia*, Cambridge: Harvard University Press, 1967, pp. 142-153; Richard Pipes, *The Formation of the Soviet Union: Communism and Nationalism 1917-1923 (revised ed.)*, Cambridge: Harvard University Press,1964(1954), pp. 76-78; Swietochowski, *Russian Azerbaijan*, pp. 90-92; 山内昌之『スルタンガリエフの夢ーイスラム世界とロシア革命』東京大学出版会、1986年、118～128頁を参照のこと。

（8）《プロメテウス》協会は、1926年5月のクーデタで実権を握ったユゼフ・ピウスツキの下で将来のソ連との戦争を視野に入れたポーランド政府（特に参謀本部と外務省）の肝いり（活動資金の援助など）により発足した団体で、ソ連地域出身の少数民族の亡命者から構成されていた。その中にはグルジアや

ウクライナの代表も含まれてはいたが、ラスルザーデをはじめカザン・タタール人のアヤズ・イスハキやトルキスタン出身のムスタファ・チョカイオウルらトルコ系諸民族の代表が多数含まれていた。同協会はパリ・ベルリン・ワルシャワなどヨーロッパ各地で各々の民族語でソ連地域の民族解放を訴える雑誌などを発行していた。月刊誌《プロメテウス》は一連の雑誌の代表的なもので1926年11月～1938年4月にパリで発行され、カフカースとウクライナ（のちにはトルキスタンも）の諸民族の利害を代弁する役割を果たした。戦間期および第2次世界大戦中のラスルザーデのヨーロッパ各地での活動は、主としてこれらの人脈を足がかりにしたものと思われる。Charles Warren Hostler, *Turkism and the Soviets: The Turks of the World and their Political Objectives*, New York: Frederick A. Praeger Inc., 1957, pp. 157-160; Jacob M. Landau, *Pan-Turkism: From Irredentism to Cooperation*, Bloomington: Indiana University Press, 1995, p. 81.

（9）日露戦争はロシア旧暦（ユリウス暦）でも1904～05年の出来事であること、日本海海戦やポーツマス条約調印がいずれも1905年のことであること等から、本文中の「1903年」は「1905年」の誤植であると思われる。なお、本文の日本海海戦と旅順陥落は順序が逆である。

（10）ロシア社会民主労働党はブリュッセル（途中からロンドン）で行なわれた第2回大会（1903年7～8月）で、党規約第1条の党員資格に関する規定をめぐる対立がきっかけで分裂した。レーニンは党を職業革命家のみから構成される中央集権的な地下組織としての前衛党とすることを提案した。他方、マルトフらは「組織」のメンバーの他にそのシンパをも含むより大きな党を提唱した。なお、スターリンは1902年4月から1903年11月までの間カフカースの獄中にあり、さらにシベリアに流刑となったが、のちに脱走してカフカースに戻り、1904年末までにはレーニンを支持する姿勢をとった。第2回大会の経緯と意義については、Edward Hallett Carr, *The Bolshevik Revolution 1917-1923*, vol. 1, New York: W. W. Norton & Company, 1985 (Original ed. 1950), pp.26-44（E・H・カー『ボリシェヴィキ革命 1917-1923 第1巻』原田三郎・田中菊次・服部文男訳、みすず書房、1967年、28～43頁）; Deutscher, *Stalin*, pp.67-76.（ドイッチャー『スターリン』[第1巻] 50～57頁。）を参照。

（11）《ヒュンメト》の結成については、ロシア社会民主労働党の影響下に結成されたものか否かについて論争があるが、西側諸国の研究では、従来、以下のようにいわれてきた。1903年に、アゼルバイジャン人の青年知識人のグループがディベートのサークルを結成し、翌年からムスリムの民衆への働きかけを開始した。このグループは、1904年10月に創刊された機関誌の名称に倣って《ヒュンメト》と称した。最初期のメンバーはラスルザーデら他の組織には加わっていない知識人と、スルタン・マジド・エフェンディエフらロシア社会民主労働党員とから構成されていたという。初期の機関紙の論調は、帝政の官僚機構やそれに協力的なムスリムの宗教界を批判し、アゼルバイジャン文化を軽んじる西洋的な知識人やブルジョワジーを非難するなど、非マルクス主義の立場からのものであった、1905年初めにはマシュハディ・アズィズベイオグル・アズィズベコフやナリマン・ナジャフオグル・ナリマノフといった社会民主労働党員が更に加わった。以上より、《ヒュンメト》は最初期においてはロシア社会民主労働党員でもあるメンバーを介して、ロシア社会民主労働党と提携関係にあった程度ではなかったかとみなされてきた。Swietochowski, *Russian Azerbaijan*, pp. 51-52; Mangol Bayat, *Iran's First Revolution: Shī'ism and the Constitutional Revolution 1905-1909*, Oxford:Oxford University Press,1991, pp. 86-87.

（12）スターリンは、ティフリスおよびグルジアでのメンシェヴィキに対するボリシェヴィキの劣勢を挽回すべく、同志のアルメニア人ボリシェヴィキ、ステパン・シャウミャン（1878-1918）とともに1907年6月にバクーに活動の拠点を移した。シャウミャンは最も古い油田地帯であり石油労働者組合の本部があったバラハヌ地区に定住し、ス

ターリン自身はノーベル油田のあるビビーエイバト地区に落ちついた。当時のバクーの労働者の間では主にロシア人の熟練工から構成されるメンシェヴィキ系の機械工組合とムスリムの未熟練工らを対象として立ち上げられたボリシェヴィキ系の石油労働者組合が対抗関係にあり、社会民主党バクー委員会はメンシェヴィキが掌握していた。バクーの労働者のおよそ４分の１ずつがロシア人とアルメニア人から成り、およそ半分がムスリムであった。以後、ボリシェヴィキは、まず、バラハヌ地区やビビーエイバト地区の社会民主党地区委員会を勢力下におさめ、同時にムスリムを含む労働者層の組織化と一層の浸透をはかるなどして、メンシェヴィキを圧倒すべく活動を展開していく。スターリンがバクーに拠点を据えて活動していた時期は１９０７～１910年であるが、失敗に終わりはしたものの、既に1906年の時点で彼自身が社会民主党に合流するようヒュンメトに働きかけていたとも伝えられる。Ronald Grigor Suny, “A Journeyman for the Revolution: Stalin and the Labour Movement in Baku, June 1907-May 1908,” *Soviet Studies*, Vol. 23, no. 3, 1971, pp. 373-376, 381-385; Swietochowski, *Russian Azerbaijan*, p. 54.

（13）スターリンは６つか７つの頃に天然痘を患ったため、顔にあばたが残っていたという。Deutscher, *Stalin*, p. 22.（ドイッチャー『スターリン』［第１巻］12頁。）

並列処理プロセッサ "Propeller" によるスケッチング・プラットフォーム

Sketching platform with the "Propeller" parallel processor

長嶋　洋一
デザイン学部メディア造形学科

Yoichi NAGASHIMA
Department of Art and Science, Faculty of Design

マイコンシステムの高性能化とオープンソース・ソフトウェアの潮流が生み出した「フィジカル・コンピューティング」に関して、工学的な専門知識をブラックボックス化した、デザイン教育やメディアアートのためのプラットフォームを目指している。本稿では、この分野の世界的な傾向の解説とともに、SUAC研究科長 / デザイン学部長特別研究として進めてきた実験について報告する。合わせて、2009年に発表参加した国際会議の参加報告を行う。

This is a report of physical computing to which people recently pay attention in design process field and media-arts field. I introduce and discuss (1) trends in this field, (2) platform project in SUAC, and (3) special approach with the "Propeller" parallel processor.

1．はじめに

筆者は本学において、メディア・デザイン系の学生に対して、インスタレーションなどのインタラクティブ作品の創作に関連する教育を行っている。本稿では、マイコンシステムの高性能化とオープンソース・ソフトウェアの潮流から最近注目されている「フィジカル・コンピューティング」に関して、工学的な専門知識をブラックボックス化した、デザイン教育やメディアアートのためのプラットフォームの実現を目指した研究について報告する。まず、この分野の世界的な傾向の解説とともに、SUAC研究科長 / デザイン学部長特別研究として進めてきた実験について報告する。合わせて、2009年6月から9月にかけて発表参加した3つの国際会議(NIME09、Sketching09、ICEC2009)の参加報告を行う。なお、筆者のこれまでの関連研究/活動等の報告については、文献[1]に70件の参考文献リンクを置いて本稿では省略したので、そちらを参照されたい。

2．「作ってみよう」文化の発展と問題点

工業化社会の産物として、あらゆるものがメーカに製造され販売されている。ネットショッピングと宅配業の普及により、誰でも居ながらにしてクリック一つで欲しいものが手に入れられる時代である。その一方、健康な文化的反動としてか、「作ってみよう」がビジネスとなってきた。高度経済成長時代以前であれば「自分で作る」というのは「高くて買えない」からであったのが、現代では「自分でわざわざ作りたい」というモチベーションに変化したのである。メーカが製造販売する完成製品を購入するだけで満足しない人々に対して、あらかじめ設計済みの「完成されたパーツ」に分割された部品を組み立てる「(工作)キット」の文化は、「ミニ四駆」「電子工作」「ディアゴスティーニ」「大人の科学」などのビジネスとして成立してきた。

この状況は一般的には決して悪いことではないが、SUACデザイン学部の学生など、新しいものをデザインする若者には、必ずしも良い影響を与えているとは言い難い。新しいアイデアのシステムの試作やインスタレーション作品の制作において、100均ショップの粗悪な完成品の改造や工作キットの安易な流用によって、ほとんど画一的なモノを組み立てただけで「作った(デザインした)」と勘違いする学生には、デザイナとして明るい未来はとうてい期待できない。しかし理系でないデザイナに現代の膨大な工学的知識と経験まで求めるのは無理であり、産業界では若い設計技術者の慢性的な不足と熟練デザイナの高齢化に悩まされている、

3．フィジカル・コンピューティングとスケッチング

このような状況に対する新しいアプローチとして世界的に注目されているのが、マイコンシステムの高性能化とオープンソース・ソフトウェアの潮流によって登場した「スケッチング」の発想である[1]。パソコンを中枢に据える大掛かりなシステムでなく、いわゆるワンチップ・マイコンによる組み込みシステ

ムを実現するには、従来はマイコンごとに固有の言語や開発環境の熟達、そして電子回路の設計技術、さらには試作開発における信頼性・開発効率・コスト設計・量産化技術・検査技術など、多くのプロフェッショナル的な技術が備わっていることが必須であった。これがマイコン技術の高度化・複雑化の進展とともに１人のエンジニアで扱える規模を超えると、新しい打開策が求められるようになった。

ソフトウェア開発においては、オープンソース化という標準化がこれを解決する切り札となった。専業メーカが提供する高価でクローズドな統合開発環境に頼るのでなく、フリーウェァの精神で開発環境もソフトウェア部品も共有して皆んなでハッピーになろう、という発想である。ハードウェアにおいても、日本のマイコンメーカの囲い込みは破綻し、全面的な情報開示とともに「ハードウェアのオープンソース」という新しい発想に対応したプロセッサを提供するメーカだけが勝ち残りそうな状況である。

紙面の関係で具体例については文献[1]の資料リンクに譲るが、１９９１年から世界のメディアアート領域のプラットフォームとなり続けて進化しているMax/MSP/jitterを開発 / 実行環境とした上で、現実の物理世界とのインターフェースとしてI-Cubeのような MIDI周辺装置、さらにIAMASの小林茂氏の開発したGainerがスタンダードとなり、多くのインスタレーション作品やパフォーマンスの出現に貢献した。これらの作品では、その内部や背後に、Max/MSP/jitterの走るコンピュータが必要であり、高度で複雑な関係性(アルゴリズム)を容易に実現できる反面、小型軽量の組み込み機器のような形態は実現できなかった。

これに対して、過去には日本のお家芸であった、産業界向けの組み込みマイコン(4/8/16/32ビットCPU)を用いて、国内では秋葉原の秋月電子のAKI-80やAKI-H8などのカードマイコンが、海外ではMITが支援しつつBasicStampなどが登場して、パソコンを不要とした小型のスタンドアロンシステムとして、インスタレーションやパフォーマンス支援の機器を実現できるようになってきた。しかし日本では、メーカ単位で閉じた開発支援環境と開発言語体系に縛られて、世界に対して大きく遅れる状況となってきた。世界はUnix/Java/gcc/CC(クリエイティブコモンズ)などのオープンソースの文化が発展して、組み込みマイコンの開発支援環境として、フリーの統一的な環境が成長を続け、processingのような画期的な環境がフリーで活用でき、多くの作家が素晴らしい作品を生み出している。

日本の組み込みマイコンが産業界だけを向いて閉鎖的であったのに対して、世界ではこのオープンソースの文化が、ソフトウェアだけでなくハードウェアのオープンソース化を強力に支援した。イタリアの研究グループが開発したArduinoはそのもっとも成功した事例であり、限定された能力であるにも関わらず、多くの教育機関・研究機関の提供するライブラリ群や雑誌「make」による取材紹介は、新たにこの領域に取り組むデザイナの援軍となった。多種多様なArduinoクローンや変形Arduinoが登場し、ますます多くのインスタレーションがArduinoによってスタンドアロン化されていく傾向が続くだろう。重要なのは、この開発環境がprocessingとほとんど同一と思えるほど似ていることで、ここではプラットフォームの違いをソフトウェアが吸収するオープンソースの思想そのものを体感できる[2]。

後述する国際会議「Sketching」は、この流れをアーティストだけでなく、デザイナにもより一般化して普及させよう、という動機からスタートした。Sketchingの主催者Mike Kuniavskyは、世界の多くの企業のコンサンティング・デザイナとして活躍する中で、工学を専門としないデザイナが容易にアイデアを具体化/試作/実現(スケッチング)するための「オープン・ハードエウェア」を提唱した。ここに、教育者・研究者・アーティスト・企業経営者・技術者・ジャーナリストなどが賛同して集っているのが国際会議「Sketching」である。これは、コンピュータの内部でバーチャルに閉じていた世界を、現実の物理世界とインターフェースさせて拡大させる、という「フィジカル・コンピューティング」の思想とも共通する部分が非常に多く、

世界から注目されている新しい領域なのである。

4. シングルタスクマイコンの限界とパラレル CPU "Propeller"

筆者は1985年頃からこれまで、基本的にはシングルタスク組み込みマイコンをプラットフォームとして活用してきた。多くの製作事例は回路図やソースコードとともに全てWebで公開しているので、見ず知らずの作家や学生から質問のメイルを受けたり、レクチャー / ワークショップ講師の依頼が突然に届いたり、プロジェクトの予算が付いたので特別なシステムの開発を依頼する、というようなオファーも多数あった。これらについては[3][4]などを参照されたい。

このようなシステム開発において、筆者が文献[5-7]などで指摘しているのは、スタンドアロンシステムの中核となるボードマイコン（AKI-H8 や PIC や Arduino）のファームウェアを書き込む内蔵 Flash メモリの「繰り返し書き込み」の問題点である。昔であれば組み込みマイコンのプログラムはシステム内に紫外線消去型 EPROM のソケットがあり、ここに最終的なプログラムを搭載したが、ここ10年以上の主流は、CPU内部のROM領域がFlashEEPROMになっていて、CPUのシリアルポートを経由してここにプログラムを書き込む、という方式である。例えば、開発中の実機に搭載されたAKI-H8のRS232Cポートから ROM プログラマボードとUSB-RS232Cアダプタを経て、開発ホストである Windows パソコンと接続する。このようにオンボードマイコンに直接、開発中のプログラムをダウンロードできることで、システム開発中のEPROMソケットの抜き差しや「ROMエミュレータ」のソケット接続の手間から解放された。

ここで問題となるのは、カタログデータではCPUの内蔵FlashEEPROMの繰り返し書き込み回数は10万回以上とされているものの、CPU個別のばらつきや周辺ノイズ環境などにより、実際には100回程度のプログラム書き込みでもエラーが起きることがあった、という経験的事実である。ICE(インサーキットエミュレータ)などを使わずに、開発プログラムをシンプルなものから漸次拡張していき、EEPROM に書き込みしてはリセットしてデバッグする、という開発プロセスにおいて、完成度を上げるためには何度でも繰り返せることが必須である。ところが「書き込み回数が増えるとエラーが起きることがある」とか「もう書き込めない(使えなくなる)段階がいずれ迫ってくる」という状況は、プログラマにとって水面下でのプレッシャー / ストレスとなる。実際に筆者の経験でも、ある程度まで完成したプログラムについては、そこから繰り返し細かく改訂するというよりも、システムの使い方で対応するとか、MIDIを経由してやりとりするホストシステム(Max/MSP など)の側のプログラミングによって細かい改良の部分を吸収する、という戦略は、ほとんど無意識的に採用している「常識」である。

また、一般にこのようなスタンドアロンシステムでは、「パネルスイッチや外部センサからの入力」「パネルLED/LCDやモータ制御などの出力(タイミング制御)」「開発ホスト PC との通信(開発中のみ)」「システムホストとの通信(MIDI/ イーサネット / 無線)」「デバッグ用の動作表示、数値表示」など、多数のタスク(ジョブ)が必要になってくる。最終的には実機で必要なくなる機能であっても、デバッグの過程ではわざわざハードウェアを試作増設して、ファームウェアの動作確認、数値データなどの外部出力によって実現している動作モニタリングは、スケッチングにおいて開発期間の短縮と完成度の向上に大きく寄与するので、ちょっとした回り道であっても定番のテクニックである。筆者の場合には、Max/MSP/jitterを作品全体のホストとすることが大部分であるために、どんなシステムであってもまずは MIDI 入出力ポートを設置して、開発やデバッグの際には、システムの内部状態を MIDI 出力したり、Max からの MIDIを受けて動作切り替えなどを行う。最終的に MIDI とは無縁のスタンドアロンシステムの開発においても、である。

ここで問題となるのは、MIDI入力には割り込みが必要であり、またタイミング設計のために CPU 内部のタイマによるタイマ割り込みを使うことも多いことである。ポーリング

とかハンドシェイクのようなシンプルなジョブの積み重ねだけで必要な処理を実現できれば問題ないが、小型軽量低価格を目指す組み込みマイコンではクロック周波数やメモリ(RAM)容量に限界があり、Cだけでなく時にアセンブラも組み合わせた、本格的なプログラミングスキルを要求することも少なくない。インスタレーション作品とは本質的にリアルタイム・マルチタスクシステムだからである。

ここに、前述のCPUプログラム書き込み回数の制限という要因が組み合わされることで、事態は非常に困難な状況となる。つまり、仕様としての機能と開発 / デバッグ用の機能をシステムに盛り込むことは、タイミングも精度も異なる多種のタスクを、割り込みを必要とするレベルで調停しつつリアルタイムに実現するという要請であり、転送一発でそう簡単には実現できない。デバッグ資源 / 機能を活用しつつ、何度もトライすることで完成度を上げていく。ところが、このトライ回数に暗黙の上限が制約として加わることで、開発そのものの足を引っ張るという二律背反の状況となるのである。この世界になかなか若手エンジニアが入ってこれない理由の一つは、ベテランなら経験的に分かっているこのあたりの勘所に不慣れなためであろう。

文献[8]で紹介したように、筆者は2008年に、BasicStampで有名なParallax社の提供するPropellerプロセッサと出会い、その概念や細部を解析するとともに、いくつかの実験システムを試作し、さらにインタラクティブなインスタレーション作品を実際に制作して公開展示した[9-10]。このシステム"DodecaPropeller"では、Propellerチップを13個用いて、縦3台・横4台、計12台のビデオモニタにそれぞれ個別のリアルタイムCGを生成表示し、その12個の画面が来場者からの働きかけや会場の環境音に反応してダイナミックに変化するが、従来のようにホストPCを必要とせず、たった1枚の基板でシステムが完結している(本稿末尾の図3のFigure 6)。このPropellerチップは内部の8個のCPUがハードウェア的に並列処理を実行するために、ソフトウェア開発において「割り込み」の概念が不要である。Cogと呼ばれる各CPUのタスクを起動すれば、相互のタイミングを設計しなくても、各Cogはそれぞれの処理を中断なく実行する。これは新楽器のように、本質的にマルチタスクなシステム開発(スケッチング)においては、非常に有効なプラットフォームである。

さらにPropellerでは、開発用ホストPC(高級言語spin/アセンブラを共存可能)からUSB接続されて開発中のプログラムを書き込むが、そのターゲットとしてPropellerの内部RAMを指定できる。つまり開発中はPropellerの内部RAMに転送したプログラムで実験 / デバッグし、最終的な完成プログラムについては、ターゲットをPropellerチップの隣に置いたFlashEEPROMに変更するだけでよい。リセット時にPropellerはまずホストPCとの接続を捜し、接続があれば開発中として内部RAMのプログラムで走る。接続されていなければ外部EEPROMから内部RAMに自動転送したプログラムで走る。この機能の意味するところは非常に重要で、RAMであるから開発中は「何度でも無限にリトライ出来る」マイコン、という事である。細かい実験や試行錯誤や修正はRAMで行い、ある段階まで完成したところでソースを保管するなり外部EEPROMに書き込む、というプロセスにより、従来のマイコンとは桁違い(無尽蔵)のテスト繰り返しを可能とする。

筆者はPropellerで外部とMIDI通信するモジュールをオリジナル開発し、Max/MSPと合わせた開発環境を実現した[8]が、さらにPropellerでは内部のCogのうち2個を使い、40ピンの入出力ピンのうち3本の外部に3本の抵抗を接続するだけで、NTSC/PALビデオ信号を簡単に生成出力することができる。PropellerコミュニティによりWebフリー公開されているグラフィックドライバなどをブラックボックスとして呼び出すだけで、デバッグのために「ビデオモニタに10進/16進形式での数値表示」やOpen-GLにも似た「カラーグラフィック表示」も容易に実現できる。これは、システムとして必要なマルチタスクを実機として動作させながら開発する中で、デバッグのために簡単に内部動作をモニタできる、いわば「内蔵デバッグ装置」のように活用できる。まさに試行錯誤の開発に好適なプラットフォームであると実感している。

5．ICEC2009 Tutorialからの紹介

ここで、関連したトピックとして、筆者が2009年6月から9月にかけて発表参加した3つの国際会議(NIME09、Sketching09、ICEC2009)の参加報告を行う。紙面の関係で、過去の紀要で紹介した2つの国際会議(NIMEおよびSketching)については簡単な報告にとどめ、ICEC2009でのチュートリアル発表について重点的に報告する。

２００４年に欧米以外としては初めてSUACで開催した[11]国際会議NIMEは、2009年は6月に米国ピッツバーグのカーネギーメロン大(CMU)で開催された[12]。筆者はPropellerを新楽器や新インターフェースのプラットフォームとして活用する、という提案を発表した[13]。本稿の末尾3ページ(図1-図3)に紹介したのは、そのプレゼンテーション・ポスターである。物理コンピューティングやスケッチングの専門家が集まる国際会議Sketchingは、2009年はロンドン市内のUniversity College of London (UCL)で開催された[14]。筆者は2008年に発表したSUACでのインスタレーション作品の事例紹介に続いて、2008年から2009年に新たに取り組んだ事例紹介[15]とともに、新しい学生作品「はやくスシになりたい」(野口佳恵)をロンドンに持参して、世界初演となる展示発表を行い絶賛された。

国際会議ICECとは、エンタテインメントコンピューティングの国際会議であり、その発端は2002年に幕張で開催された国際エンタテインメントコンピューティングワークショップIWEC2002である。筆者はこのIWEC2002での発表以来の参加となったが、研究発表としてでなく、Propellerを実験システムのプラットフォームとして活用するためのチュートリアル(レクチャー)として応募し採択され、パリ・Conservatoire National des Arts et Metiers (CNAM)で開催されたICWC2009の初日に、「Parallel Processing Platform for Interactive Systems Design」というタイトルの、全6時間の1日講習を行った[17]。受講者は、東欧やアジア(韓国)など世界各地から集まった10数名であり、SUACでのメディアアートの事例紹介から始まって本格的なシステム開発に関するノウハウまで、熱心に受講していたのが印象的であった。以下、筆者の講習メニューの項目ごとに、ごく簡単に内容を紹介しておく。

5-1 Abstract

このチュートリアルの募集としても使われた「概要」は以下である。(原文のまま)

This lecture is intended for the designer of the entertainment system. As a platform of an interactive entertainment system, it is popular to combine MIDI sensor and GAINER with Max/MSP. It is also general for a simple system such as toys to use the 1-chip microcontroller such as Arduino. However, it is very difficult in the multimedia system to combine video signal, CD-audio output and many sensors without depending on PC. You will learn a new platform with parallel 8 processors in one chip. As a result, complex processing can be achieved with the standalone system. Propeller's 8 processors can operate simultaneously, either independently or cooperatively, sharing common resources. I introduce this unique processor and discuss about the possibility to develop interactive systems and smart interfaces in media arts, because we need many kinds of tasks at a same time in entertainment computing. We will also show that the design of the Propeller system is effective for the programming education.

5-2 Installation/Performance - Examples

エンタテインメントコンピューティングでのシステム開発の事例紹介として、インスタレーション作品の本質について、インタラクションのデザインについて、パフォーマンスやメディアアートとの関係について整理した。

5-3 Platforms for Installations

インスタレーションのプラットフォームについて整理した。検討した項目は「アーキテクチャ」「ソフトウェアと実行環境」「ハードウェアとファームウェア」などである。具体的な例としてI-Cube・PIC・BasicStamp・AKI-H8・Gainer・Arduino・Propellerを紹介した。

5-4 The "Propeller" Processor

このチュートリアルの主役であるParallax社のPropellerプロセッサについて、アーキテクチャや技術的な特長について解説した。

5-5 Propeller System Design Lecture

この部分が本チュートリアルの根幹である。Propellerを実際に使ってシステムをスケッチングするための方法、支援環境、オープンソースのライブラリの活用、各種のインターフェースの実例紹介(筆者が開発し公開している世界初のアプローチもここで紹介)、周辺回路の拡張テクニックなどを紹介した。以下がその各項目の見出しであるが、これ以上の詳細は紙面の都合により省略する。

5-5-1. Development environment
5-5-2. Experiments with examples
5-5-3. MIDI I/O interface
5-5-4. Video signal generaton
5-5-5. Audio signal processing
5-5-6. Sensor Interfaces
5-5-7. Serial Communication Interfaces
5-5-8. Expanding Parallel Output Ports
5-5-9. Expanding Parallel Input Ports
5-5-10. D/A (voltage) Output
5-5-11. A/D (voltage) Input

5-6 Case studies with Propeller

具体的なPropellerを活用したケーススタディとして、以下の最新の3つの話題を紹介した。

5-6-1. uOLED-96-PROP

Propellerを搭載した超小型カラーディスプレイモジュール「uOLED-96-PROP」について紹介し、実際にこれを使用して製作したシステム2種類をMIDIインターフェースで接続し、加速度センサによって傾きを検出して画面上のグラフィクスを描画しつつ、通信ネットワークで情報交換するデモを実演した。

5-6-2. Dodeca Propeller

MAF2008で発表したインスタレーション作品「Dodeca Propeller」について詳細に解説・紹介した。

5-6-3. 4 Mouse Interface (Propeller+Gainer)

メディア造形学科学生(見崎央佳)の新しいインスタレーション作品「OTOkakekko」のために制作した、「4つのPS/2マウスの挙動をGAINER経由でホストに伝える」インターフェースは、Propellerの4つの内部CPU(Cog)がそれぞれのマウスと通信する。このデモビデオを持参して詳細について報告した。

5-7 Future work

まだ未公開というより制作中である「The New Interface for Musical Expression (32 channels Thelemin)」について、渡欧の3日前に録画したデモビデオを持参して紹介した。これはMAF2009でデモ発表するとともに、筆者が作曲し作品として公演するのは2009年12月5日(国立音大)の予定である。

6. おわりに

最近注目されている「フィジカル・コンピューティング」について、デザインプロセスおよびメディアアートとの関係に注目して、特にパラレルプロセッシングCPU "Propeller" について、個々のタスクを増設・記述するだけで、タイミング設計なしに、時分割処理による高いパフォーマンスを実現できた実例を紹介した。全てをマスターするには本学大学院の2年間でも不足するものの、効果的な汎用プラットフォームの助けによって、学生の作品制作レベルは年々向上している。今後、ますます発展するであろうこの領域において、メディアデザイン教育のための新しい

汎用プラットフォームの実現に向けて、さらに検討していきたいと考えている。

参考文献 / リンク

[1] 長嶋洋一, デザインプロセスにおける「スケッチ」と物理コンピューティング, 静岡文化芸術大学紀要・第9号 2008年, 静岡文化芸術大学, 2009
[2] http://nagasm.suac.net/ASL/Arduino/
[3] http://nagasm.org/
[4] http://1106.suac.net/
[5] http://nagasm.suac.net/ASL/sensor01/
[6] http://nagasm.suac.net/ASL/original/
[7] http://nagasm.suac.net/ASL/mse/
[8] http://nagasm.suac.net/ASL/Propeller/
[9] 長嶋洋一, Propellerを使った体験型アート作品の製作(前編/後編), トランジスタ技術 2008年9月号/10月号, CQ出版社 (2008).
[10] http://nagasm.suac.net/ASL/12Propeller/
[11] http://suac.net/NIME/
[12] http://nime2009.org/
[13] http://nagasm.suac.net/ASL/paper/NIME09_2.pdf
[14] http://www.sketching09.com/
[15] http://nagasm.suac.net/ASL/paper/Sketching09.pdf
[16] http://www.entertainmentcomputing.org/icec2009/
[17] http://nagasm.suac.net/ASL/ICEC2009/

Parallel Processing System Design with "Propeller" Processor

Yoichi Nagashima (nagasm@suac.ac.jp)
Shizuoka University of Art and Culture

Abstract
This is a technical and experimental report of parallel processing, using the "Propeller" chip. Its eight processors (cogs) can operate simultaneously, either independently or cooperatively, sharing common resources through a central hub. I introduce this unique processor and discuss about the possibility to develop interactive systems and smart interfaces in media arts, because we need many kinds of tasks at a same time with NIME-related systems and installations. I will report about (1) the Propeller chip and its powerful IDE, (2) external interfaces for analog/digital inputs/outputs, (3) VGA/NTSC/PAL video generation, (4) audio signal processing, and (5) originally-developed MIDI input/output method. I also introduce three experimental prototype systems: (a) 1 chip standalone system with MIDI input, audio synthesis, sensor inputs and double NTSC outputs, (b) a compact display module for CG generator and MIDI monitor, and (c) a compact sound installation system for 12 video display monitors with 12 Propeller chips generating real-time CG and 1 master Propeller chip.

Keywords: Propeller, parallel processing, MIDI, sensor, interfaces.

1. Introduction

Propeller [1] is supported by Parallax Inc. With its internal eight processors, we have full control over how and when each cog is employed; there is no compiler-driven or operating system-driven splitting of tasks among multiple cogs. A shared system clock keeps each cog on the same time reference, allowing for true deterministic timing and synchronization. (see Figure.1) We can use two programming languages: the easy-to-learn high-level Spin, and Propeller Assembly which can execute at up to 160 MIPS (20 MIPS per cog). There is a popular technique "Interrupt" to realize multi-task with all CPU. However, Propeller doesn't have the "Interrupt" because parallel processing is controlled by its special hardware. Its resources - common memories (32KB RAM /ROM) and 32 external I/O pins - are automatically assigned to round-switched cogs. We can easily make parallel processing software for Propeller by the smart and powerful IDE, without special consideration for synchronization. Because I have no enough space to introduce more both Propeller's languages and Propeller's IDE here, please refer my analyzing/experiments report [2]. This website was only in Japanese, but the English version is now available.

2. Propeller interfaces / MIDI input/output

Propeller has 32 I/O pins that can be accessed by each cog with double or more monitoring and overwriting. Each cog has special timing circuits for counter/timer modes. Propeller can deal serial communications like MIDI only by software, without special hardware like UART. There is a sample MIDI-in object in the Parallax web page [3], but I arranged and developed the universal MIDI-in/MIDI-out module [2]. This module deals MIDI information with deep Rx/Tx FIFO buffers in common memory in the chip, so it is easy to make intercommunication of each cog. Figure 2 shows the original circuits with MIDI I/O, audio D/A and NTSC video output (described later).

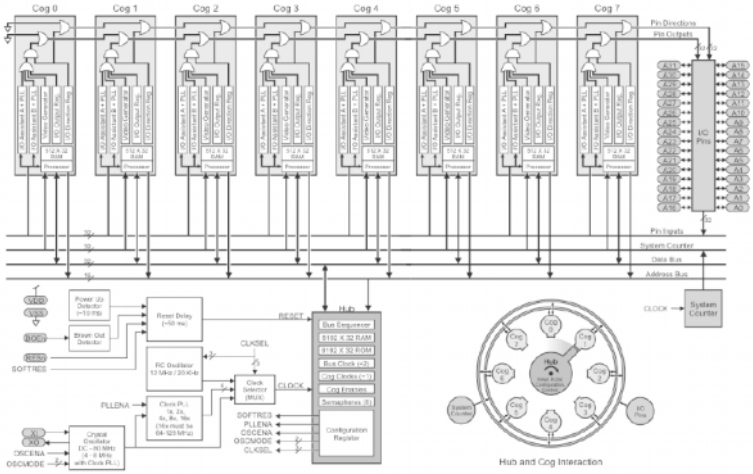


Figure 1. Block Diagram of "Propeller" processor.

3. D/A output and A/D input

Propeller can generate an analog output signal by PWM converter with external 2 capacitors and 1 resistor. Thus Propeller can generate easily 44.1 KHz sampling, 16 bits stereo audio signal with 2 external pins and 1 internal cog. We can also get A/D input with reference D/A output by 1 internal cog and 2 pins, using Parallax's sample program. The Propeller's cog is fast enough for CD quality sampling conversion. I discovered and confirmed that the assembly language of Propeller was specially designed to achieve audio signal processing compactly and efficiently.

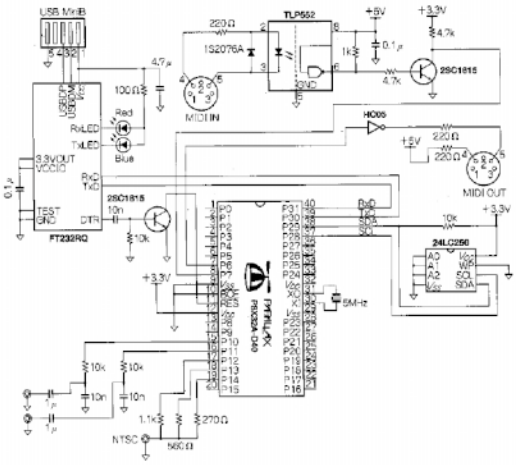


Figure 2. The original circuits with MIDI I/O, audio D/A and NTSC video output.

4. Analog (RC) input / NTSC-PAL-VGA video output

Because each cog of Propeller has an individual timing circuit in it, RC-type (time constant circuit) A/D conversion is simpler to construct. We can easily achieve high accuracy and high speed A/D by the specification of Propeller (80MHz, 32 bits). We can use many types of sensors: CdS, strain-gauge, piezo, static-electricity, carbon-rubber, electric-capacitor, etc. Surprisingly, Propeller can generate the video signal of NTSC/PAL/VGA in the background, with 1 cog for graphic driver and 1 cog for video signal D/A with only 3 external resistors. So, we can produce many multimedia systems with using only 2 cogs of Propeller, and we can use remaining cogs for 6 individual parallel tasks.

5. Double NTSC output / 4-Mouse Interface

After this research, I produced four experimental systems, and the 4th one is a media-installation work.
Using 4 cogs for double NTSC video outputs, I developed a multi monitor MIDI-CG system. However, by the limitation of Propeller's internal memory, the double CG drawing-mode were only "storage-display like" without double-buffer computing (Figure 3).
Figure 4 show the new interface system for a new installation work with 4 * PS2 mouse, NTSC Video output and the interface with GAINER to connect Max/MSP/jitter platform and FLASH platform.

Figure 3. Double NTSC video, MIDI IN/OUT system.

Figure 4. 4 * PS2 Mouse, Video out, GAINER I/F system.

6. Propeller Compact Display Module

Next, I produced a compact display module for CG generator and MIDI monitor. The small module is supported by Little PCB Solutions [4], and I developed the prototype Compact Display Module. The system generates 3 patterns of realtime CG and MIDI display by Hexadecimal format (see Figure 5).

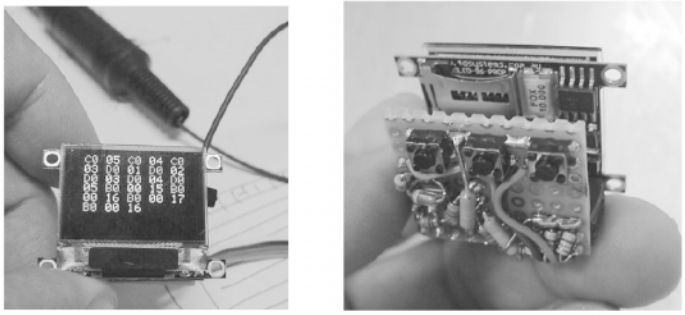


Figure 5. Propeller Compact Display Module.

7. "Dodeca Propeller"

The newest work with Propeller is the installation work called "Dodeca Propeller". This was presented at Media Art Festival 2008 at SUAC in Japan in December 2008. Figure 6 shows the system board and there are 13 Propeller chips on it. We have two huge display systems that arrange 12 large-scale video monitors in SUAC. "Dodeca Propeller" was designed for this display system, so the output is 12 NTSC video lines. 12 display Propeller run the real-time CG generating program. The "controller" Propeller works as: MIDI control (foot switch sensors) receiver, individual real-time On/Off switcher for each 12 screen, and the sound sensor in the gallery hall to control display patterns. As an important point, PC doesn't exist in the system that achieves this complex real-time generation of 12 screens CG and the interaction with the sensors. I developed this system with 2 undergraduate students. It was very easy to make CG programs of Propeller for the students, and I think that Propeller is a very good platform for education of students' programming. Figure 7 shows the presentation of "Dodeca Propeller".

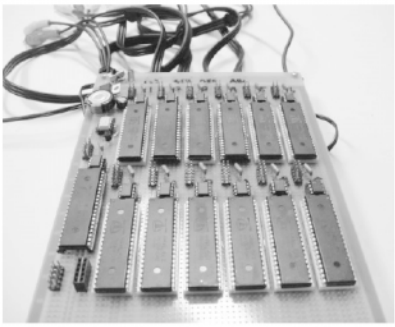


Figure 6. System Board of "Dodeca Propeller".

Figure 7. Presentation of "Dodeca Propeller".

9. Conclusions

This is my first report of the "Propeller" chip. I think (1) it has deep possibility to design interactive systems, and (2) it is good for education in computer programming. I will report next step in the future with some projects in media arts.

References

[1] Propeller General Information, Parallax Inc., http://www.parallax.com/tabid/407/Default.aspx

[2] Yoichi Nagashima, Propeller Diary, http://nagasm.suac.net/ASL/Propeller/index.html

[3] Tom Dimock, Propeller MIDI in objects, http://obex.parallax.com/objects/229/

[4] OLED-96-PROP, Little PCB Solutions, https://www.littlepcbsolutions.com/uOLED-96-PROP.html

Shizuoka University of Art and Culture

10

VOL.10 2009

静岡文化芸術大学
研究紀要

SHIZUOKA UNIVERSITY OF ART AND CULTURE
BULLETIN 2009

ISSN 1346-4744